
輪廻の向こう側

みそアイス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輪廻の向こう側

【Nコード】

N9068J

【作者名】

みそアイス

【あらすじ】

輪廻から外れた少年は神に出会う。少年の望みを無視する神に、NARUTOの世界に送られてしまう。少年は、神に押しつけられた愛玩用ペットクーちゃんと共に、NARUTOの世界を走り抜ける。*最強系ご都合主義自己満足の1S2G。

ブログ（前書き）

ちよつとマイナーなの書いてみたいなと思ひまして、かき始めました。

どんどん未完が増えて行く。

に憑依つて見たことないのでやってみました。

あんまり時間ないので更新速度は……。

プロローグ

???

「此処何処……？」

彼は茫然としながら、その場で立ち止り呟いた。

彼の前や後ろには、ハイライトの入っていないような目の人間がズラッと並んでいる。つまり、彼もそこに並んでいると言っわけだ。気持ち悪いと思った。ただただ、ゆっくりと裸で歩いているその姿が。

彼はその列から一步横に抜けだし、辺りを見回す。

白い空間。どこまでもただただ白い床が続いている。

そこで、他の人間と違い、白と黒の服を纏った人間が二人いることに気付いた。少し離れたところで、会話をしているようだ。

彼は二人にゆっくりと近づいていく。

「すみません。道を教えてもらっていいでしょうか？」

彼が話しかけると、二人はビクっとし、こちらを振り返る。

「……誰？」

「誰って……名前なんてどうでもいいと思いますが、和也です。加川和也。で、道を教えてください」

二人は一瞬目を見合わせ、白い服を着た人間が口を開く。

「あそこに並べば出れるよ？」

指を指す方向を見てみると、先ほど並んでいた場所だ。

「嘘つかないでください。これでも、表情と口調で、人の真偽を見抜くことには長けているんです」

和也は俗に言う、御曹司である。近づいてくるものは皆和也と良好な関係……いや、和也の父親と良好な関係を築こうと甘い言葉ばかりをかける。誘拐など、何度されたかわからない。真偽程度見抜かなければやっていけなかった。

学校でもそれは変わらず、友達顔して近づいてくる人間ばかりだった。そのせいで、引きこもってしまったのだが。それでも、知識だけは誰よりも持っていた。グループを継ぐ為にも、学力が必要なのだ。各専門家庭教師に、自宅で教えられてきた。

「あんなレイプ目した人間と一緒にの場所に行きたくもないです」

「ふむ……君の目も同じようだが？」

確かにそうかもしれない、和也はそう思った。

生きていて死んでいるようなものだった。ならば、あの者達と自分と同じなのだ。

「にしても、君は何故意識があるのだ？」

「意味がわかりません」

「此処に来たと言うことは魂だけ、つまり記憶媒体である脳などないのだよ。ならば、意識すらないはずなのだが……」

その言葉の意味がわからない程和也はバカではなかった。ただ、だからなに？　と言う風体で、何も思っていないような印象を受ける。

「死んだんですか？」

「うむ」

「病気もありませんでしたし、昨日は普通に寝たのですが？」

「寿命だ」

寿命と言われても困る。病気も何もない健康体。それが17歳で寿命で死んだと言われてもこまるのだ。

「老衰だ」

「同じこと言わなくてもわかってますよ、漏水野郎」

「……いきなり口が悪くなってないか……？」

思考中にちゃかされたのだから当たり前反応だろう。

「これは、あれですか？　神の間違いで寿命が短く？」

引きこもってただけあって、テンプレくらいお見通しだ。と言う感じで和也は問うた。

「いや、実際こちらにミスはない。決められた寿命が17だったのだ」

そんな短い寿命聞いたことがない。

しかも老衰などで。病気ならまだ理解も出来たが。

「はあ……どうでもいいです。早く魂ごと消滅させちゃってください」

「い」
「無理」

和也は首を傾げる。神ならそれくらい出来るだろうと。

「意識持つて此処まで来た人間なんてはじめてだし。だから、無理」
「なんでそんな投げやりなんですか……じゃあ、戻してください」
「それも無理。寿命で死んでるし」
「……どうするんですか。転生させてください」
「無理。輪廻から外れたし」

そう言っ指さされたのは、永遠と並ぶ列。あんなものが輪廻だとは思ってもいなかった和也、てか普通に抜け出せた。

「さまよえっ言うんですか？ 殺しますよ？」
「口が悪いな……、ふむお主神にならな」
「死んでも嫌です似非神野郎」
「……」

二人の間に沈黙が訪れた。

「くく、くははははは！ 面白いじゃないか小僧！ ああ、面白い」
「！」

その沈黙を破ったのは、隣ですと黙っていた、黒い服を着た人間の笑い声だった。

「神に対するそのものいい、気にいったぞ！」
「閻魔……お前また何か」
「いいではないか、創造神。意識を持ったまま魂になり、更に俺達

が此処に“たまたま”いたのだぞ？ 此処に来たのは何億年ぶりだ？ そんな天文学確率に出会えた少年だ。少しくらい遊んでやればどうだ？」

白い 創造神はため息をつく。

「仕方ないのう……、一人の人間の為に世界を作るなんてはじめてだぞ……？」

そう言うと、創造神は無色透明の球体を取り出した。

「ふむ……どんな世界がいいかのう」

「それなら、NARUTOの世界にしてください」

傍聴に徹していた和也が口を開いた。

「なるとは知らないのでな、少し頭を覗いてもいいかな？」

「どうぞ？」

創造神は目を瞑り、次の瞬間には目の前に本がバサバサと落ちてきた。

それは、生前部屋にあったNARUTOの単行本だった。なぜ和也がわかったかと言うと、最新巻にコピーをこぼしたあとがあったからだ。

「ふむ。して、なぜこの世界なのだ？」

「単に続きが気になったからです。昨日の夜最新刊読んでませんでしたし」

「……」

創造神は黙りこみ、本の上上手を当て、続いて球体に手を置いた。すると、球体の見た目が青や緑のに変わった。よくみると、それは木々や海だ。

「さて……世界宝玉は完成したが……どうやって入れるか？」
「任せてください」

和也が勢いよく球体に手を伸ばすと、そのまま球体に指が当たり突き指した。

「……」

重い沈黙が流れた。

「普通、入れるものではない？」
「そんな簡単じゃないのだが……。衝撃には強いのだよ」
「安心しろ坊主。俺が輪廻眼やるよ。そうすりゃ大丈夫だ」

輪廻眼。NARUTOに出てくる特殊な目だ。血の継承 血継
限界ではなく、偶発的に現れる瞳。
全ての性質変化が使える、修羅道、畜生道、餓鬼道、天道、人間道、
地獄道、外道の七つの能力が使える眼。

たしかに、魂を操れれば輪廻に潜り込むことも可能になるだろう。
「もっと、チートの的なないんですか？ 原作にいる人間程度の力
じゃ死にます。チャクラ無限とか、身体能力上がるとか、術使い放
題とか」
「無理」

バツサリと切られたが、和也は眉ひとつ動かさなかった。

「創造神もなんかやったらどうだ？ こいつを観察するのも面白そうだ」

「ふむ……ならば、ワシのペットのクーちゃんをやるう。最近子供が生まれて困っておったのだ。子供が6匹産まれての、そのうちの一番小さい子をやるう」

すごくやつかいばらいな気がして、軽く青筋が浮かぶ。

「安心せい、最近つて言つても、5000年以上前だ。多分」

「……愛玩動物などいりません。世話できません」

「無理。もう精神世界に入れておいたからの」

「……」

自分の中にくーちゃんつて言うのが入ってしまった事実、和也は心の中で泣いた。

「あー、もうめんどくね？ 行って来い。じゃーな」

閻魔がそう言つと、意識が曖昧になってゆく。最後に和也は思った。

(結局輪廻眼しかもらつてないし……死にますよね？ 変なペットまで押しつけられたし。チャクラ少なかったら何も出来なそう)

完全に和也の意識が無くなり、和也が消え去ると、創造神が口を開いた。

「して、閻魔は何故、あれに憑依させたのだ？ 魂を追い出すのは禁忌だぞ？」

「面白そうだろう？ 魂の管轄は俺だし、大丈夫だ」

白い空間には、創造神のため息と、閻魔の厭らしい笑い声が響いた。

プロローグ（後書き）

テンプレやってみた。

派生テンプレって楽だよな？

001 こんにちはわ赤ちゃん。

焼け跡

《封印術・屍鬼封尽》

その声に反応し、彼は目を覚ました。

何が起こったのか分からず、辺りをきよろきよろ、と言っても。

赤子の首は座っており、目くらいしか動かせないうえに、赤子の視野は狭く。ほぼ上しか見えなかった。つまり、寝かされているのだ。

ただ、対象があまりにも大きく、自然と目に入ってしまう。

それは、巨大な狐。

禍々しい狐。

赤子は泣きもせず、ただその狐を見つめる。

苦しそうに身悶える狐を。

「起きたか……ナルト」

声が降りかかる。

それは、金髪の青年だった。

ただ、その言葉に赤子の心は穏やかじゃなかった。

（ナルト！？ 確かに産まれたばかりだから転生だけど、よりによって死亡フラグ満載＋虐められるの決定なキャラに転生させやがりましたね閻魔と創造神！）

「すまない……ナルト。俺とクシナはお前に親らしいことを何もしてやれない。だが、お前は里の英雄として強く生きてほしい……後ことは、じーさんに任せてあるからな……」

（いえいえ、勘弁して下さい。あと、俺じゃなかったら絶対理解出来ませんからね？ あとすみません。大切な子供に変な人間が入ってしまった）

赤子の思考さえ無視すれば、赤子は真剣なひ表情でじつとその青年を見つめているように見える。四代目火影 火の国の長である父親を。

身体中傷だらけで、血で顔を真っ赤に染めた親を。

「ナルト、時間があまりないが お前は波風ミナトとうずまきクシナの愛の結晶だ。クシナもナルトも俺は愛している」

（いやいや、まじ勘弁です。てか、へその緒せめてちゃんと切ってください。見えますから。てか、ノロケいりません）

ミナトに抱きあげられ、背後を見させられる。
そこには、無理やり腹を切り裂かれ、赤子を取り出したであろう
母親の姿。

既に絶命しているだろうが、その顔は穏やかだった。

「うずまき 波風クシナ。お前の母親だ」

和也 あらためナルトは前世で人死には慣れていたが、これ
はきつかった。

それでも、ただその顔を見つめ続ける。

この世界で血が繋がった親。少しの間しか一緒に入れないが、
正史のナルトは覚えてもいなかったのだから、それよりはマシだろ
う。

「あうあ」

ナルトは短い手を必死にクシナに伸ばす。

愛情があるわけではない。ただ、輪廻眼を持った自分なら直せる
かも知れないとおもったからだ。

ただ、その目で見ても、既に魂は存在しない。

「わかるか、ナルト……。こんな父親だが……。最後にお前の笑った
顔が見たいな」

ナルトは自分に落ちる水滴を感じ、ほほ笑む。

涙と血の混ざった水滴をミナトはこすってくれるが、腕から流れ
落ちる血で、余計に汚れてしまう。

『キサマアアア！ 許さぬぞ！ ワシの力を返せええっ！ 人間の
術ごとき、ワシに効くとおもおてか！』

パキパキと、先ほどの術による拘束が外れてゆく。

封印術・屍鬼封尽　自分の魂を贄に相手の力を消す術。だが、強大すぎる妖狐の力は消し去ることが出来ず、何れ完全に元通りになるだろう。

(いや、十分に効いてるじゃん!?　すぐ外れそうだけど)

「さよなら、ナルト。波風ミナトは波風ナルトをいつまでも愛している」

そう言っただけでミナトは笑い、せわしなく手を動かし、印を組む。

ナルトはそれをじっと見つめ、ミナトの最後の印を覚える。唯一、父親から継がれるであろう印を。

《八卦の封印式》

ミナトの手が、ナルトのお腹に置かれ、手を回転させるようにして印が浮かび上がらせる。

それにもない、封印術・屍鬼封尽によって、消し去れなかった力が、ナルトの中に封印されてゆく。ナルトの身体を媒体にした封印術・屍鬼封尽の改良。

(こうやって封印したのか……知らなかった。でも、キモチワルイ！　身体の中がむずがゆい！)

親の心子知らずとはこのことである。

必死に封印しようとしているミナトの腕の中で、ナルトはこそばゆいかゆみを感じていた。

不意に、首に何かかけられたのを感じ、ミナトを見つめる。

「俺がお前にやれるものなんて、あまりないけど……な」

苦笑しながら、一つのネックレスを首にかけた。そして、ナルトを自分の上着に巻き、一枚の写真を挟む。

それは、ミナトと、お腹が大きくなったクシナが笑顔で映った写真だった。

そして、そのままミナトは前に倒れた。

生贄にさされたことにより、ミナトの魂は輪廻に戻ることもなく消えてしまった。

ナルトは、数分の親であったミナトの死を見届けた。

涙は出ない。

それでも、自分の親の喪失は初めての経験で、悲しかった。

きっと、これから自分は虐待されるだろう。それでも、この親が守りたかった国ならば、守ってやろうと思えた。

(つてか、このまま此処にいたら、正史通り！ その前に力着けないとダメ！ 虐待で死んじゃう！)

思っただけで、いまずぐ実践はしないらしい。

「あーぶぶ！ あーあ、あーぶぶ！」

(へーल्प！ くーちゃん、へーल्प！)

全く移動が出来ないので、頼みの綱の、未だ見ないくーちゃんを呼ぶ。

『主よ、まさか赤子とは……わらわは此処にいる』

頭の中に声が響く。

(何処!?)

『ふむ。まだ精神世界に入るのは無理かのう。最初はわらわが連れて行くかの』

そこで、ナルトの意識は深く落ちて行った。

精神世界

ナルトは意識が戻ると、パチリと目を開いた。

「おお！ 姿が戻っているじゃないですか！」

バっと立ち上がり、自分の身体を確認する。その姿は、生前の姿

のままだった。

「主の精神世界であるからの、魂が一番長く居た時間の姿になるのだ」

声が出た方向をナルトが向くと、小さな少女が居た。

「くーちゃん？」

「そうじゃ」

「創造神って幼女をペットにしてたのか？」

「ち、ちがうのじゃ！ 空狐のくーじゃ！ 長く生き、狐の姿を捨てたものが空狐じゃ。尻尾もないしの。一番近くにいた人間の姿を取ったのじゃが、いかんせんまだ若くて成長してないのじゃ。あと数千年経てば大人の姿になるのじゃが」

1000年以上生きた狐が、神格化し天狐となる。その尻尾は四本で、狐の姿を捨てたからと言われている。強力な神通力を使い、様々なものを見通す千里眼を持つ。

3000年以上生きると、空狐となる。神通力全てを扱え、尻尾は0本。完全に狐の姿を捨てた者だ。大神狐と呼ばれる。3000年以上生きた、善狐が成ると言われる狐である。

よく、会話中に女狐と出るが、それは狐が美女に化けることからそう呼ばれている。

ただ、くーちゃんは空狐の子としては若いので、姿が子供なのだ。空狐の子供は、最初から神格化した狐として生を受けるので、5000年程度ではまだまだ子供である。

「へー……で」

ナルトは辺りを見回す。

そこには、さまざまな狐が居た。ナルトの精神世界には本来、九尾を捕獲している檻があるはず。と思っていたが、そこは真っ白い空間だった。

何故か、戦闘中よりもボロボロになった九尾の狐がいる。

「ふむ。主の精神世界で暴れていたのだな、躰をしてやったのじゃ。こやつは野狐どころか完全な悪狐だからのう。それよか主よ、ちとこれに手をつくのじゃ」

そう言って、クーちゃんは大きな巻物を広げた。

それは、原作のナルトが蝦蟇一族と契約した時に使った巻物だった。

しかし、今、目の前にある巻物は誰とも前の契約した者がいない。手の跡が何処にもないのだ。蝦蟇一族のアレは、伝説の三忍自来也や、ミナトの他にも手形が在ったはずだ。

ナルトはクーちゃんなら自分をだますことなどないと思い、その巻物に手をつく。

自分の手形が、黒く押される。

「これはのう。妖狐一族の契約巻なのじゃ。これで口寄せで呼ぶことが出来るのじゃ。いま周りにいる、狐もこの一族での、わらわが先ほど呼んでみたのじゃ。まあ、口寄せしたからと言ってすぐに従うわけではないのじゃが……主の場合はわらわが従っておるので、特別に従うじやろう」

この瞬間、ナルトは正史は歩めないと確信した。

本当なら蝦蟇と契約するはずが、なぜか妖狐と契約してしまったのだから。

「それはそれでいいが……俺の修行どうすばいい？ 蝦蟇との修行も出来ないわけだけど」

「それなら心配いらぬよ。蛙に出来て狐に出来ないことなどないの
でな。紹介するのじゃ」

くーちゃんがそう言うと、狐が二匹前に出た。

その中には、九尾の狐もいた。

てかデカイ……。二匹とも狐の範疇超えてる。

「こんちゃー、うちは仙狐。千年以上生きて狐がなる仙狐。仙術なら
まかせてくらさい。せーちゃんとも呼んでほしい」

「はあ……なんともフレンドリーな狐だな」

「それはそうじゃ主よ。基本善狐なのじゃから。年をとって悟りを
開かず悪狐と呼ばれる狐は白面金毛九尾の狐くらいじゃ」

(いやー、でもその悪狐を椅子がわりにして、犬みたいにひれ伏せ
させてるくーちゃんは極悪狐って感じた)

「次はワシだ。アヤツの息子……いつそ殺して ぐっ」

「黙るのじゃ九尾。主に失礼であろう！」

くーちゃんがバンバンと九尾を叩くが、ペチペチって感じなのが、
音がゴンゴンって感じである。

ナルトの精神世界にクレーターが広がってゆく。

(にしても、九尾の暴れた理由ってなんなのだろうか。あとで聞い
てみよう)

「す、すまぬ。ワシは九尾じゃ。妖術なら全て使うことが出来る。

チャクラも自然から無限に作りだせる」

「きゅーちゃんと呼ぶとよからう主。これは玉藻前に化けた九尾じやなからうて、玉藻って呼ぶのも変じゃからの。そもそも、玉藻前は地球だしの」

まるで九尾が子供のよな扱いを受けている。

それもわかる。この九尾は善狐ならば天狐だ。くーちゃんは、善狐の空狐。しかも、空狐になって2000年は立っている狐である。九尾の5倍は生きている、この世界では神に最も近い狐だろう。

「最後にわらわじゃが、空狐。神術なら全て母上から学んでおる。体術も忍具も扱える。まあ、神術と言っても、本当の創造神に比べたら赤子以下で全然ダメじゃが、人間には大きな力じゃる。どうじや？ この三匹ならば師としては申し分ないじゃる？」

小さな胸を張るくーちゃんを見つめ、ナルトは口を開く。

「あのさ……忍術は誰が教えるの？」

「……」

その反応でナルトは理解した。

忍術を誰も使えない。妖術、仙術、神術。普通人間が使えない術は教えられるが、人間が使える忍術が教えられない。

「き、気にするでない主！ わらわには千里眼があるのでな！ これで、人間の術を覚えて教えればいいのじゃ……多分」

（幸先不安すぎる……って！ 本題忘れてた！）

「あのさ、此処にきた目的！ ちょっと俺の本体移動してほしいん

「だけど」

「ふむ、なら一度戻るかの」

くーちゃんがそう言うのと、意識が急速に薄れてゆく。

焼け跡

ナルトに意識が戻ると、傍にはニメートル程の大きな狐が居た。くーちゃんではないと思う、感じる力が全然弱い。その狐は、赤子をミナトの上着にくるみ、器用に啜えて走り出す。赤子の腹にあった八卦封印の痣は既に消え去っていた。

精神世界での出来事は、外の時間になると、ほんの刹那だったよ
うだ。

しばらくすると、火の国の人間が大勢走ってきた。

その人々は、九尾を封印し、命を落とした四代目火影、波風ミナトと、うずまきクシナを見つけ、涙を流しながら黙とうをささげた。「ミナトよ……ワシのちからが足りないばかりにすまなかった……。お前の残したナルトはワシが育てよう。必ず幸せにしてみせる」

膝をついて黙とうをささげていた老人　三代目火影は、立ち上がり、ナルトを探す。

あたりを探しまわるが見つからない。
しばらく探すが　いない。

「火影様！　まだ危険ですので……」
「離すのじゃ！　ナルトが……ナルトが！」

他の忍びが止めるが、それでも探し続ける。
そして、辺り一面を探し終える。

「どこじゃナルト！？　ナルトー」

早くミナトとクシナを里に連れ戻らないといけないが、ナルトは託された子供。それを置いて里に戻ることなど三代目火影には出来なかった。

「ナルトー……！　ナルトー……！」

まだ、火がパチパチと弾けている焼け野原を声が潰れるまで叫び続けた。

だが、それでもナルトを見つけることは出来なかった。

やがて、数週間探し続けた三代目火影は、過労で倒れた。

しばらく後、里にはある噂が流れることになる。

“里を襲った化け狐はある子供の腹に隠れ、力を取り戻そうとしていると。その子供の名を ナルトと言うらしいと。子供の髪は、里では見ることはない金髪”

三代目火影が探すよう命令した内容。それは、狐を囲っている子供を殺さないといけないと内容が変わっていた。

四代目火影の息子であるという“真実”は誰にも伝わらず、狐の子として認知されてしまった。

三代目火影がそれに気付いた時には、既に遅く。噂は里全体に広がり、そのことを子供に教えることを禁ずるという対処しか出来なかった。

その噂を知った三代目火影は泣き崩れた。

じーちゃんにあずければ安心だと言い、里の為に命をかけたナルトを。幸せにすると約束したナルトを不幸に導いてしまった自分のふがいなさに。

その頃のナルト

「あぶあ〜」

（お腹すいた〜）

「待っておるのじゃ主。いまそこらにいる動物を狩ってくるのでの」

「あつああぶーうあー」

（赤子に肉は無理〜）

平和そのものであった。

001 こんにちはわ赤ちゃん。(後書き)

最初から空狐出せばいいんじゃない？とか思うかもだけど、空狐はナルト以外どうでもよかったなので、出てこなかった。ナルトは出し方しなかったわけだし。

002 修行ときどきクレーター！

一年後

ナルトは産まれて一日で肉を食べると言う伝説を作りながら、すくすくと成長した。

母乳などあるはずもなく、まず変化の術を覚えなくてはいけなかった。肉しかないので、変化を覚えて肉を食べないと死ぬ。

産まれてわずか一日で変化をするというのも伝説だろう。

生憎と、人間でそれを知っているのはナルトだけ。あとは人外の妖狐しか知らないの、伝説でも何でもないが。

そして、今は森の中、ミナトの姿で術の修行中。

くーちゃんが見つけてきた多重影分身の術で修行中。正史では、かなり後の方でこの方法を使って修業していたのだが、利用しない手はないと思い、くーちゃんに頼んで一番最初に教えてもらった。

くーちゃんに森一面に結界を張ってもらって、数万人に分身しての修行。修行速度数万倍。多重影分身は、膨大なチャクラを使用するので、禁術認定されている術だ。ただ、ナルトの場合は、妖狐達による無限のチャクラを持つので、いくらでも使えるのだ。

くーちゃんも多重影分身をし、それぞれが別々の術を練習している。

影分身が消えると、経験が本体にフィードバックするというすぐれものの術だ。危険な術はもっぱら影分身にやらせることで、死ぬのを回避している。

更に、くーちゃんが影分身で各里に忍び込み、里秘伝の忍術書を覚えたら影分身を消し、身体にフィードバック。そのあとにナルトに教えると言う犯罪ギリギリ、むしろ完全に犯罪な行為で成り立つ修行だ。

修行の休憩中、ナルトは遠い目をしながら呟いた。

「あー、写輪眼ほしいな……」

「何を言うのじゃ主。主殿には輪廻眼があるじゃろ」

(そう言ってもこの目役にたたなすぎる。全性質変化使えるのはいが……7つの能力つてのがわからん。原作でペインが使ってた奴使おうと思ったけど使えないし。閻魔にもらった輪廻眼つて違うつばいんだよな……。それに引き換え写輪眼なら術を一発で覚えられ(るし))

「それにじゃな。確かに写輪眼は、忍術、体術、幻術を見抜けるかもしれないがの、他は無理なのじゃ。主がやっている、大部分は妖術と神術じゃからな」

ナルトがやっている部分。それは、忍術、体術、幻術、封印術、結界術、呪印術、秘伝、妖術、神術、仙術。更に、くーちゃんが考えたそれぞれを合わせたナルト専用オリジナル術。一歳でこれだけやるなんてスパルタもいいところである。

「それでも、主がやりたいと言うからやり始めたのじゃ。最後までやってみせい」

(確かに俺から言い始めたけど……死なないように。てか、俺がナルトになったら物語の続きわからなくね？ 本当は傍観しよう

思ってたのに、結局死亡フラグが自分に回ってきたし」

「ああ、やるさ。目標もあるしな」

「うむ。その意気じゃ」

満足そうにうなずくクーちゃんをしり目に、ナルトは今まで忘れていたことを思い出した。

「そういや、九尾は何で木の葉を襲ったんだ？ 聞くの忘れてた」

「本人に聞いた方がいいじゃろう。わらわも聞いてはおらぬ」

「そうするか《口寄せの術》」

印を組み、ナルトが掌を地面につけると、黒い模様が大きく広がってゆく。

これが門。

普通、九尾なんて口寄せ不可能。だからこそ、本人は門を開くだけ。門をくぐるかは九尾自体。だが、クーちゃんを介しての契約で、ほぼ強制的にこちら側に出ることになる。

そして、全長100メートルはありそうな巨大な狐が現れる。

「結界大丈夫だよな？」

「うむ。神術の結界を張ってあるからの」

これだけの妖力があれば、近くの里にバレてしまうだろう。そのため、クーちゃんにはけどうられない結界を張ってもらっているのだ。

「なあ、きゅーちゃん。なんで木の葉を襲ったんだ？」

きゅーちゃんはしばらく黙っていたが口を開いた。

『……ワシは自分の子供を殺したのだ』

ナルトには意味がわからなかった。何故自分で殺して、木の葉を襲うのか。

『奴の目を見た瞬間、ワシは破壊衝動に駆られての。全てを壊したくなったのだ。何物も区別がつかず、自分の子供ですら殺してしまった。奴は木の葉の里の者だと言っておった。それを聞いた後、氣付いた時にはお主の中に居た』

「奴？」

『うちはマダラと……後でお主の父親に聞いた』

そこでナルトは気づいた。

万華鏡写輪眼　九尾すらも御することが出来る瞳。子を殺し、怒り狂って我を忘れて木の葉を襲った。うちはマダラは最初からそれを考えて行動したのだろう。

「万華鏡写輪眼……やはりいいな」

「だからお主の目の方が上なのじゃ。お主には幻術は効かんじやろて。継承程度の目と、神から与えられた目。優劣はわかりきっておるじゃろ」

「わかってるが……。まじ役にたたないしコレ。見た目も黒点を中心に、円が何重も重なってるのだし。キモチワルイ目だ」

「まあ、目のことはどうにもならんから置いておくとしてじゃ。九尾は墮とされたのじゃ。天狐から悪狐へと。我が子を殺したことで悪狐となってしまったのじゃろな」

（わかっていた。今の九尾を見ると、人を襲う雰囲気など全くない）

ナルトは九尾の目をじつと見つめ、頭を下げる。

「すまなかつたなきゅーちゃん。元・木の葉の里の忍者がそんなこととして。火影だった父が変わって謝る」

『……気にするでない。そもそも、お主は産まれてなかったのだ。ワシもバカではない。今考えれば、あれが畏だとすぐにわかる。ワシこそ、お主の親を奪ってすまなかつた』

ナルトは本当にすまなそうにしている九尾の、下におろした頭の鼻に手をおく。

「俺は子供なんていないからわからないけどさ。きつと、殺されたのはツライ。お前がやったことは間違ってる。確かに、恨まれるかもしれないが。そこまで追いやったのはうちはマダラ。ひいては、その一族を未だに庇い立てしている木の葉のせいでもある。せめて自由になるように、解放してやろうか？ きゅーちゃん」

ナルトの言葉を真剣に聞き、首を横に振る。首を振るだけの動作で、風が起き、周りの木が倒れてゆく。故意にナルトに風が行かないようにしなければ、吹き飛ばされていただろう。

『ワシはお主についてゆこう。だが、うちはマダラとの戦いのおかげはワシを使ってほしい』

「ああ、約束しよう。これから俺達は友達だ」

ナルトはニつと笑い、それに吊られて九尾も笑う。

もし、原作であるヒーローのようなナルトならば、復讐などツライだけとか言うかもしれない。だが、“今”のナルトはそれを言わない。復讐は正統な権利だと言う。それが、本来のナルトが使えなかった九尾の陰のチャクラまで使える要因と言えよう。

『では、ワシも妖力がほぼ回復したしのう。ワシも稽古をつけてやるう』

「あー、わかった。なんかめちゃくちゃ危険そうだから影分身増やすわ」

この判断がナルトを救った。

この後、境界内の森が一面消え去り、影分身も消えることとなる。

一年後

あれから一年経っているが、ナルトは未だに同じ森に居た。

外では、境界がバレ、境界を破ろうとしているようだが、忍者に敗れるような境界ではなく、入れずの森と名付けられることなどナルトは知らない。

ナルトは二歳になり、術はあらかた覚えた。最終的には影分身数十万となっていたが……。

「にしても……」

くーちゃんの蹴りをかがんで避ける。

そのまま乗った足を払いのけようとしますが、その足もあげられる。くーちゃんは片手をつき、ぐるぐると足を遠心力で回す。まるで力ポエラーだ。

「チツ」

慣性の乗らない足の付け根を腕でガードし、掌底を放つが、避けられ、くーちゃんに器用に腕を脚に絡ませられ、ナルトの身体を縦に一回転させて地面にたたき落とす。

「いつつ……どこからその遠心力来てんだ……」

「自分を軸にし、相手のこちらに向かってくる慣性を使って一回転すればいいだけじゃ」

「どんな原理だよそれ……今でどれくらいの実力よ？」

「ふむ……一厘か二厘くらいかのう」

「1000分の1かよ」

「そもそもじゃ。万華鏡写輪眼程度に視認出来る速度じゃ意味がないのじゃ。視認できないスピードで倒すのが基本じゃ。術は最後の手段じゃな。あとは尾獣や妖狐のような打撃に強い者と敵対したときのためじゃ。人間相手なら威力なぞイランのじゃ。幻術を掛ける暇も与えず、首を切れば終了じゃ。一番大切なのは速さ。しかし、主殿には目標があるようじゃからな、術の威力と範囲も伸ばしているのじゃ」

体術は影分身を使ったところで意味がない。

術は覚えるのが早いが、体術は自分の身体感覚を掴めないという意味がないのだ。

影分身では通信制の格闘技をやっているようなものだ。

「はあ……一体いつ追いつけるんだか」

肩を落として言うナルトに、くーちゃんはキョトンとした顔を
する。

「あと一年以内に尾獣程度は倒せるようになってもらわないと困
る」

「はあっ！？ 三歳で尾獣倒せるってどんな伝説作るつもりだよ！
？」

「目標あるんじゃない？ 5年以内に全ての尾獣捕まえないと。とい
うか、今の時系列だと、ほぼすべての尾獣が人柱力に封印されてな
いから楽なのじゃ」

捕まえるって言っても、入れる人柱力見つかってないし。

「ってことで、ちょっとこれから新しい技おしえようとおもっ
のじや」

ナルトはそれを聞き、影分身を作ろうとするが、それを止められ
る。

「違うのじゃ。これは本人でなくてはいけない技でな」

「ふーん。なんて技だ？」

「外術じゃな。分類はないのでのう。簡潔に説明すると、尾獣と融
合するのじゃ。わらわでも、仙狐でも天狐でもいいのじゃが、一定
以上の力を出すのなら、千年以上生きた妖狐がいいじゃろう」

ナルトは少し後ずさった。にやにやと笑うくーちゃんが怖かった
のである。笑顔が怖いのではなく、こつ言つときは、必ず悪いこと
が起きる。

「失敗したら死ぬのじゃが」
「……」

案の定だった。

「つてのは冗談じゃ。確かに普通は死ぬじゃろうが、それは尾獣側が拒絶した場合じゃ。きゅーちゃんは主を気に言っておるから殺すことはせぬ。主の話じゃと、正史では拒絶し、精神を乗っ取られておったようじゃが。それはありえぬ。精神は主じゃ。力だけを借りるのじゃ。ただ、身体が保たないかもしれないから、九尾の一尾から徐々に馴らしていくのじゃ。最終目標はわらわと一体になることじゃな」

「出来るのかそれ？」

「そうじゃな。妖術にもなれたことじゃし出来るのではないか？
多分」

変なところが創造神と似てしまっていたくーちゃん。曖昧だけどやろつってことだ。

「と言うわけで、やるのじゃ。口寄せ・尾獣混化でいいじゃろう。名前に意味はないのじゃが、印はこうじゃ」

くーちゃんが印を組むが、もしナルトに輪廻眼がなければ見切ることすら不可能だろう速度だ。速さが大事と言っただけあり、何事も早いのだ。

ナルトはその印を真似、印を組む。

《口寄せ・尾獣混化》

印を組み終わった瞬間、ナルトは理解した。これは自分を門とし、自分を尾獣とする術。もし、こんなのを一方的に組んだら、すぐさま身体を乗っ取られてしまうだろう。九尾が協力関係にあるからこそ出来る術である。

可視出来る程高密度の真っ赤なチャクラが周りを包む。

「尻尾は一本じゃな。わらわとなら尻尾なしで行けるのじゃが。普段はわらわが、尻尾を消すように制御しておこう。それじゃ人前に出れんしろう」

(いやいや、これチャクラ膨大すぎて抑えられない。こんなで出たら化け物扱いされて討伐隊出来上がる)

「ちなみに、その状態なら火は効かぬ。と言っても、普段の状態でも火は効かんじやろうが。普段の状態で、火・無効、風・大減、他小減じゃな。今の状態ならば、ある程度までは弾いてくれるじゃろ。では、次じゃ。『二門・解』と言ってこの印じゃ」

くーちゃんの真似をし、印を組む。

《二門・解》

「ッ!？」

先ほどはちりちりと言う感じのチャクラだったが、今度は押しつぶされるようなチャクラを感じた。

「ふむ。チャクラ量が倍になるからろう。では、しばらくそれで生活するのじゃ。慣れたらどんどんあげてゆくのじゃ。門を全て繋げ

るのはあとあとでいいじゃろう。ちなみに、十門開けたら、わらわが中にいる場合は勝手に切りかわるのじゃ。ただ、覚悟しておくのじゃ。九門までは九尾の力じゃが、十門でわらわのちから。つまり、5倍近いチャクラに耐えなくてはいけないのじゃ。九門になれたとしても、よくて骨折じゃな。では、影分身10万くらい作って全員その状態でしばらくすごさせい」

（今なんていったこいつ？ 強がっていたが、実はこの状態めっちゃきつい。故意にチャクラを高速で循環させないと身体が潰れかねない。それを維持。しかも、影分身も維持しないといけないから相当きつい）

「早くやるのじゃ主」

ほつぺを膨らましてぶーぶー言ってるが、かわいいフリしてなんてスパルタだ。実際可愛いのだろうが……狐なのに足元まで伸びた真っ白い髪に金色の瞳。ってそうじゃない。とりあえずキツイ。

ただ、自分から強くなりたいと言った手前、後には下がれない。なので、

「すぐになれてやろうじゃねーか」

《多重影分身の術》

強がっているが、結局10万ぴったりの数しか出してないところがキモだ。

他の影分身も、真っ赤なチャクラを纏い、2メートル程のチャクラで出来た尻尾を二本つけている。

「早速で悪いんじゃないが主。あそこの影分身、制御しきれなくなっておるぞ?」

「は?」

その方向を見ると、確かに真っ赤なチャクラがぼこぼここと泡立っている。

正史では暴走の兆候である。だが、この場合は。

次の瞬間、影分身は大きな爆発を起こし、ナルトの視界を覆った。

煙が晴れると、暴走していた影分身は消え去り、地面に30メートル程のクレーターが出来上がっていた。

周りの影分身が無事な事から、チャクラの防御性が伺える。

「ふむ。影分身だから消えたが、もし主が暴走させても大丈夫じゃ。気を失うくらいで済むはずじゃ……多分」

「……」

ナルトはもう何も言えないでいた。

更に一年後

「主、今日でちょうど一年じゃ。そろそろ外にでんかの？」

ナルトが熊を焼いている最中、クーちゃんが提案した。

「と云うかもう食料がないんじゃない？生態系壊滅じゃ」
「……」

時は一週間前にさかのぼる。その日、クーちゃんが言った言葉。
『主もそろそろ九門まではなれたじゃろ？ わらわと合体してみぬか？ わらわもしてみたいのじゃが？』

エロイ言葉でもなんでもない。ただ、単純に融合したかったらしい。九門開放し、しばらく経っていたので大丈夫かと思ったのだ。そして、十門を開いたナルト。

開いた瞬間、押し寄せる膨大な力。開いて三秒で暴走した。結果、森は全てクレーターになった。『よ、よかったのう、わらわが咄嗟に守らなかつたら主は消えておつたぞ？ 忘れておつたが、わらわは妖力ではなく、神力じゃ。九尾の修行意味なかつたのう』クーちゃんはそのことをのたまっていた。

と言うわけで、結界内の森はクレーターとなり、食糧不足になったのだ。

「んー、別にいいぞ。だけど、10歳くらいには神力も操れるようになりたいな」

「それなら大丈夫じゃ。天狐も神力じゃから、尾を四本から練習の

するのじゃ。天狐は尾がない程強いからの。そこでわらわと合体じや！」

相変わらず成長せず、ない胸を張るクーちゃんをジトつとした目を向ける。

(どうせ天狐よりクーちゃんは5倍の神力だ。天狐で慣れても確実に暴走する)

「では主、食べ終わったら主の目標を達成しに行くのじゃ」

「そうだな。まずは疎まれてる血継限界を集めて里を作る。その中から人柱力となってくれるものを探すか」

ナルトの目標 血継限界は火の国以外では疎まれていると言う現実がある。それならば、血継限界だけの里を作れば、誰も疎まないのでないか？ と言うものである。更に、血継限界以上に疎まれる人柱力。彼らをリーダーとし、里を守る。尾獣との対話を可能と出来れば、最高の里になるのではないかと踏んだのだ。里の長はせーちゃんが成ってくれると言うので、自分自身も護りや修行が出来る。

忍術書は、他の里全ての物がクーちゃんによって書き写されているので勉強もやりやすいだろう。

「まずは里の確保。霧隠れの里(水の国)を落とす。あそこは恐怖政治だ。血継限界の者は殺される。特に忍が最悪。卒業試験がバトルロワイヤルつだけある。ついで里の長が三尾の人柱力。長が命令してあんな国にしたんだから長もダメだな」

食べ終えたクーちゃんとナルトは、その場から一瞬にして消え去った。

後に残ったのは、食べかけの熊の肉だけであった。

002 修行ときどきクレーター！ (後書き)

水影が暁のうちはマダラに操られてるってのは知ってますが、そんな設定邪魔です！

霧隠れの里（水の国）

深夜、ナルトとクーちゃんは霧隠れの里に到着した。

と言っても、目的地から離れた森の中だが。

神術・飛翔天衣による移動により、此処までの戦闘はゼロだ。

「おー、にしてもすげーキレイな場所だなこの国」

「わらわには見えぬが？ 霧が濃すぎて何も見えぬのじゃ」

クーは全然見えなくて頬を膨らませて怒っている、

ナルトは気づいていないが、輪廻眼の効果は確実に現れている。

視力増幅、動体視力上昇。妖狐による、暗闇での暗視。瞳孔が完全に縦に割れ、輪廻眼の円が縦に並んでしまっている。

「ぶつちゃけさ。今の俺で尾獣に勝てると思う？」

「無理じゃな。完全に尾獣化されてしまったら無理じゃ。むろん、九尾を口寄せすれば勝てるじゃろうが。主単体では不可能に近い」

それを聞いてナルトは落ち込む。ナルトは確かにほぼすべての術

を覚えたが、尾獣化した場合大きさの問題があるのだ。尾獣は小さくとも30メートルは超える。質量の差は忍でも有利不利がある。大きければそれだけダメージが通らず、こちらの被害は絶大だ。

「まあ、とりあえず行ってみるか？ 人柱力探しから」「そうじゃのう」

ナルトとくーは、気配を消してその場から消え去った。

ある廃墟

そこは、同里の忍び同士の争いで廃墟になってしまった場所。そこに、一人の子供が膝を抱えて俯いていた。ぼろぼろの洋服を着、首輪に鎖がついている。何日も洗っていないのか、キレイだったであろう黒い髪はぼさぼさ。更に子供のお腹が空腹を訴える。

「僕は此処で死ぬ……」

その子供は、既に希望を見いだせないでいた。

その時、俯いた子供の耳に、近づいてくる二つの足音が聞こえてきた。

逃げようとするが、限界まで空腹だった為、鎖をジャラリと鳴ら

すだけで終わってしまう。

「君は死にたいのか？」

突如聞こえてきたその声に、子供は顔をあげる。

そこには二人　ナルトとクーが立っていた。

ナルトは二十歳くらいのミナトの姿。クーは7歳程の少女の姿。

問いかけた後、ナルトは子供と視線を交差させる。

二人が此処にやってきたのは偶然だった。人の気配がない道を通っていたところ、一つの気配を感じたのだ。そこで子供を見つけた。ただ、それだけ。

子供は、しばらく思考した後、首を横に振った。

「ならば何故このような場所に一人にいる？」

当然の質問である。此処には食べ物すらない。こんな場所にいる奴は死にたいと思っている奴だろう、と。

視線を膝のあたりに移動し、子供はゆっくりと口を開く。

「父が母を殺し、僕を殺そうとしたので。僕が父を殺して逃げてきました」

「ふむ。理由は？」

「血」

子供はただそれだけを口にした。それだけで、ナルトは理解した。こいつは血継限界なのだ。

「名を」

「白。家名は捨てました」

それを聞き、ナルトは目を見開いた。

内心では『うお、いきなり原作でのMOBキャラに会った！ てか、少女だと思ってたけど少年か』などと思っていたが。

「一緒に来るか？ 少年」

その言葉を聞き、白は目を見開いた。

「僕が男ってわかるんですか？」

「あ、ああ」

ナルトは視線を思いっきりずらした。白は首をちょこんと傾げるが、その仕草も少女っぽい。

空腹だろうつことをみかね、ナルトは一つの巻物を取り出す。そして巻物から口寄せをし、それを白に渡す。決して誤魔化すためではない。

「冷めてて悪いな。確かイノシシの肉だったはずだ。食っておけ」

「あ、ありがとうございます」

白は笑顔でお礼を言い、よほどお腹がすいていたのか食べ始める。

「もうすぐこの国で大きな戦争が起きる。一緒に来るか？ 多分一人で此処にいたら、死ぬ」

白は食べるのを一度やめ、ナルトを見つめる。

大きな戦争とは、今からナルトが起こすであろう戦争だ。尾獣同士の戦い。国ひとつやすやすと潰せる戦いだ。

「穢れた血を持つ僕が」

「俺は血継限界を持つものを集め、国を作ろうと思っている。そのためにはお前が必要だ」

このとき白は嬉しかった。戦乱を呼ぶと言われ、誰もが穢れた血と罵る血を必要と言われて。血継限界の人間が見つかる。それは死を意味していたのだから。そして、そんな自分を必要と言ってくれたこの人に付いていこうと思った。

白はほほ笑み、それを口にする。

「よろしく願います。僕はアナタの武器となりましょう」

「違う。友人だ。武器など必要としていない。あと、アナタじゃなくて俺の名前は　風巻ナルトだ」

ナルトの家名。これは、波風ミナトと、うずまきクシナを混ぜたものだ。波風やうずまきをなめる資格があるとは思えず。だが、幸せを俺に託した親を忘れることもできなかった。だから、一文字ずつもらい風巻ナルトとしたのだ。

「よろしく願います。ナルトさん」

「よろしくな。それで白。いきなりだが、尾獣って知ってるか？」

「はい。大きな力を持つ、9匹の魔獣ですよね」

「知ってるならいいんだが……俺の中には、その九尾が封印されている」

その言葉に、白は目を見開く。

「それで、お前に頼みがある。お前の中に、三尾を封印させてほしい。虐待を受けないよう、俺が保証する。受けても相手を殺せるだけの力を与える。酷い頼みだと思うが、頼みたい」

ナルトは頭を深く下げた。

それを見つめ、くすりと白は笑った。

「頭をあげてくださいナルトさん。あなたは僕を友人と言ってくださいました。友人でもありますが、僕はあなたの武器でもあるんです。どうぞお使いください」

「……今回はありがたく使わせてもらう。だが、その物言いはこれで最後にしろ。自分を武器だなんて言うな」

驚いたような顔をし、すぐに笑顔になる。

「はい！」

そこで、ナルトは仙狐を人型で呼ぶ。

「こんばつぱー。せーちゃんです！ 呼ばれて飛び出て殺します！」

目の前に現れたのは、二十歳程度の女性だった。
くーより全然大人だ。

「あー、せーちゃん。その子抱きかかえてくれ。移動すつから。攻撃を仕掛けてきた奴がいたら迷わずに殺せ」

「はい！ かわいい少年ですねーよろしくねー？」

仙狐は嬉々としながらお姫様だっこをした。

白は驚いていたが、時間を無駄に出来ない。夜が明けたら面倒だ。

「行くぞ、くーちゃん、せーちゃん」

「わかったのじゃ」

「はい」

四人はその場から風のように消え去った。

水の上

現在、三人は水の上に立っている。

足の裏にチャクラを集中し、水の上を移動するという術だ。白は立っていることに驚いていたが、すぐに出来るようになるというと、元気な返事をした。

ちなみに、俺はすでに子供の姿に戻っている。三歳児の姿だ。身体が小さい方が、チャクラの伝導率がいいのだ。変化の場合、身体は子供のままなので、身体のすみずみまでチャクラを回すことは出来ない為である。

ちなみに、何故ナルトが水の国を選んだか。それは、地形にある。水の国は大半が水で覆われており、修行をしやすい。尾獣を使った修行は、かなりの被害が予想される。しかし、水の上なら被害がほぼないのだ。

現在水の上にいるのは、人を殺した時、処理が楽と言う為だ。一

応水底まで数十メートルあるので、死体は勝手に沈むだろう。

さらに、水があると言うことはそれだけ豊かである。水の国の陸部分を見てきたが、畑などがちゃんと在った。砂の国などを見たら絶望するだろう。

「白、多分お前は俺達がチャクラを解放したら気絶すると思うが、終わったら全て終わってる。だから心配するな」

ナルトのほほ笑みに、白はほほ笑み頷く。

チャクラ解放。相手に気付かせるためである。大きな力を見せれば確実に長である水影が出てくるだろう。

「さて……《口寄せ・尾獣混化》」

ナルトの九尾化に伴い、くーと仙狐もチャクラを解放する。

「というか……俺も気絶しそうなんだけど……？　どんな神力してんだよくーちゃん……。周りの水蒸発してるし……」

「ふむ。これでも抑えておるのじゃ。主も三門あたりまで解放すれば大丈夫のはずじゃ」

ナルトは実際かなりきついたので、すぐに印を組む。

《二門・三門・解》

尾が三本に増え、チャクラ量が跳ね上がる。

「平気になってきたな……。じゃ、せーちゃんは離れて俺が三尾を倒したらすぐ来て。くーちゃんは、三尾以外全員殺して。さすがに俺の邪魔されると困る。そんな余裕ないし」

「うむ」
「はい」

数分後、どうやら水影が到着したらしい。
眼前50メートル程先に8人の人影が現れた。

「侵入者は……子供が四人？」

真ん中に立っている子供が呟く。

聞こえない程の距離だが、九尾化したナルトならば聞きとるのも楽である。

「水影殿はどちらかな？」

ナルトの質問に、子供は眉間にしわを寄せる。

「俺が水影、やぐら。貴様は？」

「風巻ナルト。九尾の人柱力でもある」

「して何ようだ？」

「そんなもん決まっているだろ？ それにあんたらが向けてる殺気。話し合いの余地なさそうだし？」

ナルトはニヤリと笑う。

「殺し合いがそちらの流儀なんだろ？」

《《水遁・爆水衝波》》

ナルトが答えた瞬間、それぞれが口の中のチャクラを水に変換し、津波の様な水龍を放ってきた。

くーちゃんが一步前に出、手を上空に掲げる。
印すら組まない術。

《神術・天空雷招》

轟音をとどろかせ、空から敵に太い雷を落とす。
それだけで、敵の術は消え去った。

「ふむ。三人消滅じゃ。残り5人。主の獲物ものこっているのじゃ。
わらわは他の者を消してくるかの」

そう言うと、くーは消え去った。

ナルトは、残った一人に視線を移す。他はくーによって移動させられたようだ。

「じゃ、人柱力同士戦うか？」

「やるな。霧の忍刀七人衆を一撃で屠るなんて」

「弱すぎなんじゃない？」

ニヤリと笑い、高速で印を組む。同時に、やぐらも印を組み始める。

《雷遁・地走り》

《水遁・水鮫弾の術》

ナルトの術により、電流が水の上を走り抜ける。

やぐらの水の鮫が、その水流を巻き込みながらこちらにはしる。

だが、既にその時にはナルトはやぐらの背後に回っていた。

大量のチャクラが練り込まれた蹴りをやぐらに放つが、やぐらはパシヤと水のように溶けてしまった。

「チツ、水分身か」

「……」此処は水の国。水がない場所などあり得ない」……」

(使う術は水……ならば)

《神術・天空雷神》

くーが使った天空雷招の上位。

辺り一面全てに雷を落とし、水中全てを感電させる。

ただ、膨大な神力を消費するので、空狐化出来ないナルトには一撃打っただけで神力を全て消費する。

やがて、ぷかんとやぐらが浮かんできた。多分死んでいるだろう。ナルトは近づき、服をめくる。

「模様が……ない？」

次の瞬間、隕石が衝突したような衝撃がナルトを襲つ。

300メートル程水の上を跳ね、ナルトは水の中に沈んでいった。

数十秒後、水面にナルトが足をかけて立ち上がる。

右腕の骨は完全に砕け、血だらけの姿のナルトが。

「はあ……はあ……。人柱力が死ぬと尾獣が勝手に出てくるのか……」

尾獣との初めての戦闘。ナルトはそれを知らなかった。

そこには、するどく尖った角と巨大な甲羅、海老に似た3本の尾を持ち。右目が潰れており、人間によく似た顔を持つ三尾が居た。

大きさは30メートル程だろう。尾獣にしては小型ではある。

「このままじゃ……きついな。てか、火と水って相性最悪だわ……」

《四門・五門・六門・七門・八門・九門・解》

今現在のナルトの最終形体。九本の尾を生やした完全な九尾化姿になった。

それに伴い、ナルトの傷が復元されてゆく。

「って言っても……長引かせるとまずいか……」

高速で印を組み、

《多重影分身の術》

ナルトが一万人居に増える。

「妖術使い放題ってところはお前と同じだろ？ 三尾」

《《妖雷・雷竜爆》》

それぞれの分身が竜のような雷となり、三尾に飛翔する。その速さは雷と同じ。だが、いわゆる自爆である。当たった瞬間爆発し、分身は消え去る。

一万もの轟音が轟き、煙が辺りに立ち込める。

煙が立ち込める中、ナルトは膨大なチャクラの収束を感知した。

「……っ!? 飛雷神の術」

ミナトが作った最速の移動術を使用し、移動した瞬間。ナルトが居た位置を大きな衝撃波が通り抜ける。水面が縦に割れる程の威力のチャクラの塊だ。

ナルトは更に飛雷神の術を使い、移動を続ける。無限に打ち出される衝撃波を避け続けるためだ。

「おいおい……二発同時にも出せるのかアイツ。弾幕対決って奴？」

自分も印を組まずに使える妖術。ただチャクラを圧縮した黒い球体を両手に作りだす。もしこれを一般忍者がやるうとしたら、上忍数百人の命分のチャクラが必要だろう。

山ですら消滅させる球体だ。だが

三尾の衝撃波に向け、二つの球体を投げつける。それは中心でぶつかり、辺りの水を数百メートル消しとばす。

相手は“普通”ではないのだ。

実質無限に衝撃波を撃ってくる。持久力と言うと九尾の方が上だが、ナルトは九尾化した人間なのだから持久戦には向いていない。

九本の尻尾を三尾に向け、黒い球体を先端に作りだす。

「死ね、亀」

九個の球体を投げつけるが、三尾の口から連続で放たれる衝撃波に全て撃ち落とされてしまう。

威力は互角。数はこちらが上。連射性能は向こうが上。結局持久

戦でしか勝負はつかないのだ。そうなった場合先に倒れるのはナルトだろう。

「くそっ……しつこいんだよ！」

更に連続で放つが、撃ち落とされ、撃ち落とすの繰り返しだ。このままじゃ先に水が干上がってしまう。

そのとき、三尾がいきなり大きな波を作り、水に沈んだ。まるで上空からの攻撃を受けたような沈み方だった。

やがて、腹である真つ赤な甲羅を見せて浮かんできた。

そして、その腹の上には

「主。あんな戦いでは夜が明けるのじゃ！　ってわけで潰したのじゃ！　主は修行のやりなおしじゃのう」

くーが手を振っていた。

「俺の苦勞が……くーの殴っただけの一撃に負けた……」

言葉通り、あれは上空からくーが殴っただけ。それだけで三尾は気絶した。

実際は、三尾はあんな攻撃効かない。ナルトの攻撃により余裕が無くなり、生体強化や防御にチャクラが割けなくなり、無防備なところへの一撃で気絶したのだが、ナルトはそんなこと知らなかった。くーは知っていたが、あえて修行の為に言わない。

「それより主は早く封印するのじゃ。仙狐くるのじゃ」

すぐそばに白を抱いた仙狐が現れ、仕方なくナルトも近づく。

「それにしても、この尾獣まんま亀だしブサイクだな。白に合わないし」

「仕方ないじゃろうが。今やめるって言っても封印が出来なくなるのじゃ。早くするのじゃ」

くーにせかされ、仕方なくナルトは印を組む。

そして、三尾に掌を当て、

《妖術・妖獣封印式》

尾獣に黒い文字の羅列が這ってゆく。

これは、人間側に封印を施すのではなく、尾獣側に封印を施す術式だ。十段階の封印があり、人間側に解除をする権限がある。ナルトの九尾化のように、制御できるところまで徐々に開く形である。最終的に御せる様になれば、全てを外しても構わない。口寄せ以外では外に出れないのも特徴である。くーが考えただけあり、御すにふさわしい精神力を付ければ、完全に従えることもできるそうだ。

模様のついた中心軸に白の血をたらすと、尾獣は煙となって消滅した。

口寄せの応用である。白の精神世界に口寄せしたと言うわけだ。

そこで、ナルトはペタンと水の上に胡坐をかいた。

「あー……疲れた。この後は、どうすっかな」

「水影を殺害したって証人もいないしもう。さっきの人間と戦って思ったのじゃが、この国の忍はダメじゃ。仲間を楯に使ったりしての。どっちにしる血継限界以外はいらんのじゃ。残酷なダケの忍は全員排除。その後に血継限界以外は退去してもらえばよかるう。

今まで血継限界と言うだけで殺されてきたのじゃ。今度は血継限界

に追い出されても文句は言えんじやろ」

「やっぱそうなるかー。別に血継限界以外でもいいんだが、血継限界が多くなれば、今まで虐げられてきた分逆に普通の奴が殺されそうだからなー……里を出てもらうのがいいよな」

「そこでいい方法があるのじゃが」

「ん？」

「妖狐としての妖術でな。幻術系の術が在るのじゃ。霧を使って広範囲に幻術を掛けるのじゃ。血継限界と認識していない者は勝手に出て行くように軽い心象操作じゃが。結界を水の国全土に張れば一発じゃろ？」

ナルトは少し考える。

心象操作までしていいのだろうか……と。しばらく考えたが、結局、去るような心象操作だけならいいと言っ考えに至った。ちまちまやっていると、内乱が起き、人死にが確実にでるからだ。

「んじゃそれで頼む」

「早速やってみるのう」

くーが術を掛けているのを横目に、ナルトは目を閉じた。九尾化での全力戦闘はさすがに疲れたのだ。

やがて、ナルトはそのまま眠ってしまった。

003 三尾封印(後書き)

くそつたれな出来になっちゃいました。

水影の書室

白に三尾を入れてから一カ月。

くーの幻術の効果はすさまじかった。妖術なので、幻術返しが出
来ず、里には血継限界の者だけが残った。

ただ、そのせいで里人の人数がかなり少なくなってしまった。当
初はガランとしてしまった水の国に、ナルトは悲しくなっていた。
しかし、なぜか一週間を超えたあたりで、人の数が増えてきたのだ。
しかも全員血継限界。ついでに、侵入者も増えまくった。くーの影
分身が24時間迎撃している。

水影は仙狐がやることになっている。里の名前は、九陽の里とな
った。九人の人柱力が光となって里人を照らすって意味なのだが、
里人は意味を知らない。つて言っても、まだ人柱力は二人だが。

アカデミーでは高度な術や、血継限界の術も教えている。教えて
いるのがくーなだけあり、進歩は速い。下忍以下のアカデミーで何
してるんだって感じた。大技教えてクラス全員チャクラ切れて気絶
とかさせてたし……。

里人が血継限界持ちなだけあり、血継限界だけの里で行く方針は
歓迎された。それだけ虐げられていたのだろう。

修行の合い間、ナルトはくーに質問してみた。
ちなみに、現在ナルトは天狐化して尻尾二本で修業中である。

「くーちゃん。何で血継限界がこんな勢いで増えてるんだ？」

「それはのう。わらわが、他里で血継限界持ちの人間だけに呼びかけたのじゃ。血継限界だけの里があると。そして里抜けの手助けをしたらこの通りじゃ」

「うん。それ絶対こっちの事ばれるし目立つよな？」

「大丈夫じゃ……多分」

ナルトもこの里を襲撃している忍の多さは知っている。

五大国の一つである水の国。いきなり水影が変わり、しかも血継限界以外全て追い出したつてことは周知の事実だろう。

「あ、でも主よ！ いいこともあったのじゃ？」

「いいこと？」

「う、うむ！ 一尾と二尾と七尾以外は獲ってきたのじゃ！」

「ぶっ！」

ナルトには意味がわからなかった、人柱力候補なんて見つけてないわけだから、捕獲方法があるのかと。

「一尾と二尾と七尾は産まれてすぐに封印されて無理じゃったのだが、他は大きな茶壺のようなものに封印されておった。茶壺ごと獲ってきたのじゃ！」

「開けたら出てきて戦闘だよな？」

「それはそうじゃな……」

(なら、人柱力候補見つけてからか……ん?)

「今それは何処にある？」

「水影の宝物庫に入れてあるのう。わらわの影分身が守っておるから安全じゃ」

ナルトは考えた、ならばすぐにやった方がいいのではないかと。妖術以外で封印すると、尾獣が暴走し、不安定になるのだ。妖術だとしても、制御にはかなりの時間を要する。ならば出来るだけ早く入れた方がいいだろう。

「赤子の時にいれられた人柱力ってどうなった？」

二尾が入っている二位ユギトは里で人気があるはずだよなーとか思っていたが。

「隔離されてるのう。暴走するのでの」

(子供の頃は隔離されているのか……)

「なら、俺はそいつらを連れてくるから、くーはかぐや一族の君麻呂っての探してくれ」

「ふむ。それは前世の知識かろう？ それに尾獣を入れるのじゃな」
「？」

「ああ」

この時期ならまだかぐや一族は大蛇丸に壊滅させられていない。それに、あの一族の血継限界を失うのは惜しい。敵にまわってしまった時も厄介だ。

ならば先に保護しようとナルトは考えた。

「じゃが、残った尾獣は4、5、6、8じゃぞ？ 他はどうするのじゃ？」

「うーん……前世で気に入ったキャラに入れるかな……木の葉はダメとなると……。マイト・ガイが一番好きなんだけど……。多由也かな……。じゃ、君麻呂6尾で多由也8尾いれるかな。各里の住民登録の写しあつたっけ？」

「うむ。それならあるのじゃ」

「まだ、大蛇丸に獲られてないと思うから連れてきてほしい。多分三歳程度だと思っけど……。親がいたらそつとしいてあげてくれ」
「して、他の4と5尾はどうするのじゃ？」

ナルトは全く考えてなかった。

必死に考えるが、キャラが全く浮かばなかったのである。物語の内容的に、木の葉がメインだ。だが、木の葉に手を出すのはまずい。そうなると思儀が無くなってしまふのだ。

「確か里に孤児が居たよな？ 里の為に働きたい奴いたら、血継限界の能力関係なくいれていいぞ？」

「ではそうするのじゃ」

ナルトはまず雲隠れの里(雷の国)の二位ユギトの所に決めた。忌子として隔離されてるのはつらいだろう。

「じゃ、行ってくる」

「気をつけて行ってくるのじゃ。危なくなったらわらわを口寄せするのじゃぞ？」

なんだかんだいって、心配してくれるクーにナルトは笑みを返し、その場から消え去った。

雲隠れの里

ナルトはついてそうそう思った。

やはりというか、尾獣を全然制御出来ていなかった。

漏れ出す妖力が場所を教えてくれる。その方向にゆっくりと歩いてゆく。

深い森の奥へと。

やがて、開けたと言うか、開けさせられた場所へと出た。地面はえぐれ、木々は押し倒されている。そこで、一人昼食を作っていた少女。昼食かはわからないが、作っているのは事実だ。ウサギをさばき、血抜きをしている。

少女の見た目は10歳くらいだろうか？ 今のナルトにしたら大きい。怖がられると困るので、ナルトは現在三歳の姿なのだ。

「こんにちは、お姉ちゃん」

そう言って、ナルトはニコリと笑った。年に合ったような無邪気な笑顔で。

「え？」

少女はナルトに気付き、振り向く。

「こんにちわ。でも、ダメよ？ こんなところに来ちゃ」

少女は迷ってきてしまったのだと思い、ナルトを遠ざけようとする。

「お姉ちゃん一人？」

「……うん」

「寂しくないの？」

「……」

少女は俯いてしまう。

寂しくないわけがない。里で忌子として虐げられ、此処に逃げてきたのだから。

「一緒にこない？」

ナルトは笑顔を向けて手を差し出した。

「……無理よ。里には近づくなって言われてるわ」

「どうして？」

「……どうしてだろっね？」

そう言つて少女は作り笑いを浮かべた。

「人柱力だからか？ 二位ユギト」

「ッ！？」

突然のナルトの豹変に少女は驚いた。

「人柱力だからどうした？ それだけで幸せになれないとでも？

虐げられるのが決まっているとでも？ お前はそのままでもいいのか

？ 変えたくはないか？」

「少し驚いたけど……。その通りよ。人柱力は化け物を飼っている。だから幸せにはなれない」

ナルトは見下したような視線をユギトに向ける。

そして印を組む。

《口寄せ・九尾》

模様が広がり、その中から100メートル程の狐が現れる。結界を張っていなかったら一発で気づかれる大きさと妖気だ。

ユギトは口をポカンと開け、それを見つめる。

「九尾の人柱力、風巻ナルト」

頭を下げた九尾の鼻に手を置き、撫でる。

「尾獣は人柱力を主と認めれば従う。俺はその方法を知っている。

ついてくるか？ 二位ユギト。俺の里には人柱力が他にもいるぞ？

皆同類だ。お前と同じように制御が出来ていない。それを乗り越

えようと必死にあがいている。その成功例が俺でもある」

ユギトはしばし考え、顔をあげる。

「制御出来れば恐れられないのですか？ 幸せになれるのですか？」
「恐れられはしない。幸せになれるかはお前次第だ」

幸せ そんなの人柱力だろうと血継限界だろうと、一般人だろうと手に入れるかは自分次第。ナルトはそう言っているのだ。

「貴方がわたしを導いてくれるなら行くわ」
「俺が導くんじゃない。お前がついてくるんだ」

ナルトはユギトに近づき、服をめくった。
やはりというか……封印された模様がある。

ナルトの封印は、九尾のチャクラを還元できるようにしてあったものだが、これは本当にただの器だ。

「今から封印を解き、人柱力を下してから再度別の封印をする。いいか？」

ユギトは赤くなりながらも頷く。と言うのも、模様が大きすぎるのだ。お腹だけではなく、肩の方まで模様が続いている。更に太もも辺りまで模様が続いているので、その部分をさらけ出すと、ほぼ全裸。10歳程度の少女でも恥ずかしいのだろう。
大きさから、封印は相当強固な物である。

《解》

神術の印での解術。幾重にも施された封印術を一気に解呪する。

そしてユギトからはがれおちた化け猫。
漆黒のチャクラをまわりつかせた二本の尾を持つ尾獣。
大きさは二尾も30メートル程度だ。

「きゅーちゃん、叩き潰せ。封印を開始する」

九尾は二尾に飛びかかり、地面に縫い付ける。

三倍近くの質量をもった九尾の下から逃げることなど不可能だ。

二尾は口にチャクラを収束する。それと同時に九尾もチャクラを収束。

ただ、傍目にもわかる程技量が違いすぎる。大きさも密度も九尾が圧倒的に勝っている。

「どうだユギト。腹の中に入った化け物って言うが、俺の中に入ってた九尾に比べたらまるで子供だろ？」

震えていたユギトは顔をあげてナルトを見る。

「むしろあれを制御してるナルトがすごいわ……」

次の瞬間、二匹の口から高密度に圧縮されたチャクラの塊が放たれる。

ナルトとユギトの結界の外が真っ白に塗りつぶされる。

煙が晴れると、気絶している二尾と、無傷の九尾。

二尾は生霊であり、消滅することはあり得ないが、移動すらできないようだ。

そして、森は完全に消え去り、広大なクレーターが出来上がっている。

ナルトは二尾に近づき、印を組む。

《妖術・妖獣封印式》

ナルトが触れた場所から、黒い文字が二尾を侵食してゆく。
そこでナルトは振り返る。

「ユギト、今お前は人柱力でないが、封印したらまた人柱力だ。封印するか？」

「封印しなくてもついていっていいの？」

ナルトは苦笑しながら首を横に振る。

「なら答えは決まってるわ。封印して」

「なら血を垂らせ」

ナルトはある一転をとんとんと叩く。

そこは、周りを円で囲まれ、色がない箇所だった。

ユギトは指の先を噛みちぎり、血を垂らす。

すぐに二尾はユギトの中に消え去った。

ユギトは不思議そうにしている。

「封印は終了したから、あとは使いこなせるように修行だな。飛雷神の術は使えるか？」

ユギトは首を横に振る。ナルトは苦笑しながら『だろうな』と言った。ユギトはほおを膨らませておこったが、あれは四代目火影が

作った難易度Sの奥儀だ。使えるはずもない。

「里に送り届けるが、俺はその後一尾を捕獲に行くから里を空ける」

ナルトは先ほどの戦闘中、遠くで大きなチャクラが溢れたのを感じ取っていた。方角的には砂の里だろうと思っている。

「……ついていつちゃ……ダメ？」

ペタンと座り込んでいるユギトが、三歳児に上目づかいで聞いてきたが、ナルトは首を横に振った。

「今度は九尾を出さずに尾獣と戦うことになるからな。お前を死なせたくない」

「ふーん……だったら早く使えるようにならないとだめよね」

ナルトは頷く。

「あと、いつまで半裸でいるつもりだ？ もう終わったんだから服着ろ」

恐怖でそれすら忘れていたユギトは、慌てて洋服を着る。

着たのを確認し、ナルトは横抱きにユギトを抱えた。

「……小さな子に横抱きに抱えられる私って……と言つか膝ついてる」

「安心しろ。怪我くらい直せるから」

「そういう意味じゃないんだけど……」

ナルトはユギトを横抱きにし、避雷針の術で里に戻る。

砂の国

ナルトはユギトをくーの影分身に預け、砂の国にやってきた。

「おー、ひどい状況だなコレ」

入口から死体がずっと続いている。何者かに　まあ一尾の人柱
力にやられたのだらうと仮説をたてた。

「にしても熱い……自分が水の国でよかった」

ほのぼのとしながら歩みを進める。

しばらく歩くと、一人の子供に大勢の大人が襲いかかっていた。

子供は砂の自動防御で術やクナイをガードし、砂を操って大人を
殺していた。

「へー、あの年でやるなあ」

と言っても、子供も3歳程度だろう。ナルトと対して変わらない。
ナルトは一番チャクラが多い大人の傍に歩みを進めた。

「ねえ、あんたが風影？ どうせ殺すなら、あの子供は俺が引き取ってもいい？」

風影だろっつ男性はこちらを見、眉を寄せる。

「出来るならやればいい。俺には関係ない」

「あんたの子供でしょ？」

「……俺には関係ない」

「それなら俺がもらっつ」

ナルトは戦場を中心に向けて進む。

巻き添えで飛んでくる術やクナイなどは、ナルトのチャクラが実体化し、打ち消される。

「くるなっ！」

子供が叫ぶと、砂がナルトに襲いかかる。

さすがに尾獣の攻撃は消すことが出来ない。ナルトは飛雷神の術を使い、移動しながら進む。

「こんばんわ我愛羅。いや」

ニヤリと笑みを浮かべる。

「 同胞よ」

ナルトの言葉に、ピクつと我愛羅は反応する。

そして、キッと睨みつけてくる。

「ボクは一人だ……自分だけを愛する……それが」

「我”愛羅って？ 洒落かよ」

ナルトはバカにしたよう笑う。

「それだったら我が愛するのは羅”徳。ととれるだろ？ 我は愛を網羅するとか？ いろいろあるわけだ。そもそも名が体を表す何てありえない。それだったら俺はナルト好きだからナルトかって感じだ」

まあ実際は母親の家名を波風に変える時。でも、うずまきつてのが無くなるのもつたいなくね？ じゃあうずまきつてことでナルトだろーアハハって感じで決めてそうだ。

「……」

「そうだな。お前は自分の為に今戦ってるんだろ？ 友達がいない？ 信じる奴がいらない？ だから自分だけの為に戦ってる。それってさ」

ナルトはくすりと笑う。

「ただの逃げだね」

「ウオオオアアアアア！」

我愛羅が、右腕を尾獣に飲み込まれる。その腕でナルトを殴ろうとするが、九尾化したナルトに片手で止められる。

「化け物同士で戦おうって？ にしても我愛羅は既に混化出来るんだな。でも、制御が甘い。それは乗っ取られてるだけ。自分の身体の質量からはみ出てるのは尾獣の力を圧縮出来てないからだ。まあ、とりあえず」

ナルトは片手で我愛羅を抑えながら、背後を振り向く。

「邪魔だ砂忍共。くだらねー術で攻撃してくんじゃねーよ。テメー等みたいな雑魚の術が通るわけねーだろ！　だが、鬱陶しいことには変わりねーんだよ！」

本気の殺気を放ち、忍達を気絶させる。

そして、我愛羅に向き直る。

「わかるか我愛羅？　俺も化け物だ。化け物を助けるのは化け物しか出来ない。そう思わないか？　なあ我愛羅」

我愛羅の腹に、解術を纏わせ、叩きつける。砂の防御を散らしながらそのまま我愛羅の腹にめり込む。

我愛羅の小さな身体はバウンドしながら後方に飛び、意識を失った。

そして現れる一尾。

全長70メートル程の化け狸だ。

『自由だアーーー！　あの小せエガキからやっと出れたぜー！！　感謝するぜえ風巻ナルトオオ！』

「あ？　誰が出すだけって言った？　お前も久々に暴れたいだろ？　こいよ狸」

『ヒヤハハハハ！　おもしれエ！　おもしれエぜー！！』

ナルトは印を高速で結ぶ。

《風遁……練空弾！》

《妖術・皇炎》

建物を破壊しながら迫る一尾の練空弾を、ナルトの皇炎が燃やしつつくす。

『さすがだぜえ九尾の人柱力！』

「その程度か一尾……」

既にその時にはナルトの眼前に漆黒の球体が出来上がっていた。超高密度のチャクラによって、周りの残骸が引き寄せられるが、球体に当たる直前で消滅する。

「死にくされ一尾！」

化け物同士の戦い。地面や建物をえぐりながら、漆黒の球体は一尾に向かう。

それが直撃し、大きな爆発を起こす。一尾はそのまま、数百メートルも後方に吹き飛ばされるが、すぐに立ち上がる。

ただ、身体の半分が吹き飛んでいる。ぐによくによと周りの肉が動き、損失部分を補っていた。

「さすがにタフだな」

『チゲーねえ！ お前の今の痛かったぜエ！』

「なら更にいてーの喰らわしてやるよ！ 慣れてねーからどうなるかわからねーけどな！」

ナルトは普段より長い印を何重にも繰り返す。

尻尾がピンと立ち、その周りにチャクラが収束してゆく。

《秘妖・超大玉螺旋連弾》

収束した状態でもメートル近い螺旋丸を九つ、敵に放つ。

風遁・螺旋丸のようにしたかったのだが、妖力のチャクラを使わないと不可能だった為、結局妖術の秘儀になつてしまった技である。

「チツ《風遁・練空弾!》」

「バカの一つ覚えみたいに同じ技ばっかすんじゃないよ!」

だが、連続で放たれるプラズマさえ放つ空氣の塊に、ナルトの螺旋丸は相殺されてゆく。

ナルトは更に印を組む。神術としての印。じつはナルトは神術が苦手である。くーみために印無しで打てればいいのだろうが、そんな技量はない。そのため、複雑な印を組まなければいけない。途中何度も指が吊つた過去があるのだ。

《神術・天招捕縛》

風遁・練空弾により、チャクラを攻撃に全て回した無防備な一尾の上空から、光の柱が何本も突き刺さる。

「クソがアア!! 何故妖力が減っているウウ!?!」

苦しみ叫ぶ一尾の頭部に、我愛羅を抱いたナルトが現れる。

「神術の捕縛術。神力以外の力を吸収し、束縛する術だ。まあ、狙いがめっちゃくちゃ悪いから、尾獣みたいなデカイ奴にしか意味がない術だけだな。抵抗するならどうぞ」

しばらく必死に逃れようとしていが、動く程力が失われる為、やがて動かなくなった。

「チツ！ 全くオレも運がねエ。おかしな奴に狙われちまったな」
「お前戦闘好きなんだよな？ なら俺と一緒に来い。他にも尾獣が
7匹いるしな。いずれ九匹になる。全力で暴れられるぜ？ まあ、
我愛羅の中にいるときは我愛羅に力を貸してもらうが。それに俺よ
り数十倍……いや数百倍強い。そいつと修行でもすれば今より強
くなれる。こんな場所でへばつてるより断然楽しいと思わないか？」
「ハツ！ テメーより数百倍か！ おもしれえ！ だが、約束は違
えるなよ？」
「わーつてるよ。んじゃ、一度我愛羅の中に戻すからな？」

ナルトは印を組み、手を頭部に置く。

《妖術・妖獣封印式》

いつものように文字が羅列として這う。

「おい何だこりゃア？ 力が抜けて行くぞ？」
「封印だ。お前が変な時に暴走しないようにな。暴走しなければす
ぐにでも我愛羅に出してもらえる。そんなとき本気で暴れて、普段は
おとなしくしてろ」

ナルトはクナイで我愛羅の指先を切り、血を垂らす。

一尾が消え去り、我愛羅を連れて九陽の里へと踵をかえすが、途
中で風影がこちらを見ている事に気付き、その場に降りる。

「約束通り我愛羅は貰っていく。里はかなりの被害だが、俺がやら
ないで全壊するよりはマシだろ？ 風影」

ナルトはニヤリと笑う。実際ナルトがいなかったら一尾が出てくることもなかったのだが……。

「わかっている。そんなでも息子だ。息子を頼むぞ」

「わかっているさ。だが、返すことはないと思え」

「フツ……それにしても、その力。どこの忍びだ」

「水の国。九陽の里」

俺の言葉に風影は目を見開いた。

「偵察に行った忍びが一人も戻らないあの里か……」

「ああ。無駄な死人を増やしたくないなら来ない方がいいぞ？ 攻めてくる以外なら歓迎しよう。攻めてきたら潰すけどな」

「わかった」

次の瞬間、ナルトは既に飛雷神の術で消え去っていた。

「九陽の里……この俺ですら瞬身が見えなかった……。手を出さないように言っておいた方がいいな」

瓦礫の中、風影の声だけが夜風に吹かれていった。

005 七尾捕獲。(前書き)

えーっと、感想の返事とかは暇な時まとめて書きます。

ストックがかなり 中忍試験のところまであるので、投稿はしま
すけど。

最近あまりかけないので、ストックなくなったら一気に遅くなる
かも。

005 七尾捕獲。

いつもの水の上

一尾捕獲から一週間。ナルト達はいつもの水の上で修業中。ちなみに、最初に覚えることは尾獣との対話。チャクラを取り出せなければ、何もできないからである。

次に影分身。修行には必須の術である。次に水面歩行の行。これがないと修行場所まで行けない。

此处でやっと修行のスタートラインだ。影分身は高度な術であり、子供に覚えさせるのは大変だが、影分身に時間がかかっても、最初に覚えておけばあとと楽なのだ。だったら全員やるだろ？ と思うが、チャクラの消費が半端ない。500人とか出したら、尾獣の加護のない常人なら一発で気絶する。尾獣がいるからこそ一万とか出せるのだ。

ナルトが、天狐化尻尾一本で修業していると、クーが走ってきた。

「主、多由也と君麻呂捕まえてきたのじゃ」
「でかしたくーちゃん！」

バツと振り返ると、クーの影分身にお姫様だっこされている子供が二人。どうみても両方とも5歳以下だ……。

白い髪の少年に、赤い髪の少女。原作の面影ゼロである。

「さらって来たわけじゃないよな？ てか怯えてるぞ？」

「何を言うのじゃ！ 多由也の方は捨て子だったのじゃ。君麻呂の方は一族をこの里で匿ってくれたら譲ると言われたのじゃ。何でも狙われてるそうじゃった。ついでに怯えてるのは主が神力のチャクラ放出しているからじゃな」

ナルトは納得し、天狐化を解く。

ちなみに、今の姿はミナトの姿だ。説明が遅れたが、ナルトの類には原作であった三本の対の線がない。くーの話だと、封印ではなく、口寄せとして人柱力になっているからだそうだ。髪も全く切っていないので、かなり長い。

「よろしく、多由也。君麻呂」

ナルトが笑顔であいさつすると、へにやっと二人はほほ笑んだ。

「こんにちわ、ナルトおにーちゃん」

「初めまして、かぐや君麻呂と申します」

（おお、多由也は子供って感じで、君麻呂は旧家なだけあってしっかりしてる）

原作での、多由也が毒舌なところ。君麻呂の大蛇丸信教がなくて感動していた。

「えーっと、君たちは人柱力になるって知ってる？」

コクリとうなずく。

「そっか……そうなった場合、里の者以外信じられなくなるけど大丈夫？」

もう一度頷く。

里の者以外 人柱力は血継限界以上に嫌われ、それ以上に狙われる。信用する人間を選ばなければいけないのだ。

「主。ついでに孤児から二人選抜してきたのじゃ」

くーの言葉にナルトがうなずくと、先ほどと同じように子供を抱いた、くーの影分身が現れた。

「……ヤヒメ。晶遁使える……よ？」

二歳くらいの少女が呟いた。

長くて青い髪の色少女。ナルトは、青って人間がどうか疑わしくなる色だなーとか思っていた。

「二歳で使えるのか……？」

「……まだ使えない」

「……」

ナルトは会話を成り立たせるのは難しいと判断した。

「俺はリト！ 木遁が使えるらしい！」

「らしい？」

「と、くー姉に教わったぜ」

親指を自分にピシッと向けて自己紹介をした。

「まあ、四人に自己紹介すると、俺は風巻ナルト。今はこんな姿だが、三歳だな」

四人は目を見開く。

「お、俺を騙そうたってダメだぜ、そんなデカイ三歳いないって知ってるぜ！」

ナルトはため息をつき、変化を解く。

「ナルトおにい……ちゃん？」

「ナルトでいいぞ多由也。多分年齢変わらない」

子供の姿は落ち着かないので、すぐに変化をし直した。

「で、後の二人は人柱力になるって知ってるよな？」

コクリとうなづく。

「んじゃくーちゃん頼む。人柱力以外の封印は任せる」

「任せるのじゃー！」

くーはそう言つと、影分身もつれて消え去った。

「主殿、せーちゃんやってきましたー」

くーが消えると、すぐに仙狐が現れた。

どこかに隠れていたようなタイミングである。

「どうしたせーちゃん？」
「みてくださってーこれを！」

仙狐の手には、額当てと羽織が握られていた。

「出来上がったばかりの九陽の里の額当てと、人柱力の羽織でーすっ！」

額当ては、炎の様な模様が九個ついている。羽織は真っ白で、背中に九尾をかたどった刺繍がされている。

「これ一発で人柱力ってバレるじゃんっ!？」

「いんですよーそれで。一応里の守り神ってことにしてーです。で、額当てはウチが炎の性質だから炎。で、九陽の里だから九個ですっ！」

「めちゃくちゃお前の勝手だなそれ!? てか水の国なのに炎か!」
「ぶー、だって水影はウチだからいいじゃねーですか？」

ナルトはそこで諦めた。別にどうでもいいことではあったからだ
が。

仙狐からそれを受け取り、額当ては首にかけ、羽織は羽織った。

「わー、かつこいいですー……ね？」

「首傾げるな。てか、変化した姿用の服か？」

「全部くーちゃんの毛で織ってあるので、妖力を込めれば大きさ自由……多分。ほんとーに人柱力専用ですっ！」

ナルトが説明を受けていると、我愛羅と白がやってきた。

「ナルトさんいいですねーそれ」

「いいな……」

「だいじょーぶです！ お二人のも此処に」

仙狐が我愛羅と白に同じものを渡すと、早速着始めた。

二人とも額当ては大きくて、首にかけることになっている。

羽織は妖気を込めないで、小さい状態で着ているようだ。

「人柱力に合わせた尾獣背中に刺繍してるのか。てか、長すぎて動きにくいなコレ！」

「そうなんー。だって、わかりやしーです？ 長いのは強くなれば関係なくなっていく」

わかりやすい。味方にも敵にも。

ついでに額当てがかかった。我愛羅と白は小さいのでわかるが、変化したナルトでもかかったのだ。だからこそ首にかけることになってしまった。額当てって言うより首当て状態だ。我愛羅や白だと胸当てだ。

「ちなみに俺らって上忍？」

「いえいえ、下忍です」

「……尾獣使わなくても俺上忍殺せるが？」

「試験受けるーです」

「……」

ナルトはどうでもいいやと思いつつ、下忍だろうとなんだろうと腕前には関係ない。

ちなみに、何故下忍かと言うと、くーの修行がアカデミーってことになっている。くーの修行には勉強も入っているので、ますますアカデミーって感じた。影分身増やしまくって夜やらせる反則技ではあるが。

「と言うか、主殿。早く七尾つれてこーです。一匹だけいないって中途半端」

「んー、それは俺も思った。遅くなったらそれだけ他の奴に追い付く時間かかるからな。んじゃちよっど行ってくるわ」

「いてらっしゃー」

「がんばってくださいナルトさん」

「……行ってらっしゃい」

三人に見送られ、ナルトは消え去った。

我愛羅が口下手なのを心配しながら。

滝隠れの里

ナルトは七尾がいるであろう滝隠れの里へ赴いた。

「へー、マジで滝ばっかだな。滝でチャクラの気配吹き飛ばすのか」

ナルトは目を閉じ、赤いチャクラを探し出す。

「……見つけた」

その場から消え去り、一瞬で目的地の家の前に着く。

そこは滝の裏側の洞窟に、家を建てたような場所だった。

「こんにちわー」

ナルトがドアを開けると、ドアが開いた。開いたと言うか、鍵ごとナルトが突き破った。

「何者だっ!？」

中には、若い夫婦が二人いた。

男は身構え、女はその背中に隠れた。

「あやしいものではありません。この家にいる子供を引き取りにきました。妖気があふれてますよ? これだと里の外からだって一発でべれます。このままじゃこの家が狙われますよ?」

ナルトの言葉に夫婦は驚く。

「自分もその妖気を感じてきたもので、だから此処に人柱力がいるってわかりました」

「うう……だから嫌だって言ったの! 我が子を化け物にするなんてっ!」

女が泣き崩れたのを見て、ナルトは冷やかな視線を向けた。

「子を愛していないのですか?」

「愛せるわけないでしょうっ!?! いきなり家が壊れたり、虫が寄ってきたり、いつもビクビクしているわ!」

ナルトは男に視線を向ける。

「後悔してるよ……自分の子に化け物を入れたことを……」

まあ、育てるだけマシ……か。とナルトは思った。

「では、お子さんを僕が買い取りましょう」

ナルトは口寄せで、お金が入ったケースを取り出した。

「此処に100万両あります。これで次のお子さんを作って、幸せになってください」

そう言つて、ほほ笑む。

ちなみに、1両＝10円と考えればいい。1000万円というわけである。ちなみにSランク任務の報酬が20～50万両である。200万から500万というわけだ。ナルトは術の試しということ、殲滅依頼だけは結構受けてお金がたまっている。

「こ、こんな大金!？」

「あなた、これで幸せになりましょう! また子供を作ればいいじゃない?」

「しかし……」

「お言葉ですが、このままだと此処が狙われ、最悪貴方がたも死ぬ危険があります。人柱力は然るべき場所で保護するべきでしょう」

男は妻を見つめ、やがてナルトに頷いた。

「では、こちらについてきてくれ」

ナルトは奥へとついてゆく。

やがて、鉄で出来た扉があり、男は鍵を開けて中に入った。

中には、布に包まれた赤子が床にぼつんと置かれていた。

「赤子……?」

「産まれて半年程度だろう。名をフウと言っ」

橙色の眼をし、黄緑色の髪の毛の赤子だった。

多分、将来は美人になるだろう子だ。

ナルトはその赤子を抱きあげる。

「き、気をつけた方がいいぞ? 　いつ暴れるかわからない。暴れたら我々には手が出せない」

ナルトはため息をひとつついた。自分の赤子にどこまで怯えるのだと。

「では、百万両は置いていきますので、赤子は僕が世話をします。では」

そう言うと、ナルトは消え去った。

水の上

「あ、ナルトさん帰って来たんですね？」
「ああ」

ナルトが帰ると、白が走ってきた。

「白。お前はもう尾獣見ても気絶しないよな？」
「だ、大丈夫だと思います」

ナルトは白に赤子を手渡した。

「白はきょとんと首を傾げている。」

「今から俺が尾獣を倒し封印する。白は赤子を持っていてくれ」

白は緊張した面持ちでコクリとうなずいた。

ナルトは印を組み、解呪にかかる。

《解》

赤子から飛び出たのは、背に巨大なツノを持ったカブトムシ。

まるで鎧のような外骨格を持っている。緑色の巨大な6枚の羽と、一本の尾を持っていた。

「これ、七尾って言うのか？」

「とりあえず離れますね……」

白が離れたのを確認し、天狐化する。

「さーて、言葉も理解できないし知能も低いカブトムシを撃墜する

かな……」

《神術・飛翔天衣》

ナルトも上空に飛翔し、七尾に対峙する。

更に印を高速で結び。

「虫には火かな？ 狐と相性抜群じゃん」

《火遁・火龍炎弾》

大きな火の竜が、一直線に七尾に向かう。

至近距離に迫ったところで、いきなり竜が消え去った。

「何あの羽……。羽から出てる風圧で忍術消すのかよ？」

茫然としてみると、一瞬にして目の前までカブトムシが突っ込んできた。

ナルトは咄嗟にチャクラを前方に固めるが、ツノがあたり、水面に弾き飛ばされる。

およそ30メートル程の水柱が上がり、そこから20メートル離れた水の中からナルトが飛び出てくる。

「虫ハヤっ！ てか、ツノいて……。天狐か九尾化してなかったら確実に死んでたわ」

それもそのはずである。木の葉を襲った九尾の時、五大大国で一番強いと言われた木の葉が壊滅寸前まで追い込まれたのだ。四代目がナルトに封印しなかったら確実に壊滅していただろう。

「せっかく天狐なんだし……神術使いまくってみるか」

ナルトは神術の印を結ぶ。

《神術・龍神昇》

……。

「あ、印間違えげふあっ！」

再度吹き飛ばされて水面の上を石投げのように跳ねてゆく。
百回以上のバウンドしたのは伝説だろう。

「痛すぎる……神術の印難しすぎ……」

片手印を高速で結び。

《仙法・再生の術》

失った右手をチャクラで復元した。

両手がないと神術は結べないのである。

「なんか簡単な奴にしよう……」

《神術・極炎爆破》

向かって来た七尾の身体が、全て青い炎で包まれる。

その温度の高さは、二十メートル程下の水面が蒸発し、水蒸気が発生していることからわかるだろう。

そこでナルトは右手を前に突き出し、握り潰す。

それと同時に、青い焰は爆発し、七尾のツノや羽を弾き飛ばす。外骨格もはじけ飛んだようで、柔らかそうな肉体が見えている。

「やっぱカブトムシだな……甲羅の中は……やわいつてねっ!」

飛雷神の術でチャクラを膨大に纏って一気に突き抜ける。

身体を中心に突き抜けたことにより、緑色の体液があたりにべちゃべちゃと散乱する。

そして、七尾は水面に落下した。

すぐに、ナルトも水面に降り、白を呼ぶ。

「はーく! すぐにフウ連れてきて」

「はい!」

白はにこにここと走ってきたが、途中で眉をひそめて立ち止った。

「どうした?」

「……ナルトさんすごく臭いです」

その反応にナルトは絶望した。いつもナルトさーんと嬉しそうに言っていた白が距離を取っているのだ。確かに、カブトムシの身体の中を通過したから体液でべとべとなのだ。

《神術・浄化の炎……》

ぼわつと、一瞬ナルトの身体を青い炎が多い、すぐに消え去る。毒や病気、麻痺などを一瞬で直す術である。それ以外に、自分の身体に着いた不純物なども焼けてしまふ嬉しい効果もある。

「ハイ ナルトさん」

ナルトはフウを受け取りながら、心の中で泣いた。

あまり触りたくないが、ナルトは七尾に人差し指だけつき。

《妖術・妖獣封印式》

黒い模様がいきわたったのを見、すぐにフウの指を切り、七尾を封印した。

だが、その後が大変だった。

フウが起きて泣き出したのだ。すぐさま指の傷は尾獣によって治ったが、泣きやまない。

色々あやしても泣きやまない。

結局空を飛んだら泣きやんだ。泣きやむまで30分程かかってしまった。

「尾獣の戦闘以上に疲れた……」

そんなナルトを、白が生温かい目で見つめていた。

水影邸

現在、ナルト達は夕飯を食べる為に集まった。
メンバーは人柱力9人＋空狐、仙狐である。

「では、これがフウの分じゃ。ついで、これがリト、ヤヒメ、君麻呂、多由也じゃ。次が我愛羅とユギト。最後にこれが主じゃ」

空狐の手作り料理が運ばれてくる。実は結構な腕前で、料理はもっぱら空狐……の影分身が作っている。

「ねえねえ、なんでいつも皆違うの？ 量も品も同じに見えるわ」

ユギトの問いに、お茶をすすっていたナルトが口を開いた。

「毒だ」

皆疑問に思っていたのか、全員が首を傾げる。

「薬の耐性をつけるために、皆に合った量の毒が入ってる。例えば、俺は0歳〜3歳まで毎回飯に毒が入ってたから一番多い。もし、ユギトが俺の飯を食ったら死ぬ」

その言葉に全員が青ざめる。

ナルトはずっとこれだったので、慣れてしまった。

「ユギトにも入ってるぞ？ まあ、気付かない程度だ。そこはくーちゃんも真剣に分量考えてくれてる……はずだ」

過去に、空狐が分量を間違え、生死のさかえをさまよったナルトは断言が出来なかった。しかし、そのお陰で空狐は分量にだけは気をつけるようになった。

「だから飯は全部食べよ？ だんだんと毒の分量が増えて行くんだ。残したらそれだけ耐性がつかない。だが、くーちゃんは食べたと計算して毒の分量を増やしていく」

ナルトはそこでお茶を飲むことに戻った。ちなみに、このお茶にも毒が入ってることをナルトは知らない。

「く、くーちゃん……ちなみにナルトの毒の分量はどれくらい？」

ユギトがおそろおそろ空狐に聞くと、空狐は笑顔で口を開いた。

「致死量」

全員の顔が蒼白になってゆく。

「主のは、睡眠薬、麻痺薬、毒薬、幻覚薬、腹痛。ついでに毒薬だけでも致死量じゃが、主のは全部混ぜておる。全員10歳になるころにはどんな薬も効かない身体にしてみるのじゃ」

全員がそれを聞いて眩暈を起こす中、空狐は燃えていた。

「諦める。それに気付かないくらいなんだからいいだろ？ 薬でこ
の中の誰か一人でも死んだら俺は悲しい」

ナルトが淡々と口にする。

「ナルト……」

「……ボクもナルトが死んだら悲しい」

「ナルトさん……」

「カッコイイぜ！」

「……にー」

「そうだね」

「ナルト君……」

全員が何故か尊敬の目で見ていた。

多由也はナルト君で、ヤヒメはにーと呼ぶようにいつの間にな
っていたのが不思議だ。

多由也は同年代と言うことで、ヤヒメはお兄ちゃんみたいだから
といつことらしい。

その後、全員はおいしく夕食を食べ終えた。

コギトの話では、おいしいはおいしいけど一口一口が怖いらしい。

006 ハナビとの出会い。

三年後

この頃、人柱力九人は里の守護者 九陽として、里人に紹介された。

- 一陽・我愛羅
- 二陽・二位ユギト
- 三陽・白
- 四陽・リト
- 五陽・ヤヒメ
- 六陽・君麻呂
- 七陽・フウ
- 八陽・多由也
- 九陽・ナルト

となつている。全員が人柱力であることは公然の事実になったが、里を守ってきたのを皆知っているので、皆が賛同してくれた。この里ほど人柱力を受け入れてくれる里もないだろう。ナルトが作りたかった 普通と違う者達（血継限界や人柱力）が幸せに暮らせる国を作ると言う目論見は成功したと見える。

一陽が一番強いと言うことはなく、例えば、一番尾獣を使いこなせているのはフウ。これは産まれてすぐに妖術での封印を行った為、自分の一部として認識されているからだ。

人柱力同士の戦いだと、我愛羅、君麻呂が強い。

多人数相手だと、リト、多由也が強い。

暗殺はユギト、白。

迎撃ではヤヒメ。

それぞれ得意な場所があるのだ。

ただ、ナルトだけは全てにおいて全員を超える。それは、他が使えない神術や仙術が使えるからである。それ以上に、まだ持続時間は短い。空狐化すると全員が相手でも一撃で倒してしまう実力だ。九陽の中で、誰が一番かと言う話になった時に、全員がナルトといった事からもうかがえる。二番は自分だと全員が言っており、結局順位を付けるのは諦めたのだ。

ただ、九陽に認定されても全員が下忍である。

里トップと忍者の位は別ものらしい。

ただ、全員特Sランクの任務を一人でこなせることもあり、実力だけなら確実に上忍である。

里一番と言われるが、前に全員で空狐に襲いかかったが、一瞬で全滅と言う結果に終わった。尾獣化した全員VS人型空狐で九陽全員全滅である。ちなみに空狐は狐化したら、全長300メートルを超すらしい。7歳の少女姿の時は実力の一割も出せないと言っていたが、それでも九陽全滅である。

で、今ナルトとフウは特Sランクの任務中だ。

任務内容は、元霧隠れの里の忍者の討伐。小さな里を潰し、乗っ取ったらしい。悪さがひどいとのこと、雨隠れの里から要請が来た。他里からの依頼は珍しいが、報酬がいいとのこと。仙狐が引き受けたのだ。

「おにーちゃんおにーちゃん！ 一人で出来たら褒めてくれる？」

フウは赤子の頃からナルトが育てていたので、ナルトにべったりだ。いつもナルトの任務についてくる。恋愛とかではなく、ただ単純に父親に対する感情の様なものである。それでも十分ファザコン

であるのだが。

「ああ。ここの里は忍者だけだしな。しかも、生活は他里からの強奪で成り立ってるような里だし、好きだけ潰していいぞ？」

ナルトは笑顔で酷い事を言った。『えへへ』と無邪気にフウが印を結び出す。

背中には七尾化特有の、明緑の六枚の羽に一本の尻尾がついている。黄緑の長い髪にとてもよくあっている。

《妖術・蜘蛛縛り》

フウのチャクラで出来た蜘蛛の糸が、壁と言う壁に張り付き、どんどん広がってゆく。

これはナルトにも出来ない技である。昆虫との相性がいいフウが考えた技。本来、糸で相手を縛る技だが、応用して完成したらしい。蜘蛛の糸はどんどん広がってゆく。夜だが、途中警備していた忍びも巻き込んで広がってゆく。これ単体では全く殺傷能力がないが、此処で更に応用する。ただ、広範囲に広げられるのも、人柱力からチャクラを借りることが出来る故だ。

「うんうん、里全部覆えたねー、くもさん」

《晶遁の術》

瞬間、チャクラの糸につかまっていたあらゆるものが紫いろの水晶に変わってゆく。

町中全てに張り巡らされた糸。家々や、その中にいる人間全てが水晶に変わってゆく。

フウは、背後のナルトに笑顔で振り向き、カシユつと指を鳴らす。それだけで、水晶が全て砕け散り、家や人間全てが崩れさる。指を鳴らすのは、ナルトの真似なのだが、まだ鳴らすことは出来ない。ただ、本人は満足なようである。

「おにーちゃんっ！」

ナルトに抱きつき、『えへへ』と笑う。

「そのまえに、証拠隠滅だ」

「あ、そーだった《晶遁解》」

水晶を消し去って任務終了である。誰がやったかばれないように晶遁の術。これがフウの血継限界である。攻守ともに優れた術だ。ただ、尾獣を制御できる人柱力などには効かないため、仲間内では弱いとされている。ちなみにフウ自身の血継限界ではない。神術の高等術に、相手の特性を一度だけ自分に刻み込むという物がある。ヤヒメの血継限界を見、水晶がキレイだったことで、空狐に頼みこんで一時的に神力を貸してもらい、神術を使用して血に刻み込んだのだ。血に刻み込んだことにより、一か月程高熱で死の境をさまよっていた。更に、刻み込んだとしても、本来の使用者じゃない人間が使っても成長が極端に遅くなるのだ。フウは神術を覚えるのに一年、晶遁を覚えるのに、影分身を大量に使って3年近く。それだけの時間を掛けて覚えたのだ。それでも、ヤヒメが影分身無しの修行半年で覚えられる内容程度にしか成長しなかった。結局、フウは晶遁以外は影分身。あとは移動術と虫を使った妖術しか使えない。まだ4歳にもなっていないのに、大した覚悟である。そんな努力を見て、血を提供したヤヒメは、血継限界を奪われたとかフウを思わず、むしろわからないところはコツを教えてあげていた。ただ、やはり偽物と言うだけあり、完全に使いこなすことは出来ていない。

「よし、よくやったなフウ」

「おにーちゃんの為にがんばった」

ナルトに頭を撫でてもらい、嬉しそうにしている。

最後に、ナルトが人の気配が無くなったのを確認し、二人共飛雷神の術で消え去る。

それから二年・ナルト8歳

「じゃー、次の奴誰行く？」

「ウチが行く！」

多由也が一步前に出た。

現在、全員で侵入者迎撃任務だ。と言うより、技の見せあいである。個人しか覚えていない。主に血継限界で敵を倒してゆく。単なるお遊びだ。

多由也が木笛を口に付ける。

《魔笛・死誘》

ナルト達は、今からするだろう術を聞き、すぐに尾獣化する。

そこで美しい音色が流れだす。

笛を吹いている最中、こちらに向かってくる忍が見えた。

だが、途中で苦しみだし、そのまま水の中に沈んでしまった。

同じことが何度も続き、多由也が口から笛を離す。

「どう!? うちの音色? ナルト! あふっ」

パアッと顔を輝かせる多由也をユギトが殴りつけた。

「どう? じゃないわよ!? 尾獣化しなかったらこっちが全滅してたじゃない!？」

尾獣化でチャクラを膨大に纏わないと、死ぬ。

死誘 読んで字のごとくの術である。正確には、内部の血液を凝固させる。

ただ、音が聞こえる範囲から逃げる、それが耳を潰す。それだけで回避出来てしまう術だ。あとは、人柱力のように、規格外のチャクラを張り巡らせれば、効果はない。

「それでもキレイな音色ならいいじゃないっ!？」

「よくないわよっ! 死んだらそれで終わりじゃない!」

「死んでないんだからいいのっ!」

二人が争うのはいつものことなので、他はため息をついている。

多由也がナルトに問いかけたのは、ナルトが師匠でもあるからだ。空狐の神にしか通じないような教え方を、人間として覚えたナルト

が、全員にコツを教えているのだ。ナルトは全員の師匠と言える。

「お次が着たようだけど、次は？」

「俺が行くぜ！」

リトが一步前に出る。

すぐに印を組み、術を発動する。

《木分身の術》

リトが1000人程に増え、色々な方向に走ってゆく。

「……分身。ちまちまヤツ」

ヤヒメがリトに文句を言う。これもいつもどおりだ。確かにヤヒメは毒舌だが、他の人間にはあまり言わない。

同じ孤児院出身のリトにライバル心があるらしい。毒舌は照れ隠しやツンデレでは断じてない。本当に嫌っているのだ。

「うつせえヤヒメ！ これからだっつー！」

「……うるさいのはお前」

ずばずばと言つりトと、控え目なヤヒメでは馬が合わないらしい。

「いつくぜー！」

《木遁・森羅庄！》

ズバつと、木分身が高速で木になり、円のように敵を囲った。

次の瞬間、一瞬にして木が成長し、まとまって一本の、幹の横幅

が数十メートルの木になった。中心も幹の間も0であり、最終的に全ての木が繋がり一本の木になった。円の中にいた忍びは上に逃げる速度も追いつかず途中で圧死した。

見上げると、数百メートルはありそうな大樹が出来ている。最後に、木を消し去って終了。

「どうだにーちゃん！」

「やるなー、リト。まあ、今度は一瞬で大樹まで成長させるように修行したほうがいいな。あれじゃ逃げられるかも知れない」

「そんなのすぐにやっつてやるぜ」

強がっているが、リトは褒められて嬉しそうだ。

そこで、ナルトは裾を誰かに引っ張られたのを感じた。

「……わたしの方がすごい。……よ？」

顔を赤らめながら、ヤヒメが裾を引っ張っていた。

「んじゃ、次行っってきてくれ。次で最後かな」

コクリとうなずき、ヤヒメは一步前に出た。

やがて20人程の気配がした。

《晶遁・無限葬槍》

一キロに及ぶ、紫色の水晶のドームが前面に現れた。

ただ、よく見ると、それは一本一本隙間なく埋められた槍で。

それが同時に中心に向かって発射される。途中、隙間がないなら途中でとまるんじゃないかと思っただが、合わさってより長い槍に変わっていくようだ。それが最終的に中心に集まり、ウニのような球

体になった。

血が滴っているが、気にしない。

「……すごい？」

「あ、ああ。すごいなヤヒメ」

ナルトに撫でられながら、リトに視線を向け、フッとバカにしたような笑みを浮かべた。

「俺もつとスゲーのやってやるぜー」

「……黙れ。もう敵いないからチャクラの無駄」

「うっせー！ 俺の方がスゲーんだよ！」

「……良い子は寝る時間。だからお前は低身長」

「これから伸びんだよ！」

これもいつものやり取り。

ナルトはもう一度ため息をついた。

実は、九陽の中で対立関係は珍しくない。

ユギト 多由也

ヤヒメ リト

我愛羅 君麻呂

白 フウ

ちなみに、白とフウはナルトの取り合いで対立をしている。白は男だが、慕っている人に性別は関係がないらしい。

ナルトだけは、全員から尊敬や憧れ、好意を受けているが。

「帰るか……」

ナルトは未だに争ってるユギトと多由也。ヤヒメとリトを置いてその場を後にする。

火の国

ナルトは現在一人で火の国の近くの森の中に来ていた。

此処は、ナルトが三歳まで修行していた場所。そして、自然破壊をしまくった場所である。わざわざここまで来たのは、自分の土地の自然破壊するのやだなー、あそこなら一回破壊したいいいか。って感じだ。

ナルトは此処で、螺旋手裏剣の練習をしているのだ。原作のナルトはこれを放つと反動がすごくて自爆のようだったが、ナルトはそれを妖力を纏わせることで回避していた。反動さえなければかなりの術である。ただ、そのままだとおもしろくないので、忍術チャクラ、仙術チャクラ、妖術チャクラ、神術チャクラを混ぜて、出来るだけ大きく。そして、手裏剣のように投げられるようにしようと考えているのだ。ぶっちゃけ趣味だ。

今、手には5メートル近い螺旋手裏剣が形成されている。先ほど一メートル程の物を試してみたら、周囲三十メートル程を吹き飛ばした。

今度は限界まで大きくしたらどうなるか……の実験である。

螺旋手裏剣が10メートル程になったところで、ナルトはそれを消し去った。

「気づいているから出て来い」

一点を見つめ、問いかける。
しばらくして、ヒヨコリと木からチヨコンと顔を出した長い黒髪の少女が現れた。

「何してんだ？ 俺を暗殺しにか？」

フルフルと首を振る。

「じゃ、何しに？」

「……此処、うちの森。大きな音がしたから来てみた」

ナルトは知らなかったが、このぼろぼろにしてしまった森は私有地だったらしい。

「何してるの？」

「んー、修行？」

「……見てていい？」

「別にいいが、面白くないぞ？」

「いい」

ナルトはため息をつき、近くの木をクナイで切り倒しイスにする。

「修業はやめだ。こっちはいい」

呼んでみると、おずおずとやってきて、木の上に座った。

「どっやったの？」

「ん？」

「木切ったやつ」

「ああ、こつやってクナイで」

明らかに長さが足りないが、バターを切るように、ストーンと木が切れる。

それを見、少女は自分のクナイを取り出し、同じように切りつけてみるが、木に弾かれてクナイが飛ぶ。

「硬い……」

「慣れないとな……クナイ持つてることとはアカデミー生か？」

「違う。でも、父様に教えてもらってる」

「へー……。偉いな」

ナルトが笑顔で頭をなでてやると、恥ずかしそうに立ち上がる。

「こんなのやってる」

少女は誰もいない場所に相手がいるとして、流れるように掌底を繰り出す。

「八卦三十二掌か……」

ぼつりと言ったナルトの言葉に反応し、少女はとてとてと戻ってきて、木のイスに座る。

「知ってるの？」

「体術の基礎に日向の術やってるからな」

正確には、此処から一番近かったのが日向のところで、それを空狐が見て教えたのである。

「君は日向か？」

「日向ハナビ」

(あー、確かヒナタの妹か。原作だと出番全くなかった気がする)

「俺は風巻ナルト」

「ナルト？」

「ああ。うーんそうだな。八卦かあ……白眼使えるか？」

ハナビは首を横に振る。

「まあ、その年じゃ無理か……まあそうだな。白眼って相手のチャクラの流れを見て、点穴をつくだろ？」

「うん」

「それとは別に生命の流れってのもあるんだ」

「生命？」

ナルトは立ち上がり、木の前で構える。

「生命の流れって奴は、人だけじゃなく木などにも流れているそれを見て……フツ」

掌を広げ、木に一線する。木がスツパリと斜めにズレ、横に倒れる。

ハナビはそれに目を見開いて驚いた。

「多分白眼でも出来ると思う」

ナルトのこれは輪廻眼で見ている。生命の流れやチャクラの流れは、人間道の能力である。白眼でも見えると思って言ってみた。

「わたしも出来る?」

「白眼が開眼したらな」

「早くみたい。後はなんかない?」

「うーん……八卦ならある程度教えられるが……本家に教えるのもな……」

「教えて」

ナルトは苦笑し、影分身を作りだした。

「まあ、影分身が出来れば一人で練習出来るから楽だな」

影分身と対峙し、構える。

次の瞬間、ナルトの姿が掻き消えた。

『八掌』 『八掌』

お互いの掌が全く同じ起動、速度でぶつかりあう。

『十六掌』 『十六掌』

更に速度を増し、残像すら見えない。

『三十二掌』 『三十二掌』

『六十四掌』 『六十四掌』

『百二十八掌』 『百二十八掌』

『二百五十六掌』 『二百五十六掌』

『五百十二掌』 『五百十二掌』

最後にドンと、足を踏み込み。

『柔拳法・八卦千二十四掌』

足元にクレーターが出来、風圧で近くの木の枝が全てはじけ飛ぶ。

「とまあ、同じ実力の相手なら永遠に続く……だ？ 白眼使えるじやんハナビ」

「え？」

ハナビは気づいていなかったが、確かに現在ハナビは白眼を使っている。

「あれ？ 出来ないはずだけど」

「実際使ってるじゃん」

「わからないけど……動きが見えなくて。見ようと目を凝らしてたら使えるようになった……のかな？」

ハナビを首を傾げる。

ナルトはほほ笑み、頭を撫でる。

「えらいぞハナビ。まず、何かをしたいって思うのは大事だからな。それがないと先に進めない」

「うん……」

「よし、じゃあ、試しに俺のチャクラ見えるか？」

「見える……けど。身体全体がチャクラで点穴がわからない」

「……そうだったな」

尾獣化出来る人柱力は点穴などない。

膨大なチャクラを処理するため本当の意味で器となるのだ。細いチャクラの通路など、尾獣のチャクラを使ったら一瞬で決壊する。尾獣化の慣れ　つまり、チャクラの通路を太くするのだ。最終的に、ナルトのように身体全てがチャクラの器として機能することになる。

「んじやー、とりあえず俺が教えられるところは教える。それとも父親に教えてもらうか？」

「教えてください兄様」

ナルトは首を傾げる。

「兄様？」

「あ、いえ。なんとなく兄様がいたらこうなのじゃないか……と」

「兄いるだろ？」

「分家のネジ兄様がいますが、教えてくれません。むしろ嫌われてますね」

あー、確かこの時は、宗家に父親が殺されたと思ってるから、宗家の娘であるハナビを嫌ってるのか。

「まあ、いいや。教えるぞハナビ！」

「はい！　兄さ……ナルトさん」

ハナビは恥ずかしそうに顔を赤らめ、チラチラとナルトを見る。

「あの……兄様って呼んでもいいですか？」

「いいよ、それでも」

ナルトは苦笑しながら頷いた。

それから一か月。ナルトは此処に通い、ハナビに教え続けた。と言っても、影分身にやらせ、自分は別の修行をやっていたのだが。

「今日もありがとうございます兄様」

ハナビが満面の笑みで、いつものようにお礼を言う。だんだんと慣れて来て、ハナビはよくしゃべるようになった。

だからこそ、言い出しにくかった。

「なあ、ハナビ」

「はい？」

ハナビがコテンと首を傾げた。

「実はなあ……えーっと。此処に来るのもこれで最後だ」
「……」

ナルトはかなり心苦しかった。泣きそうなハナビを見ると、かなりつらい。

だが、最近修行に付き合ってくれないと、九陽達が文句を言うのだ。

「……わたしの覚えが悪いからですか？」

「いやいや、ハナビの覚えはいいと思うぞ？（俺の影分身無しでの百分の一くらいだけ）」

「では、何故ですかっ!？」

「うーん、額当て見てわかると思うが、俺って他里の人間なんだよ。」

ずっと此処に通うのはまずい。それにハナビも結構成長したし」

ハナビは俯きながらつぶやく。

「確かに父様には覚えが早い。と褒められました」

「だろ？」

「しかしっ！ コレは兄様のお陰なのです！ 白眼だって、日向の柔術だって全部兄様に教えてもらいました！ 兄様がいなくなったらわたしはどうすれば……」

（日向の柔術を俺が全部教えただって……親教えろよ！）

「うーん。実力的に今のとこどうよ？」

「姉様には勝てますが……ネジ兄様には……このまま兄様が教えてくれれば勝てるかも？」

チラチラとナルトを見ながらつぶやく。

「実際の師匠は父親だろ？ 俺のは我流も混ざってるし……」

「兄様以外に師匠はいませんっ！ それに、兄様のほうが教えるのがうまいです。兄様の方が父様より強いですし」

（いやー、柔術だけなら十中八九負けるぞ？ 妖術使えば確勝だけど）

「そうだな……ハナビが忍になればまた会えるかもしれない」

「くのーですか……？」

「ああ」

「でも、父様はわたしを当主として家で育てるって……でも、兄様が言うのなら言い聞かせれば……わたしには甘いですし」

「なんだかハナビが腹黒いことを言っているが、ナルトは聞かなかったことにした。」

「しばらくブツブツ言っていたが、バッとハナビは顔をあげた。」

「わかりました！ もし、わたしが下忍になったらまた会おうと約束してください」

「そうだな。そうだったら、会いにくるよ」

「絶対です！ もし嘘ついたら恋人です！」

「どんな理由だそれっ！？ 合わなかつたら恋人って！」

「んー……じゃあ、水の国に“愛”に行きます」

「まあ、“会い”に来るくらいならいいけどな」

ハナビが修行を受け始めた途中から、ギラギラとした眼でナルトを見ていたが、ナルトは最期まで気付かなかった。

「じゃ、強くなれよ？ ハナビ」

「はい！ 最低でもネジ兄様に勝てるようになります！」

ナルトは苦笑し、その場から消え去った。

006 ハナビとの出会い。(後書き)

ちなみにこの時ハナビは三歳。

しゃくしゃく余裕で暮らしたい〜約束だって守りたい〜

NARUTOの心境です。

てか、この歌聞くとカラオケでのPVが頭を流れる。あのキモチワルイ踊りが。

ストック残り150キロバイト)・・・)

75000文字くらいか……。

007 五影会談にて。(前書き)

ストックが中忍試験終了まであるんだけど……グダってる。
なんだろう……ミスッた。

007 五影会談にて。

更に四年後・ナルト12歳

「主殿〜主殿〜水影かわってたもれーナルし〜」

仙狐はナルトの腰に抱きつき、ずるずると引きずられてゆく。

「うつつとうしい！ ナルシストみたいな名前で呼ぶな！ 国のトツブなんて簡単に変えられないだろ！？」

「なんか五影会談みたいのやらされるんよーやらされるツスー！めんでーですし緊張するしやー！」

「口調が変わりまくりだろお前！ 行つて来い！」

ちなみにナルトは修行中だ。空狐化を約一日は続けられるようになり、空狐でしか使えない術を覚えるのが楽しくて仕方ない。

「でもさー、場所が火の国なんでっすよー。はっきり言つてやるならこつち来いって感じーみたいなー」

「うぜー、古いし見た目的に全然合つてない！ てかなんでお前は成長するどころか逆に退行してんだよ！？」

仙狐の姿は前は18歳程だった。だが、今は12歳程度になっている。

「あー、あれはカツコつけたかったからーらららー。変化でした、

「テヘッ」

「結局妖狐は皆幼いのかよっ!？」

「ちげーです、妖狐にとつて1000歳とか全然若ーです。空狐は最初から神だからめちやくちや若いけど、ウチは2000歳くらいになったら本当に18歳くらいの姿になるはず……多分ね」

「うざすぎる! 行って来いボケ!」

「だったら、空狐の宝物庫にあるお菓子持って行っていい?」

「いいから行け!」

「やったZE先輩!」

仙狐はその場からすぐ消え去った。

ちなみに、後日仙狐は空狐に半殺しにされることになる。

火の国

仙狐は遅刻しまくったが、なんとか五影会談に間に合った。

気分としては。

(てか、ウチって五影に入った覚えがないのに何で? いらなくなくなくない?)

とか思っていた。

この会議に集まったのは、火影、水影、風影、雷影、土影である。他の里長は、皆護衛を二名連れてくるが、仙狐だけは一人での出席だ。

「……水影殿は一人の出席でいいのかなのう？ 相談役がないようじゃが……」

「あーいいの。五影会談だってお菓子の為に来たようなものだから空気として扱って」

火影の問いかけに、めちやくちや失礼な事を言う仙狐。しかも、パリパリとお菓子を食べながらである。

「水影殿、お久しぶりです」

風影とは面識がある。一度、訪ねてきたことが在るのだが、もちろん仙狐は覚えていない。

「こんにちはー 久々だねー、風影ちゃん。そう言えばなんで風の国なのに砂隠れの里なの？ まあ、うちなんて水の国なのに九陽の里だし。しかも“隠れ”もついてないしー。隠れてないからいいかーにやははー」

もう完全に独走中な仙狐。ついでに、他は結構いい歳の参加者だが、仙狐だけは見た目12歳と言う場違いさだ。足首まである青い髪をだらーっと机の上に乗せ、お菓子を食べている。ちなみに、仙狐を水影にしたのは、青い髪は水影っぽいとナルトが言ったことがはじまりである。

「コホンっ！ では、大分送れたが始めるでしょう」

火影は嫌みで言ったつもりだが、仙狐にはまるで効いていなかった。

「最初は、我等五大国を狙う者についてじゃが……最近は特に多いと聞く。各国の状況はどうじゃ？」

火影が辺りを見ますと、仙狐以外は渋い顔をする。

「火の国では常時守りを固めているが、尋問をしてもわからぬ国の者が、多数襲撃してきておるな」

誰も口を開かないことから火影から口を開く。

「俺のともそうだ。間者がかなり入っていた。近々戦争でも起さすのかもしれない」

その時、既に仙狐は夢の中に旅立っていた。無防備な姿は、かわいらしくもあるが、此処は五影会談なのだ。

「水影殿！ 水影殿！」

「あつっ？」

いきなり大声で怒鳴られ、仙狐は目を覚ました。

「水の国ではどうですか？」

「んー、なにが？」

全く聞いていなかった。

「ごほう。被害状況です」

「うちー？ どうでもいいけど、火の国26人、土の国34人、雷の国27人、風の国13人、田の国21人、川の国32人、音の里42人。知らないところ379人かなー」

仙狐がそういうと、ピシリと空気が固まった。

仙狐は無くなったラムネの瓶からビー玉を取り出し、転がして遊んでいる。

「し、失礼ですが。何故国の特定を？」

土影が慌てて聞く。

「そんなの見てるからに決まっーです。里から出たところからうちに来るまでみえみえー。まあ、別に怒ってないからいいよー？ 全員殺してるし。文句は言わないでねー？ 攻めてくるのがいけななんだから？」

全員がゴクリとのを鳴らす。

正確には、森に住んでる狐や妖狐が教えてくれるのだが、教える気はないようだ。更に、空狐と天狐の千里眼で見ることできる。

「あとさー。別に攻めてくるのはいいけどー、うちの里って血継限界以外は入れないように結界張ってあるわけーです。無駄でーす。まあ、結界前で九陽達が遊びで殺しちまーですけど。本当に入りたいたら血継限界連れてこーです」

ケラケラと笑う仙狐だが、他は顔を青くしている。

「し、失礼ですが九陽とは？」

「ありゃ？　そこまで情報ねーですか。九陽ってのは、うちの里を守ってる九人の守護者？　うち暗部とかゆーですね、暗部〓九陽？」
「いいのですか？　そんな重要な事を此処で離して。皆聞いておるのだぞ？」

仙狐はフッと鼻で笑う。

「えーです。だって、それがバレたから何って感じだしー。九陽がどういうものかも言っていないし？　攻めてきたら攻めてきたで倒せばえーですし？」

そこで、仙狐がガタッと立ち上がった。他の全員が身構える。

「お菓子プリーズ！　お菓子くらさい！　くださいっ！」

両手をバンバンと机に叩きつけ、仙狐が催促する。

火影はため息をつき、後ろの護衛に持つてくるように促した。

「ありがとー火影ちゃん」

「いやいや」

笑顔でそう言える火影は立派である。

「さて、では次の連絡にうつろうかのう。まずこれを見てほしいのじゃ」

火影が相談役にならずくと、相談役が紙を配り始めた。

「回ったかのう？ 毎年恒例の同盟国同士の中忍試験じゃ。水影殿以外は知っておると思うじゃろうが、同盟国同士の友好、忍びのレベルを高め合うことで、火の国主催で行っているものじゃ」

火影が熱く語るが、仙狐はもちろん聞いていない。

「って言っても、本当に聞いてないわけではない。そう見せてるだけだ。」

「へー、つまり国を背負って下忍を先発しろってことでしょ？ 忍の質を披露って感じ？ 勝ち進めば見に来た大名や国主から依頼が来ればんばんざい。負ければ弱小国と終了。まとめちゃうと戦争の縮図って感じっすかねー？」

他の参加者が目を見張る。

「真意を一発で汲み取るとはさすがじゃな……」

「伊達に長生きしちゃねーですよ」

「12歳の少女……しかもお菓子を食べながらそんなことを言っても、まるで威厳がない。」

「でー、最低何組だせばいいの？」

「多い方が本戦に残る確率が増えるのじゃが？ 他里は毎回かなり多く出るが……」

「関係ねーですよ。えーですよ。少なくともそれが全員残れば逆に質のいい忍が集まってるっておもーですよ。たくさん出して一組残るより、一組みだけだして一組み残るってーのが大事じゃねーっすか？ うーばー？」

「ふむ……確かにその通りじゃな。そんな考えをする人間ははじめてじゃ」

「そりゃー、自分の里の忍びに自信がねーです。長なら里の忍びを信じなきゃいけねーですよ。うちは最低選抜人数でいーのでトレハロース並みに他国で人あつめちゃってくらせー」

手をひらひらと振り、どーでもいい感まるだした。

「最低二組、六人選抜してほしい」

「じゃあ適当に二組連れてくーから。ってわけでアデュー」

そこで、仙狐は消え去った……。

「ふむ……九陽の里……か。誰か今水影殿が消えたのを見ることが出来たか？」

火影が全員を見回すが、首を横に振っている。

「この部屋は窓もなく、ドアが背後にしかないのじゃが……まるで消えたように見えたの。転移の術などないのじゃが……。水の国か……」

全員着眼点が間違っていた。

仙狐は消えたわけでも、高速で移動したわけでもない。

最初から影分身だったのだ。用紙の内容を覚え、ただ姿を消しただけである。

「てーわけでー。誰か六人行ってくらせー」

ナルト達は修行から帰って来るやいな、水影の部屋に集められ、五影会談での事を聞かされた。

「と言うか……既に中忍試験直前らしい。何でも言うのを忘れていたとか。」

「ってーのも面倒なんで。こっちから指定しちえーます。と言うかー、既にメンバー送っちゃってます。テヘツ」

『うぜー』全員心が一つになった瞬間であった。

「主殿は決定。理由は主殿がいねーとまとまんねーですから」

全員が頷くが、まとまらないのが自分のことだとは気づいていない。

「一班 主殿、フウ、ヤヒメ。理由としてはー、二人ともいつも主殿のことみてるし、一緒の班にしないと木の葉でもこの里でも暴れるからー」

フウとヤヒメの顔が真っ赤になるが、二人がナルトを好きなのはナルト以外全員に気付かれている。ただ、恋愛ではなく、親に対するような愛情である。

「二班 我愛羅、君麻呂、多由也」

「異議あり！」

「うるせーですユギト。理由きかーせんか？ まず三尾は九尾以外だと一番チャクラがあって持久力があるっしょー？ だから里を守ってもらーたいんねす。んで、ユギトとリトは正確に難あり。OK？」

「「NO！」」

「うるせーです。リトは好戦的すぎてうるせーです。ユギトは存在がうるせーです。ついでに一番年上」

「関係ないわよねそれ！？」

「何で俺が好戦的なんだよっ！？」

「じゃ、解散。ちなみに明日辺りから行ってほしーです。理由としては、遅くなると文句言われるかーです。後、変化でいかねーでくだせーよ？ てかダメらしーっすからよろすー」

「「聞けっ！」」

暴れる二人を無視し、他のメンバーは消え去った。

火影の執務室

「それで、なんですか火影様。旧家の当主を皆呼びだして。と言っか、何故オレが……？」

はたけカカシはそう言って肩を落とした。

明らかに場違いだと思つてのことだろう。他は名家、自分はその上忍である。

「今回呼びだしたのは、ミナトに関係深い人間じゃ」

全員の肩がピクリと動く。

カカシはミナトの教え子であり、他は親友である。

「今回九陽の里からの参加メンバーなのじゃが……」

「九陽……つてことは水の国ですか？」

火影はその用紙を机の上に出す。

「ナルト……？ ですか。そのような名前どこにでも」

「そうなのじゃが、家名がのう。風巻ナルト。父方の性である波風、母親の性であるうずまき。一文字ずつ組み合わせると、風巻じゃ」

全員が八つとしたように顔を見合わせる。

「だが、偶然つてこともあるじゃろ……ただ、波の国は謎が多くてのう。本人かどうかもわからないのじゃ」

「写真が張つてないようだが？」

「うむー……忘れたんじゃろ」

「そんなことあり得るのか？」

「あの水影ならありえる……」

ため息をついた火影を、不思議そうに見る。

「失礼ですが火影様」

「ふむ……なんじゃ日向ヒアシ？」

「うちの娘のハナビが風巻ナルトに会ったと前に……」
「なんじゃと!?!」

ガタつと火影はイスから立ち上がる。

「すぐに連れてまいるのじゃ!」
「ハッ」

数分後、ヒアシがハナビを火影の前に連れてきた。

「ふむ、久しいのう日向ハナビ」
「お久しぶりです火影様」

ハナビは何故呼びだされたのかわからずおどおどとしている。
しかも、周りは旧家のお偉いさんばかりである。

「すこしお主に聞きたいことがあつてのう」
「はあ……わたしにこたえられることなら」
「お主、風巻ナルトを知っておるかろう」
「兄様ですか……?」

火影は眉をピクリと動かす。

その時になって、ハナビはまずいことを言ったのかもしれないと思つた。

「兄様……とな?」
「いえ……あの……」
「教えてほしいのじゃが」

旧家の歴戦の方々の圧力に、幼いハナビが耐えられるわけもなく、仕方なく口を開く。

「兄様は……わたしの師匠です」

「師匠？」

「はい。白眼を開眼させ、日向の柔術を覚えてくれた方です……」

「日向の柔術だとっ!？」

火影がヒアシに目で訴え、黙らせる。

「続けて」

「はあ、一か月の間修行をつけてくれたのですが、自分は他里の者だからいつまでも見てやれない。でも、忍びになったらまた会えるだろうと……」

「だから、あんなにアカデミーに入りたいと……」

「すみません……」

ハナビは俯いてしまいが、火影は忍びになればまた会えるかもしれないと言う点に思考が言っていた。つまり、中忍試験を知っていた。そして出ると。

「それで、どのような風体だった？」

「えーっと、長い金髪でした。あと……カッコよかったです」

火影はズッコケた。別にカッコイイとかは個人の主観だからいらないのだ。

「ふむ。もう帰ってよいぞ。教えてくれて助かった」

「あの……、兄様が何かしたのですか？」

「いや。捕まえるとかではないのじゃ。此処にいる者の友人の、大事な忘れ形見での……」

そう言った時の火影の優しい目や、他の人の昔を思い出す眼を見て、ハナビは安心した。

「では、帰らせていただきます」

ハナビはぺこりとお辞儀し、部屋を後にした。

「して、どう思った？」

「名前と金髪。金髪はこの里や他里でもかなり珍しいものです。そして 四代目火影様は金髪」

「そうじゃのう……おそらく。ワシが見つけれなかったナルトじやろ」

火影は遠い昔を思い出し、目を細める。

「やっと会えるんじやのう……ナルト……」

「しかし、ナルト君に会ってどうするのですか？ この里に戻すのですか？」

「うむ……本音を言えば戻ってきてほしい。そして幸せにしてやりたい。だが、戻ってきて幸せになれると思うかの？」

火影の言葉に全員が俯いてしまう。

幸せになれるわけがない。ナルトと言う名前は最大級の忌子の名前。そのような者が戻ってきてどうなるかわかったものじゃない。

あの噂は今も残っているのだから。

「九陽の里で幸せに生きているなら、それで良いと思うのじゃ」

全員が頷くのを確認し、火影は優しくほほ笑む。

（ナルト、お主は今幸せかろう？）

007 五影会談にて。(後書き)

家に帰ると寝ちゃって更新でないから、昼休憩に更新。
USBに入れてきてよかった。

008 中忍選抜試験一（前書き）

知らない言葉知ってたりしますが、多めに見てください。
例えば、スズメバチとか知ってたりします。

原作でもそうですか、何故か横文字とか使ってるんですねー。

火の国

「何が予定より早く行ってこいだせーちゃん……思いつきり当日じやねーか！？ てか、フウの尾獣に乗ってこなかったら間に合わなかったぞ!？」

「いいじゃないおにーちゃん？ フウのおかげでなんとかなったし」

そう言って、フウはニコリとほほ笑む。

ナルトが頭を撫でてやると、後ろから裾がひかれた。

「……にー。わたしのほうが役……立つ」

ヤヒメが対向してきた。

6人で仲良く歩いてゆくが、誰も周りに人が歩いていない。と言
うか、迷っている。

「……すみません。中忍試験の会場は？」

「おう、それならあそこだ。お譲ちゃんも中忍試験か、頑張れよ？」

「……うん。ありがとう」

とてとてとヤヒメは戻ってきた。

「……えらい？」

「えらいなヤヒメ」

「……えへへ」

ヤヒメの頭を撫でてみると、隣ではフウがぷくーっと頬を膨らませていた。

いつものことなので、ナルトはフウを無視して我愛羅に視線を移動する。

「そっぴや我愛羅の兄と姉も来るんじゃないか？」

「オレの家族は九陽の里の者だけだ……」

「そ、そうか……」

我愛羅は里の者だけは家族と思えるようになった。街を歩くと、九陽は人気なのだ。声をかけてくれるのなんて当たり前、食べ物にくれたり、守ってくれてありがとうとお礼を言ったりしてくれる。そのおかげで、我愛羅はだんだんと笑顔を見せるようになった。尾獣との対話も成功し、目の周りのクマも無くなっている。まあ、原作通りヒョウタンは背中におぶっているのだが。

「とりあえず我愛羅も君麻呂も試験中喧嘩すんなよ？」

「ナルトが言うなら」

九陽全員がナルトと空狐の言うことだけは聞く。もし、リーダーとしてナルトが居なかったらあつという間に里を滅ぼしているだろう。それだけ九陽は感情コントロールが下手糞である。

中忍試験会場

火の国、下忍チーム第七班　　うちはサスケ、春野サクラ、日向ハナビ。

ハナビはナルトに言われた年に、編入生としてアカデミーに編入した。年は4歳だったが、技術的には全く問題がなかった。そして、姉と同じ学年に編入後、ナルトに教わった通りに影分身をアカデミーに置いて授業を受けさせ、自分は必死にヒアシのもとで修業をした。夜になるころにはチャクラ切れを起こし、毎回気絶。ハナビのチャクラでは影分身を作ると、かなりつらいのだ。それを三年間続けるころにはチャクラの量も増え、技量も随分上がった気がする。姉と一緒に卒業し、班わけで七班になったわけだが、ハナビにとっではどうでもよかった。ただ、ナルトに会うためだけに必死に頑張ったハナビ。卒業した年が7歳だろうと、7歳で卒業したハナビにサスケが嫉妬して、喧嘩を売ってきてもどうでもよかった。

ナルトに会うためにひたすらに勉強し、それが今日叶うと思い、朝からハナビは機嫌が良かった。ナルトが中忍試験に出ると、父ヒアシに教えてもらったのだ。教えてもらったとき、

(父様もたまには役に立ちます)

と、腹黒い事を考えていた。

「そんなんで中忍試験受けようっての？ やめたほうがいいって」
何やら試験教室の前で人が集まってることにハナビは気づいた。
そしてその奥から、厭味ったらしい声が聞こえてきた。

「フンっ、行くぞ？」

とどめとばかりのサスケのその物言いに、ハナビはむかむかしてきた。

（こんな写輪眼だけしか取り柄がない男を好きだなんて、サクラもダメダメですね。兄様の目のほうが全然すごいです）

ハナビはまだ生命の流れを見ることが出来ないが、いつか見たいと思っていた。そして、全ての面でハナビの中で最強はナルトなのだ。

扉の前につくと、二人の人間が道をふさいでいた。
そして、一人の濃いまゆ毛の人が殴られて腰をついていた。
近くにネジがいることから、同じ班のロック・リーって人だとハナビは思った。

同時に、白眼を使う。

『初めて会う人を信用するな。まずチャクラの流れで、ある程度の思考は読めるはずだ。これから何をするか。今何をしているか確かめる』

ナルトに言われた教えをハナビは破ったことはない。

一か月の間の教え、全てを覚えている。

そして、白眼を解く。

(さすが兄様。信じるべきは兄様です)

くすりと笑い扉の前に歩みを進める。

「何だお譲ちゃん？ 此処は君の様な小さな子供が来る場所じゃないぞ？」

ハナビはフフッと笑う。

「そのうす気味悪い笑いをやめて早く幻術を解いてください。ついでに、その程度の変化で騙せるのは三流以下の忍者だけです。密度も精度もダメダメです。わたしの“本当”の兄様に比べたら赤子レベルですね」

「は……何言ってるんだお前？」

さもおかしそうちに、二人が笑う。

ハナビは一つため息をつき、印を結ぶ。

そして、扉に手をつき、

《解》

空間がグニヤリと歪み、部屋番号が“3-1”から“2-1”へと変わる。

(やはり、兄様に教えてもらった解術はいいです。学校で教えてもらった術じゃ解けませんからね)

そのまま、ハナビは来た道に戻る、二階ではなく、本来の三階へ向かう為に。

「ネジ兄様はまだまだですね。この程度の幻術や変化、見切れなくてどうするんですか？」

ハナビは鼻で笑いながらその場を後にする。
後ろから、悔しそうな顔をしたサスケと、サクラがついてくる。

三人が本来の部屋に入ると、部屋一杯の人間がいた。皆中忍試験を受けに来た人間だろう。

「サスケ君おつそーい」

10班の山中いのが、後ろからサスケに抱きついてるのを見向きもせず、ハナビは辺りをきよきよし始めた。

(兄様兄様何処？ 兄様ー！)

「何きよきよきよしてんだお前？ この人の多さにビビってんのか？」

「黙ってくださいうちはサスケ。次声掛けたら殺しますよ？」

ハナビのあまりの迫力に、サスケは何も言いだせなくなってしまった。

「あ、ハナビ……」

今度は、三人が傍に寄ってきた。
八班である、犬塚キバ、油女シノ、日向ヒナタ。

「ああ、姉様ですか。今はそれどころじゃありません兄様を探さないといと！」

「えーっと、兄様っていつもハナビが言ってる人？」

「そうです。いるはずなのですが見つかりません！ 何処ですか兄様！」

見向きもせずを探し続けるハナビに、いのの隣にいたシカマルがめんどくさそうに口を開く。

「まだ来てねーんじゃねーの？」

「ああ、奈良シカマルですか。確かにそうかもしれません。待ち遠しすぎて我を忘れてました。でも、兄様の為なら忘れてもいいです」

ハナビがそわそわしていると、シカマルはため息をつき、ヒナタを見る。

「なあ、ヒナタ……兄様って下忍の日向ネジのことじゃないのか？」

「ふざけないでください！ あんな屑と兄様を一緒にしたら兄様が可哀そうです！」

もうハナビ暴走中だ。

「アハハ……ハナビはハナビの兄様のことになるとすごいから」

ヒナタが苦笑しながらシカマルに教える。

「おい君達！ もう少し静かにしたほうがいいな……」

背後から声がかげられ、全員がそちらを振り向く。
そこには、メガネをかけた青年が立っていた。

「君達がアカデミー出たてホヤホヤの新人九人だろ？ かわいい顔してキャツキャと騒いで……」

「黙ってください年増！ どんだけ試験落ちてるんですか？ かわいいなんて兄様以外に言われても虫唾が走ります」

その青年の額に青筋が浮かぶが、ハナビはナルトのことで頭がいっぱいだ。

「誰よ〜アンタ偉そうに」

サクラがその青年に問いかけると、青年はくすりと笑い口を開く。

「僕はカブト。それより辺りを見てみなよ」

全員が辺りを見、身体を硬直させる。そこには、こちらを睨んでいる大勢の忍達がいた。全員試験前でピリピリしているようだ。

ハナビだけはまだキョロキョロとし、すぐにカブトをキッと睨みつける。

「騙しましたね！ 兄様いないじゃないですか！」

もう他はどうでもいらしい。

「ふつ……まあ可愛い後輩が殺されるのも可哀そうだ。この認識力
ードで情報をあげよう」

ハナビを無視してそう言い、カブトはニヤリと笑いながらカードを取り出した。

それを地面に置くと。地図の様なものになった。

「今回の中忍試験の、それぞれの里の受験者数を個別に表示したものだ」

ハナビも気になり、それを見つめる。もちろん気になるのは九陽の里。

(六人……少ないけどきつというはず……)

「そのカードに個人情報詳しく入ってるやつ……あるのか？」

サスケがした質問に、ハナビの耳がピクリと動く。

「もちろん、今回の受験者の情報は完ぺきとまではいかないが、焼きつけて保存してある。君たちも含めてね……。何でも言ってみな、検索してあげよう！」

「木の葉のロック」

「黙ってください！うちはサスケ！ 風巻ナルト！ 風巻ナルトを検索してください！」

「おい……」

サスケの抗議がある中、ナルトをカブトが探すが、なかなか見つからないようだ。

そして……。

「どつやらないようだ」

「何が何でも言ってみなです！　ないじゃないですか！」

ハナビは逆切れした。

「す、すまない。それはどこの里かわかるかい？」

「九陽の里です」

「九陽の里は情報が全く手に入らない。わかっているのは、前の霧隠れの里が、わずか三人に滅ぼされ、新しく出来た里と言うくらいだ。後は、里の民は皆血継限界だけと言うところか……」

「皆血継限界……だと？」

皆はそこにくいついたが、ハナビは心底どうでもよかった。

「各里の血継限界が流れて出来た里だからね、民は皆血継限界持ち。木の葉で言う、旧家と同等の力を持つ人間しか住んでないと言うことだ。あとは、九陽と呼ばれる九人の守護者が守っていることかな。これは公式に発表されているから、秘密でもないが。ついでに、あの里に偵察に行つて戻ってきたものは誰もいない」

その言葉に、全員が驚愕の色を浮かべる。

だが、ハナビだけは違った。

（九陽……確か兄様の背中に九陽つて刺繍がしてありました！　あれは里の名前じゃなくて守護者つて意味だったんですね。さすが兄様です！）

一人で浮かれまくっていた。

「情報がない国は音隠れの里と九陽の里だけ……危険度で言ったら九陽の里がトップじゃないかな？　何かあるかわからないし」

その時、前の扉が開き、うるさかった部屋が一気に静まった。扉から入ってきたのは、白い羽織を着、首に額当てをにかけている六人。

ナルトひきいる九陽の里の者だ。

九陽の里は、五大国であるのに情報が一切ない里である。そのこともあり、他里に危険視されているのだ。

「来たようだね……あれが九陽の里だ」

全員がゴクリと息をのみ込む。

醸し出す雰囲気、圧倒的に違う。全ての者がそう思った。

「兄様！」

ハナビ以外は。

ハナビはナルトの目の前まで瞬身を使い、ナルトに抱きついた。

「兄様！ 兄様！ 会いたかったです！」

ぐりぐりとナルトの胸に頭をこすりつける。

フウとヤヒメが止めに入ろうとしたが、途中でやめた。なぜなら、ハナビが泣いていたからだ。

「にーさま……ぐす……もう会えないかと。もう離れません」

「久々だなーハナビ。相変わらずちっこいな」

「まだ七歳ですから仕方ないです……」

ナルトはほほ笑み、ハナビの頭を撫でてやる。その姿を見て注目していた忍達がズッコけた。

「なあ、あれが九陽の里か……?」

「多分そうだけど」

「雰囲気は穏やか過ぎて和むんだが……」

「と言っか、ロリコ……ッ!」

クナイが飛翔し、話していた忍の髪を数本もっていった。
ナルトはそちらを見もせず、話を続ける。

「そっか。でも七歳でアカデミー卒業とはやるなー」

「忍者になっいたらまた会えるって……だから頑張りました」

ハナビを引きずりながら、ナルト達は空いている後ろの席に移動する。

「我愛羅!? なんで砂の里のアンタが九陽の里にいるの!?!」

途中、我愛羅が声を掛けられた。

「ああ、テマリとカンクロウか……俺は砂の里とは関係ない。九陽の里、一陽・我愛羅だ」

「あんたが居なくなっってから必死にさがしたのよ!?!」

その言葉に我愛羅はキッと少女を睨んだ。

「それは俺を殺そうとか?」

「そんなわけないでしょ!?! 弟を殺そうと何て」

「俺は砂最後の日、親代わりの人間に殺されかけた。兄弟程度の絆で信用出来ない……」

「だったらソイツらはなんじゃんよ?」

傍に居た黒ずくめに白い化粧をした男がナルト達を睨みつけた。

「……かけがいのない仲間だ……。オレと同じ宿命を背負ったな……オレに近づくな。近づいたら殺す」

そう言っつて、我愛羅は足を止めずにナルトについてきた。我愛羅の本気に二人は恐怖を浮かべた。

(チツ……結局兄弟だと言っつても、オレを恐れた目で見る……)

我愛羅の中で、砂隠れの思い出は、思い出したくない過去。それ以外のなんでもない。

虐げられ、信用した者に裏切られ、拳句の果てに実の父親から暗殺命令が出た。いいことなど何もなかった。

「あの……あなたがハナビが言っつてた兄様ですか？」

「ん？ えーっと」

「日向ヒナタです……」

それを見ていたハナビがキッとヒナタをにらむ。

「兄様を取っつたら姉様だつて許さない……」

「え？ え？ 違うよハナビ……ハナビが嬉しそつに話してるからどんな人かなつて……」

ハナビは親の仇を見るような眼でヒナタを見続ける。

「こらハナビ。実の姉だろ？ そんな目で見るなつつの」

「兄様がいうなら……」

「んじゃ“ハナビ姉”。まあ一か月だけの兄だったけど修行つけたのが兄様ってんなら俺がその兄様だ」

「兄様はずっと兄様だけです！」

ナルトはため息をついた。

久々に見たハナビが、完全にヤンデレハナビだったのだ。そりゃため息をもつきたくなる。

「なんだよ、結構普通じゃん？ 危険とかカブトが言ったから身構えちまったよ」

シカマルが一步前に出た。

「オレは奈良シカマルだ。よろしく」

「へー、シカマルがめんどくさがらずにそう言つことするの珍しいわね？」

「なんだよいの？ 他里との交流深めるってのは大事だと思うぜ？」

ナルトは苦笑いしながら挨拶をする。

「俺は風巻ナルト。よろしく」

「あ、ちなみにフウはフウだよ？」

「……ヤヒメ」

「ウチは多由也」

「君麻呂です。よろしくお願いします」

「……」

「あー、我愛羅はこう言つての苦手だな。我愛羅だ」

フウとヤヒメとハナビが火花を散らしているが、次々と挨拶をする。

「あ、わたしは春野サクラ」

「……」

「あ、兄様。うちはサスケもこう言つの苦手です」

「オレはさつきも言ったけど奈良シカマル」

「山中いのよ」

「秋山チヨウジ」

「……油女シノ」

「犬塚キバだ」

わきあいあいと挨拶する。

フウとヤヒメとハナビが罵りあい、サクラといのが罵倒をぶつけ合う。

ソレを見たヒナタはめちゃくちゃおろおろしている。

そこで、ピクリと九陽一同は反応した。

木の葉組みは誰も気づかないようだったが。

九陽は一瞬でアイコンタクトし。

ナルトが飛んでくるクナイをキャッチし、それ以上の速度で投げ返す。

そのままジャンプしていた奴を天井に縫い付ける。

フウとヤヒメがその場から消え、こちらに走ってくる二人を殴りつける。

そして、殴った時にかすめ取ったクナイで二人を天井に縫い付ける。

三人が天井に縫い付けられた。ここまで約一秒。

何が起こったかわからず、全員が唖然とした視線を天井に向けて

いる。

ナルトは振り返り、カブトを見つめる。

「殺気に向けるなよカブト。特にあの音忍がやられた一瞬……な」

ニヤリと笑ってやると、そそくさとカブトはその場を離れて行った。

「兄様兄様！ やはり兄様はすごいです！」

キラキラと尊敬のまなざしで見上げてくるハナビの頭にほんぽんと手を置き、苦笑いを浮かべる。

「静かにしやがれドグサレヤロー共！」

突如、その場に声が響き、煙と一緒に大勢の試験官が前に現れた。だが、静かにしやがれというが、先ほどの天井縫い付け事件のせいで誰も喋っていなかった。

「待たせたな……中忍選抜第一の試験官、森乃イビキだ……」

顔に傷が多数ある試験官は、受験生に殺気を放つ。ほぼすべての生徒が、殺気に充てられたようだ。

（ぬるいな……。尾獣の何千分の1以下だ）

（くだらない）

（あの人遊んでいいのかな？ 晶遁の実験したい）

（兄様の腕暖かい……）

相変わらずハナビだけは全然違うことを考えていた。

「にしても……あいつら何天井で遊んでんだ？」

当然の質問であろう。

それから、他の中忍がそいつらを降ろし、座席番号を受け取ってから席を移動した。

「あー兄様が隣で嬉しいです。やはり、これは運命ですね？」

にこにこそんなことをのたまうハナビに、ナルトは冷ややかな目を向ける。

「……白眼」

ビクつとし、冷や汗を流すハナビ。

「な、何を言ってるんですか兄様？」

「……」

「あ、愛は待ってちゃ来ないんです！ 自分から動かなければいけないんです！」

なんだかカツコイイセリフを言って、ハナビは誤魔化した。ハナビは札を箱の中から抜く時、ナルトの隣を狙ったのだ。

「答案用紙はまだ裏にしとけよ。では、ルールを説明する」

ヒビキは黒板にルールを書きこんでゆく。

「まず、お前らには最初から10点ずつ持ち点が与えられている。

筆記試験問題は全部で10問、各一点。この試験は“減点式”となっている。問題を間違えるごとに一点減点。次に、このテストはチーム戦。チーム三人の合計点で合否を判定する。次に一番大事なことだが、カンニングおよび、それに準ずる行為を行ったと此処にいる監視員達にみなされた者は、その行為“一回”につき持ち点から“二点ずつ”ひかせてもらう。持ち点が無くなった場合、その場でチームごと退場してもらう。不様なカンニングなど行った者は自滅していくと思え。仮にも中忍を目指す忍なら……“立派な忍びらしくする”ことだ」

そう言って、殺気を込めながら、ヒビキはニヤリと笑う。

ナルトは始まる直前にハナビを見た。

「……」

みた瞬間ににこにこしているハナビと目が在った。

「ハナビ……カンニングだと思われるぞ？」

「兄様と試験なら兄様を取ります！」

「……第一試験で落ちたらもう会わないから」

そう言うと、傍目にもわかるくらい顔を青ざめさせ、ショックを受けていた。

だが、すぐに真剣な表情に戻って試験に集中した。

「試験時間は一時間。始めろ！」

ナルトは心配し、気配を探してみると、どうやらハナビはいきなり白眼を使い始めたようだ。まだ、誰も解いてねーよと思っていたが、自分も試験用紙に視線を落とす。

最初の暗号文を見、ため息をこぼす。

(何このアカデミー初期レベルの問題。これが中忍試験とは笑わせ
る)

思考時間0。

まるで、文字を移すようにサラサラと書いてゆく。

九陽の里の者は、カンニングなんてすることもなく、すらすらと
解いてゆく。

数分で最後の問題まで辿りついたが、この問題に限っては試験開
始後45分経過してから出題されます。とこのことで、ナルトは寝て
過ごすことにした。

「第一の試験合格を申し渡す！」

その叫びでナルトは目を覚ました。

「此処に残った108名全員に第一の試験合格を申し渡す！」

ナルトはキョトンとしていた。

いきなり起きたら合格宣言だ。どんな推理も追いつかない。
とりあえず、隣のハナビに小声で話しかける。

「ハナビ。どういうことだ？」

「なんか第十問を受けるか受けないかだったので試験だったらしいで
す。受けてミスしたらもう中忍試験を受けさせないって。で、受け
なかつたら退場。此処に残ったのは皆受けた人ですね。覚悟を試し
たってことです」

ナルトはそのまま寝てたから結果的に合格したわけだ。

忍者に必要なことを備えているか確かめる試験だったのだろう。

「で、どれだけ人数減った？」

「0です」

「は？」

「カンニング以外で落ちた人いません。十問目が出された瞬間、フウちゃんが言ったんです。……早く出てけ。臆病者の屑共が。貴様らなど一生中忍になれない」と。そして、それに反発して全員が残ったわけです」

ナルトは苦笑した。確か原作では70ちょいしか合格者がいなかったはず、でも先ほど108名と言った。フウの言葉が効いたってことだろう。

その時、窓の外で何か動く気配がした。

そう思った時には九陽の里の人間は全員クナイを取り出していた。窓を突き破り、黒い何かに包まれた人間を確認すると、六人がクナイを投擲する。

ほぼ同時に黒い布に突き刺さり、中の人物ごと壁に縫い付けた。

何やら中でもごもごしているが九陽達は知らないフリだ。

部屋中が一気に静かになった。

「さて、次の場所までは俺が案内するからついてこい」

受験生が席を立ち上がる。

「ひよ、ひよっほまひなさい！ たふけなはいよイビキ！」

「……自業自得だろ？」

「まへー！！」

それを放置し、受験生達はイビキの後に付いて行く。

008 中忍選抜試験一（後書き）

基本大事な本筋だけは原作通りです。
ネジの試合とか。

009 中忍二次試験(壱)(前書き)

短いです。

長いので、切ってみました。

ルール説明だけの様な感じですね。

死の森

「えーでは此処が」

「……此処が第二の試験会場、第四十四演習場。別名死の森よ！」
「お前……」

イビキが説明していると、結局イビキに引きずられてきたアンコが、クナイで包まっていた垂れ幕を破り解説を始めた。だが、ごく時間をかけて作ったたろう垂れ幕 何度も書き直した後があるアンコ参上と言う文字が書かれた物が無残に破れている。

アンコだが、最初が黒い布に巻きついて壁に貼り付けられていたこともあり、なんとも威厳がない。荒い息してるし……更に目が血走っている。

誰がやったか見回しているが、九陽は知らぬ顔だ。

「兄様、兄様！ 死の森怖いから守ってもらっていいですか!？」

「いやいや、お前一応敵チームだろ？」

「ぶー」

頬を膨らませるハナビに苦笑してしまう。

「へー、話も聞かないで恋に夢中って？」

アンコがいきなり投擲したクナイを、ナルトは数倍の速さで投げ返す。

その後、アンコの額当てが地面にパサリと落ちる。

髪がかかっているのに、髪は一本も切れておらず、額当ての布だ

けが切れる。

「言葉で注意も出来ずに実力行使のアンタよりはマシじゃないか？」
「恋も出来ずに年増になっちゃった人に言われたくないです！ その歳で恋とか言つのも遅い感じですよ」

ブチッと言う音が聞こえてきそうなほど、額に青筋を浮かべるアンコ。

（いやー、多分独身年増つてのがタブーだったんだろうなー上忍なら額当てくらいで怒らないだろうし）

と、ナルトは思っていたが、アンコの沸点は異常に低い。

次の瞬間、アンコが消え去り、すぐに背後のフェンスに突き刺さる。

この試験を受けた人間で、何が起こったか見えたのは九陽の六人だけだろう。

アンコがハナビの前に現れた瞬間、ナルトが蹴り飛ばした。ただ、それだけだが、あまりに速くて誰も見えなかったのだ。

「ごほっ……試験官への暴行……アンタ失格にするよ？」

「どう考えても正当防衛だろ？ 試験官からの無意味な暴行。どっちかと言つとアンタの首が飛ぶんじゃねーか？ てか、下忍程度にやられんな」

ハッとナルトは笑い飛ばしてやった。

隣でハナビが何が起こったのかわかったか知っていたので、耳元で教えてやると、キラキラと尊敬のまなざしでナルトに抱きついた。

少し離れたところで、ネジとリーは小声で会話をしていた。

(リー。今の攻撃どうだ?)

(いえ、全然見えませんでした……かなりの実力者でしょうね。会ったら逃げた方がいいでしょう)

(白眼でも全くとらえきれなかった……風巻ナルト……か)

知らないところで敵を増やしているナルトだった。

「はあはあ……今回だけはいいわ。それじゃあアンタらにこれを配っておく。こつから先は死人もでるから、それについての同意書にサインね。これないと私の責任になっちゃうからさ」

他の者は青ざめているが、我愛羅と君麻呂は誰が一番多く殺せるかとか話している。

「アンタ達には死の森でサバイバルをしてもらうわ。この森はカギのかかった44個のゲート入口に円状に囲まれて、川と森……中央には塔があるわ。ゲートから塔まで10キロ。直系20キロの円ね。武器や忍術何でもアリの巻物争奪戦。天の書と地の書。ここに108名36チームがいるわけだから。18チームに天の書、残り半分に地の書を渡す。合格条件は、天地両方の書を持って中央の塔に三人でくることが。期限は5日間。その間の生活は自給自足。途中ギブアップは無し。同意書三枚と巻物を交換。その後すぐにゲート入口を決めてスタートよ!」

(長々と説明したが、これだったら天と地集めて中央に来てって説明でいいじゃん……)

「最後のアドバイス　死ぬな!」

その一言で緊張が走る。

「アンタは死ね！」

アニコがビシッとナルトを指さして言う。

ナルトは肩をすくめて苦笑しただけだった。

結局無視し、ハナビに向き直る。

「また後でな、ハナビ」

「はい！ 兄様！」

ハナビと別れ、ナルト達は一度集まる。

「じゃあ、とりあえず俺達のルールを決めようか」

ナルトがニヤリと笑うと、全員が同じように笑う。

「まず、尾獣化は無し。ただ、やむおえない場合は各自の判断で許可。ただ、尾獣化した場合全員がその場にすぐ直行。危険があるってことだからな。人柱力としての能力の使用は自由。殺す殺さないは各自の判断で自由。で、一人ずつ行動して、巻物を一番集めた奴が勝ち。最後に俺のわがままだけど、俺が指定したチームだけは見なかったことにしてくれ。攻撃してきたら巻物を奪っていいけど、気絶までで頼む。追加ルールとかあるか？」

見回してみるが、異論を唱える人間は誰もいない。

「では、スタート」

巻物を交換し、九陽達はそのままゲートに移動した。

第二試験

ナルト、フウ、ヤヒメ。

「おにいちゃん、フウが勝ったら一緒に寝てね？」

「……わたしも」

「まあ寝るくらいならいいぞ？」

「やった！」

「……がんばる」

我愛羅、君麻呂、多由也。

「負けない……」

「我愛羅だけには僕だって負けないよ？」

「あー、ウチはどうでもいいや」

「「負け犬」」

「ぜってー勝ってやる！」

うちはサスケ、春野サクラ、日向ハナビ。

「はやつく〜 兄様と合流したいな〜」

「ハナビ……一応敵なのよ？」

「フツ……あの程度怖がつてどうする」

「兄様の攻撃が見えもしないくせにへたれうちはサスケ」

「……殺す」

山中いの、奈良シカマル、秋道チョウジ。

「あー、めんどくせー」

「僕にご飯とりにいきたいな」

「サスケくんどこかなー？ サクラがいるから心配」

犬塚キバ、日向ヒナタ、油女シノ。

「とりあえず弱い奴から行くか？」

「……弱い奴って誰？」

「……他の里で知ってる奴九陽の里しかいねー！」

「そこ狙うの……？」

「無謀」

ロック・リー、日向ネジ、テンテン。

「さっきはああ言いましたが、ボクは自分がどれくらい力があるのか試したいです」

「ふ……つまり、九陽の奴らとやるのか？」
「ええ、出会ったならばやりましょう！」
「オレもそれでいいと思う」
「本当にやる気なの……？」
「もちろんだ（です）」
「はあ……」

開始1分。

ナルトは一人、右回りで外周を回っていた。

「お、発見」

飛雷神の術を使い、一気に距離を詰める。

一瞬で三人の首裏を叩き、意識を狩り取る。相手はナルトの存在にすら気付かず意識を狩り取られた。

そして、服をまさぐり、巻物を見つけて手に取る。

「一本目くさーて次々」

ナルトは更に進んでゆく。

フウの場合。

フウは開始一時間経つが、誰とも会えないでいた。

「むー、この森ひろすぎるのがいけないんだよー」

辺りの気配を探り、人の気配がある方向に走り出す。

やがて、やっとの思いで一組見つけるが、一気に肩を落とす。

「あー、外れだ……。フウ運悪い……」

それはネジ、リー、テンテンの班だった。だが、この班はナルトに攻撃禁止を言い渡されている。

「誰が外れなんだ？ 俺たちじゃ相手にならないとでも？」

ネジが睨みつけながら問いただが、フウはどこ吹く風だ。

「違うよー、お兄ちゃんが君達には手だすなって。攻撃してきてくれたら反撃していいらしいけど」

「なら安心しろ。オレがお前を倒してやる」

「本当!？」

フウは嬉しそうに笑みを浮かべる。

「いきなり九陽ですか!？ それに、彼女は一人ですよ?」

「だったら、お前は侵入してきた忍がいたとして、子供や女だからって許すのか?」

ネジの言葉にリーは眉をひそめる。

「うーん、なんか嫌な予感がするんだけど……」

テンテンの直感は正しかった。いくらフウが九陽で一番弱いからと言って、他の里でも一番弱いとは限らないのだ。

「じゃー、いっくよー」

そこで、三人は構える。

フウは50メートル程離れたところから印を組み。

《晶遁・晶山》

そして、目の前には大きな水晶の山が完成した。
中の方に三人が埋まっている。

「あわわ、息出来ないね。殺しちゃいけないだった」

そこで、フウは頭から上の水晶を消し去った。

「だから嫌な予感がしたって言ったのに……」

「何もしないで負けました……それに、この水晶硬くて身動きが」

「……お前は九陽の中で何番目に強い」

フウは唇に手を当て、考える。

だが、フウが誰かに勝った記憶が存在しなかった。つまり。

「あはは……改めて考えるとフウが一番弱いかな。だって九陽の誰にも勝てないもん」

その言葉に三人は固まった。自分達三人が全く手も足も出なかった相手が一番弱いなど、信じられなかったのだ。

実際は、フウが一番弱いと言うわけではない。ただ、相性が最悪なのだ。晶遁は人柱力には効かない。そして、晶遁以外フウは熟練度が低いのだ。結果負ける。更に、フウの素直な性格のせいでもある。フェイントなど何もかけない攻撃しかしないのだ。

「さーて、巻物はー……水晶の中だ……」

フウはその事実にしよぼんとうなだれた。

「えーっと、巻物持ってるの誰？ 確か君たちの班は体術が得意なんだよね？ 体術だけで巻物持ってる人と戦ってあげるから、教えて」
「……オレだ」

満面の笑顔で聞くフウに、素直にネジが答える。ネジはただ、戦ってみたかったのだ。体術だけなら九陽に勝てるかと。

「じゃ、解放するよー」

ネジの周囲の水晶が砕け散る。そこで、すぐにネジは白眼を使用する。

「じゃあ、よく見ててね？ ちなみに体術もフウが一番弱いかな？」
「なっ……」

フウは瞬身の術で、一瞬でネジの背後へ移動し、意識を狩り取った。

そして、その手にはいつの間にかネジが持っていた巻物が乗っていた。

「ごめんね。殺しちゃダメってお兄ちゃんに言われてるから」

指をパシユンと鳴らし、フウは水晶を全て消し去る。

その瞬間には、飛雷神の術で移動したようでも離れた木の上にフウの姿が在った。

飛雷神の術とは、術式を置いた場所に一瞬にして移動する術だが、フウには虫がいる。虫に術式を込めれば、ほぼ全ての場所に可能だ。ナルトの熱や、ヤヒメの空気と同じようにほぼどこにでも移動が出来るのだ。

「ばいばい!!」

そこで、フウは飛雷神の術で消え去った。

「……………」

その場には、気を失ったネジと、茫然としているリーとテンテンだけが残った。

「見えませんでした……………」

「え?」

「最初から最後まで、移動中は何一つ見えませんでした! 巻物を取ったことすら気付きませんでした!」

リーは目を開いたまま、涙を流した。

ひたすらに修行をしてきた自分が、10歳程度の少女の足元にすら及ばなかったことに。

「……………」

そこでネジが目を覚ました。フウが手加減をして気絶させたおかげで、すぐに目を覚ましたのだ。

「……アイツは？」

「巻物を持って消えたわ」

「消えた？」

テンテンはリーを指さした。

リーの姿を見て、何が起こったか悟った。

「リー、オレも全く見えなかった。見てると忠告を受け、必死に白眼で見た。50メートルは離れていたのに。一瞬すら見えなかった」

そう言って、ネジは天を仰いだ。

そこは、木々が生い茂り、隙間から光がさしているだけだった。

「もっと強くないとな……リー」

この時、フウはまた迷子になっていた。

ついでに我愛羅と君麻呂は二人でバトルを繰り広げていた。

多由也の場合

多由也は開けた場所で、笛を吹いていた。

軽くチャクラを放出し、気付かれる程度に。

遠くで敵が倒れた音がする。

笛を吹きながらゆっくりとそこに近づき、懐から巻物を拾いあげる。

「三本目っと」

多由也が吹いているのは眠りの音色。

チャクラを撒いているおかげで、敵が勝手に近寄ってきて、勝手に眠ってくれるのだ。

そして、また木の上に座り、笛を吹く。

その場には、優しい音色だけが響きわたる。

ヤヒメの場合

ヤヒメはいち早くゴール付近に近づき、待機していた。

ゴール間近で、巻物を獲得してゴールを目指す敵から、巻物を奪うために待っている奴を狙うのだ。

卑怯な敵は多く、また遠くで気配がした。

《晶遁・六角水晶》

敵の気配のポイントに、遠距離から水晶を精製するだけ。

できた水晶に近づき、手を突っ込む。

本来、血継限界を持つものなら、自分だけは石の中でも移動出来る。フウが出来ないのは、単に修行不足ってだけだ。

懐から巻物を貰い、水晶を砕いて終了。

ヤヒメは殺していい相手は殺す主義のようだ。

カブトの班

大蛇丸の命令通り、カブトは他の人間の实力を調べていた。

だが、その前に巻物を集めておかないといけないのだ。

ちょうど一人の忍を見つけ、カブトは仲間都合をする。

「ねー、そこの君たち。道教えて……」

「「「「！」「」」」」

驚いた。カブト達は気配を消し、100メートルは離れているのだ。だが、声はそばで聞いているように近くで聞こえる。

「君は試験前に居た九陽の里の忍ですね」

カブトは一步横に移動し、さも今来たと言わんばかりに笑顔で近づき、話しかけた。

と言っても、30メートルは離れているが。

「んー、確か……カプトって人だっけ？ いい名前だねー。カプトムシとか大好きだよ？」

そう言っつて、フウはニコリと笑った。

カプトはそれに安心し、近づいて巻物を奪おうと思った。

「それならボクらと一緒に行くかい？ ちょうど塔に行こうと思っ
てたんだ」

「ふーん。でも、フウは塔じゃないよ？」

「？ 何処へ行くんだい？」

「えーっと、入口かなあ？ 合流ポイントわからなくなっちゃった
し」

カプトは意味がわからなかった。はぐれた訳じゃなく、故意に一人で移動していたわけだ。しかも、手に巻物をもっている。油断しすぎだろう。

「ならば……フッ」

カプトは一瞬で近づき、チャクラをナイフに変えてフウを切り裂いた。

「あまり人を信用しないほうがいいよ。君は忍に向いていないね」

「なら、誰が向いているの？」

「!？」

聞こえてきた背後を振り向くと、仲間が二人、水晶に閉じ込められていた。

先ほど切り裂いたフウを振り向くと、フウの身体が無数のミミズ

の様なものになり、カブトに張り付いた。

「君。そんな殺気漏らしてたらダメだよー。普段からほがらかにー」

そこで気づいた。この子供っぽい忍は、あえて油断させるためにこの性格なのだ。

「君は演技がうまいね……」

「んーん。演技じゃないよ。この性格はくーちゃんがこのほうがいって言ってやらされてたら、なっちゃっただけ。それよりいいの？」

カブトは首を傾げる。確かにキモチワルイが、ミミズに囲まれるくらいで精神崩壊を起こす程弱くない。

「それは鉤虫って言うんだけど、身体の中に寄生する寄生虫。そして、フウのチャクラだから身体を内部から乗っ取っちゃっ」

「!?!」

カブトの手が勝手に動き、巻物を取り出し、フウに投げていた。

「ありがとー。絶対ヤヒメにはまけられないもん!」

そう言うと、カブトの身体が水晶に覆われてゆく。

「もういいよー、虫さん。一緒に水晶の中にはいっちゃっから」

「ゴホッ……オエエエ」

フウがそう言うと、カブトの口から大量の虫が出てきて、地面の中に潜ってゆく。

更に上空から巨大なカブトムシが舞い降り、水晶になった三人を脚のかぎづめに引っ掛け、飛び立つ。

「ごほっ……ゲホッ……君は……」

「道教えてくれないからもついいよ。カブトムシさん、その人たち会場の外にすてきてー」

大きな羽音をとどろかせ、カブトムシは去っていった。

「んー……どうしよう。誰かが能力解放すればどうせ気づくし……
それまで歩いてようかな」

フウは当てもなく歩くことになった。

009 中忍二次試験(壱)(後書き)

次はハナビと合流です。

ハナビ、サスケ、サクラ

三人は一回目の襲撃をなんとかぐり抜け、作戦を考えていた。先ほど、スタートしてすぐにハナビが全力ダッシュし始めた。体術専門でやってきたハナビに他が追い付けるはずもなく、見失った。そして、ハナビが戻ってきたとき、油断していたらそれは敵の変化。同じような事が強い敵で起こったらまずいと思い、対策中なのだ。

177

「一旦三人がバラバラになったとき、例えばそれが仲間であつても信用するな。今みたいなことになりかねない」

サスケの真剣な物言いに、サクラはごくりと喉を鳴らす。

案にハナビの事を言っているのだが、ハナビは上の空だったが。

「それじゃ、どーするの？」

「念の為に合言葉を決めておく。いいか……合言葉が違った場合、どんな姿かたちでも敵とみなせ！ 特にハナビだ！ 風巻ナルトだつたらすぐにでも飛びつくだろ」

サスケの言葉にハナビはムっと眉を寄せる。

「何を言っているのですか？ わたしは相手のチャクラを白眼で見れるんですよ？ 二人のチャクラくらい覚えています。兄様なんて特にわかりやすいので、一発でわかります」

フンと、そっぽを向く。

「便利よね……」

「まあ、一応逆の場合もあるから覚えておけ、忍歌「忍機」と問う。その答えはこうだ。“大勢の敵の騒ぎは忍びよし、静かな方隠れ家も無し。忍びには時を知ることこそ大事なれ……敵のつかれと油断するとき”」

「OK！」

サクラは長い文を一発で覚えたようではほほ笑む。

ハナビは全く聞いていなかったから一文字も覚えていなかった。

「巻物はオレが持つ……！？」

その時、ゴオオオと強烈な風が三人を襲う。

ハナビは真っ先に隠れ、他の二人もそれに続いた。

ただ、早速全員が離れ離れになってしまった。

草の陰に隠れたサスケは、人の気配が近づいてくることに気がついた。

「サスケ君！」

「寄るな！ まずは合い言葉だ……『忍機』！」

それはサクラだった。

サクラにクナイを向けながら、サスケは問う。

「あ、うん。“大勢の敵の騒ぎは忍びよし、静かな方隠れ家も無し。忍びには時を知ることこそ大事なれ……敵のつかれと油断するとき”」

「よし！」

サクラと合流し、しばらくすると、草むらからハナビが出てきた。

「大丈夫でしたか……？ 何だったんでしょう」

「！！！」

本人かわからず、二人は身構える。

「ハナビ、ちょい待ちなさい！ 合い言葉……」

「はい。“大勢の敵の騒ぎは忍びよし、静かな方隠れ家も無し。忍びには時を知ることこそ大事なれ……敵のつかれと油断するとき”」

「ハナビね」

「わっ！？」

そこで、サスケはニヤリと笑い、ハナビにクナイを投げつけていた。

その行動に、サクラは驚いた。

「サスケ君……なんで？ ハナビはちゃんと合い言葉いったのに……」

「ハナビが俺達の心配をと思うか？」

ハナビの顔がニヤリと歪み、ボンと音を立てて、変化が戻る。

「なぜわかった。私が偽者だと……」

「確かにあっていたが、なんとも悲しい理由で判明した。」

「てめーが土の中でオレ達の会話を聞いていたのはわかってた。あいつが答えるのはそんな普通の言葉じゃねーはずだからな……つまりお前はニセ者ってわけだ」

「なるほど疲れも油断もないってわけね……思った以上に楽しめそうね……」

二人がニヤリと笑い合う。

「ッ!?」

突如、オカマ口調の敵から膨大な殺気が二人に放たれた。殺気だけの、死のイメージ。二人はその場に崩れ落ちる。

サスケは冷や汗を垂らしながら震え、サクラは涙を流しながら膝をついている。

サスケが隣を見ると、サクラは戦えるような状態ではなかった。

(チッ! ダメだ! ここは逃げるしかない……そうしなければ……死しかない!)

「クク……もう動けないのかしら……?」

(くそっ、動け! なんて動かねー)

「サヨナラ……」

ヒュンと、ソイツはクナイを投擲する。

それが当たる直前に、サスケは木の陰になんとか逃げることが出来た。

「恐怖を痛みで消し去る為に、とっさに自分の身体にクナイを刺したのね？ やるわね」

オカマ野郎は本当にうれしそうにニヤニヤと笑っていた。

「サクラ……逃げるぞ！ こいつは次元が違いすぎる！」

「う……うん、え？」

サクラはサスケの後に大きな、顔だけで2メートルはある蛇がいることに気付いた。

「サスケ君後ろ！」

「ッ!？」

蛇がサスケに喰らいつく……その時。

《八門崩撃》

ズガンと、轟音を立て、蛇が地面にめり込み、絶命した。蛇の上からゆっくりと立ち上がったのは、ハナビだった。

「あ、そう言えば合い言葉言ってなかったですね。“兄様の言うことは絶対。一言も忘れちゃいけません。忘れる”死であり、最も愚かなことである。兄様をみたらすぐさま抱きつき、頭を撫でてもらうことが最高の幸せ。わたしは兄様が大好きです”」

「……」

さも当然とばかりに言った合い言葉に二人は言葉が出なかった。ハナビの中では別の合い言葉が誕生していたんだと考えることにした。

「確かに、サスケ君が言った通り、“あいつはそんな普通の答え言わねー”ね……」

「……それより、ハナビ、サクラ！ 逃げるぞ！ オレ達の敵う相手じゃねえ！」

(だが、逃がしてくれるわけもない……これしか方法がないか……)

サスケは木の陰から出、巻物を取り出した。

「巻物ならお前にやる……頼む。これを持ってひいてくれ」

その言葉に二人は絶句した。

「なるほど……センスがいいわね。獲物が捕食者に期待できるのは、他のエサで自分自身を見逃してもらっただけですものね……」

サスケはフン、と鼻を鳴らし。

「受け取れ！」

巻物をソイツに投げ渡した。

だが、途中でハナビが、パシインとその巻物を奪い取った。

「なっ！？ ハナビ、よけーなことすんな！ この状況がわかってくぶっ！？」

激怒したサスケをハナビが殴り飛ばした。
そして、倒れたサスケを冷やかな目で見下す。

「わかってないのはうちはサスケ。交渉にすらならない脳内世界での独りよがりをされて、とばっちり食うのはまっぴらです。わたしは兄様の為に二次試験を落ちるわけにはいきません」

「テメえー……」

睨みつけるサスケと見下すハナビ。

そこで、拍手の音が聞こえてきて、二人は視線を移した。

「フフフ……ハナビちゃん。正解よ」

ペロリと顔に長い舌を這わせながら、オカマ野郎は笑った。

「巻物なんて殺して奪えばいいだけ……取引にすらならないわ……」

そこで、オカマは顔だけで10メートルはある大蛇を口寄せした。
次の瞬間、大蛇の尻尾でサスケは弾き飛ばされた。

「サスケ君っ!？」

「……」

サスケが木に打ちつけられ、サクラが叫ぶ。
ハナビは俯いてブツブツと何かを呟いている。

「あら？ 恐怖で壊れちゃったのかしら？」

「……した」

顔をあげたハナビの目は、白眼を使用した状態だった。

「うちはサスケはどうでもいいですが、兄様は仲間を見捨てる奴は屑だと言っていました！」

ハナビは、姿を消し大蛇の真横に現れる。

だが、大蛇は顔を横に振り、ハナビを打ちつけようと動かす。

トンつとチャクラを纏わせた腕で、ハナビは大蛇の顔に手をつき、上空に飛びずさる。

上空約20メートル程に。

『亜流・八卦………』

ギンと、白眼で睨みつけ、高速で落下する。

『三十二掌!』

蛇の至る所に現れ、掌底を繰り返す。

『六十四掌!』

蛇が顔を殴られ、逆側に移動し、更に殴りつける。

『百二十八掌!』

まるで、蛇が跳ねるようにゴンゴンと言う音と共に、殴られ続ける。

『亜流・八卦二百五十六掌!』

ドンと、最後に、蛇の頭に足を踏み込み、チャクラを込めた掌で点穴を突く。

それと同時に、大蛇は煙となって消え去った。

スタット、ハナビがサクラとサスケの元に着地する。

サスケはサクラに抱きかかえられているようだ。

「今のわたしの限界です。兄様の百分の一にも及びませんが、全力です」

オカマはニヤリと笑みを濃くし、ハナビを見つめる。

「素敵ね……日向の子供。その中でもなんて才能を持っている子でしょう」

「黙ってください！ 才能の一言で片づけられるのは気に障ります。兄様の為に努力して手に入れたのです」

「あらあら、努力も立派な才能よ？ 才能+努力をする子は好きだわ。でも、残念。女の子には興味がないの……今日の目的はサスケ君」

そこまで聞くと、ハナビは膝をつく。

「ちょ、ちょっとハナビちゃん!？」

「サクラ……」

ハナビはサスケを見つめる。

「うちはサスケ。あなたの大事なうちのはプライドはこの程度ですか……？ それだったらちゃんちゃらおかしいです。あなたは何も

していない。ヒドクかつこわるいです。ですが……後は任せます。
チャクラが……切れました」

ドサリとハナビは倒れる。サクラに木の傍まで連れて行かれ、背
中を木に預ける。

その様子をサスケは見、フッと笑った。

「ふ……見ておけ日向ハナビ。うちはサスケを。お前の兄よりよっ
ぽどすごい男を……」

「それは……ないです……」

サスケの瞳に写輪眼が浮かびあがる。

(見えるぞ……！)

ヒュンとサスケが消え去り、それと同時に、クナイが五本オカマ
に飛翔する。

だが、オカマは蛇の様な動きでそれを回避。次の瞬間、オカマの
背後にサスケが現れた。

「止まって見えるぞ……オカマ野郎！」

「面白いわ！ 《潜影蛇手》」

オカマの腕が大量の蛇に変わり、サスケをとらえた。
だが、ポンと音がして、サスケは丸太には変わる。

「変わり身！？」

「遅い……」

オカマの首に、二本の鋼糸が絡みつぎ、少し離れた所に居るサス

ケの口に繋がっている。

《火遁・龍火の術!》

鋼糸を炎が伝い、一瞬でオカマの頭部が炎に包まれる。

「その歳でここまで写輪眼を使いこなせるとはね……さすがうちの名を継ぐ男だわ……」

炎に包まれながら、言葉を紡ぐオカマがニヤリと笑う。

「やっぱり私は……君がほしい……」

次の瞬間、オカマはサスケの背後に移動し、首筋に噛みついていった。

ジワアと、サスケの首筋に黒い呪印が浮かぶ。

「ぐ……な、なんだ!? ……急に……苦し……」

サスケが首筋を抑えて苦しんでる最中、ハナビは思った。

(兄様の一兆分の一の役にも立ちません。むしろわたしが兄様の役に立ちたいです)

「今日の目的は達成したわ。私の名は大蛇丸。いずれアナタは私の元に自分から来るわ」

大蛇丸の手には、サスケが持っていた天の書が燃え上がっていた。そして、シユンと姿が消え去った。

だが、すぐに少し離れたところの木に大蛇丸は縫い付けられた。

「うーん……少し強いチャクラを感じてきたけど……」

第三者の介入。そこには、空中に立っているナルトの姿が在った。

010 中忍二次試験(弐)(後書き)

短いし、本編とあんまり変わらないですこの話は。

大蛇丸とランデブー

現れたナルトは視線をハナビにずらし、眉をひそめる。

そして、一瞬でハナビの傍に移動し、抱きかかえる。

「ああ……兄様。せつかく近くにいるのに……身体が動かさなくてすみません」

ハナビは軽く唇を歪めて、自傷っぽく笑う。

そんなハナビを、ナルトは優しげに見つめ、頭を撫でる。

それから、立ち上がり。

「おい、貴様ら。ハナビをやった奴は誰だ。隠れてる12人も出て来い。出ない奴は 殺す」

軽く殺気を放ちながら、淡々とナルトは言った。

《斬空波！！》

突如、ナルトに向かって放たれる音の衝撃波。それを見つめ、ナ

ルトは更に眉をひそめる。

ナルトに直撃し、音隠れの里三人が大蛇丸の近くに、降り立つ。

同時に、隠れていた、木の葉の3チームも出てくる。

「大蛇丸様……」

「ええ、ありがとう。それより、まだ死んでないわ」

煙が晴れると、ナルトは無傷でそこに立っていた。背後のハナビも全くの無傷で。

「貴様は邪魔だ」

次の瞬間、音の三人は木々を折りながら後方に殴り飛ばされ、見えなくなった。

「おいおい……マジかよ……」

シカマルの弦きが漏れるが、此処にいる全員も同じ気分だった。

ナルトはただそこに立っているだけで、音の三人は背後に吹っ飛んだのだ。

ハナビだけは、『やっぱり兄様はすごい』と思っていたが。

ナルトはただ、移動して三人を殴って同じ位置に戻ってきただけだ。

「俺は誰がやったかと聞いているんだ」

有無を言わさないナルトの言葉に、全員が一点を見つめる。大蛇丸を。

「ほう。貴様か。キモチワルイ顔してよくもやってくれたな……」

大蛇丸は、ナルトから放たれる殺気に冷や汗を流す。だが、それ以上にナルトの目が気になった。

「……その目。輪廻眼ね。まさかその目の持ち主があの人以外にいようとはね」

その場の全員が首を傾げる。

「ちよつと、輪廻眼ってなに!？」

「ば、バカ! いの!」

声をあげた山中いのをシカマルが止める。
巻き込まれたら確実に死ぬのだ。

「輪廻眼、この世で最高峰の眼よ……写輪眼以上に」

大蛇丸はニヤリと笑って言う。

その目に気付いた人間はいない。なぜなら、輪廻眼を知っている人間はいないからである。ナルトの目を見て、何かの血継限界程度には思つかもされないが、輪廻眼だとは誰も思わない。否、知らない。

「ほしいわ……その眼。その力」

「その言葉は圧倒的強者が、弱者に言う言葉だ。弱者が強者に言う言葉じゃない」

「フフ……そうね!」

大蛇丸が高速で印を組み始める。最初の部分で何をするかわかったナルトは、それ以上の速度で印を組む。組み上がったのはほぼ同時だった。

《風遁・大突破》 《風神・大突破》

大蛇丸の口から、チャクラで増幅された、人くらいなら簡単に吹き飛ばせるような暴風が巻き起こる。

ナルトの術は、背後から木々を押し倒しながら、圧縮された風が吹きずさむ。

片や広範囲の風。片や、狭範囲の圧縮された風。

大蛇丸の暴風を圧縮されたナルトの風が、プラズマを発生させながら打ち破る。拮抗などなく、一瞬で。

轟音や砂煙の後には、数百メートルに及ぶえぐれた地面と、倒された木々だけだった。

「……逃げたか」

暴風の中でも、ナルトには見えていた。

当たる瞬間、大蛇丸の口から蛇が飛び出し、地面の中に消えて行ったのを。

ナルトは背後のハナビの前に片膝をつき、口を開く。

「大丈夫だったか？」

「はい、兄様の勇姿を眼に焼きつけました」

そんな返事にくすりと笑い。人差し指を額に付きつける。

《神術・チャクラ転讓》

ハナビの身体が淡く光り輝き、ナルトのチャクラがハナビに移動する。

ただ、移動率が酷く悪い。10のチャクラを使って、1のチャクラを渡すような術である。膨大なチャクラを持つ人柱力だからこそ出来る術だ。

「あふ……なんか落ち着きます」

「まあ、そうだな。でも、ハナビのチャクラ許容量限界まで入れたから、暴発させるなよ？ ハナビはまだまだチャクラが少ないからな、無理やり最大チャクラをあげる術でもある」

普段、10のチャクラを精製し、それが身体を流れている。ただ、これだと身体の成長でしかチャクラの限界は上がらない。だから、無理やりチャクラを12流し、道を太くする。太くすると、身体がそれだけ大量のチャクラを必要とし、そのために精製量が増える。ただ、一気に20とか入れると決壊するし、15とか入れると慣れるまで入院生活を余儀なくされる。アカデミーで空狐がやってる一番馴染むのが早い量が12なのだ。

「むー、これでもチャクラ量はかなり多いんですよ？ 今回は無理しすぎました！」

頬を膨らませるハナビを撫で、笑いかける。

確かに七歳にしては多い。だが、八卦はチャクラを直接相手の内部に送りこみ、破壊する術だ。当然、チャクラの使用量は多い。大蛇と言うこともあり、ハナビは普段よりも多くのチャクラを流し込

んだからすぐ疲れてしまったのだ。

「よくやったなハナビ」

「えへへ」

和やかなムードで、ハナビは立ち上がり、身体を動かし始める。

「前より調子いいです!」

「うちのアカデミーでやってるチャクラ量増やす技術だからな」

「むー、わたしもあの時兄様について行って、そっちのアカデミーに通いたかったです。血継限界だからわたしも大丈夫なはずですし」

「そうだな……才能はあるのに全然使い方が成ってない。木の葉の試験官のアンコって奴くらいならうちのアカデミー生でも倒せるぞ?」

「一応特別上忍の人ですけどね」

「つまり、錬度が低いってことだろ」

九陽の里は下忍でも稀にAランク任務をこなす人間も居るほどだ。元々血継限界で才能もあり、更に空狐のスパルタ授業によって、才能を限界まで引き延ばされるのだ。多分下忍になるまでに数百回は死の境をさまよっている。

「あの……」

背後からサクラが声を掛けてきたので、ナルトとハナビは振り向く。

邪魔をされたハナビはかなり機嫌が悪くなった。

「サスケ君を治してもらえませんか……?」

「なんで?」

「なんでって……」

ナルトの素っ気ない返事にサクラは俯いた。

「ソイツ。敵だつて俺達の事言つてたじゃん？　つまり俺達から見ても敵つしょ？」

「じゃあ……なんでハナビは？」

「大切だから」

「え？」

ナルトのノンタイムでの返事にキョトンとする。

「大切なら治すだろ？　俺は今までに数千人は殺してるけど、心が痛んだこと何てない。だが、里の者が死んだら一人だつて痛む。確実に復讐しに行く」

サクラは殺すことに抵抗がないナルトに、驚愕に眼を見開き、震える。

「今は関係ないでしょ……？」

「大ありだ。大切な人が死んだら苦しいが、敵が死んだってなんら思わない。なあ、どう思うよ？　その忍び達？」

固まっていた他の忍にニヤリと笑いかける。

「フン……当然だな。殺すのを躊躇すれば、逆に殺される。それが嫌なら忍者などやめてしまえばいい」

ネジがぶっきらぼうに賛成する。

「どう思う？ ハナビ姉」

いきなり問いかけられたヒナタは、慌て、何を言ってるかわからない。

「……いや、でも……あの……やっぱり、誰も死なない方がいいかな……って？」

「そうか。お前忍やめた方がいい」
「！」

ナルトは笑顔で言い切った。

「テメエー！ いい加減にしろよ！？ 言いすぎだろ！？」

「えーっと、犬塚キバだっけ？ 忍ってたか、医療忍者になればいいってことだ。白眼で身体の中見えるわけだし、医療忍者なら人を助けられるだろ？ 多分性格的にその方が合ってる。まあ、たいして話してないから性格なんて知らないけど」

「姉様医療忍者になりましたよ！」

ハナビが姉の進路を勝手に進言した。ハナビにとってナルトは絶対なのだ。姉を殺せと言えば殺すくらいに依存してしまっている。

「まあ、ハナビ姉の進路はいいとして、サスケの意識の流れが変わったぞ。そろそろ起きる」

「え？」

全員が視線をサスケに移すと、サスケは額に手を置きながらゆっくりと身体を起こす。

「っ……何があつたんだ？」

ゆっくりと眼を開き、その場の惨状に眼を見開く。

「何があつた……お前、何故此処にいる」

ナルトに気付कि、憎々しげに、呟く。

ナルトはハナビを膝の上に乗せて、頭を撫でていた。

「ん、何つてハナビの治療？」

ケラケラと笑いながら言つてやると、サスケはナルトを睨みつける。

「サスケ君……痣が……」

サスケの身体に呪印が広がつてゆく。此処にいる人間は、皆怪我をしている。それは、大蛇丸の大突破で飛んできた木や石に切り刻まれたのだが、サスケはナルトがやつたと思ひこんでいるのだ。怒りに反応し、呪印が身体をむしばむ。

「すごいチャクラの量……」

ハナビが呟く。

「殺してやる……」

サスケの姿が消え、ナルトが居た眼前に現れた。だが、ナルトはハナビを抱えて既に、木の葉の忍がいる辺りに移動していた。

「おー、てか。ハナビいること考えるよ？ てかそんな他人からも

らった力振り回して楽しいか？」

「関係ない……オレは力をつける為なら悪魔にだって魂を売り渡す」

《火遁・鳳仙火》

口から大量の火の塊が放たれる。

「って、マジかよ！？ オレ達が居るんだぜ？」

シカマルが声をあげるが、それは近くにいた奴らも同じだ。

ナルトは飛んできた火の玉を全て掴み取る。

そして火の玉の中に入っていた、手裏剣を手の上に乗せ、弄ぶ。

「んー、はつきり言ってお前と俺の相性最悪だけど？」

更に、火をこちらに放ってくるサスケ。ナルトが腕を前に出すと、その火は全て消え去る。

『え？』

「ほら。火は俺の味方」

ぶわっつと、ナルトの身体を青い炎が包み込む。

その高温に、周りの木々が燃え上がり、地面一帯が黒くなってゆく。

「え？ 全然あつくない」

「面白いですね、兄様。熱くない炎」

「スゲーなコレ。傷が治ってくぞぞ？」

木の葉の忍者がそう言うが、サスケの身体からは汗が吹き出し、

熱を吸い込んだせいか苦しそうにせき込む。

「って、サスケ君！？　なんでそんな苦しそうなの！？」

サクラはわけがわからなかった。サクラは青い炎に包まれているのに、熱くない。むしろ身体の傷も消えるしチャクラも回復し、心地よいのだ。

「ッ……！　それは……はあはあ……こっちのセリフ……な、んでお前ら平気なんだ……？」

全員が意味がわからなくて首を傾げる。

浄化の蒼炎。ただし、これは対象者にとっての浄化だ。癒しを与える半面、それ以外は燃やしつくして浄化する。人柱力としての能力で、意識するだけで出せる術だ。チャクラ消費がなく、使い勝手がいい。

人柱力にはそれぞれ、尾獣本来が使えた能力がある。

我愛羅は砂を自由に扱える。ユギトは怨霊、白は水、リトは溶岩、ヤヒメは空気、君麻呂は毒、フウは虫、多由也は力、ナルトは炎。チャクラの消費がなく、自由自在に扱える。

「炎は俺の味方。意味わかったか？　その呪印は精神を壊す。いますぐそれをおさめる。出来ないなら俺が気絶させてでもおさめる」

「チッ」

倒れそうな身体で、サスケはクナイを投擲するが、途中で燃え尽きてしまう。

「早くやれ」

それから、しばらくしてサスケは気絶した。
結局抑えることは出来ず、気絶したのだ。

「はあ……ったく。しゃーない。呪印の封印だけしてやるっ」
「え？」

サクラの声を無視し、ナルトは気絶したサスケの印に指を置く。

《神術・侵呪》

呪印の色が青く変色してゆく。

そこで、ナルトは立ち上がり、サクラを見つめる。

「今のは呪印を侵食し、じわじわと治してゆく術だ。二ヶ月後には完全に呪印は中和され消える」

その言葉に、サクラはほっとした。

「ただし！ 二か月以内に魂を売り渡してでも力がほしい、呪印を使おうと自分で思えば逆に呪印に術が侵食される。その場合、呪印が一気に成長し、呪印に身体が乗っ取られる」

続いた言葉にサクラは顔を青ざめさせる。

「そんな……」
「だから、自分で呪印に飲み込まれてもいって思わせなきゃ大丈夫だったの」

（ま、あの様子じゃ呑み込まれるけどな。そうなった場合、原作と違って確実に呪印は引かない。まあそうなたらカカシの封印術で

一時しのぎしてもらおうか)

本当は解呪しようと思っていた。しかし、先ほど呪印が広がったせいで、身体に根付いてしまったのだ。あれを取り除くには、チャクラの道全てを強引に引きはがさなければいけない。神経をすべて身体から取り除くようなもので、立ち上がることも出来なくなってしまうだろう。そこで、ナルトは抗ウィルス薬のような術をかけたのだ。

「おにいちゃん、そろそろキャンプの準備出来たから行こう」

『!?!』

「ああ」

フウがナルトに声を掛けると、ナルト以外は驚いた。

九陽の5人がいつの間にかナルトの傍にいたことである。

「蒼炎使ったからおにいちゃん反則負け！」

「いやいや、力引き出しではないんだろ？ 固有能力だし。てか、お前ら誰も能力使っていないのか？」

ナルトが見回すと、全員が視線をずらす。

「ってか、フウなんて羽出てるし！ 誤魔かせねーだろ!？」

「この羽はフウ標準装備なのっ！」

確かにフウが羽を着けていないのを見たことがない。だが、どう考えても人間としての能力じゃないだろう。

「まあいいや。キャンプいくぞー」

木の葉の忍を無視し、九陽達は歩き出す。

「ねえ、兄様。皆いつきたの？」

「最初からいただろ？ 俺が大蛇丸倒した時からいたぞ？ 俺の周りに」

『！？』

ハナビは驚いた後に、くやしそうにした。

ハナビには心配すら感じ取れなかったのだ。

それは全員がそうだったようで、くやしそうにしていたり、驚いていた。

「って、何でお前までついて来てんだよ！？ てか木の葉全員ついてきてるじゃねーか！」

九陽に全員がついてきていた。

「サスケ君倒れてるから危ないし……？」

「兄様にずつついていきます」

「あの……ハナビが心配で……」

「飯用意するのめんどくせー」

「ご飯いっぱい食べたいー！」

「サスケ君が心配」

「フンっ……」

「ボクは修行を」

木の葉の忍が口々に言う。

九陽達は顔を見合わせ、苦笑する。

「まあいいや」

それから、全員でキャンプをしようと思っていた場所に移動した。

012 中忍二次試験(四)(前書き)

中忍試験終了まではよくあるSSですわねー。
組合せとかはぐっちやぐちやですが。

キャンプ。

「って、何もないじゃない」

「はあ？ 俺達は忍だろ？ そんなの術使えば簡単に出来るだろうが」

サクラの言葉に、ナルトは肩を落としながらつぶやく。

「んじゃー、我愛羅は家、フウは綱引き上げて、君麻呂は食べられる草や果物、多由也は動物とってきて、ヤヒメは解体、俺調理。行け！」

「……………御意……………」

バッと五人が消え去る。

まず、周辺の岩が砕け散り、砂で出来た家が組み上がる。

フウが事前に仕掛けておいた網を引き上げると、数百匹の川魚が上げられる。しかけたときに、川に電気を流したのだ。

多由也がすぐに三匹の熊を狩って来て、ヤヒメが空気の刃で細かく解体。

君麻呂の毒の能力で、毒がない草や果物を大量に持ってきてくれ

た。

最後にナルトが、一定温度で炎を作りだし、焼いた。

木を半分にし、内側をくりぬいて、中に出来た物を放り投げて終了了。

「……豪快ね」

「てか、30分で此処まで出来るのかよ……」

「肉！ 魚！ 果物！」

木の葉の忍は全く手伝わなかった。

「とりあえず終わったから喰っていいぞ？ まあこれだけあれば足りるだろ？ 秋道チヨウジが食べすぎなければ」

ナルトが合図すると、皆お腹がすいていたのか、すぐに食べ始める。

「あ……おいしい」

「ホントね。味がないかと思ったわ」

サクラといのの期待なんて全くしてなかったけどおいしい発言に、ナルトはため息をつく。

「ちゃんと調味料持って来てんだから味あるに決まってるだろ？」

そう言って、ナルトは巻物から口寄せで調味料一式を取り出す。

「男なのにそんなの持ってるんだ？」

「男だろつと女だろつと忍なら持っておけ。最悪塩と水と砂糖があれば生きられるだろ？ 何があるかわからないんだからな。ちなみ

に、九陽達は全員持つてるぞ？」

ナルトの言葉に、コクリと九陽が頷く。

「あのっ！ ナルトさん！」

各々で固まってる食事中、リーが大きな声でナルトに声をかけてきた。

あまりの大声に全員がリーを見つめる。

「ん？」

「修業をつけてくれませんか！」

木の葉全員がズッコケた。他里の忍びに修行つけてくれなんて言う奴は前代未聞だ。そもそも、里の忍術は外に持ち出すこと自体が禁止されている。簡単に教えるなんて出来ないのだ。

ただ

「いいぞ」

『いいの！？』

九陽の里ではそんなことがない。

覚えたのは自分なんだから、覚えたものは自由に扱っていいのだ。そもそも九陽の里では他の里全て＋自里の術を教えており、里だけのものか思っていないのだ。術がわかれば里の対策になるとかどうでもいい。ただ、それより強ければ勝てるって原理で成り立っているのだ。

「何か勘違いしているようだが、俺達が里に入ってくる忍びを撃退してるのは情報を守るためじゃないぞ？」

果物を食べながら語るナルトの言葉を、全員が真剣に聞く。

「里の人間に危害を加える可能性があるから撃退しているだけだ。情報なんて勝手に持って行けばいい。セーちゃん　水影に言えば情報なんてなんでも言うぞアイツなら」

実際仙狐は問われれば答えるだろう。里抜けは他里だと抜け人として殺されるが、九陽の里では自由である。入るのも出るのも自由。

「そんなんでいいの？」

「俺達の里は血継限界持ちだけ。里の術が盗まれようが、血継限界の術は盗めないだろ？　皆が知らないような血継限界だっているわけだし、対策らしい対策は出来ないだろうよ。それに、里の迎撃率100パーセントがソレを証明している」

サクラの質問に、ナルトは適当に答える。

「んー、納得いかなそうであれだが。例えばヤヒメやフウの晶遁受けたって言ったよな？　ネジ、テンテン、リー」

三人が頷くのを確認し、続ける。

「もし、今もう一度受けたとして対策を立てれば勝てるか？　動きが見えず。術の範囲はでかすぎて回避不可、一回つかまったら水晶を破壊されて死ぬ。対策出来るか？」

三人はしばらく考えるが、テンテンだけが首を横に振る。

「つまりそう言うことだ。バレても対策のしようがない。そしたら

終了」

「でも、弱点だって存在するはずです」

リーの言葉に頷く。

「もちろんある。弱点はチャクラを纏えば無効に出来る」

「それなら、あるとき私がやったわよ？」

テンテンが反論し、疑問をぶつける。ナルトは苦笑しながら言葉を発する。

「付け加えるなら“膨大”なチャクラだ」

全員が首を傾げる。

なぜなら、あの時三人が全員全開でチャクラを放出したのだから、まったく破れなかった。

「君麻呂。やってやれ。混化許可。形成はするな」

コクリとうなずき、君麻呂は消え去った。

尾獣化はしていいが、尻尾として形成するな。と言うことだ。

全員が何処に行ったかわからないようなので、ナルトは指をさす。

100メートル程離れたところに、君麻呂が立っていた。

「まあ、晶遁を破るならあれくらいないと破れないかかってところだ」

次の瞬間、君麻呂の身体から膨大なチャクラがあふれ出る。

尻尾の形には形成されないが、チャクラがそのまま物質化され、

周りの木々がへし折れてゆく。

周りの空気が悲鳴をあげ、ビリビリと振動し、息をするのもつらい状況だ。

尻尾の形成とは、一か所に溢れたチャクラを固める為でもある。形成しないと、チャクラはそのまま溢れ、外部に被害をもたらす。尾獣ならば図体が大きく、溢れるチャクラは分散されるのだが、人柱力が使うと範囲が狭い分周りに被害が出る。先ほどの大蛇丸とナルトの風みたいなものだ。

そんな中、九陽達は普通に飯を食べていた。

木の葉の忍は汗を垂らしながら膝をつき、顔面蒼白である。

「君麻呂もついいぞー」

「そうかい？」

尾獣化をとき、すぐに戻ってくる。

「とまあ、こんな感じのチャクラ出せば水晶がはじけ飛ぶ」

九陽達は涼しい顔をしているが、木の葉達にとって冗談ではなかった。
「た。」

殺気でもないのに純粋なチャクラで殺されそうになったのだ。

「はあ……はあ……どうやって、あんな、の……出せばいいのよ……」

「……」
「どうやるも何も、身体の中のチャクラを抑えなければああなる」「アンタ達化け物？」

九陽は化け物と言う言葉に敏感だ。食事をするときは暴れるなど空狐に言われているから大丈夫だが。もし、普段言われたら殺しているだろう。

九陽達は遠い目をし、口をそろえた。

『慣れたよ』

化け物と言う言葉には慣れてしている。九陽の里に来る前には毎日のように言われ、九陽の里では迎撃した忍に言われる。

化け物と呼ばないのは里人だけだ。それどころか、里人は尊敬や憧れの眼で九陽達を見る。化け物にとってあれ程すごしやすい里はないだろう。

「まあ、いいや。体術なら全員が、武器の扱いも全員が、術はフウ以外、虫はフウ、医療術は全員が教えられるかな。まあ、特化ならば力の扱いが多由也。炎の扱いなら俺。治療なら君麻呂、術を当てたりそう言うのはヤヒメが専門かな。我愛羅は教えてくれないと思うし。てか、サスケ。起きてるだろお前？」

全員の視線がサスケに移る。

すぐにパチッとサスケが眼を開ける。

「……あんだだけデカイチャクラ感じたら寝てても起きる」

「サスケ君！」

いのとサクラが抱きつくが、うっとうしそうにどけ、ナルトを睨みつける。

「おい。オレにも何か教える」

そんなサスケの変化に、全員が眼を見開く。

命令形ではあるが、あのプライドの高いサスケが頼んだのだ。

サスケはプライドよりも強くなることを選んだ。そして、九陽の実力を見る為でもある。いずれ越すことを心に誓いながら。

「へー、お前は火遁が得意だったな？」

「ああ」

「火遁・豪火球の術の上位版教えてやろう。写輪眼使ってみろ」

サスケの眼に模様が浮かんだのを確認し、印を組む。

《火遁・豪龍火の術》

ナルトの口から、巨大な炎の竜が空中に向けて飛翔する。やがて、小さくなって消えてしまった。

サスケは驚いていたようだが、やがて印を組み出す。

《火遁・豪龍火の術！》

サスケの口から小さな蛇が上空に……。

『プッ』

「わ、笑うな！」

どこからともなく聞こえてきた笑い声にサスケが怒鳴る。

「まあ、あとはサスケが使えるそうなのは……千鳥があつたな」

「千鳥？」

説明するのも面倒と思い、ナルトは印をくみ上げる。

《千鳥》

ナルトの手に、高密度の電気が圧縮され、『チツ、チツ、チツ…』と音になる。

「まああれだ。一応超高等忍術だが……こんなただの遊びだ。音が鳥の鳴き声みたいだからとかで千鳥ってしたんだろっ？」

ポイツとナルトはいつでもよさげに千鳥を投げ捨てた。

普通は投げられないのだが、ナルトの圧縮率が半端なく、そして精密だからこそ出来るのだ。

そして、ソレは数十メートル先の地面に落ち、20メートル程のクレーターが出来上がる。

「まああれはイラン。お遊びみたいな術だし。覚えるならこっち覚えとけ」

更に印を組む。

《千鳥鋭槍》

ナルトの手に、千鳥を槍の形に変えた物が現れる。

ヒュンと、投擲し、遠くの木に突き刺さると、突き刺さった場所から数万本の長い槍が、突き刺さった点を中心に現れる。傍の木に大量に突き刺さり、穴だらけにした。

「覚える」

「無理だ」

ナルトの命令に、即座に反応する。

「いや……覚えて見せる。まずは火遁・豪龍火の術だな。覚えたらアンタを倒してやる」

「俺だって使えるんだから倒せないだろ……」

「フンっ……」

意外に可愛いな。と、ナルトは思っていた。

「と、修行するなら明日からな。さて、俺は寝る。秋道チョウジ残ったの全部喰っとけよ」

「もう無理だよ」

「熊一匹でいっぱいになんよ」

熊一匹……ただ、この熊が5メートル程あったのだ。それを食べたチョウジはすごいだろう。

それだけ言い残し、ナルトは消え去った。

「サスケ君……いつまでも印の練習してないでこっちで一緒に食べない？」

「絶対アイツを越してやる！」

サスケの闘争心に火がついたらしい。

それから数日、全員は修行に明け暮れていた。

九陽達が影分身で教え、木の葉を修行って感じだったが。

ネジだけは日向宗家と一緒に遊んでいられないと言って、テンテンを連れて巻物を探しに行った。

そこで、サクラが全員がしていた現実逃避をぶち壊した。

「ねえ……私達ずっと此処にいるけど、いま四日目なだけど？」

全員が忘れていたが、この試験の期間は五日。

だが、やっていたのは普通にサバイバル訓練みたいな感じだった。的確なアドバイスや、新術などで、皆楽しくて忘れていたのだ。

「うーん、そろそろ塔行くか？」

「……巻物は？」

ナルトはそこで首を傾げる。

「え？ お前ら巻物揃えてないのに修行してたの？」

全員がコクリとうなずく。

「そう言えば、テンテンとネジは巻物を獲りに行ってたんじゃないの？」

皆の視線が二人に移るが、渋い表情だ。

「敵が見つからなかった」

「そりゃそうですよー、だってもう残ってる人いませんしー。気配でわかります」

フウの言葉に、班ごとに自然と集まってゆく。

「つまり オレ達5チームの中から3チームがこの試験超えられ

るわけだな、九陽は集まってるようだし」

サスケがニヤリと笑い、構える。

「え？ え？」

サクラは意味がわからなさそうだが、他は構える。

「なんで！？ 今日まで仲良くやってきたのに！」

「けっ！ それはソレ。コレはコレって奴だろおーよ！」

サクラの質問にキバが構える。

それを、九陽＋ハナビはじっと見ていた。

「そう言えば兄様。いつのまに全員いなくなっただんですか？」

「ん？ 開始3時間くらいで残ったのは此処にいる6班と、音隠れ1班、砂隠れ1班だけだったぞ？ ちなみに気配の動き方みただけ、音隠れと砂隠れは既にゴールしてるな。」

『ちよつと待て』

戦っていた奴らが、全員ナルトを見つめる。

「いまゴールしたの二班なのよね？」

「ああ」

「他はどうなったのよ！？」

「巻物が無くなっても奪えばいいんだから、いないってことは戦闘不能で失格だろ？」

「違うわよ！ そうじゃなくて、他の巻物は紛失したって言うの！？」

ナルトは首を傾げた。

「お前ら巻物ほしいの?」

「当たり前でしょ!?!? じゃなかったらなんで此処で戦ってるのよ!」

「あー、そう言うことね。んー、本当は塔で決着付けたかったけど此処でいいか」

「!?!?」

ナルトの決着という言葉に、皆が身構えた。
そしてナルトは自分の羽織を、広げ

「勝負! 俺は9本!」

バサバサと中から九本の巻物を地面に落とした。

「は?」

「フウは5本」

「……ヤヒメ6本」

「ウチも六本」

四人の視線が我愛羅と君麻呂に移る。

「ない……」

「あはは……」

「大方二人で喧嘩してたんだろ?」

「「はい……」」

ナルトはため息をついた。

修行中でも休憩時間でも二人は喧嘩をする。それが試験中も加わっただけである。

「さすが兄様！ 一位です！」

ハナビはキラキラとした眼でナルトを見つめていた。そんなハナビの頭をナルトは撫でてやる。

「ハナビもいつか勝負が出来るといいな？」

「はい！ 兄様の次くらいになりたいです！」

「むーりー、ハナビちゃんじゃフウには勝てないもん！」

「今は勝てなくてもいつか勝ちます！」

「……フウも屑」

子供同士のじゃれあいを生温かい眼で見つめる九陽の男衆三人。

『おい』

なんかすごく低い声が木の葉達から聞こえ、喧嘩してた九陽＋ハナビがそちらを向く。

「この大量の巻物は？」

「この試験の巻物だろ？」

何を言ってるんだとばかりにナルトは言った。

「試験始まって三時間で他は全滅したって……」

「俺達がやっただけ」

「なんでそんなこと……？」

「誰が一番とってこれるか競争してたんだよな？」

九陽達がうなずく。

「まあいいじゃん。楽しんで手に入ったし？ 本当は成長しないかなって思ったけど、代わりに修行つけたらその分成長しただろ。ってわけで『影分身の術』」

ナルトは人数分の影分身を作り、抵抗できない力で全員を抱き上げる。

そして本人は巻物を全て持ち。

「一気に行くぞ？」

瞬身で消え去った。

すぐに全員が塔に付き、ナルトに降ろされた。

「えーっと、じゃあ。ネジ。足りない巻物は？ プライドが許さないかもしれないが此処で落ちるよりマシだろ？」

「……地」

ナルトは地の巻物を投げて渡す。

パシンと受け取り、自分たちのゴールの部屋へ入ってゆく。

「シカマルんところは？」

「天だな」

パシッと受け取り、礼を言って入っていた。

「ハナビ姉のところは？」

「……天の書」

礼を言って、部屋に入っていく。最後までぺこぺことしていたのが性格を表している。

「ハナビは？」

「両方です……」

ナルトは苦笑して二本渡してやる。

「ありがとうございます兄様！」

ニコニコしながら部屋に入って行った。

それから我愛羅に二本渡し、ナルト達中にはいる。

「んじゃ開くぞ？」

「そうだねー、天地双書を開かば危道は正道に返すって書いてあるし」。最悪この壁ぶちやぶっちゃえばおっけー」

残った19本の巻物を、ナルトとフウとヤヒメは片っ端から開いて投げ捨ててゆく。

口寄せが書かれていることは、見なくてもわかっていたからだ。

「何をしているのじゃ……？」

「何って巻物開きまくってるわけよ。余ったらもったいないし」

既に口寄せで人が出てきているが、ナルト達はひたすらに開きまくっていた。

全てが開き終わり、前を見ると、なんだか大勢出てきていた。

「出過ぎー！」

「お主がそんな開くからじゃ！」

目の前には、火影や他の旧家当主＋カカシが現れていた。

「はあ……お主達が他の受験生を落とすすぎるから大変じゃった」
「ルール通りだろ？」

ナルトは火影にニヤリと笑う。

「うむ。お主ら三人に第二次試験合格を申し渡す！」

ナルト達は別にどうでもいいと言わんばかりに黙っていた。

「なんじゃ？ 嬉しくないのか？」
「いや。てかさ、此処にいる人ってお偉いさんばかりだよな？
こんな試験合格言い渡す為に来るような人じゃないでしょ？」

ナルトは懐から、ネックレスと、いつも持っていた一枚の写真を取り出す。

「これでしょ？」

ニヤリと笑ってやる。

「それはミナトの……やはりか……」

それを見せると、他の人たちもナルトの事をしげしげと見つめはじめ。

「ミナトの若いころにそっくりだ……」
「どーも。そりゃ子供だしね？」

ナルトが苦笑すると、他の人たちも口を緩める。

「先生……」

「違うでしょ？ あなたが父さんの教え子だって言うなら」

ナルトは変化の術で姿を変える。

「こつちでしょ？」

「「「「四代目!?!?!」」」」

「ちゃうって。これは俺が二十歳の姿」

「本当にそっくりじゃな」

ナルトは、此处にいたら話が長くなると思い、話を切る。

「後で火影の執務室にでも行きますよ。そこで話しましょう」
「うむ……おかえり。と、言っただけなの？」

フウとヤヒメがナルトが居なくなってしまうと思い、両腕にすがりつく。

それを見て、ナルトは苦笑しながら首を横に振る。

「俺の居場所は此処にはないでしょ？ 木の葉に人柱力を放し飼いにすることは、里人が許さない」

ナルトはくすりと笑い、火影に背を向ける。

「最後に一つだけいいかおう？ ナルト……お主は今幸せか？」

首だけ横を向き、口を開く。

「俺は父親も母親も、三代目火影も、木の葉も九尾だって恨んでないさ。幸せだよ」

それだけいい、ナルトとフウ、ヤヒメは消え去った。

その後、火影はパイプタバコを大きく吸い、吐き出す。

「ふう……飛雷神の術　ミナトが考えた術か……とことんミナトにそっくりじゃのう」

「いえ、先生の飛雷神の術を見たことありますが、先生より早いかと……」

カカシの訂正を聞き、火影はため息をつく。

「ワシがあの子を見つけられなかったのがいけないのかのう……」

「あのう……それより、これから三次試験の予選がそのままあるんですけど?」

「忘れておった! 何としても探し出すのじゃ!」

「」「」「御意」「」「」

それから一時間程でラーメンを食べていた九陽達はみつきり、会場に到着した。

最後まで食べると聞かず、ラーメンを持ちながらである。

013 中忍三次試験予選(巻) (前書き)

中忍試験中はオリジナル要素あまり入れられなくてつまらないなあ。
最低限原作通りにしないと布石立てられないし……。

013 中忍三次試験予選(壱)

三次試験・予選

「なんか既に始まつてるな……」

「まだ一試合しか終わってませんよ兄様」

(にしても、俺達がカブトのチーム倒しちゃったから試合がぐちゃぐちゃだ)

「試験前に話してたカブトって奴いたろ？ アレ誰倒した？」

見回すと、フウが手をあげていた。

「どうだった？」

「んー、弱いよ？ 迷子になってたところで道聞いたんだけど、いきなり襲いかかってきたから、どしゃーってやって、パキン」

どしゃーってのは水晶出して、パキンってのは固めたのだ。

「殺したってことか？」

「んーん。気絶させて巻物奪って、水晶に閉じ込めてから会場の外に投げ捨てておいた」

(そりゃ失格だ。ヤヒメにあたらなくてよかったな。ヤヒメだったら確実に殺してた)

「てか、一試合目見れなかったが、誰が戦ったんだ？」

「うちはサスケとドス・キヌタつて人。兄様が教えた炎の竜で焼き殺してた。んで、うちはサスケはカカシ先生に連れて行かれた」

「へー……てかあの音忍頑丈だな。俺が軽く殴っただけど」

（（（軽くじゃねー！）））

ナルトは素直に感心していたが、傍にいた九陽以外は心の中で突っ込みを入れていた。

「次はザク・アブミ対油女シノ」

試験官に言われ、二人は前に出た。

ナルトは、音忍の名前は何故あんな変な名前ばかりなのかに思考を費やしていた。

「えー……ではこれから、第二回戦を始めます」

「……シノくん大丈夫かなあ……」

ナルト達から離れたところで、シノと同じ班のヒナタとキバが心配そうに話していた。

「あいつは強えーよ。オレもあいつとだけはやり合いたくねエよ……」

真剣な表情で、キバは呟いた。

「では、始めてください」

始まった瞬間、ザク・アブミが殴りにかかった。だが、それはシノの右腕で止められる。

《斬空波！》

ザク・アブミの掌から、音の衝撃波が出、シノに直撃した。

土煙が上がり、木の葉の忍の皆がゴクリと唾を飲みこむ。九陽が思ったのは、何故気配を読まないのかである。気絶したり死んでいる人間と、正常な人間では気配がまるで違うからである。ただ、気配を読むことは下忍程度には出来ない。人柱力として、気配に敏感な九陽はそれに気付けないでいる。

煙が晴れると、シノは立っていた。

ナルトからは見えないが……肌に黒いものがもぞもぞと……。

「おにーちゃん！ おにーちゃん見てください！ 虫がたくさん身体に入ってますあのひと！ いいですねー、フウもしてみたいです……」

「……フウが同じことしたらもう一緒に絶対寝ない。そもそも、お前は腹にでっかいカブトムシいるだろ？」

「むー、虫かわいいじゃないですか？ いつも楽しいことおしえてくれるしー」

「虫と話せるのはフウだけだ……」

頬を膨らませておこるフウを放置し、ナルトがハナビを見ると、顔を青ざめさせていた。

「虫……キモチワルイ」

左側には虫が大好きなフウ。右側には虫が大嫌いなハナビを置き。

ナルトはぼーっと試合に視線を移す。フウがハナビの言葉にキレそうだったが、ナルトが撫でてやると怒りを治めた。

「あ、フウとハナビに付き合ってたら試合終わってんじゃない……」

最終的に、音の衝撃波を出すための掌の風穴に虫を詰め、次の衝撃波を出した時、詰まっていた腕が千切れて終了だった。

「勝者！ 油女シノ！」

ザク・アブミは、担架に乗せられ運ばれていった。

それよりも、九陽達はすぐくつまらなそうにしてた。レベルが低すぎるのだ。九陽達がいつも戦っているのが、他の九陽や空狐、天狐、仙狐。後は尾獣なわけだから、中忍試験など赤子の遊びのように感じている。

「次、カンクロウ対我愛羅！」

「わー！ ゆめのきよーだい対決？ おもしろそー」

試験官の宣言を聞き、フウはきゃっきゃと楽しそうにしてるが……我愛羅殺しちまうんじゃないかとナルトは冷や汗ものだ。

二人が前に出、カンクロウは我愛羅を睨みつける。

「砂隠れを捨てたこと、後悔させてやるじゃんよ！」

「勘違いするな……オレが捨てたんじゃない。砂隠れがオレを捨てたんだ」

カンクロウは、横にトンと、包帯に巻かれた傀儡人形を降ろす。

包帯からは、黒い髪の様なものだけが出て、気持ち悪いことこの上

ない。

「それでは第三回戦、始めてください」

ドン、と音がして。

我愛羅の身体がカンクロウの後方数メートルに現れる。

次の瞬間、カンクロウの身体が真っ二つになり、崩れ落ちた。

「フン……」

会場は一気に静まった。

「しよ、勝者、我」

「待つじゃんよ」

傀儡が入っていたと思われた包帯の中から、カンクロウが飛び出し、チャクラの糸を我愛羅に巻きつけていた。

「あれは……傀儡の術？ でも、上手い手ね」

ハナビの横にいたサクラが呟いた。

「まあ、サクラの言うとおりだ。認識を狂わせてるって感じだな」

「てか、カカシだっけ？ なんでずっとそばにいるのさ？」

ナルトは後ろから口出しをしていたカカシに問う。

「仕方ないだろう？ ハナビがお前から離れないんだから。担当上忍が班ごとにつくんだからな。お前らはいないみたいだけど……」

ナルトに担当上忍などいない。そもそも、あの適当な水影がそんなことしようとは思わない。アカデミーの下忍すら担当上忍などいないのだ。フリーマンセルで組むことはあるにはあるのだが、基本ランダムで組み上がる。“担当”ではないのだ。

「で、ナルト。お前はアレどう思う?」

「どつって何がだ? あんな強度の低い糸。作るだけ無駄だ」

そう言って、ナルトは我愛羅に視線を移した。

「これで終わりじゃんよ」

カンクロウは我愛羅につながった糸を、思いっきり引っ張る。

「何が終わりだ?」

「な、何で切れないじゃん!??」

カンクロウのチャクラの糸を、我愛羅が掴んでいた。

しかも、自分のチャクラで相手のチャクラを包み込み、糸が引きちぎれないようにしている。

「フン……フウの糸に比べたらこんなの蜘蛛の糸レベルだ」

「おにーちゃん聞いた? フウの蜘蛛の巣はすごい蜘蛛の糸だって!」

我愛羅の言葉にフウは喜ぶ。

確かにフウの蜘蛛の糸は一本で数トンまで持ちあげられる。しかも、一本で使うことはなく、必ず大量に対象を覆い尽くすのだ。

我愛羅はグンとカンクロウを引っ張り、目の前にカンクロウを固

定する。

「兄様。何であんな不自然な形でとまっているのですか？」

「ああ……カカシ。あんたは見えるか？」

ナルトは、カカシって忍者がすごいのか調べてみたいと思ったので、聞いてみた。ニヤリと笑い、上忍であるアンタにあの仕掛けがわかるのか？ と。

「砂……か？」

「正解。眼に見えない程の砂の粒子で、敵を束縛してる。人間の身体くらい粒子10粒くらいで空中に固定出来る。てか、カカシ。止めなくていいのか？」

「え？」

「今空中に針くらいの大きさの砂が大量に舞ってる。あれを高速で打ち出してカンクロウを貫通させようとしてるぞ。十中八九死ぬ」

我愛羅が昔、ナルトに一番楽だと言っていた攻撃だ。砂をほぼ固めず打ち出すだけ。小さくとも、貫通させれば人間は死ぬ。尾獣とかだと全く通じないが、人間なら普通に殺せるのだ。

「うーん……止められないんだよねー」

「はあ……我愛羅。そんな小物どうでもいい。適当に殴って気絶させとけ」

我愛羅は一瞬ナルトを見つめ、目の前のカンクロウを殴りつけた。カンクロウは天井にぶつかり、そのまま落下した。

我愛羅がナルトの言うことを聞くのは、ナルトがあゝの里から救いだしてくれた命の恩人だと思っているからである。あとは圧倒的強

者である空狐、仙狐、天狐の言うことくらいしか聞かない。この三人にトラウマを植えつけられたことが関係しているのだが。

「サンキュー我愛羅」

「別にいい……」

カンクロウは大急ぎで担架に運ばれていった。

「うーん、アバラ骨全折くらいしてるなあれ。四肢もだめか」

「物騒な性格してるねー。なんだか先生見ているようで怖い」

「俺の父親もこんなだったのか……」

まあ、火影つてくらいだから敵には容赦ない人間じゃないとな。

「次、第四回戦。山中いの対春野サクラ」

「頑張ってくださいサクラさん」

「サスケ大好き女対決かー」

ハナビが応援し、ナルトが茶化す。フウやヤヒメはもう全然違う方向を向いている。二人のチャクラの量を見て、つまらない試合になるだろうと思っているからだ。

「頑張ってくるわ!」

サクラが出て行き、いのも前に出た。

「第四回戦、始めてください!」

……。

.....。

.....。

「うわー.....」

「いたそっ」

「つまんない.....」

痛そうな上に痛々しい戦いであった。

サスケの話から始まって、結局殴り合って両者ノックダウン。

「おにーちゃん。これって忍の戦いじゃないの？」

「いいか、フウ。モテない女は痛い上に痛々しいんだ。フウはあんな風になっちゃダメだぞ？」

ナルトはフウにきつちりと教育する。こんな教育のせいでフウは、子供っぽい上に、容赦しない性格になってしまったのだが。

「大丈夫。フウ結構モテるし？ 結構手紙とかもらってるけど、虫さんの方が好きだから全部紙食べる虫さんにあげてる」

「そっかー..... まあいいんじゃないか？」

「でも、おにいちゃんの方がもつと好き」

『えへへ』と言うフウの頭を優しく撫でてやる。フウは癒しキアラとして空狐が調教しただけあって、ナルトの癒しだ。

「兄様..... わたしも兄様が..... す、すき..... スキンケアは大丈夫ですか？」

ナルトは慌てて顔に手を置いた。
ニキビもないし、アトピーでもないが、びっくりしていた。
ナルトは何を言いたかったかわかったが、さすがにスキンケアの
ことを言われたらビビるだろう。

「ロリコン」

「殺すぞイチャパラ王」

「……何で知ってるんだ？」

「ハナビ情報」

カカシはナルトの返事に納得し、ため息をこぼした。

ナルトが聞いたたらどんなことだってハナビなら言いそうだと思う
たからだ。

「にしても……第五回戦のテマリ対テンテン。語ることもなく、終
わったぞ。二分は早すぎる」

「武器口寄せして攻撃してただけだからねー」

「でも勝ったテマリってやつ風使いか……。ヤヒメと戦わせてみた
ら面白いかもな。風使いと空気使い。テマリって奴が絶望したとこ
ろ見てみたいかも」

「お前ってロリコンでSなのか……」

「殺すぞカカシ」

くだらないことを話していると、次の試合が決まったらしい。ロ
ック・リー対多由也。

対戦相手は決まったのだが、テマリがニヤリと笑い、テンテンを
武器が散乱している床に投げつけた。そのまま落ちると、串刺しに
なるだろう。

リーが瞬身で先回りし、テンテンを受け取る。

「ナイスキャッチ」

「何をするんです！　それが死力を尽くして戦った相手にすることですか!?!」

「うるせーな……とつとつそのへっポコつれてけよ」

ロックリーの抗議に、適当に答えるテマリ。なんだかわからないが、ナルトは胸に熱い物が込み上げてきた。

「いいなー、アイツ。俺アイツ虐めたい」

「マジSだなお前……」

「兄様！　わたしを！」

S心が沸いてきたナルトに、呆れるカカシ、壊れるハナビ。

《木ノ葉旋風!》

リーがキレたのか、体術でテマリに回転しながら向かう。軸を心に置き、コマの様に脚を遠心力に回転する。だが

「何!?!」

「やっぱりアンタもニブいんだなあ……見かけどおり……」

リーの回し蹴りを、テマリは等身大の大きなセンスで受け止める。

「やめなつてリー」

「多由也さん……」

いつの間にか近寄っていた多由也が、リーを止める。そして、ゴミ屑を見るような視線をテマリに向ける。

「とりあえずテマリだっけ？ アンタの試合は終わったんだから邪魔」

「アンタは……九陽の里の……」

弟を取られてムカツクのか、テマリは多由也を睨みつける。

気にした様子もなく、多由也はリーの蹴りを受け止めている巨大なセンスに手を近づけ。

「自分で退場出来ないならウチがさせてあげる」

デコピンをした。

そのデコピンで、テマリははじき飛ばされ、二階の観客席の壁まで吹き飛び、背中をぶつけて崩れ落ちた。

「リー。変わりにデコピンしておいたから、次はウチとの試合ですよ？ あんなの気にしない方がいいよ」

軽快に笑いながら多由也は言ったが、会場は静まりかえっていた。デコピンで人間をあそこまで弾き飛ばしたのだ。しかも、手に持っていた武器にデコピンである。どれだけ腕力があるのだと。

「兄様、多由也さん力持ちですね……」

「あーそうだな。力だけなら俺より強いぞ」

「に、兄様よりもですか!？」

「お前の中で俺がどれだけ強大なのか知りたいわ（まあ、空狐化したら勝てるが……）」

多由也の人柱力としての能力は力である。とにかく力が強いのである。笛を使うと言う戦法ゆえに、力がないように思われるが、近

づいたら近づいたでかなり強い。

「会場の忍具を除外し終えたので、第六回戦、開始してください」
「よろしくお願いします！」

開始と同時に、リーは勢いよく頭を下げた。

「よろしく」

多由也も挨拶をし、笛を吹き始める。

キレイな音色が流れる中、リーは構える。

《木ノ葉旋風！》

一直線に多由也に蹴りを放つが、床から飛び出した石に阻まれる。更に、その石から無数に槍が出現し、リーはバック転をして背後に逃げるが、そこに石が出現しづつかる。そしてそこからも槍が……。

「兄様……アレなんですか？ 全く印を組んでませんが？」

「アレは術ってか特性かな。確かに術として笛もあるんだけど、あれはコントロール」

「コントロール？」

「周囲のあらゆるものを操る。ただ、弱点としては笛を吹いてないダメ。それが途切れたらコントロール不可。遠距離系の術を使えば簡単に対処できるんだが」

「リーには忍術が使えない……か？」

またしてもカカシに横やりを入れられ、ナルトは眉をひそめる。

「カカシ。俺に恨みでもあるのか？」

「まさか。先生の息子だよ？ 第二次試験で死体の片づけやらされたからって怒ってない」

更に、派手に森を破壊した修復作業もあるのだ。上忍達は寝ずの修復に追われるだろう。

「それにしても……他の九陽の里の忍びより弱い？」

「はつきり言うなあ」

ナルトは苦笑しながら多由也の試合を見つめる。

先ほどと同じような事がずっと続いている。ただ、リーがずっと激しい動きをしつづけて、疲れているだろう。

「多由也は強いよ。例えばあらゆる物を動かせるわけだから、最初からリーを操って棄権させちゃってもいいし、周囲の酸素を消し去ったりしてもいい。暗殺なら心臓を止めたっていい。そのまま殴っただけでも殺せるだろう」

「……何でそれをしないんだ？」

「多由也は優しいんだ。なんだかんだ言って、九陽が一番優しいと思う。知らないと思うが、普段は温厚な白だつて敵に対しては残虐なのに。多由也はほとんど殺さない。二次でも眠らせただけだろ？ 二次試験で、リーが必死なの見たから……きつとあれに抜け道作つてあると思う。成長できるように」

眼前では、既にリーは動きすぎて虫の息。

ハナビでも白眼を使わないと見えないであろう速度で、岩が出たり戻ったりを繰り返す。一度動いてしまうと、止まることが出来ない連続技。止まった瞬間串刺しになる。しかも、いきなり出てくるから変な形で避けることになるのだ。余計に体力を削られる。まるで、修行のような術だ。

「ハナビだったらどうやって対処する？」
「んー、影分身で色々な方向から試して？」

多分ハナビは何も考えないで言ったのだろうが、ナルトは苦笑する。

「正解ではあるな。理由は？」

「わからないですけど、兄様が敵を知るのも大事だって言ってたから試そうかなと」

「んーそうだなあ……あ」

ポコンと、リーが多由也の顔面を殴っていた。本当に弱くダメージはないが、限界だったのだろう。

「お見事。偶然じゃなかったらよかったんだけどね。人間の思考は常に一つしか考えられない。だから、ウチが操ってたのはずっと一つだった。移動する方向にずっと先回りする形でね。だから、二箇所、一発をあらぬ方向へ、もう一発をウチにやれば当たったわけ。相手の癖、思考、特徴、性格。それを見つければ相手の弱点だっておのずとわかるはずだから。体術バカでもいいけど、ちゃんと考えてバカしなさい」

そう言って、多由也はツンっとリーの額を突っついた。別に力を入れず、本当に軽く。

だが、限界だったリーは後ろに倒れた。

至る所から血が出てるし、身体中ポロポロだ。

「勝者！ 多由也！」

「うおおおおお！！ 青春だリー！！ 強者の戦いは熱いなあー

「――！」

鬱陶しいリーの担当上忍であるガイの叫びが会場に響き渡る。全員が『またか……』と言う表情をして、無視することにした。

ヒュンと、ステージの多由也が消え、ナルトの隣に現れた。

「お前は優しいな……全く。八門開けさせないために、攻略法が見つからなければ何したってポロポロになる方法選んで」

「あの子、多分二次試験で八門開けてるの。もう一度開けたらチャクラの通路壊れちゃうかもしれない。だったら、しばらく休めるよ。うな傷がいいでしょう？」

フツと笑い、多由也は消え去っていった。

多由也はナルトが何か聞いたそうだから此処によったただけであったのだ。

「お前の言うとおりだったな……」

「言うなよカカシ？ 多由也は恥ずかしがり屋だ」

くすりと笑みを浮かべ、倒れたリーが運ばれてゆくのを見守る。

そこでナルトはあることに気付いた。どうしようもなくしょうもないことであるが。

「てか、この試験って負けたら皆運ばれるのな……」

「まあ、だからこそ“負け”なんだろう？」

次の試合は、キン・ツチVS奈良シカマルになった。

試合内容は影真似で背後の壁に頭をぶつけたって感じた。

意味がわからないが、そんな感じである。ってことで、シカマル

の勝ち。

そのころ九曜達は寝ていた。つまらなすぎたのだ。

ステージ

「第八試合、犬塚キバ対フウ」

「うげエ！ 九陽のかよ!？」

名前が出た瞬間、キバがめちやくちや嫌そうな声をあげたが、フウは気にしていなかった。フウへの禁句はそんなことではない。

「おにーちゃん行ってくるねー!」

「ん、頑張れな?」

「絶対勝ってくるよー」

「……… 適当でいい」

フウは最後の言葉は聞かず、六枚の羽を羽ばたかせ、フウは飛んで行った。

「フウちゃんって強いの?」

「あーそういえば、フウの見たことないか…… 晶遁抜いたとしてもめちやくちや厄介だぞ? 本気でやったら印組まずに、此処にいる九陽以外上忍含めて瞬殺出来るぞ? そのほかにも生理的に嫌な術が多い」

実際フウの相手はかなり大変なのだ。晶遁が無くとも、他の九陽

と互角に戦える。ナルトの次に尾獣との感応性がよく、虫と言つ能力がかなりヒドイ。

「では、第八回戦。開始してください！」

試験官が宣言し、二人は対峙する。

地面から上を見上げるキバと、下を見下ろすフウ。やがてキバがぶるぶると震えだし……。

「コラッ！ 降りてこーい！」

「ワンっ！」

キバと、キバの忍犬である赤マルが吠える。

「えー、だつて犬臭いし？ 虫と違って動物嫌い」

「虫なんて気持ち悪いだけだろうが!？」

ピクリ。と、フウとシノの耳が動いた。

「虫がキモチワルイ……？ 虫のすごさ……見せてあげる……」

「あ、フウが怒った……」

「兄様。怒るとどうなるんです？」

「キバが死ぬ」

淡々とナルトは言い切った。

《サソリ》

フウの腰から、長いごつごつとした尻尾が生えてくる。先端はまるでく光っており、液体が飛び出ている。

それが、上空から狙いを定め、ヒュンっと高速で地面に突き刺さる。先ほどまでキバが居た場所が、クレーターのよう陥没し、紫色になって、ドロドロと溶解する。

「な、なんだこれ……」

青ざめるキバを無視するように、それは更に同じ行程をたどる。ドストドスト、更に何度も突き刺さりその箇所を溶解させてゆく。

「に、兄様……あれは？」

「毒。触れた瞬間致死量だから死ぬな。刺さっても、踏んでもアウト」

周りに居た人間の顔が青ざめる。
だが、この程度でフウは許していない。

《口寄せ・パラポネラ》

「おいでー、パラポネラ」

「うあー……これは悪夢の再来だ」

ナルトはハナビを連れて空中に浮き上がる。

同時に、九陽の人間も浮き上がる。

ハナビは不思議そうにしているが、何かを見て固まった。

それは黒い物体。タイルの隙間と言う隙間からわき出す三センチ近い蟻、蟻、蟻。

キー、キー、キーとかなきり声をあげながら地面が真っ黒になる程出てくる。

やがて、それはキバにたどり着き、

「ぐあああああああ！！！！ いたっあああああ！」

噛みついた。

上忍や、動ける人間は退避している。

キバと赤マルは試合中で動けずご愁傷さま。

蟻に身体中覆われて、真っ黒になって暴れる犬とキバ。
他人から見ても、恐怖を覚える光景だ。

「そのまま食べられちゃえー」

「こっざんあああああ！！！」

「しょ、勝者フウー！」

それでもフウはやめず、ついには動ける忍が逃げている天井にまで蟻が迫る。

「フウ！ もうやめろ！」

「わかったー。ありがとうパラポネラー」

ナルトの叫びにフウは頷き。

蟻たちはキーキーと言いながら戻ってゆく。

「に、兄様。なんですかあの蟻！？」

「パラポネラ……刺されると、どんなハチに刺されるより痛い痛みが襲う。この世の最上級の痛みが一気に押し寄せる程だ。大スズメバチより強力な神経毒。例えるなら銃で撃たれたくらい痛い。しかもそれが24時間続く。別名銃弾アリって言われる。ほら、見ろ」

ナルトが指を刺した方向、そこに居たのは

「口から胃液をまきちらし、身体が勝手にのけぞって、白目を限界まで開いて痙攣してるだろ？ 失禁のおまけつきだ。すぐにショック死しなかつたのはすごいが、放っておいたら多分死ぬぞあれ？ 精神的にも身体的にも」

近くの人間が顔面蒼白になり、すぐに担架を持ってきた。

だが、担架の上に乗せようとして触ると、痛みで激しい痙攣が起きる。結局、四肢を無理やり押さえて連れて行かれた。

皆の耳にキバの悲痛な叫びが残る。

どうでもいいとばかりに、フウは笑顔でナルトの元に飛んできた。

「おにーちゃん、勝ったから褒めて？」

「……」

満面の笑みで頭を出してくるフウを、ナルトは拒めず結局褒めて撫でてあげた。

「こつゆうところでフウが勘違いし、さっきみたいのをしたら褒めてもらえると思ってしまっただが、ナルトは未来永劫拒めないだろう。」

「シ、シノくんなんだか嬉しそうだね……」

「あのムシがほしい。痛さで敵が一発で動けなくなる」

ヒナタは嬉しそうにシノを止めることが出来なかった。

ちなみに、シノが虫を操る一族として操れるのは、チャクラを餌として食べる虫だけである。パラポネラは普通に餌を食べるので、操ることは不可能。虫を無条件で全て操ることが出来るフウだからこそ出来るのだ。そもそも、フウはチャクラを虫に出来るという特性もあり、ナルトが言ったように敵にしたら非常に厄介な相手であ

る。

「会場が破壊されたため、しばらく修理時間を設けます。土遁が使える担当上忍は、修理の手伝いをお願いします」

試験官の合図により、皆がナルトの元に集まってきた。砂忍以外ではあるが。チームメイトが負傷した人たちは、そちらに行っている。ネジもテンテンとリーを心配してそちらに行ってしまう。

「フウ……毒撒きすぎだ」

「でも、あの動物臭い人虫バカにしたもん。虫は匂いなんてしないし」

フウは膨れ、まだキバに怒っているらしい。

「あ、あの！ 兄様、お弁当作ってきたのですが……」
「え？」

ナルトはハナビの言葉に驚いた。お弁当 普通なら歓迎だが、この前に試験5日があった。つまり、5日経っているお弁当なのだ。

「こ、これです！」

ハナビは顔を真っ赤にし、俯いて差し出した。それは、かわいらしい布に包まれた弁当だった。

「は、始めてだったのですが、兄様が来るとのことなので頑張りました……どうですか？」

上目づかいでチラチラと視線を移動するハナビにそんなことを言

われて、断れるはずもない。

「ありがとう」

ナルトは笑顔で受け取り、ゆっくりと布をほどいてゆく。ふたを開けると、色とりどりのおいしそうなおかずが。ただ、まったく臭いがなかった。

「うおっ！ うまそうな弁当だな？」

背後からシカマルが声をかける。ソレを無視し、ナルトは卵焼きを口に入れる。隣のフウも唐揚げを口に入れた。

「……んー、おいしくもまずくもない。普通だ」

「そうだねー、普通？」

ナルトとフウは普通と判断した。ハナビが肩を落としたが、ナルトは評価を変えない。ただ、これはナルトとフウだから普通と評価出来たのだ。

「お前ら舌肥えすぎてるんじゃないか？ めちゃくちゃうまそうじやん。オレも腹減ったから一つもらっていいか？」

「ボクもー」

ナルトが頷いたのを確認してから、シカマルとチョウジが口に入れ、固まった。

ただ、ハナビにじっと見られていて、吐き出すこともできない。

「……なあ、ナルト。普通……か？」

「……」

何度も言うが、ナルトとフウだからこそ普通と言えたのだ。毒だろつと何だろつとチャクラで分解出来、耐性もある二人だからこそである。

「普通だな。粘土の味としては普通だ。ハナビは工作の才能があるかもしれない」

「そうだねー、すごいキレイに出来てた」

二人の反応に、ハナビは照れていたが、シカマルとチョウジはそれどころではなかった。

「ナルト……お前常識を学んだ方がいい。自分の為にも相手の為にも……ヤバイキモチワルク……」

口の中で粘土が溶け、塗料と一緒に胃に落ちてゆく。

「お口に会いませんでしたか……」

ハナビが涙をためながらシカマルに聞くと、シカマルはうっと引いた。七歳児の少女の泣き顔はキツかったようだ。

「い、いや。お、おいしかった！ あ、そう言えばオレずつとトイレ我慢してたんだ……行ってくる！」

「ぼ、ボクも行ってくるよ！ おいしかった！」

シカマルとチョウジは急いでその場から逃げだした。結局、本音は言えなかったようだ。

ハナビはにこにここと笑顔になり、周りに勧めるが、全員がお腹いっぱいとのことで断った。結局ナルトが全部処理することになった。

「それにしても、フウちゃん強いですねー」

「んー？ あの人が弱かったから？ いつもはチャクラの物質化で弾かれちゃうんだけど、あの人はチャクラの物質化もしなかったし」

ケロっと言ったが、周りは啞然としていた。

チャクラの物質化 高密度のチャクラを物質とする現象。形成するには膨大なチャクラが必要である。九陽達はそれを、能力として使用している。熟練すると、自由自在に使える為である。フウの尻尾や蟻、ナルトの炎もこれに当てはまる。

当然、普通の忍が使えるようなものではない。フウは人柱力以外をあまり知らないのも、相手が手加減していると思っっているのだ。

「修理はまだ時間がかかるが、次の対戦者を発表する。日向ネジ対日向ヒナタ！」

試験官がそう言った瞬間、九陽以外の人間が固まった。

ヒナタは心此処にあらざと言った感じである。

ナルトはヒナタに聞こうとしたが、無理そうなのでハナビに問いかけることにした。

実際ナルトは原作を知っているが、毎回覚えていないフリをしている。ただでさえ狂ってきているのに、続きを知りたいからということ転生した意味がない。既に人柱力を集めてしまった時点で意味がないのだが。

「ハナビ。どうしたんだ？」

「えーっと、宗家と分家の仲が悪いってことは知っていますよね？」

「ああ」

「それで、姉様とわたしは宗家……本家です。ネジ兄様は分家にあたります。従妹にあたりますね。それで、昔兄様に会った時、家の

方でごたごたしてたんです。まあ、そのお陰で兄様に会えたからわたした的にはよかったです」

話がずれていることに気づき、ナルトは肩を落としていた。

「そのときの問題が、雲隠れの里が父様の身柄を渡せって言うて来たんです」

「父様ってハナビの親……ヒアシか？」

「はい。まあ、姉様がさらわれて、日向の暗部が雲隠れの里の犯行だと思つて殺したら、木の葉の忍だったんです。たくさん殺したので、代償として父様の身柄を渡せって条件だったんです。渡さないと戦争ですね。ですが、父様の弟で分家のヒザシ叔父様が身代わりになると言つて変わりに」

「違つっ！」

全員が背後を振り向くと、戻つてきていたネジが殺気を放ちながらハナビを睨んでいた。

「父上は宗家の人間に身代わりとして殺され、差し出された！ 双子で似ていると言つ理由でだ！ 宗家は分家の人間など、ゴミ程度にしか思つていない！」

歯をギシリと噛みしめながら、呪い殺すような声音で叫んだ。

「確かに、宗家のやり方はわたしも間違つていると思います。ですが、わたし達に事の真相がわかるのですか？ 真相などわからないでしょう？ ですからわたしは宗家が本当にそのような事をしたか、していないかは判断が出来ません。ですが、それはあなたも同じことではないですか？ ネジ兄様？」

「っ！ だが、被害をこうむつたのが分家だけと言う事実だけは残

っている。だから、オレはむざむざ誘拐されるような出来そこないの日向ヒナタを許さない。ソイツが誘拐さえされなければ何事もなかったはずなのだ。その事実はかわりはしない！」

ハナビの問いに対するネジの反応は的を得ている。結局、分家だけが被害を被っている。その原因がヒナタにあることも一目瞭然。

「確かに、ヒザシ叔父様が身代わりになられたかもしれない。だけど、宗家を守るために自ら身代わりになったと言う可能性もあるじゃないですか？ もちろん、宗家が分家を差し出したと言う可能性もあります。それはわたしには判断が出来ない。あなたも同じように判断が出来ない。当事者である父様に聞こうにも、もし宗家が差し出したのなら父様は自分からヒザシ叔父様が出たと言い。自分から出ても自分から出たと言う。結局真実は聞けないのです」

「それでも……それでもオレは許せない！ 特にキサマだけはな！」

そう言つて、ネジはヒナタを睨みつける。全ての原因である少女を。

ヒナタはネジからつらそうに顔をそむける。自分でもわかってい
るのだ、誘拐されたのは自分だと。だが、幼いヒナタが撃退出来る
はずもないのだ。相手は暗部なのだから。ただ、宗家の長女として、
狙われてしまっただけ。

「まあ、原因つて言えば、雲隠れの里だろ？ ヒナタには撃退能力
なんてないし。その年齢じゃ、ネジだつてさらわれてたぞ？ 相手
は選りすぐりの暗部複数だろうし。狙われた理由は宗家長女だった
からだし」

ナルトは適当に零した。

「フンツ。どっちにしる許すわけじゃない。次の対戦はオレとソイツだ。死にたくなければ棄権しろ」

そう言つて、ネジは消え去つた。

「駄目ですね。ネジ兄様は」

「あれは無理だ。父を殺された衝動をぶつける場所がほしただけだ。何を言つても聞かない。で、どうすんだ？ ハナビ姉？」

ナルトとハナビは、未だに俯いているヒナタに視線を向ける。

「……やります」

「殺されるかもしれないが？」

ナルトは本気でそう思つていた。確かに原作を知っているが、不確定要素としてナルトがいる。ハナビだって原作ではアカデミーにすら入っていなかったのだ。どこで狂うかわからない。

「それでも……です。わたしは……変えたい。出来そこないと云われた弱い自分を。宗家や分家の争いは、此処で終わらせる」

その強い意志をくみ取り、ナルトは目を見張つた。

「……強いとは、身体だけじゃない。心　精神だ。少しくらい上の相手なら、精神力でカバー出来る。覚悟があるなら行って来い」
「はい！」

返事をし、ヒナタは修繕が終わつた会場に足を勧めた。

ただ、ナルトが言つたのは少しくらいならばだ。実力が違いすぎれば不可能。ナルト辺りならば、嘘を並べただけで相手を狂わせて

勝てるだろう。だが、それがヒナタに出来るとは思えなかった。

「なあ、ハナビ。実際“ヒナタ”ってどうよ？」

「そうですね。弱いです。心も身体も。ネジ兄様に一撃を入れたことすらありません」

「姉には厳しいな」

「わたしは何事も客観的に見ますからね。兄様が教えてくれたんですが」

ナルトは苦笑した。確かに昔、客観的に見ると教えていたのだ。

あと、ナルトは気づいていないが、“ハナビ姉”から“ヒナタ”に呼び方が変わっていた。それは、ナルトが少なからずハナビの姉と言う人物から、ヒナタとして個を認めたことでもある。

「ハナビは強いのか？」

「どうでしょう？ 兄様相手なら兄様がぼろぼろの状態でも負けると思います。他はいつもわざと引き分けにしていますが、ネジ兄様よりは強いと思います」

「へー。前はネジより弱いつて言ってたが？」

「影分身も使って勉強しましたから。ネジ兄様がアカデミーに行ってる間、わたしはずっと父様と修行してましたし。兄様に教わった日向流の亜流も覚えましたから」

ナルトが一月の間に教えたものだが、あの時ハナビはそれを出来なかった。しかし、血のにじむような いや、実際血を流しながら修行したことにより覚えたのだ。

「ヒアシには勝てるか？」

「どうでしょう？ 生命の流れが見えるようになった今なら勝てるかもしれませんがね。だからこそその亜流です」

四日間の修行。そこで、ナルトはチャクラの線を太くすることと、生命の流れを見させるために使った。基礎がしっかりし、更に白眼に慣れていたハナビは、それをすぐに覚えることが出来た。

日向流亜種　日向流とは柔拳を使い、チャクラの流れを見て内部にダメージを与える。だが、亜流は違う。チャクラの流れ以外に、生命の流れをくみ取る。生命の維持に繋がっている流れを止める点穴を突くことで、チャクラの流れと同時に、生命の流れをも止める。日向流が格闘技のようなのだとすると、亜流は完全に物を殺すことに特化したナルト独自の業である。有機、無機物に限らず全ての生命を絶つ技。

「試合では殺すなよ？　気絶か、ダメだったら一生動かなくする程度にしておけ」

「大丈夫です。殺さないために技術を磨いてきたんです。やって見せます」

力強く頷いたハナビを、ナルトは誇らしく思った。おかしな方向に成長しなくてよかったと。

ナルトとの接触により、変な方向に成長してしまったら目も当てられない。

精神面ではおかしな方向に成長してしまったことは、仕方ないとナルトは諦めることにしていた。

015 中忍三次試験予選(参)

ステージ

「では！ 第九回戦を開始する。両者前へ！」

「始まるな……」

「ええ」

ネジとヒナタがステージに移動し、他の人間にも緊張が走る。

二人の仲が悪いことは、二次試験中見ていたので皆知っているのだ。

「アナタは忍びには向いていない……棄権しろ」

「……！」

前に出て早々、ネジはヒナタに揺さぶりをかけ始める。

たったそれだけのことで、ヒナタは動揺を見せ、それをみたネジは冷笑した。

「この程度で揺らぐなら俺が言った通り、医療忍者にでもなればいな」

「兄様が前言ってましたね」

それを、ナルト達は傍観する。この程度では忍など無理だ。これから数多の忍を殺し、その家族を絶望に追い込んでゆくことになるのだから。敵だってやりたくてやっているわけではない。里の命令は絶対であり、殺すしかなくてやっているのだ。木の葉の忍と変わらず、殺されたら悲しむ家族だっている。

「アナタは自分に自信がない。いつも劣等感を感じている。だから、下忍のままでもいいと思っていた。しかし、中忍試験は三人でなければ登録が出来ない。……同チームのキバやシノの誘いを断れず、流されるままに嫌々受験しているのが事実だ。違うか？」

「……ち……違う……違うよ。私は……私はただ……。そんな自分を変えたくて、自分から……」

俯いてしまったヒナタは思い出していた。

自分が役立たずだと、不良品だと言われた、下忍になったあの日を。

“ 「立てはなびー！」

荒い息をしながら、ヒアシの言葉にハナビは立ち上がる。

「ヒナタはこれから私の下につきます……ですが、本当によろしいのですか？ ヒナタは日向宗家の跡目のはず。しかし下忍としての仕事は、常に死がついて回ります」

「好きにせい。あやつはこの日向には要らぬ。この5つ下のハナビにすら劣る出来そこない……」

ヒナタの担当上忍である夕日紅の言葉に、ヒアシはヒナタを切り

捨てることを言葉にした。

「話はそれだけか……ならば去れ。邪魔だ！」

「ハイ……」

その会話をヒナタは聞いてしまった。誰にも必要とされていないのだと。

「ヒナタ様…… アナタはやっぱり宗家の甘ちゃんだ」

「え？」

ヒナタを睨みつけ、ネジは続ける。

「人は決して変わる事など出来ない！ 落ちこぼれは落ちこぼれだ。その性格も、力も変わりはない」

弱々しい表情でヒナタは聞き続ける。まるで、いますぐ走りだして逃げ出すような表情で。

「人は変わりようがないからこそ、差が生まれ……エリートや落ちこぼれなどといった表現が産まれる。誰でも、顔や頭……能力や体型、性格の良し悪しで勝ちを判断される。変えようのない要素によって人は差別し、差別され、分相応にその中で苦しみ生きる。オレが分家で……アナタが宗家の人間であることは変えようがないようにね……」

「ヒッ！」

ネジが白眼を使い、睨みつける。

その様子に、ヒナタは後ずさる。

「ホント勝手ですね、ネジ兄様は。だったらわたしに追いつかれたネジ兄様は、才能のからつきしないダメ人間だったんじゃないですか？ 7歳のわたしに追いつかれる程度の才能ってことですね」「なに……？」

唐突に言葉を発したハナビを、ネジは睨みつける。

ハナビは見下したような視線をネジに向け、続ける。

「考えてみてくださいよ？ わたしは少し前まですごい弱かったです。それこそネジ兄様に片手であしらわれるくらいに。兄様に会って、わたしは我武者羅に修行し続けました。それで、今ではネジ兄様と引き分けています。つまり、努力したからそれ相応の力をつけただけです。才能に胡坐をかいていたネジ兄様に負けないくらいにです。努力が才能を超す。そんな夢みたいなのが在ってもいいじゃないですか？ これが体現者からの言葉です」「……」

ハナビの言葉にネジが黙ってしまふ。だが、納得したわけではなく、相変わらず睨みつけてはいるが。

「フン……それはハナビ様に才能があつたからだ」

「どうでしょう？ 兄様に会えなかつたら宝の持ち腐れで終わっていた気もしますけどね。白眼さえ兄様に開眼してもらいましたし」

ハナビの適当な返答に、興味を失ったように視線をヒナタに移した。

「棄権しないんだな……どうなっても知らんぞ？」

「私は……もう……」

ヒナタは勢いよく顔をあげ、ネジを睨みつける。

「逃げたくない！」

そして、白眼を開く。日向流の構えを取り、覚悟ならネジにも負けないと言うように。

「ネジ兄さん……勝負です」

「……いいだろう」

全く同じ構えを取るネジ。

「あの構えって迎撃用なんですよね、重心後ろですし」

「そっぴや、ハナビは俺と同じ構えになってたよな？」

「はい」

ナルトと同じ 重心を前に倒している形の構えだ。

脚の裏にチャクラを纏わせておき、それを爆発させて一撃で仕留める亜流。移動として、足だけでなく身体全体にチャクラを纏わせることで、普通では出来ないような動きが出来る。鋼糸やチャクラの移動で、いくらでも応用が出来る構えだ。

だが、慣れないと隙を突かれて逆に負けるような、諸刃の剣のような構えである。防御を全く考慮していない故に。

「第九回戦、日向ネジ対日向ヒナタ。始めてください！」

始まった瞬間、二人が同時に前に出た。

日向流は基本柔拳しか使わない。亜流の場合は全体を使うが、日向流は柔拳だけとなり、結果、突いては流すという単純な打ち合い

となる。

ヒナタがネジの頭部を突き、ネジがソレを左腕で逸らす。ネジが右の掌で腹部を突くが、ヒナタが左手で弾く。必然的にこのような戦いになってしまう。

「おにーちゃんつまんない……」

フウが欠伸をしながらそれを見ていた。ナルトは苦笑しながら、フウを撫でてやる。

「此処っ！」

「くっ！？」

ヒナタの掌底が、ネジの横腹にかすった。追撃を受けぬよう、すかさずネジは後ろに下がった。

「入った！？ でも浅いわ！」

「それでも効くのが日向流です」

サクラの叫びに、背後でリーが答えた。

「リーさん！？ もういいんですか？」

「はい。ただ体力がもたなかったただけですから」

サクラはリーの返事に納得し、先ほどの事を問いかける。

「それで。どういうことですか？」

「日向流って言うのは自分のチャクラを、手のチャクラ穴から放出して相手の体内にねじ込み、直接ダメージを与える体術なんです」

説明の途中で、ヒナタの掌底がネジの身体にめりこんだ。サクラは嬉しそうに見ているが、ハナビは真剣な表情で見つめていた。

「やったの!？」

「やられましたね。姉様」

「え?」

ハナビがやられたと言い、サクラが意味がわからなく不思議そうにしていると、ステージでは展開が一気に変わっていた。

ヒナタが吐血したことによって。

「姉様の掌底が当たる直前に、右腕の点穴を突いています。これで、右腕はチャクラが使えなくなり、身体の内部にダメージは行かない。それと同時に、姉様の胸部へ掌底を打ち込み、内臓破壊……しかも」

その説明に、サクラは顔を蒼くしていた。

ハナビは他にも言うことがあったが、どうせ後でわかることだろうと言わないうでいた。言ったらヒナタがもう勝てぬことがバレてしまっから。

「やはりこの程度か……ヒナタ様の力は……!」

「今っ!」

ヒナタが右腕を戻す反動で、左腕を突きだす。

そこに、更にネジが指を立て、点穴を突いた。ヒナタの動きが止まり、掌を突きだした状態で荒い息をしている。

それを見たネジがヒナタの左の裾をめくると、そこにはたくさん

の痣が浮かんでいた。

「ま……まさか最初から!？」

「そうだ……オレの目はもはや点穴すら見切る……互角だと思っ
ていただるうが、その時に点穴を突いていた」

つまり、ヒナタは最初から既に、柔拳を使えなかったのだ。内臓
にダメージを与える技は、見た目的には外傷がほとんどない。つま
り、既に攻撃手段がなくなっているのだ。

「キヤ!」

そこでネジがヒナタを突き飛ばす。まるで、興味を失ったように。

「ヒナタ様……これが変えようのない力の差だ。エリートと落ちこ
ぼれを分ける差。棄権しろ!」

「私は……」

ゆつくりと、何度も崩れ落ちながらヒナタは立ち上がった。もは
や、抗うすべがないと知りながら。口からはむせるように血がこぼ
れてゆく。

「逃げない……変えたい……私は、だから此処に立ってる!」

「……ならば。来い……」

「!ガハツ」

ゴホツつと、ヒナタの口から血がとめどなく溢れる。内臓がかな
りやられているのだ。

ナルトはもう無理だろうと思い、ハナビに視線を向けた。何だか
んだいって、ハナビはヒナタが好きだと知っているから。

「いいのか？ ハナビ」

「ギリギリまで……姉様を待ちます。わたしは姉様が頑張ってるのを知っているから。もし、わたしが助けるのが間に合わなかったらお願いします」

ハナビは左手を押さえ、ナルトに頼んだ。本当はいますぐに助けに行きたいだろうに、ヒナタが頑張っているのを此処で止めることは出来ない、震える左腕を押さえつけていた。

ナルトはフッと笑い、ヒナタを見つめた。

「九陽として最後の―撃を止めると約束しよう」

九陽として 九陽全員に対するナルトの絶対命令である。

ハナビの真剣な物言いに、真剣に返さないと失礼だとう思い、最高命令を出したのだ。

「宗家、日向ヒナタ……参る！」

動くのもやつとのはずのヒナタが、一気に距離を詰める。

高速で掌底を放つが、全てネジに防がれる。最初よりも早い応酬を見せるが、身体の限界だったのだ。

ついにはよろけてしまう。その隙をネジが見逃すはずもない。

「ぐっ！」

頭部への掌底。なんとか踏みとどまるが、その身体はふらふらと揺れている。

「まだ……まだ負けない……ぐっ！」

ほとんど目も見えていないのか、腹部への掌底がもろにはいる。既に、白眼は使えなく、視線も焦点が合っていない。

「アナタもわからない人だ……最初からアナタの攻撃など効いていない……」

「ヒナタ！ もういい！ 試合は負けたけど、アナタは昔とは違う。よくやったよ！」

担当上忍である、紅が叫ぶ。これ以上やったら、危険なのだ。下手をしたら死んでしまう。

「心臓を狙ったネジの決定打だ……かわいそうだがもう立てまい」

ネジの担当上忍のガイがそう判断する。

「これ以上の試合は不可能とみなし」

「ま……だ……」

『！』

九陽も含め全員が驚いた。立てる身体ではない。それでも、ヒナタは立った。

もう目も見えていない。下を向き、顔をあげることすらできないでいる。

「何故立ってくる……無理をすれば本当に死ぬぞ……」

「ま……まだまだ……」

「強がってもムダだ。立ってるのがやっとだろ……白眼でわかる。

アナタは出来そこないで、それはこれからも変わらない。これが運命だ。もう苦しむことはない……楽になれ」

ヒナタは血を吐きながらも、苦笑した。

「それは違うわネジ兄さん……だって、わたしには見えるもの……私なんかよりずっと……宗家と分家という運命の中で……迷い苦しんでるのはあなたの方……」

ネジの白眼が一層開かれ、ギロリとヒナタを睨みつけた。一番触れられたくないところを、ソレを作った原因が言ったのだ。

ネジはギリッと奥歯を鳴らし、走りだす。

そこでハナビも飛び出すが、とても間に合わない。

「ネジくん……もう試合は終了です！」

試験官が止めるのも聞かず、掌底をヒナタの胸部に

「！」

「それ以上やるのならば、俺達が相手になろう」

ネジの掌底を指一本で受け止めているナルト。

ネジの足には砂が纏わりつき、両腕は水晶に覆われている。

身体は空気ごと固まり、頭部はフウの尻尾にからめとられている。

ネジがもっていた武器は毒で溶け落ち、多由也は眠らせるために笛を口につけている。

ハナビとの約束を守った完全な無力化。

他の上忍や、ハナビは着地した状態でとまっている。

「……何故お前らが出てくる……日向の宗家などお前らには関係ないだろ。それとも、やはり宗家に取り入りたいのか」

「戯言を……。木の葉の旧家に取り入ったところで利益なんて皆

無に等しい。理由は単純、ハナビと約束したからだ」

ネジの目をまっすぐに見つめ、ナルトは言い聞かせる。

「ヒナタっ！」

上から下忍達が降りてくる。

「ガハッ……ゲホッ……ゴホ……ぐ……」

ヒナタが今までより多く血塊を吐き、崩れ落ちた。

「九陽……あとは任せた」

ナルトはヒナタの傍により、抱き起こす。

「兄様！ 姉様は!?!」

ハナビの声を無視し、ナルトは内部を見る。

「肺が破裂してるな……血管もかなりやぶけてる。あとはチャクラが止められて、弱っていた部分が全く補えていない。……心臓が停止している」

「フン……もう無理だ」

ネジのそんな物言いに、ハナビはネジを睨みつける。

「医療班を！」

「待て！ それじゃ手遅れだ！ 俺がやる」

ナルトは集中し、破損部分を輪廻眼で確認する。

《治活再生の術》

本来、髪の毛などの細胞を媒体に、新たな細胞を作り出す超高等忍術である。ただ、それは外部でやることであり、隣の細胞を複製して内部を治すなどありえない。それを可能にしているのが、輪廻眼で内部を見ることがだ。ヒナタにナルトが医療忍者になればいいと言ったのはこのことである。内部を見ることが出来れば、直接治療が出来る。

「お前……そんなことまで……」

「黙れカカシ！ そんなことは後でいい！」

ナルトはバツとヒナタの服をはぎ取る。

くの一が、男達の首を逆方向に、強引に向ける。

ナルトは、さらけ出された胸部に掌を置く。

少しして、ドンつと、音がしてヒナタの身体が跳ねる。

「に、兄様……何を？」

「心臓が止まってんだ！ 直接心臓に雷の性質変化のチャクラを送りこんでる……チツ、まだ動かないか」

ドンつと、更にヒナタの身体が浮き上がる。

「ゴホッ……ゲホッ……」

血を噴き出したのを見、ナルトは迷わずヒナタの口に口をかぶせる。

「あう……兄様が姉様と……ぐすん……」

ナルトはぺつと真つ赤な血を口から吐き出し、もう一度口をかぶせる。そして同じことを何度も繰り返し返す。それが終わり、印を組み、次の治療に入る。

《神術・チャクラ転讓》

無くなったチャクラを無理やり入れ、身体の回復に回す。

《掌仙術》

そのまま、横隔膜と心臓の上に直に手を置き、治療を行う。

「心臓は弱っているが正常。内部破損部分は全て再生させた。血も抜いたからつままることもないだろう。一応掌仙術で治療中だが、出来るだけ早く医療忍者を呼んできてくれ」

テキパキとナルトが指示をだす。やがて、医療忍者が来たところで、掌仙術を交代して連れて行ってもらう。

「うう……兄様と姉様が……あたっ」

ナルトは未だに戻ってこないハナビの頭を軽くたたいてやる。

「アホか！ 無理やり治したから気管中血だらけだったんだよ。肺やぶれてたし。放置してたら死ぬから、チャクラで無理やり血引っこ抜いてんだ」

「はあ………そうですか。よかったです。姉様を亡きものにしようかと……」

ハナビはかなり擦れて育ってしまったようだ。

「にしても、すごいなお前……。医療班がほぼ全て治ってるから後は掌仙術で外部の傷を治すくらいって言ってたぞ？」

「あれくらいアカデミーで習うつつの。人の命優先だから、アカデミーで真っ先に習う。まあ、内部再生はそういう血継限界もってる一族が普通はやるが、今は緊急時だ」

周りに居た木の葉の忍者は驚愕した。

超高等忍術の応用をアカデミーで習うと言う事実にある。木の葉では医療班しか覚えていない。いや、医療班でも止まった心臓を治すのは人工マッサージくらいしかないのだ。この時代、電気を流して動かすとは考えていないからだ。そもそもそんな忍術存在しない。

「にしても……治活再生なんてどうやって内部でやったんだ？」

「この目だ。多分白眼でも出来る。だから、白眼を医療忍術に使うことも考えてみる、相当な数の命を助けられるぞ？ ハナビには俺が教えるし」

「その目……先生やクシナさんにはなかったな……」

「輪廻眼。血継限界ではなく、時代の節目に稀に現れる目らしい。効果は……めんどいから言わない」

普通の輪廻眼はそういう物である。ナルトは、神からもらったのだから効果も違う上に、面倒なので此処では言わない。

「白眼を破壊するためだけにしか使わない坊ちゃんには思いもしない使い方だけだな」

「フン」

ナルトは、未だ束縛されているネジに視線を向けた。いつのまにか、顔以外全て水晶に覆われている。

「おにーちゃんにそんなこと言う人には、パキン、ガラガラってやつちゃうよ?」

フウが言うことはそのまま、水晶を身体ごと砕くつてことである。ナルトは苦笑し、ネジから視線を外す。ハナビを抱き上げてから、面倒そうに口を開く。

「九陽。もういいぞ。そんな雑魚放置していい」

身体中を拘束していた水晶や砂が消え去り、九陽達はその場から消え去った。

ナルトもハナビを連れて元の位置に戻った。

「兄様、本戦でネジ兄様をわたしがコテンパンにします」

「いや……誰となるかわからないじゃん……」

「こういうときのわたしは強いです」

ナルトはどういうときだよ……と苦笑した。

「えーっと、ハプニングもありましたが、次は、秋道チョウジ対日向ハナビ前へ」

「きました兄様！ 応援してください！ 褒めてください！」

ハナビはぴよんぴよんと跳ねてせがむ。

「応援はするけど褒めるのは勝ってからだろ……」

「サクっとしてきますー！」

そう言っつて、ハナビは消え去り、ステージに現れた。

「それではー、第十回戦始めてください」

「兄様ー」

「おー、頑張れハナビー！」

「はいっ」

開始早々ハナビは応援してくれとブンブン手を振っていた。

「ハナビ頑張っつてねー」

「ハイ！ サクラー！」

フウや多由也、ヤヒメがハナビを応援する。ヤヒメとフウはハナビと精神年齢が同じような感じなので、仲良くなったようだ。

「ガンばれー！ー！」

「デブー！ー！」

「くっ……アイツら見てろ！ この試合さっさと終わらせてギタギタにしてやるうー！」

シカマルというのがチョウジを茶化しながら応援し、チョウジがキしる。

「にしても……ハナビなんであんなデカイ服来てんだ……額当ても胸当てになっつてるし」

「ナルトさんの真似よ」

「え？」

ナルトの疑問に、隣のサクラが返答した。

「前に聞いたら、憧れてる人と同じ服装なんです！　ってね」

ナルトは苦笑した。確かに、あの時もこの服装だった。ナルト自身ですらこの服装は動きづらいつのうに、未熟なハナビでは足かせにしかないだろうに……と。だが、それと同時に少し嬉しかった。それだけ慕ってくれるのだから。

ナルトはハナビを見つめ、大きく息を吸い込んだ。

「ハナビー！　そんなデブに負けんな！」

「当たり前です」

「でぶでぶでぶでぶ……ボクは……」

《忍法・倍化の術！！》

チョウジの身体が一気に大きく、丸く変化した。

「ポツチャリ系だー！ー！」

《肉球戦車！！》

ゴロゴロと転がってくる丸いチョウジを見つめ、ハナビ重心を前に倒した亜流の構えを取る。

「フン……日向の面汚しだ」

ネジが呟くが、次の瞬間。

ドンと、足元の床がはじけ飛び、ハナビがロケットのように肉達磨に突っ込んでゆく。普通だったら潰されて終わりである。

「回転速度を計算して、角度を合わせれば」

ボゴッと音がし、チョウジが空中高くに弾き上げられる。
更に上空にハナビが現れ、天井を蹴って降下する。

《亜流・柔歩双獅拳》

チャクラが大きな獅子の形をとり、ドゴンッと音を立て、チョウジの身体に挟り込む。すさまじいスピードでチョウジは地面に叩きつけられ、クレーターを作り、めり込んだ。

全く動かなくなったチョウジに試験官が近寄り、

「気絶により、勝者日向ハナビ！」

「兄様——」

ナルトはびゅんびゅんと手を振り笑顔を向けているハナビから視線を移し、ネジを見る。

「実力差は明白だな。スピードやキレ、威力。全てにおいてお前よりハナビの方が上だ。ハナビに比べたらお前こそ落ちこぼれだ」

「くっ……！」

ネジの悔しそうな姿を横目に、いきなりハナビがナルトの傍に現れて抱きついた。

「褒めて〜」

「ああ、偉いなハナビ」

ナルトが撫でてやると、嬉しそうに目を細める。

「次、君麻呂対風巻ナルト。前へ」

「兄様……大丈夫で……あれ？」

ハナビが話しかけた時、既に二人は前に移動していた。

「第十一回戦。始めてください」

「はあ……なんで初戦から君麻呂となんだよ……」

「いいじゃないですか？ つまらなかつたんで助かりました」

ため息をつくナルトと、嬉しそうに笑う君麻呂。

「んじゃ、ルールは混化無し。能力は在り。此処破壊するような大規模な術は禁止でいいか？」

「いいですよ」

ナルトは少し離れ、試験官と火影に視線を向ける。

「離れてた方がいいぞ？ あと、火影のじーさん！ 結界頼む。出来るだけ強力なやつ」

試験官に離れることを言い、結界を頼んだ。

火影は頷き、傍に居る忍びに結界を張ってもらうように言った。

ナルトはポケットから一枚の銀色のコインを取り出した。

「さーて、このコインが落ちたら試合開始な？」

「それでいいですよ？」

君麻呂の周りの地面が溶けてゆき、ナルトの周りに蒼い炎が浮かんでゆく。

そして、ナルトは一枚のコインを上空に投げる。

やがて、コインは重力に従ってゆっくりと落ちてゆく。

【キーン】

次の瞬間、二人は消え去った。

016 中忍三次試験予選(四)(前書き)

なんか文章がおかしい。

おかしいと言っか適当と言っか……仕事始まる直前に書いたから
かもしれない。

やっと今作の毎時ユニーク最低が200越え始めたb
いつもありがとっございます。

016 中忍三次試験予選(四)

ゆっくりとコインが地面に落下した。

【キンツ】

《狐火》

《毒流》

落ちた瞬間、二人の応酬によって、中心地で大きな爆発が起き、結界内は煙で何も見えなくなった。

毒液は蒸発することもなく燃やしつくされ、青い炎も消え去った。ナルトは後方上空にとどまり、周りに蒼い火の球がたくさん浮かばせ、連続で射出する。

それを君麻呂は血継限界の骨を銃のように飛ばして相殺。

相殺された時には、ナルトは君麻呂の後ろに移動しており、そのまま蹴りあげる。

君麻呂は結界まで吹き飛び、ボンと音がして消え去った。

「影分身か……」

「ご名答」

「っ!」

背後に気配を感じた瞬間、ナルトは右に飛びのいた。

ナルトが居た一直線上が、紫色に変わり腐敗する。

「あぶなっ! 尾獣化してないんだから浴びたら死ぬぞ!？」

「それはこっちのセリフです。追撃しようとしたら目の前に蒼炎があるんですもの。しかも、床が溶けるような温度の物が」

二人はニヤリと笑い、消え去る。

しばらく、音だけがこだまし、地面や結界がいきなり破壊されてゆく。全ての上忍で何重にも結界を張り、なんとか耐えてる状況だ。

《妖術・狐焰噴》

一瞬にして、結界内全てに蒼い炎の柱が立ち上がる。

「くっ 《屍骨脈・防》」

やがて、地面が溶岩のようになっていくが、その上に真っ黒になった黒い球体が浮かんでいた。

それが砕け、中から無傷の君麻呂が出てきた。

瞬時に、体内の骨を外に出し、包んだのだ。

「しゅといな……」

「まだまだ行きますよ 《早蕨の舞》」

今度は全ての地面から天井まで、鋭い骨が伸びる。

ナルトが骨で見えなくなったのを見、君麻呂は首を傾げる。

「あれ？ 呆気ない？」

「いやいや、その程度じゃね」

ナルトは周りに蒼炎を纏わせ、無傷で立っていた。蒼い炎により、周りの骨は溶け落ちている。

「邪魔な骨だ 《炎葬》」

蒼い炎がブワッと周りに広がり、骨が全て溶け落ちた。

《十指穿弾》

君麻呂の指から機関銃のように骨がナルトに飛翔する、それを後方空中に移動し回避する。

「いやー、さすがにそれじゃ直撃しても倒せないけど？」

「下ですよー」

「は？」

下には、骨が円のように何本も生えており、真ん中は蟻地獄のようになっていた。

ナルトが気づいて飛翔するが、円になった骨が一瞬にしてナルトを捕まえ、蟻地獄に叩き落とす。

直後に出れないように、骨が閉まっていった。

《早蕨の舞》

そして、閉じ込めた地面から、無数の鋭い骨が天井目指して突き上がる。

「フウさん……兄様大丈夫でしょうか？」

「んー、何が？」

フウはハナビの心配そうな問いかけに、眠そうに答えた。

「何がって……あれ。死んじゃってないですよね？」

「えーっとね。おにーちゃんは」

ついに欠伸までしているフウ。

「わたしたち九陽全員と戦っても、一度も負けたことないよ？」

次の瞬間、君麻呂は蒼い炎の様な蛇に地面に引きずり込まれた。変わりに、腕に竜の様な蒼い炎を纏わせたナルトが現れる。

「油断禁物。もし実戦なら死んでたから注意だ」

腕をブンと、振ると、龍に啜えられた君麻呂が出てきて、結界に打ちつけられる。

それだけで三枚の結界が一気に割れてしまった。

「さ、さすがに蒼炎龍は卑怯じゃないかな……」

「尾獣化してないし、チャクラも借りてないだろ？ そっちもやればいいじゃん」

「素のチャクラで出来るのはナルトだけかと……」

「まだまだだねー」

ピシッつと君麻呂の中で何かが切れた。

「そーいうこと言うんだ……《骨龍》」

君麻呂の身体から骨が飛び出し、だんだんと数が増え、組み合わせられてゆく。

そこには、全長20メートルを超える骨で出来た龍が居た。君麻呂の姿はなく、核として骨龍に取り込まれてしまっている。

「っておい！ それチャクラ借りてるだろ！」

『さーてどつたろっ？』

「つてあぶな！」

くすくすと笑いながら骨龍は、空中に浮かんでいるナルトに向かって毒液を吐きだした。

ナルトは間一髪でよけたが、結界が割れ、天井に大きな穴が開いた。

「……そっちがその気なら……」

ナルトの身体に蒼炎が撒きつき、大きな蒼炎の龍になってゆく。そして、天井を溶かして上空に飛翔した。

『来いよ君麻呂』

『行かせて貰うよナルト』

そして始まる人間離れた二人の戦い。姿はもう人間ですらない。尾獣化ではなく、能力による戦い。

君麻呂による毒液であちこちが腐敗し、ナルトの蒼炎で溶けてゆく。

「ねえフウさん。忍者対決じゃないよねコレ？」

「あれくらいなら大人しい方だよ？ 本気でしたら山とか無くなっちゃうし。あ、ハナビちゃんはおにーちゃんのお気に入りだから、今度九陽の里に招待するよ。修行でもつとすごい見えるから」

にこにことしたフウのお誘いに、ハナビは曖昧な苦笑で答えた。

「なあいの。オレ達はなんで忍になろうとしてるんだらう」

「さあ……。とりあえず、あんなのに攻められたら勝ちようがない

「……」

「シカマルといのが悟りを開いていた。」

「あれなんじゃん！ 今回の作戦本当にうまくいくのか？」

「黙ってなカンクロウ！ 確かにそうだが、昔の我愛羅はもっと危なかっただろ！？」

ある計画がうまくいくか不安になり、虚勢で対抗していた。

「……ミナト……お主の子供は立派に成長したぞ……」

「火影様！ 現実逃避しないでください！」

「あのように大きく成長したぞ」

「火影様！」

火影はボケた老人のフリをして耐えていた。

「と言うか、修繕費どうしよう……」

「水の国に請求すればよいかと？」

「無理じゃ……無理やり出させたときに、責任はとらないと言われるたので……」

「……」

意外に考えていた水影に感嘆していた。

その時、ドスンと音を立てて、上空から龍が振ってきた。

辺りを土煙が覆い、やがて煙が晴れると

上空から眼下を見つめる蒼い龍と、地面に倒れた君麻呂が居た。

『降参しとけ。もう更に引き出さないとチャクラないだろ?』
「はあ……そうだね」

君麻呂は首をコキコキと鳴らしながら立ち上がった。
そして、右手をあげて口を開く。

「降参します」

「しよ、勝者風巻ナルト!」

勝者が決まり、ナルトも元に戻る。

「にしても、久々に君麻呂と一対一でやったな。楽しかったぞ」
「そうだね、ボクも楽しかったよ。またやろう」

二人で笑い合い、元の席に移動した。普段はナルトが教える側で、実力が離れすぎていて戦わない。今回も互角のように見えたが、ナルトは無傷で勝利している。しかも、君麻呂と違ってチャクラは完全に自分の物を使っているのだ。

「兄様! キレイでした!」

「ははは、まあ本当はやるつもりなかったんだけどな」

キラキラとした瞳でナルトを見つめるハナビに、ナルトは曖昧な笑顔を見せた。

「……ナルト。お前先生を余裕で超えたな」

「……と言っか、九尾事件の時ナルトさんが居れば殺せたんじゃないですか? ヒッ!?!」

サクラがそう言った瞬間、その場に殺気が満ちた。

殺気の発信源は九陽達からの物だった。
向けられたサクラもそうだが、そのほかの者も膝をついて震えている。

火影でさえも、膨大な殺気に膝を突く。

「おい貴様。貴様が尾獣の何を知っている？ 噂に踊らされる貴様達を見ていると、虫唾が走る」

「ナルト！ よせっ！」

止めに入ったカカシはフウに壁に叩きつけられる。

「貴様らは尾獣の事を考えたことがあるか？ 自分の子を殺してしまった親の気持ちかわかるか！ おい！」

ナルトが片手でサクラを吊るが、既に気を失っていた。

『ナルト……もうよい。ワシはもうよい。我が子の様なお主といれて幸せじゃ。だから、ワシの為に怒ってくれなくてもよい。次はお主が封印されてしまう……』

瞳がパツクリと縦に割れたナルトは、泣きそうな瞳で目を瞑った。次に開いたとき、その瞳は戻り殺気は消えていた。

「次に貴様らが俺の前で尾獣達を悪く言ってみろ。その時は里ごと潰してやるっ！」

そう言いきった。

九陽達は尾獣達と対話を可能にし、過去を知った。結果尾獣達は何も悪くなかったのだ。例えば一尾 彼は小さな子狸だった。そ

して、たまたま人里に下りてきてしまった狸だった。ただ、化狸と言う少し変わった狸なだけ。彼は遊ぶのが大好きだった。そして、子供になって一緒に遊んでいた。だが、未熟な変化しかできず、バテてしまった。そこで、化け狸とのことで封印され、茶壺の中で1000年の時を過ごした。そして、遊べなかつた鬱憤がたまり、遊びが戦闘狂へと変わってしまった。

二尾 その猫は、人間に殺され、憎悪を持って霊となった。憎悪を持った霊が複数集まり、一つの生命体となった姿。

三尾 これは大人しい亀だった。これは普通に長生きした亀である。ただ、主となった人間が人間を殺すことを覚え、それに引張られていった。三尾は人が好きで、主には従順であったのだ。だからこそ、やぐらにも従っていた。

四尾 森に家族で住んでいたゴリラだった。だが、ある日人間が戦争の為、火山を噴火させた。近くの国を落とそうと思ったらしい。そして、死んでゆく群れの者達。人間を恨み、魂は溶岩に溶け、意思を持たせた。そしてゴリラの姿を持った溶岩として、姿を変えたのだ。

五尾・八尾 これは、実験に使われた者だ。五尾はイルカと馬八尾はタコと牛。生物兵器とし、最強の生物を作る過程で産まれた。だが、実験は失敗して死んでしまった。そして、霊となり、その後の実験の生物の魂を取り込んだ。

六尾 もとは三人の人間であった。生きたまま溶かされ、溶解液と混ざり合った。それが周りの物を喰らい、大きさを増していったのだ。

七尾 戦争により焼き払われた森に住む何兆と言う虫たちの集合体。

そのどれもが、人間がやってきたことなのに、結果封印されている。それから尾獣達が外に出ることは出来なかった。そんなことをすれば、恨みがより大きくなるのは自然の理である。強くなった憎悪があふれ、巨大になり、禍々しいチャクラを持ってしまったのだ。だからこそ、心を通わせた人柱力達は怒る。誰のせいでこんな化け物が誕生したか知らない人間達に。更には生贄となった人柱力を虐げる人間を。

「おい火影。九陽の里は中忍試験を棄権する。事実を知らないこな里にいつまでもいたくない」

ナルトは冷めた目で火影を睨みつける。

「……それは無理じゃ。今回の試験は各国の大名や重鎮が楽しみにしておる。もし、九陽の里がいなくなれば、参加者が七人しかいなくなってしまう」
「知ったことが」

焦る火影に、ナルトは素っ気なく返した。

「頼む。この通りじゃ……ワシらは何故お主達が怒っているのかわからぬ。良ければ教えてくれぬか……」
「ほ、火影様！」

火影は土下座をしていた。九尾に恨みを持つはずのナルトが、九尾を悪く言った瞬間、豹変した。何か重大な思い違いがあるのでは思ったのだ。

「……火影。後でミナトの関係者。旧家の人間と、そこに居る力カシを火影の執務室に呼べ。教えてやる。中忍試験は……お前に免じて参加してやる」

「貴様！ 火影様になんたる言い草だ化け狐め！ ぐっ！？」

火影の相談役の男は、次の瞬間反対側の壁に叩きつけられ、気絶した。

「化け狐？ 上等だ。人間（悪魔）よりは百億倍マシだ。試験を続ける。最後だ。九陽は機嫌が悪い。死にたくないなら棄権しろ」

そう言い、ナルトは自分の席へ戻った。

「兄様兄様、化け狐ってなんですか？」

「っ！」

ナルトは一瞬怒鳴りそうになったが、ハナビのくりくりとした目が、何も知らないので純粹に興味があると言っていた。

そんなハナビに、ナルトはフッと笑顔を浮かべた。

「そうだな……俺の中には化け狐がいるんだ」

「へー、狐ですか。いつもベットといれていいですねー。もふもふ出来そうです」

ナルトは苦笑してしまう。その純粹に羨ましそうな目を見て。

「なあ、ハナビ。この里の真実を知る覚悟があるか？」

「真実ですか？」

「例えばハナビ。無実の罪を押し付けられ、殺された子供がいたと

して、殺した相手をどう思う?」「
嫌いです!」

嫌いで済むところがナルトには和む。自分は荒んでしまったからと。

ナルトは巻物を一本取り出し、口寄せをする。
出てきたのは一匹の小さな狐。

「わっ! 狐かわいい! 尻尾が九本九倍もこもこっ!」
「きゅっ」

その狐をハナビはぎゅーっと抱きしめる。

ナルトは素直にうれしかった。狐はナルトにとっては家族の様なものであるからだ。ちなみに、九陽の里では狐を神として崇めている。それは仙狐がとつた政策なのだが……。

「なあ、ハナビ。この狐は今此処に来たばかりだ。そして、この里に来たのも始めてだ。何も悪いことをしていない」
「?」

ハナビは何を当然のことをとといった感じで首を傾げる。

「そうだな。で、ハナビにその狐の世話をしてほしい」
「いいのっ!?!」

ハナビはキラキラと顔を輝かせ、満面の笑みを浮かべる。

「ああ。ただし、その九尾の狐にある命令をして置く。もし、いきなり誰かが攻撃をしてきたら相手を半殺しにしろと。狐からは絶対攻撃をしないようにも言っておく。実はその狐結構強いからな。ハ

ナビを守ってくれるだろう。ハナビの守り神として、友達としてな
「うん、ありがとう兄様！ この子の名前は？」
「名前はまだないんだ。つけていいぞ？ 今日からハナビの友達だからな」

「えーっと、じゃあきーちゃんて」

どうやらハナビは空狐や仙狐と同じような名前のセンスのようだ。ナルトは先ほどの命令を九尾にした。九尾は子供でも、忍ごとときには負けない。さすがに、人柱カレベルだと負けるが、チャクラを膨大にもっており、変化で100メートル程になることもできる。この狐は、妖術を尾獣である九尾に教えてもらったのだ。なんでも、九尾一族の者らしい。

木の葉の大人である忍は、その狐を憎悪のまなざしで見つめていた。

「火影、次やれって言うてるだろ？ いつまでもきーを見てるんじゃない。これは全く関係のない子供だぞ？」

「う、うむ……」

火影は目で次をやるように合図する。

「次、第十二回戦ヤヒメ対マツリ。前へ」

言い終わったと同時に、ヤヒメは前に現れた。完全に敵に対する瞳で立っている。

「マツリ。今回だけは棄権したほうがいい」

「テマリ様。ですが……せっかくのテマリ様の部下としての初仕事」

「……早くしろ屑。殺すぞ？」

テマリとマツリが話している最中、ヤヒメが目の前に現れて会話を割り込んだ。

「……機嫌悪い。さっさと終わらせる」

そう言い、マツリを会場に放り投げ、自分も中心に立った。

「で、では十二回戦。始めます」

「マツリ……」

「テマリ様。なんとかやってみます」

「がんばるんだよ……?」

「はい!」

テマリとマツリが会話をしている中、ヤヒメは背中を向けて歩き去る。

「え?」

「……終わり」

次の瞬間、ダン、と。マツリが壁に叩きつけられる。ヤヒメが印を組んだわけでもなく、いきなり背後に叩きつけられて終わった。ヤヒメが空気を操ってぶつけたのだ。

「しょ、勝者ヤヒメ!」

「……アンタ!」

「……何? 正当な結果」

ブチリと、テマリの中の何かが切れた。

「殺してやる！」

テマリは自らの武器である大きなセンスを開き、振り被る。

《大カマイタチの術！》

膨大な風がヤヒメに向かうが、ヤヒメの蒼く、長い髪をそよ風程度に揺らして終わった。

「なん、で？」

「……あなたは風を知らない。使い方がダメ。こつやる」

バンと音がし、テマリが壁を突き破って背後に飛ばされる。その際、鮮血が舞ったがヤヒメは涼しい顔である。

「……ぬるま湯につかっているこの里ならいざ知らず。我愛羅に聞いたら砂は殺しが多いらしい。何故そんなチンケな術を使う。殺す気で来い」

テマリは気絶し、聞こえていないだろう。

更に、テマリが使ったあれは本来上忍の術である。だが、ヤヒメにしたらチンケもいいところだっただけなのだ。しかも、自分が操る風を使ったわけなのだから、機嫌がますます悪くなっていた。

すぐに担架を持った医療班がやってきて、テマリとマツリは連れて行かれた。

「ごほんっ……アクシデントもあったようじゃが……。では、これより本戦の説明を行う。心して聞くのじゃぞ？」

この時、既にナルト以外の九陽はいなかった。ナルトが伝令するから聞かなくていいと言うことらしい。

「以前も話した通り、本戦は諸君の戦いを、皆の前でさらすことになる。各々は各国の代表戦力として、それぞれの力をいかなく発揮し、見せつけてほしい。よって、本戦は一ヶ月後に開始される！」
「フンっ……何故一ヶ月後なのだ？」

火影の言葉にネジが文句を言う。当然である。なぜわざわざ日付を開けるのかわからないのだ。

「これは相応の準備期間というヤツじゃ」「
「どういうことだ？」

「つまりじゃ……各国の大名や忍頭に予選の終了を告げるとともに、本戦への招集をかけるための期間。そして、受験生のための準備期間。つまり、敵を知り、己を知るための準備期間。予選で知り得た敵の情報を分析し、勝算を着けるための期間である。では、これからこの箱の中から、一枚ずつ紙をとってくれ」

アンコが箱を持ち、前に出た。

(うわー……アイツとか最悪)

ナルトが前に出ると、案の定アンコが睨んできた。

「何さ……」

「別に。早くとんな。と言うかアンタが死ななかつたのが残念だわ」「
「だったら自分で俺を殺せ。殺しに来た場合、俺は迷わずお前を殺すがな」

そういつて、ナルトは他の奴の分も合わせて5枚を抜き取った。

「ふむ……終わったようじゃの。ナルトは名前を宣言してから一枚ずつ開けてくれ」

「りょーかい」

結果から言つと。

日向ネジ対日向ハナビ

奈良シカマル対フウ

ヤヒメ対テマリ

我愛羅対多由也

風巻ナルト対うちはサスケ

「兄様兄様！ ほら言いましたよね？ わたしこつ言つての強いつて
！」

「確かにな……」

ハナビは宣言通りネジと当たった。

テマリがヤヒメと当たったのは風使い同士の宿命か。ヤヒメは空
気使いだが。

「やべえ……棄権してえ……」

「死んできなさい」

シカマルは絶望していた。更にいのが追い打ちをかける。

「俺サスケとじゃん……あいつ執念深いからな……」

（てか確実にあいつ里抜けするわ。呪印が現れる前に速攻で倒すか
……）

「兄様頑張ってください！」

ナルトの心の内を知らず、ハナビは九尾を抱いて応援する。

「にしても……我愛羅と多由也とか最悪だわ……一生勝負つかねよ……」

「どうしてですか？」

「我愛羅は攻撃特化。多由也は防御特化だからだ……まあわからないと思うから試合見とけ」

ハナビは意味がわからなそうだが、二人の戦いを知っているナルトはめんどくさいの一言だ。

「ハナビ。俺は用事があるから先に帰るが、きーを頼む。あ、あと口寄せ契約しとけばいい。まだ口寄せ出来る奴居ないだろ？ きーは強いから戦力になる」

「あ、はい！」

『主、わらわがくーちゃん、そやつがきーって。被るどころの話ではないぞ？』

『それならばワシはきゅーなのだが……』

『いやいや、もうわかりやすいくらい存在が違うから大丈夫だろ？ 主に大きさが。きーは“その姿”なら40センチくらいで、空狐は300メートルだ。九尾が同じくらいか……力は違うが』

名前は一緒だが、力が違いすぎる。きーは“あの姿”では話せないし。

「火影。先に執務室で待ってる」

「あ、待つの……行ってしもうた」

火影はため息をついた。結局途中から九陽達に振り回されっぱなしだったのだ。

そこで、視線をハナビ 正確にはハナビの腕の中の九尾に移す。

「ハナビ……その九尾を
嫌です！ これは兄様からのプレゼント。例え火影様だろうと渡しません！」

ハナビがきーを抱きしめて、火影を睨む。きーも怒ったのか、毛を逆立てているようだ。

だが、ハナビは知らない。今のきーの瞳が真っ赤に縦にさげていることを。ハナビが認識できない程の大きな妖気を放出していることを。

そのきーの姿に、火影はたじろぐ。

「そ、そうじゃな。じゃが、決して目を離すではないぞ？」

「当たり前です！ 寝るときもお風呂の時もご飯も一緒です。ねー、きーちゃん」

「きゅー」

ハナビの前では元に戻るげんきなきーである。

だが、これはナルトのした命令からである。

一つ 自分を襲ってきた者は再起不能なまでに半殺し。

二つ 自分からは攻撃をしない。

そして、次がきーをそうさせる。

三つ ハナビを襲ってきた者を殺せ。その際、本来の姿に戻ることも可。

本来の姿。実は今のこれこそが変化。確かに、ナルトの中に居る

九尾程はない。だが、それでも“九本の尾”を持つ程の長生きをしているのだ。1000年は生きていると言うことだ。ハナビを襲うと言うことは、九尾事件の再来を意味するのである。

にここにこときーをじゃらすハナビを見つめ、火影は何とも言えな
いたため息をひとつ零した。

017 ハナビ強化月間（ひと月限定）（前書き）

四月下旬って行って、めっちゃくちやすぎました、すみません。

あまり余裕なくて……ってことで、気力が続く限り、書いていた奴をまとめてアップしちゃいます。次いつ更新出来るか不明なので。

今見ると描写が屑レベルですが……。う　こです！

こんなのう　こです！　ごめんなさい。

メッセージとか、感想とか返信出来なくてすみません）．．．（

火影執務室

火影は慌てて、執務室までの道のりを急いでいた。

なぜなら、執務室に向かう途中、自国の忍達が全員気絶していたからだ。

なんとなく、誰だかわかっていたが、万が一賊と言うこともある。

そして、執務室の前につき、火影+旧家の長達はドアを開け放つ。

「ハロー火影+旧家+1の諸君」

火影の机に座ったナルトが居た。

それ見た火影は一気に緊張の糸が切れた。背後の旧家の者達の歎息が聞こえてくるあたり、皆同じような状態だろう。

「ナルト……お主がやったのか？」

「いや、攻撃してくるわけよ？ 此処まで来るのに。意味わからないしうざいから眠らせた」

「そりゃ……火影の執務室は里の機密がたくさんあるからのっ……」

「簡単に入れたけどな。よわっちすぎる」
「……」

ナルトは一人一発ずつ殴り、普通に歩いて通り過ぎて行っただけだ。

タイムロス0秒である。

火影は意を取り直し、長らしく堂々と仕切り直す。

「して、ワシらが勘違いしていることとは何かのう」

「まあ、ゆっくりしていつてくれ。まずい茶とお菓子しかないが。てか、菓子どこだ？」

「……ここはワシの部屋なのじゃが……あと水の国は皆菓子が好きなのかのう」

ナルトは首を傾げたが、やがて仙狐だろうと思いついた。あのバカならやりかねないと。

火影はイスに座り、ナルトは机、他は立ったままである。

「とりあえず、三人暗部いるよな？ 消えろ。10秒以内に消えな
いなら殺すぞ？」

ナルトがその三人の暗部の目を見つめる。暗部は天井裏に隠れていたのだが、視線が合った事に、玉の汗を零す。

「よい。下がれ」

「ハッ」「ハッ」

気配が消えたのを確認し、ナルトは結界を張る。邪魔が入ると面倒だ。

「ふむ。結界まで張りおつて……」
「いや、これから言うことは極力聞かれない。これを知ってるのは九陽と水影と一人だ」

ナルトが真剣な表情で皆を見回すと、皆はゴクリとのを鳴らす。そこでナルトは長嘆をしてから、カカシに視線を移動する。

「カカシ、睨むな。さっきは悪かった。でもな、これからお前等に教示することで、俺の父さんが本当にどうしようもないことで命を落としたんだなってわかるぞ？」
「先生が……？」

ナルトは一度だけゴクリと頷く。

「まず、きゅーちゃん 九尾にこの里を襲わせた犯人を教えよう」
「待て！ この里を襲わせたじゃと!? あれは誰かが襲わせたことなのか!？」
「落ち着け。心臓発作で死ぬぞ」

ナルトは茶を飲み、話を続ける。

「万華鏡写輪眼を使い、九尾を御し、九尾の子供を殺し、木の葉のせいにして潰そうとした人間が犯人だ」

「万華鏡じゃと……歴代で開眼した人間などあの時は一人しか……じゃがアヤツは……」

「終末の谷で初代火影と戦って死んだ……と？」

全員が驚いたような表情を浮かべていたが、やがてうなずいた。それは、里でも皆知らぬような事だ。他里のナルトに言っているも

のか考えたのだ。

「経緯を説明しよう。まず、初代火影に倒されたうちはマダラは、万華鏡車輪眼のある能力により、自分の亡きがらをチャクラで蘇らせた。正確には、チャクラで無理やり身体を維持している。そして、その後俺が殺した水影 ヤクモの前の水影を殺し、自分が水影となった。二つ前の水影だな」

「ちよつと待ってくれ！ ナルト。お主水影を殺したのか!?!」

「今さらだな。だったら何故俺の口寄せが現在水影をやってるんだ？ 殺したからだろ」

『なっ!?!』

全員が驚いていた。

つまり、現在の実質的な水影はナルトであるのだ。

「そんな話はどうでもいい。まあ、そこで九尾を操り、我が子を殺した。その責任を木の葉になすりつけることに成功し、怒り狂った九尾は我を忘れ、木の葉を襲った。だが、その時すでにうちはマダラは水の国を後にしていた。その後の消息は不明」

「じゃが、なぜお主は事を知っておるのじゃ？ 特に九尾のことじゃ」

「それは俺が九尾と契約したからだ。かなりいい子だぞ。あんたらが知ってる九尾はマダラのせいで我を忘れていた九尾だからな。本来はかなりいい奴だ」

「……ふむ。何か証拠があればよいのじゃが……皆を納得させるよくなものが」

確かに、とナルトは思う。いきなりこんな話をされても誰も信じないだろう。

「九尾を呼びだしてもいいんだが……人型で呼びだしても本人かわからないだろうし。本来の姿で呼びだしたら大騒ぎ。じゃあ、アレでいいか」

そこで、一人で納得したナルトは九尾化することにした。一番被害が少なく、一発で信じられるだろう。

「っ!?! 何じゃその……妖気は……」

ナルトの瞳孔が縦に開き、目が真っ赤に変わる。九本の長い尻尾が形成され、膨大なチャクラがあふれだす。結界内の者は軒並み崩壊してゆく。

狭い空間では、限界飽和量が少ないのだ。当然、溢れた妖気は外に出ようと、壁を壊してゆく。

「九尾の力を俺に宿らせた。九尾と契約したって証拠だが」

「う、うむ。信じる。信じるからやめてくれ」

「見せるつたりやめろつたり全く」

仕方なくナルトは混化を解く。

「つまりだ、木の葉が襲われたのも、父さんが亡くなったのも、本当にどうしようもないうちはマダラのせいなんだ」

「先生が……くっ」

カカシがギリっとはぎりしをし、拳を握る。掌から深紅の液体が零れ落ちていることから、カカシがどれほどミナトを慕っていたかわかるだろう。

ナルトはそれを一瞥し、視線を火影に移す。

「現在、うちはマダラはある組織に居る。それは、尾獣を集める組織だ。だから俺は、全ての尾獣を一か所に集め、幼いころから修行をさせ、力をつけさせていた。人柱力と言っただけで殺すことは俺が許さない。ちなみに、組織の本拠地はわからない」

「わ、わかったから殺気を出すでない。全く、心臓に悪いわ」

「あ、悪い」

ナルトは気付かぬうちに殺気が漏れて居たようで、悪げもなく謝った。

「つまりだ。尾獣を知らない癖にって言ったのは、九尾が悪いわけではなく、うちはマダラをそうしてしまった木の葉が悪いってことを言いたかったんだ。責任転嫁もいいところだろ？ 子を殺されて怒るのは当然。そして怒り狂って滅ぼそうとしたが、それを招いたのはお前ら木の葉。この里では、俺が九尾って話になってるけどなさつき外歩いてたら石投げてきたから、半殺しにして病院の前に放り投げてきたが」

ナルトはしれつと言った。だが、悪いとは思っていない。何もしていないのにそんなことされたらたまったものじゃない。

「ついでに言うと、他の尾獣も似たような感じで封印されてな。だから俺は尾獣の肩を持つわけ。OK？」

「ふむ……してお主が集めた尾獣は……」

「九陽。里の神として九柱で九陽」

そこで全員が目を見開く。つまり、全部集めたと言っわけだ。そして、中忍試験を受けている全員が人柱力。もしここで尾獣を出されたら、里など簡単に潰されてしまうだろう。

「あ、安心しろ。全部俺が倒して別の封印をかけた。まあ封印なくてもそれぞれが対話をして契約してるから暴れない。その人柱力に何もしなければな」

ニヤリと、ナルトは笑みを浮かべる。
手を出したらその次第ではないと……。

「ちなみに、俺は狐が家族だと思っている。だが、木の葉では悪魔だと伝わっている。今更変えるとは言わないだがな」

ヒアシに視線を移動する。

「お前の娘。ハナビと言う子がいるだろう？」

「日向宗家の次期当主として考えている」

「火影。俺がハナビにやった狐。何かおかしくなかったか？」

「う、うむ。あの大きさに肝が冷えるような妖気を持っておった」

そんな返答を聞き、ナルトはケラケラと笑い続ける。
皆は何を笑っているかわからないようで、眉を潜めている。

「あんなもの序の口だ。アレはな。木の葉を襲った九尾と同格の九尾だ。九尾一族のな。本来の姿は100メートルを超える。もちろん、悪狐ではなく善狐だけだな」

『なっ!?!』

ナルトはその事実を、バカにしたように笑いながら言い切った。

「き、貴様は私の娘を利用したのか!?!」

「断じて違う。俺はハナビを気にしている。だから九尾にはハナ

ビを守るように言っているし、自分から攻撃をしないように命令してある」

その言葉を聞き、皆がほっとする。

「自分からはって言ったろ？ アレはハナビを主と思っている。ハナビが怒ったり、ハナビが攻撃を受けたりしたら俺の命令が遂行される。全力で殺せと。本来の姿に戻ることも構わないと」

すぐに絶句したものに変わる。

本来の姿とは、あの悪夢の再来を意味する。それがわからないバカは此処にはいないだろう。

だが、更にナルトは爆弾を投下する。

「九尾を抱いた子供が町中を歩いていたらどうする？ もしうちの里なら可愛がられる。だが、木の葉ならどうだ？ 殺そうとするか？ 石を投げつけるか？ もちろんハナビへの攻撃と九尾は思う。そして攻撃をした者は殺される。ハナビから引きはがすこともできないぞ？ ハナビは嫌がるし、九尾もいやがる。その場合半殺しにされる。九尾はハナビの守り神であり、友達だからな」

ナルトはずーっと最後のお茶を飲み干し、立ち上がる。もう此処には用がないとように。

「だから、真相を伝えるのは早い方がいいぞ。だがな。もし、真相を伝えたら伝えただで今度はうちは一族の生き残り、サスケが虐げられる。うちはマダラの一族だしな。結局テメーらは誰かを犠牲にすることではか平和を維持できないんだよ。俺然り、九尾然り、うちは然り、だ。じゃーな」

そこで、ナルトは消え去った。

「う、うむ……。今日は皆眠れぬ夜になりそうじゃの……。すぐ
にでも何かしらの対応をしなければ手遅れになりかねん。それにし
ても……。ナルトはミナトとは全然違うようじゃの……」
「それは違うかもしれませんよ」

先ほどまで、うちはマダラへの憎しみでいっぱいだったが、カカ
シは火影の呟きに声を発する。

「何？」

「会場での事ですが……。『ごめん父さん、俺にはこの里を愛するこ
とが出来そうにないよ……。』と。ほとんど声に出さずに呟いていま
した。口の動きでわかりましたが……」

カカシの言葉に全員が黙りこんでしまった。

「ミナトと同じように愛そうと思ったが、愛せなかった……。と言う
ことかのう。アヤツの話を聞くと、ワシらはずっと間違っていたの
じゃ。確かに、憎しみを何かに背負ってもらわなければ平和すら維
持できなかったのは事実じゃ」

憎しみの対象を何かで共通させる。一番国を治めやすい方法であ
る。九尾とナルトとすることで、内乱や他国への戦争から目をそむ
けることが出来る。

「犠牲の上の平和……」

それっきり、皆黙ってしまった。

キャンプ場。

本戦までの一か月、九陽は近くの森でキャンプをすることにした。理由としては、泊めてくれる場所などないからだ。金髪っただけで追い出される。本当にナルトかも確認を取らずに追い出されるのだ。

そこに、昼ごろ、ハナビがやってきた。

「兄様……兄様……！」

ハナビは走ってきてナルトに抱きついた。目を真っ赤に泣きはらし、今も泣きながらである。そのさらさらな黒髪を撫でながら、ナルトは問いかける。

「きー。ちゃんとハナビを守ったか？」

「きゅー！」

守ったとでも言うように、尻尾をフリフリする九尾。ハナビに全く傷がないようなので、ちゃんと守ったのだろう。

「どれだけ殺した？」

「きゅっ」

九尾は尻尾を三本立てた。

「半殺しは？」

「きゅっ、きゅっ！」

最初に九本上げ、一度下げて、次に七本上げた。16人つてことだろう。

「兄様……。兄様にもらったきーちゃんを抱いてるだけで、里のたちがすごい目で見えてきて……。石を投げてきました。乱暴しようとする人も……。そのたびにきーちゃんが炎を吐いて焼いて」

「そっか……。怖かったな。どうする？ きーちゃんはもういいか？」

ハナビはきーを見つめる。

きーは寂しそうに、しっぽをだらんと垂らす。

「きゅー……」

「いえ……。きーちゃんは友達なので、離れません」

「きゅっ！ きゅっ！」

「キヤッ！ くすぐったいきーちゃん」

嬉しそうに尻尾をふりふりとしながら、きーはハナビの頬をぺろと舐めた。

「それにしても……。里の者は皆家族って……」

「うーん。ハナビだけなら家族って思われるだろうけどな」

ナルトは苦笑しながら言う。ハナビだけなら、間違いなく

家族と思われるだろう。それも、旧家の娘なら待遇もいいはずだ。

「でも……家族の家族はダメなんですか？ きーちゃんはわたしの家族なのに……」

「きゅー……」

「家族つてのは一定条件がそろったものだからな」

「条件……？」

ナルトはハナビの頭を撫でながら続ける。

コテンと可愛らしく首を傾げたハナビを見つめ、まだ早いかもなーと思っただが、結局言うことにした。

「ああ。例えば、水の里は他の里で嫌われている者を受け入れる。そして、木の葉では尾獣と人柱力以外なら受け入れる。その代わり尾獣と人柱力の扱いは酷いけどな。それでも、木の葉もほかの所よりマシだな。他は血継限界つてだけで虐げられる。まあ、旧家以外の血継限界は木の葉も追い出されるけど」

ナルトはそこで苦笑する。

結局、どこも同じなのだ。水の国は普通を追い出す。他は異端を追い出す。何もかわらない。

「でも……酷かったです。此処に来る前に、お菓子でも買って来ようと思ったんですが、お店に入れませんでした。すみません……」
「いいや。気持ちだけ受け取っておくよ。ありがとう」

ナルトが撫でてやると、ハナビは気持ちよさそうに目を細める。

「兄様が言ってた里の真実ってアレだったんですね……」

「その狐と全く同じ態度を俺もとられるからな。コイツらだってバ

したら同じ対応を取られる」

そう言っつて、ナルトは九陽を見まわす。

「……別にいい。こんな里どうでも。家族は九陽の里だけ」

「最悪滅ぼしちゃえばいいーもん」

「ウチもどうでもいいかなー、他里で受け入れてくれる何て初めから期待していないし？」

「まあ、だから僕達は野宿してるんだけどね」

「水の国以外での対応なんてみんなおなじだ……」

皆他里でバレたことは一度はある。そうなったときの対処は酷いものだ。

依頼に力を使ったらバレる。その時は手を返したように追い出そうとしてくるのだ。賊の討伐が、依頼主の組織討伐になった時もあった。

「それは……寂しいですね」

「いや。怖がらないハナビが居るだけマシだ。他は大体全てが怖がって拒絶するからな」

九陽も全員が頷く。ハナビは俯いている。

暗くなつてしまったので、ナルトは話を斬りかえることにした。

「そういえば、ハナビはきーちゃんと口寄せ契約したか？」

「してませんけど？」

「するか？」

「はい！」

ナルトはハナビの頭から手を離し、一本の巻物を取り出す。

契約の巻物だ。

「妖狐の種族との巻物だけど、呼べるのはきーちゃんだけだからな？ 力があれば呼べるが、尾獣倒せるくらい力があるか、相手と親しくなつてないと無理。俺の場合呼べるけど」

巻物を広げ、地面に置く。ナルトの手形だけが教えてある、契約の巻物。

それを見たハナビは、花が咲いたように顔を誇らばせる。

「あ、兄様だけですな。えへへー。結婚の申告書みたいですね」

断じてそれは違う。どの世界に血判、しかも手形の婚約届けがあるんだ。それは手形詐欺だ。まあ、手形の意味が違うが。

「名前を上を書いて、下に手形を押して終了」
「わかりました。えーっと、日向ハナビ……ペタン」

ハナビは声に出しながらその作業を終了する。と言っても、10秒くらいの作業なのだが。失敗しようもない。

「これで、いつでも口寄せ可能だ。きーがいると困る場合は戻せばいい。木の葉だと店にも入れないからな」

「うー……ずっと一緒に居たいんですが……ね？」

「きゅー……」

きーはハナビに頬ずりをして自分の意志を伝えようとする。

「まあ、この期間中はいいんじゃないか？ どうせ修行だろ？ 此処でしたっていいんじゃないね？」

「いいんですかっ!？」

パアッと顔を輝かせて、ハナビは九陽達を見つめる。

「フウはいいよー。ハナビちゃんならね」

「……わたしもいい」

「ウチも大丈夫。他の人間が来たら追い返すけど」

「そうだね。ハナビさんは怖がらないし」

「別にいい……」

ハナビは嬉しそうにきーとくるくると、踊るように回っている。

(やっぱ一緒にいたんだな……)と、ナルトは思い、いい方法を探すが、木の葉の忍を皆殺しにするという非情な手段しか浮かばず、それは最後の手段と、取っておくことにした。

「ってわけで、また一か月だけどハナビには俺が修行つけるわ」

「また兄様の修行です！ やりました！」

「親に報告とかしなくていいのか？」

「いいんです！ 一か月家に帰りません！」

どうやらハナビはすごい決意だ。搜索願とか出されたら困るので、ナルトは後々ヒアシに知らせにいった。

修業開始一日目。

「まず、生命の流れは見えるか？」

「はい！ ちなみに九陽の人たちは全員チャクラも生命エネルギーも見えません！」

「あー、それは仕方ない。とりあえず、そのクナイで木を一発で切断できるようにしろ。影分身使っていていいからな」

「はい！」

それから、ハナビは出来るまでひたすらソレを繰り返した。お陰で、切断された木が数千本出たとか。

二日目。

「次はチャクラでの鋼糸だ。これは体術と組み合わせるととても便利だ。とりあえず糸はフウが専門だから後任せた」

「OK。さーやるよハナビちゃん」

「はい！」

「こうやってバーってやって。ずりやって」

「なんかどんどん伸びて自然破壊が……」

今更それを言うハナビ。ちなみに、これを5日かけてハナビはマスターした。

作ること自体は一日で出来たが、実戦で使える長さ、細さ、強度を保つのに結構かかったのだ。だが、結局一本しか使うことが出来なかった。フウのように多人数相手には難しいだろう。

七日目。

「次は力の扱い方だな。ハナビは身体が小さいから、チャクラの運用をうまく行って、出来るだけ威力をあげる。柔拳で幾ら内部にダメージが通るからと言って、外部ダメージも大きい方がいいにこしたことはないだろ？ ってことで力は多由也にまかせた」

「ウチにまかせて。んじゃー、手っ取り早く間接部分をチャクラを使って固定、打つ時は脚から一直線上にチャクラを流す。こんな風

にッ……と」

「なんだか地割れが起きてますね……」

「そそ。これで外部だろうと中身だろうと関係なく破壊」

「が、がんばります！」

結局多由也の手加減にもかなわなかったが、小さなクレーターが出来る程までにはなった。

十日目。

「今日から本番だ。疑似人柱力になってもらう」

「疑似？」

「んー、本来俺達は人柱力と呼ばれるものではない。別に大多数に訂正はしないが、違うんだ。当初は確かに人柱力って言う無理やり封印した人柱　生贄の形だったが、今は口寄せとして力を貸してもらってる。だから、普段から中に入れっぱなしなのは俺くらい。で、ハナビの中にきーちゃんを入れる。それで力を貸してもらうんだが、これが難しい。普通数年かかる。だから、ほんの一部だけ貸してもらおう。尾が生えない程度に。ってわけできーちゃん入って」

ナルトがそう言うと、きーちゃんはその場から消え去った。

「あれ？　どこに？」

「ああ。逆口寄せってことで、ハナビの中に居る。ちょっとだけ力を貸してもらえ。あんまり多すぎるとダメだ」

「はい！　お願いきーちゃん……」

その後、ハナビは爆発して気絶した。

急ぎ過ぎだと九陽から指摘を受けたので、10段階に分けて枷を付けて馴染ませた。

尻尾ゼロ本を維持するのに、限界まで影分身を作りだして期間ギリギリまで使ってしまった。

それでも、そのお陰で莫大なチャクラを手に入れたことに変わりはない。

ただ、ほとんど垂れ流しである。

形成も出来ないし、能力としても使えない。本当に術に使う為だけ。

ただ、白かった目が真っ赤になるようになった。その状態で白眼を使うと、黒い点が見えるとのことで、ナルトは直視の魔眼にでも開眼したかと思っただが、全然違った。ただ単にチャクラと生命の点穴が鮮明に見えるようになっただけらしい。前までは場所を覚えなきゃいけなかったが、勝手にわかるから楽と言っていた。

ナルトは九尾状態で鏡を見たことがなくて気付かなかったが、真っ赤な瞳で縦にさけた瞳孔はかなり怖い。その事に、ナルトはハナビがなって初めて気づいた。これだけ混化をしていて、気付かないのもすごいことだろう。

「狐の嫁入り……」

「そんなシャレいらん」

「……シャレじゃないけど（ぼそっ）」

「え？」

「何でもないです！」

ついでに、ハナビは普段からきーちゃんを外に出してるので、狐でもなんでもない。

ナルトはたくさん妖狐がいるので、普段から全員が中に入っている。ナルトの中は安全とのことで、妖狐種族の楽園となっているのだ。だからこそ、他の九陽より圧倒的に強いのである。すでに、勝手に精神世界に住居を作られている。

017 ハナビ強化月間（ひと月限定）（後書き）

最低限の修正でも結構時間がかかった……。

描写不足が多すぎる。訂正後でも『あー、ここもって描写しないと
なー』ってところ結構手抜いてたり。

時間がほしい！

すみません。

火影の執務室

現在、執務室には二人の人物が居た。

一人は当然のごとく火影。もう一人はナルト。もつとも、ナルトは今来たばかりだが。

「ナルト……何故警備全てをかいくぐって、ワシの机の上にいきなり現れる」

「え？ だって此処の警備ざるだし」

「……」

ナルトは最近毎日此処に来ていた。

なんとなく、父親が預けても安心できると言う人物を知りたいと思っただけだ。

それ以外にも、暇と言うのもあるのだが。

「なあ、火影」

「なんじゃ？」

「気にするなよ？ 確かに俺はアンタのもとで幸せになったわけではない。だが、俺は今幸せだ。お前が知っているミナトは弱い奴だったか？ 周りを変えられないくらいに。俺は自分で幸せを作った

んだ。だから……気にするな」
「……」

ナルトは気づいていた。火影がナルトに負い目があるのを。いつもナルトを見る目が、謝っているように見えていた。

「あんたは俺を捨てたのか？」

「違う！ ワシは……ナルトを探した。だが……見つけれなかったのだ」

「知ってるよ」

「おぬし……？」

「俺は九尾を入られた。だから赤子の頃から意識が在った。父さんの顔も、母さんの顔も覚えてる。父さんがアンタを信用していたのも知ってる。アンタなら俺を探そうって思うだろうな。だけど、俺は逃げたんだ。里で虐げられるってわかってたから……逃げたんだ。いくら火影だろうとアレ程の被害。その元凶が俺に入っていたなら、里人はわかってはくれないからな。だから、狐に頼んで運んでもらった」

ナルトは、ぽつぽつとその時のことを語った。何を思って逃げたかも。

実際ナルトは全くと言っていいほど恨んでいない。木の葉のあり方は好きじゃないが、火影自体は嫌いじゃなかった。むしろ、里人の事を思う、いい指導者だと思っている。

「ワシを……許してくれるのか……」

「許す許さないも、俺はもともと誰も恨んでなかった。ただ、里人には尾獣達の事をわかってほしかったただだけだ。そうじゃないと、アイツらがつかばれない」

そう言つて、ナルトは愛おしそうに腹を撫でた。そこにいるだろ
う妖狐達を。

「すまん……スマンナルト……あの時見つけてやれなくて」

「だから……あれは俺が望んで逃げたんだ。火影のじーさんは悪く
ない。なあ、じーさん。わかつてもらえなくてもいいから、尾獣達
の真実を巻物にでもしてくれないか？ 別に皆に見られなくてもいい。
ただ、知ってる人がいてほしいんだ。俺達が死んだ後も尾獣達
は生き続ける。ずっと人間の敵になるのは……ツライ」

ナルトは本当にそれが気がかりだった。人間の寿命など、80年
程。妖狐は死なない限り永遠。未来永劫、真実を知っている人間が
九陽だけつて言うのはつらい。そして、九陽が死んだらそれで終わ
り。

「約束しよう。かならず巻物にして記録を残すと。だから、教えて
くれ。尾獣達の事を」

「ああ。教えるよ。尾獣の全てを」

ナルトは笑顔で、ゆっくりと口を開く。

のちに伝えられることになる、その伝承を。悲劇の尾獣達と、心
を通わせた人柱力達のお話。

これが何れ二大大国となる、火の国と水の国の同盟への足がかり
でもあった。

ナルトは、演習場に来ていた。

近くを通りかかった時、感じたことのある、不安定なチャクラを感じたからである。

そして、そこに行くと、案の定……居た。

「ヒナタ……お前その身体で突きの練習か？」

「え？ ……あ、ナルトくん……」

ヒナタはバツの悪そうな顔をした。なぜなら、とてもじゃないが外に出れるような身体ではないからだ。一度心臓が止まっているのだ。しばらくは入院のはずが、病院の服で突きの練習をしていた。

「あ、ありがとうございます。……ナルトくんが治してくれたって

……あと人工呼吸……」

真っ赤になったヒナタにナルトは問う。

「何故知っている？」

「えっと……ハナビがお見舞いに来て、間接キスですって言って……」

ますます顔が赤くなるヒナタを見て、ナルトは頭を抱えた。そこまで壊れていたかハナビ……と。

「まあ、訂正すると、人工呼吸ではなく、気管洗浄だ。あのままじや詰まって死んでた」

「あ、そうですね……ハハ……」

(こいつ苦手だ……話が續かない……)

「ナルトくんが言った通り医療忍者になるのかな……わたし忍は向いてないだろうし……」

「はあ……つたく」

「え？ あたっ」

ナルトはヒナタの頭をパコンとはたいた。

「お前は強かったよ」

「……弱かった。ナルトくんがアドバイスしてくれたのに……結局負けちゃっ、あぶっ……いたい」

シヨボンとするヒナタをもう一度叩く。

「あのなあ……俺は言っただろ？ 強いつてのは何か？ 精神だとあの時のお前はまさしくあの場で一番強かった。死ぬ限界まで己を変えようと戦ったお前が弱いわけないだろ？ そうだな……身体だけ強くなりたいなら。何か目標……と言うか、何かの為に成し遂げたいと思うのがいいんじゃないか？」

「えっと……ハナビみたいのですか……？」

「いやー……あいつの場合は不純と言うか。まあ、実際それで強くなってるから効果は在ったんじゃないか？」

「ハナビは……ナルトくんにあつてすごく強くなったと思う……身体も心も。今ではお父さんに反発してるもん。わたしは、好きな人つて……いないけど……」

(キバは可哀そうだな。お前の恋愛は敵いそうにない。あんだけわかりやすいのに)

そう言いながらも、ナルトはどこか面白そうにしていた。基本、からかうのが好きなのだ。

「いや、何もそれだけじゃないぞ？ 例えばそうだな……ネジがむかつくならネジを倒したって思うとか？ 漠然と強くなりたいつてのよりいいと思うぞ？ ちなみに、ハナビは俺の隣に並びたいのだとき。わかるかヒナタ？ お前とネジより更に難しいぞ。八陽全員でかかっても勝てない俺と同じになりたいつてさ……まあ、嬉しかったけど。何か目標があるといい」

「……ハナビは幸せだね。そんなに思ってもらえて……私なんか……あたっ」

ナルトはもう一度叩く。すぐに落ち込むのが悪い癖だと言うように。

「自分卑下すんなうざったいから。思ってもらえるんじゃない。思わせてるんだ。思わせるだけ努力したなら、見返りが必要だろ。てか、お前さつきから見てたけど根本的に掌底がおかしい！」

「え？ え？ だってこうだって……」

「違う！ ハナビは全く違うことしてるぞ。まあ、亜流として俺が教えてるんだが……」

そう言つて、ヒナタが突いていた木の前で、ナルトは構える。

亜流ではなく、本当に日向流柔術。

「白眼で見てみる。俺のチャクラの動き。柔拳の基本は、チャクラを手に纏わせるだけだと、威力が通らない。地面に足を踏み込んだ衝撃を、チャクラとしてかけ抜けさせる。そして、衝撃を与えるときに、ちょうど掌に纏うように……っっ」

ナルトは、ズドン、とチャクラを纏った足で踏み込み、力を掌から逃がすように打ちつける。

それだけで、バゴン、と木が折れ、粉々になって吹き飛んでゆく。柔拳により、木の内部から爆発したのだ。

「と……こんな感じだ」

「えっと……すごいけど。フェンス突き破って民家が……」

日向の視線の先には、確かに民家の屋根を破壊している木の破片が……。さすがに破片で屋根を壊すとは、物理的に不可能だと思っていたのだが、チャクラが木々に流され、強化されていたのだ。

「まずい！ 逃げるぞ！ またじーさんに色々言われる！」

「え？ え、キャッ!？」

真っ赤になったヒナタを抱き上げ、ナルトは飛雷神の術を使って移動する。

逃亡中。

「なあ……何か俺誘拐犯になってんだけど？ 化け狐が日向の長女

誘拐したって」

「えーっと……私が昔誘拐されたからまたか、と？」

冗談じゃない。ナルトはただ逃げただけだ。だが、なぜか病院から日向の長女を誘拐したと言う話になった。そして、現在大勢の忍に追われていた。

しかも、化け狐ってことが何故か定着していた。

「つて、危な！」

「キヤッ！」

眼下からの火の塊を避ける。

ナルト一人なら当たっても平気なのだが、ヒナタは別である。消炭確定。

「あれ目的変わってるよな？ ヒナタの捕獲から俺討伐に。あんなの喰らったらヒナタ火傷じゃすまないぞ？」

「おかしいな……何でだろう？」

「さあ」

ヒナタの問いかけにナルトは答えなかった。言ったところで変わらないと思ったからである。

「お前落としていい？」

「無理よ……此処から落ちたら死んじゃうし……」

「どうすっかな……」

ナルトはめんどくさくなっていた。

いつそ殺すか？ と思っていたが、あれは日向の暗部。ハナビに迷惑がかかる。

「それより……今日日本戦じゃない？」

「あ……そう言えば会場に行く途中でヒナタ見つけたんだった」

そのころ、既に開会式は始まっていた。

会場

火影は護衛二人を背後に控えさせ、一番高い位置に座っていた。そこにはほかに四つの空きイスが置いてある。

そこに、風影が到着する。

「遠路はるばるお疲れじゃのう」

やってきた風影に挨拶をする。風影もどうやら護衛は二人のようだ。

「いえ……今回はこちらでよかった。まだお若いとはいえ。火影様にはちとキツイ道程でしょう。早く五代目を置きめになった方がよいのでは……？」

「ハハ……まあそう年寄り扱いせんであらう。まだ五年はやろうと思

「……おるの……」

風影の不躰な問いに、笑いながら答える火影。

「五大国ではあるが、やはり仲は悪い。過去、お互いが争っていた国同士であるのだ。」

「そんなことどーでもえーです。それにしてもめんどーです。勝つなんて主殿にきまつてるしー。早く初めて帰らせれーです」
「!?!?」

いつの間にか、水影が椅子の一つに座っていた。護衛は今回も無し。

「み、水影殿……いつのまに!?!?」

「いつの間につて今。警備が弱すぎねー。横を通ったことも気づかないってありえねーです」

「ハハ……面目ない」

水影のお菓子を食べながらの物言いに、火影は冷や汗を流す。つまり、簡単に暗殺が出来る。と言うことである。警備を強化しようと、心に決めた瞬間だった。

「お久しぶりです……水影殿」

風影の言葉に、仙狐はチラッと風影に視線を向ける。

「“アンタ”とは初めてです」
「……」

その言葉で、何故か風影は、表情を思案顔に変えた。

風影の葛藤などどうでもいいとばかりに、水影はお菓子を要求する。

「では、そろそろ始めますかの……」

火影が立ち上がり、一步前が出る。

「えー皆さまこの度は木の葉隠れ中忍選抜試験にお集り頂き、まことにありがとうございます！ これより、予選を通過した十名の『本戦』試合を始めたいと思います。どうぞ、最後までご覧ください！」

予選より広大な敷地を使つての会場。周りは全ての席が客で埋まっていた。選手は現在ナルトとサスケ以外は来ているようだ。

「……十名なら。二人足りないようですが……」

「言葉にする前に自分でさがせーです。主殿は近づいてますねー。もう一人は誰かしらねーです」

風影の問いには、仙狐が適当に答える。

こんな子供が水影をやっているなど、一体誰が思おうか？ ただの我儘な子供だ。ナルトも後々変えようと思つたが、『こんな楽しんでお菓子食べ放題な仕事やめられない』と、仙狐が突っぱねたのだ。

「サスケは後で来るんじゃよ」

「貴方がたの忍は時間も守れないのですか……」

「砂隠れなんて一人しか残つてないじゃねーですか」

とてもじゃないが、親密な雰囲気とは言えない。

むしろ、一触即発である。

ステージでは、九人の下忍が並んでいた。
たった今、ナルトが現れたから九人である。

「兄様。姉様と一緒にでしたが、どうしたんですか？」

「んー、突きが甘いから教えてたら、日向の暗部に追いかけられた。で、ヒナタを観客席に送ってきた」

事実ではあるが、民家を壊したことなどは言っていない。

「はー……日向は最強の体術つてあの家系は思ってますからねー。他の人が教えるのは許せないんです。わたしは兄様に教えてもらってますが」

「お前も日向だろ？ しかも次期当主」

「え？ わたしは当主になんてなりませんよ。全力で断ります。皆殺しです」

「いいのか……」

「だって、その……」

ハナビがチラチラとナルトを見るが、ナルトは無反応であった。
ハナビはそれを見て歎息した……。

ナルトはハナビの想いに気付いているが、あえて気付いてない振りをしているだけだ。ハナビが嫌いなわけではない。むしろ好きだが、ハナビ一人を優遇すると、フウやヤヒメが暴走するかもしれないのだ。

「いいかてめーら！」

そこで、試験官が口を開いた。

「これが最後の試験だ！ 地形は違うが、ルールは予選と同じで一切なし。どちらか一方が死ぬか負けを認めるまでだ。ただし、オレが勝負がついたと判断したらそこで終わり。わかったな？」

シカマルとテマリが冷や汗を流す。両方が九陽の相手である。下手したら一撃で殺される。

「じゃあ、一回戦は日向ネジ対日向ハナビ。その二人以外は会場外の控室まで下がれ！」

「兄様！ 見ててください！」

「はいはい。わかったから頑張れよ？」

「はい」

そこで九陽全員が消え去る。

それを見たシカマルが、傍らにいたテマリに近寄る。

「なあ、テマリだっけ？ オレ達死ぬんじゃないか……？」

「……アンタだけ勝手に死ぬ」

それだけ言って下がるテマリを見、シカマルは肩を落とす。そして、ネジとハナビだけが残った。

「日向一族同士の戦いか……面白いな」

「日向の天才と、日向の秘蔵っ子ってところだね……」

観客席で見ていた、何も知らない中忍が呟く。

「では、第一回戦始め！」

試験官が合図をするとともに、二人は構える。

ネジは日向流。ハナビは亜流。

「ふむ……あの構え。やはり日向の構えではないか……あれほど言っただがな」

「宗家の者なのに情けない！」

観客席で、ヒアシとその分家の長が会話する。

（だが……あの構えの時のハナビは強い……。負けられないと、自負しているところがあるしな。だが……アヤツには勝てない）

ハナビの亜流の構え。それは、ナルトの構えである。だからこそ、ハナビに負けることは許されない。そして、前に重心をかけたその構えは、攻撃特化。避けることなどはなから考えていない。

勝てないのならば、死んだほうがマシ。

「ハナビ様……あなたはいつまでそのようなお遊びを続けるつもりですか。この一か月も、ずっとあの者達のところに通い。慣れ合って来たのではないですか？」

「ネジ兄様……貴方は何もわかっていません。復讐心しか持っていないアナタは。そんなアナタに、わたしが……負けるはずがない！」

ドンと足元の地面にクレーターが穿たれ、ハナビは一直線に飛翔する。

だが、それはネジもわかっていたこと、軽く横に身を引いて避ける。

「そのような邪流。わかっているれば簡単に避けられ……ッ!？」

横を通り過ぎたところで、ハナビは左手をチャクラで地面に吸着

し、回転するようにその場に停止する。

チャクラを地中深くまで差し込み、急停止を可能にした技である。亜流では、これが出来ないかと自爆することになるのだ。

「……亜流・蜘蛛縛り」

通り過ぎる瞬間に、ネジの体躯に絡まされた鋼糸。それがネジの身体を空中に巻き上げる。

「わかっていませんねネジ兄様……」

「くっ！」

既に背後に移動してハナビが掌底を放つ。

ネジは咄嗟に身をひねって避けるが、右腕にかすってしまふ。

「手加減はしました。ですが、数力月は動かないでしょう」

かすっただけで、ネジの右腕は不自然な方向に折れ曲がっていた。その部分より先が黒く変色している。

チャクラと生命の点穴を突かれ、内部に衝撃を全て放出したのだ。日向流ではありえない、亜流だからこそその柔術。もしこれを日向がみたら、異端だと糾弾するだろう。それほど歪な技。

「くっ……片手で十分だ」

そう言って、ネジは左手を左足に乗せるような、おかしな構えをとる。

「あの構え……」

「あれは……当主様の構えですか？」

（ハナビには驚かせられたが、これは更に驚かされる。ネジがまさかアレを会得してようとは……）

ヒアシがそんな会話を繰り返している中、ヒナタは思う。

（お父さんは知らない。ハナビの本気を……わたしやネジ兄さん、お父さんに怪我をさせないように、いつも手加減していることを……当主にされるのが嫌で、弱いフリをしていたことを……）

ヒナタはハナビとナルトとの組み手を中忍試験で見ってしまった。そのとき、ハナビは今まで手加減していたのだと気付いたのだ。

「柔拳法……八卦六十四掌」

ズザツと、足を移動し、ネジがハナビに迫る。

『八卦二掌！』

点穴を狙った突きを、ハナビは棒立ちしたまま左手でいなす。

『四掌！』

猛攻な突きを、ただ左手だけでいなす。

『八掌！』

『十六掌！』

『三十二掌！』

『六十四しよツくつ!?!』

最後の一発で、ハナビはネジの腹部を蹴り飛ばした。ネジは20メートル程後ろに蹴り飛ばされ、地面を削りながら着地する。

「左手だけで……防いだ、だと……」

「日向一族が、脚で攻撃……」

ヒアシ達が会話している最中、ハナビは俯いていた。そして、右手を前にだし、何かを掴んでいた。

「ハナビ様……あなたは」

「許さない……」

「は？」

ハナビの手に握られていたもの……それはハナビの長い髪であった。ほんのひと房。本数にして約500本。

だが、それだけで十分だった。いや、例え数本でも逆鱗に触れていただろう。

「兄様が……兄様がキレイだと言ってくれた髪を……あなたは……」

「許さない日向ネジ……!!」

「ッ……」

ハナビが顔をあげると、目は真っ赤になり、瞳孔が縦に裂けていた。そして、身体から真っ赤なチャクラがほとばしる。

「なっ!?!? コレは九尾の!?!」

火影や、過去をしっている上忍達が立ち上がる。

だが、何故ハナビがそれを使えるかわかっていない忍がほとんどだ。知っている物は混乱し、対処が遅くなってしまうている。

「あー、あの子が主殿のお気に入りかー。契約させたーですね」

「み、水影殿。契約とは……」

仙狐の眠そうな目をした説明に、火影が慌てる。

「あれっすよー。口寄せ。ただ、相手が尾獣レベルってことはお宅らにとつては人柱力ってやさーです」

「なっ!？」

火影が驚いている中、仙狐は心底どうでもよさそうだった。

妖狐種族は長生きだ。だから放任主義である。もちろん、契約したのはナルトが初めてだが、個々が気にいった相手と契約するならば別に構わない。ほとんどはナルト以外と契約しようとは思っていないようだが。

「そのチャクラはなんだ……」

「わからないですよね……ネジ兄様には。くだらないことばかり考えてるアナタには……。ですが……それで他人の大事なものを壊していいと思ってるんですか？」

ハナビは髪にチャクラを流し、ピンと張らせる。それは、細く、黒い槍のようだ。

「逃げてください……わたしの大事を壊したアナタを……殺します」

「ッ!？」

ネジが逃げるが、ヒュンヒュンと長い髪が突きささる。

「八卦とは……点穴の数が351しかないから、それが最高だと思われがちですか……間違いです。八卦百二十八掌で終わりじゃないんですよ。兄様が使っているのを見て知りましたが」

「何……?」

ハナビは空中に、チャクラで髪 of 槍をうかばせながら続ける。

「生命の点穴を数えれば……最高が1365穴。アナタが切った髪の本数が、493……チャクラの点穴で足りない142穴。生命で補ってもらいます」

ヒュン、とネジのチャクラの点穴に紙の槍が刺さってゆく。まるで、あらかじめ刺さる予定であるかのようにトストスと刺さる。

「チッ! 回天!」

ネジが回転をして、髪を防ごうとするが……、

「ぐふっ……」

「わたしが髪を無駄にするわけじゃないですか? それはチャクラを身体から大量に放出し、回天して相手の技を弾く術。ですが……わたしが髪に込めた想い(チャクラ)はそんなものじゃないんですよ?」

そして始まる、一方的な虐殺。

ハナビの髪はどんどんとネジの点穴に吸い込まれてゆき、更には

生命の点穴にまで入り込んでゆく。

「……ハナビのチャクラと、術……あれは既に日向ではない……」
「はい……あれは体術ですらありません……」

日向として守ってきた伝統。ハナビを当主にした場合。そこで、完全に道を外れてしまう。

そうになると、ヒアシは決断するしかなくなる。

「ハナビを当主にすることは不可能だ……」

「おっしやる通りで……」

この時、ハナビが当主となる宿命は消え去った。それは、奇しくもハナビの思惑通りでもあった。

「あなたは過去のしがらみにとらわれ、何も見ようとしない。そんな盲目の様な目ツ、っで！」
「ぐっ！」

四肢が動かないネジを、ハナビは蹴り飛ばす。
そして、地面に落ちる前に先回りし、上空へと蹴りあげる。

「何も見えないアナタが……！」

影分身をしたハナビが数人上空へ現れる。
その瞬身の速度は、移動の瞬間を誰もが視認することが出来ない程だ。

見えているのは九陽くらいだろう。

「他人をバカにするな……っ！」

「がはっ」

5人のハナビの双獅拳がネジに叩きこまれる。ネジはそのまま落下し、地面を揺らし、地面に叩きつけられる。そして、辺りが土煙に包まれた。観客は、皆息を呑む。

土煙が晴れた場所には、全身の骨が折れ、チャクラが枯渇し、倒れたネジだけが居た。

試験官や、観客は静寂していたが、やがて、試験官が立ち直った。

「しよ、勝者日向ハナビ！」

その声に反応し、観客から大きな歓声が上がる。

ハナビは、ヒアシを見つめる。ヒアシは、ハナビを睨みつけ口を動かす。

“お前は破門だ”と……。

ハナビはニコリとして頷く。

ハナビの姿を風影は、身を乗り出して見ていた。

その目は欲望。一体風影の何がそうさせるのかわからないが、貪欲に、蛇が獲物を見るような、キラキラとした目だった。

そこで、ハナビは火影に視線を移す。

「わたし、日向ハナビ 改め“ハナビ”は木の葉の里を抜けて、九陽の里の忍となります！」

ハナビの叫びのような宣言に、皆が唾然とした。

里抜けは重罪だ。普通、抜け忍として死ぬまで追われることにな

る。それを、このような大きな場で叫んだのはハナビが初めてだろ
う。

ナルトは苦笑していたが、他の九陽は腹を抱えて笑っていた。
そして、仙狐も爆笑していた。

「あははは！ 面白い！ おもしれーです！ ハナビちゃん！ こ
の水影が許すです！ 九陽の里はハナビちゃんを歓迎すーです！」
「み、水影殿！？ これは我々の問題であって……」
「関係ねーです。ハナビちゃんは既にうちの里人けつてーです」

仙狐は口寄せで、ナルトのお下がりである羽織と、額当てを取り
出し、ハナビに投げつけた。ハナビの疑似尾獣である、九尾の刺繍
が入った羽織り。

ハナビはそれを受け取り、羽織をはおり、額当てを首にかけた。

「里抜けは大罪だとわかっているのか？」

ハナビの周りに大勢の暗部が集まるが、次の瞬間壁まで弾き飛ば
された。

上空から降りてきた白い羽織をはおった者達に。

「ハナビは俺達の里の人間だ。勝手に手を出さないでほしな」

それはもちろん九陽達である。

「里人は家族。それはどこもおなじなんだよー？」

「……触れさせない」

フウヤヤヒメが続けた。

更にそれを取り囲むように、木の葉の忍が現れる。

「うむ……試験が終わったら話し合いと言うことでいいかのう？」

「おっけーです。あーでもめでーですから本人達だけでよーです」

仙狐は既に興味を失ったのか、お菓子を食べていた。

火影が後で話すとのことなので、木の葉の忍達は睨んでくるが、ハナビをそのまま通した。ハナビは木の葉の控室にはいかず、九陽側にやってくる。

「いやーにしてもハナビには驚いた。堂々と里抜け宣言だもんなー」

思い出したのか、フウや多由也、君麻呂が笑いだす。

「本当は抜けるつもりはなかったんですが。さっき破門って父様に言われました。後、きーちゃんとずっと居たからかもしれないが、きーちゃんがいなくても最近じゃ襲われます。狐に誑かされたとか言われて」

言っていることは過激だが、ハナビは嬉しそうだった。

「まあ、ようこそハナビ。九陽の里へ」

「はい」

ハナビの笑顔を見、そして視線を運ばれてゆくネジに移す。

「お前さっきのわざと外した？ それとも全力？」

「わざとですね。だって、生命の点穴なんて突いたら死点以外でも動かなくなっちゃいますし。最後あの人が崩れたのは思い込みです。思い込みは一種の幻術って本当でした」

その言葉でナルトは確信した。

ハナビは間違いないく九陽側に染まってきていると。このまま木の葉ではやっていけないだろうと。

九陽は別に人を殺すことが楽しいわけではない。ただ、その方が後腐れなく、簡単に方がつくからそうしているだけである。ハナビも、あそこで殺したら日向の跡取りがハナビに確定してしまうと思いい、あえて殺さなかったただけである。その考えは木の葉では受け入れられないだろう。

「まあ、九陽の里についてくるのはいいが、実力的には微妙だからマンセル組んでも特Aが精いっぱいだぞ？ ネジなら弱いから大丈夫だったけど、カカシ当たりだと簡単に殲滅させられる」

「うー……確かに。速さもないですし……鋼糸は細さが足りなくて束縛以外に使えないです。兄様のところだとわたしはどれくらいの強さですか？」

ナルトは少し考えた。術の数、速さ、威力。チャクラだけは狐を飼っているので計算外だ。

「んー、下忍と中忍の間？ 術が鋼糸と日向流の亜種だけだし……。あとは幻術を解くくらいか。手が少ないとそれだけダメだ。次の試合は棄権した方がいいかもしれない」

「むー……わかりました。勝てる気がしませんし、修行してからです」

次の試合はハナビ以外全員が九陽になるだろう。そうしたら、尻尾の形成が出来ないハナビなど、手加減されても一撃で死んでしまう。

「とりあえず、木の葉の修行の百倍くらいつらいから覚悟しとけ。
実際心臓止まるまでしたりするし」
「はいっ」

ナルトは、本当にわかってんだかわかってないんだかなハナビの
頭を撫でながら、天を仰ぎ、歎息する。

試験終了後の面倒事を考えて。

（てか、火影のじーさん過労で倒れるんじゃないか？）

018 ハナビVSネジ(後書き)

二話で眠くなってきた。
頑張る。

019 ハナビのロイヤルストレートフラッシュ！(前書き)

何か投稿なかなか出来なくてホントすみませんって感じでした。

ずっと投稿してなかったから毎時ユニーク50くらいでしたb
投稿したら1500くらいに増えてちょっと面白かった。それを見
てどれだけ投稿してなかったか思い知りました。すみません。

019 ハナビのロイヤルストレートフラッシュ！

医療室。

そこは、ネジが運ばれた医療室であった。
意識は取り戻しているが、チャクラは枯渇している上に重傷すぎて立てないでいる。

そこに、一人の男がやってきた。

「済まないが、少し席をはずしてくれ……」

「あ……はい」

手当を終えた医療忍者は席を外す。

「……何の用ですか……ヒアシ様」

「……」

ネジは口だけを動かし問いかけた。声が出ることで、手加減されたのだと思い余計にいらついていた。

「よかったですね。宗家の娘が分家に勝って。これで家の面目が立ちますでしょう」

「……ハナビは日向を抜けた」
「なっ!？」

ネジも抜け忍がどのように扱われるか知っている。だからこそ驚いた。しかも、アレ程の才を持つならば、アンチが居なく次期当主

だっただろう。

「何故ハナビ様はそのようなことをしたのですかっ!？」

「違う……私が破門したのだ」

「つまり……木の葉に居場所がなくなり、ハナビ様は抜けたと？」

「ああ……お前もわかっているだろう？ ハナビの体術はもはや日向ではない。そして、戻す気もないようだ。ならば、アヤツは日向に必要がない」

その言葉を聞き、ネジはキレた。もし身体が動いていたら殴りかかっていただろう。決して敵わないと知りながらも。

「あなたはっ！ そうやってすぐ人を切り捨てる！ 娘だろうと弟だろうと！ 自分に必要があるかないかだけで……」

ヒアシは黙りこみ、やがて口を開く。

「お前に……真実を伝えよう……」

「……真実？ まさか今更弁解しようとしても……？」

「……」

「……」

二人は黙りこみ、ヒアシが重い口をゆっくりと開き紡ぐ。

「あの時……私が死ぬつもりだったのだ……」

「ッ!？ いまさら何を言っているのですか!？ あの時……あの時私の父はアナタの影武者として殺されたのですよ!？ それ以外の真実などありますか!？」

「結果的には……そうとられても仕方あるまいが……それは事実ではない」

ネジもわかっていた。真実は違つたろうと。なぜならネジは憶測で仮定を立てたのだから。だが、何度も調べて立てた憶測である。

「話そう……全てを……」

そう言い、ヒアシは思い出すように目を瞑った。

“そのとき、ヒナタを助けるために、日向の暗部は多数の雲隠れの里の忍を殺した。だが、誘拐していたのは木の葉の里の者であった。実際は、操られたか雲隠れの者が木の葉に潜入していたのだろう。だが、証拠がなかった。実際その忍は木の葉で登録されている。雲隠れの里などとわからなかったのだ。

一方的に殺されたと言いがかりをつけ、戦争を仕掛けると言つて来た。さもなければ、日向の当主をよこせと。日向の血継限界である白眼を調べ、移植するために。

「仕方ありません……。私一人の命で里が救えるなら」

「ヒアシよ……早まるでない。日向の血継限界は里にとって重要な切り札じゃ。永劫、それを守り続けるのが宗家のお役目じゃろう？」

ヒアシの決定に、ヒアシの父親　当時の当主は異をと見える。

「……しかし、そのお役目の前に、里を絶望的な戦争に巻き込んでしまつては……」

「わかつておる……だからその為に分家がおるのではないか。お主の弟、ヒザシの死体をお前の影武者として引き渡すしかない」

ヒアシはその物言いに心底驚いた。確かに弟と仲が良くない。だが、それは人間として出来ることではない。

「ヒザシも了承済みじゃ……………」

「しかしっ!」

「ヒアシ……………来る時が来たのじゃ……………。どの先代もそうして血を守ってきた。血の為なら、切り捨てる心を持つものじゃ……………! それが宗家の宿命……………日向に産まれた者の運命じゃ……………」

「くっ」

それでも納得など出来るはずもなかった。

「いつも強気なヒアシ様は何処へ行ったのです?」

「……………! ヒザシ! これは今までとは事の大きさが違う! そう簡単には…ッ!?!」

ヒアシは最後までその行いを否定していた。

だが、業を煮やしたヒザシは、行動へ移る。ヒアシの無防備な腹部に、ヒザシが突きを刺したのだ。

そして、ゆっくりと倒れ伏すヒアシ。

仰向けに倒れた状態で、ヒアシはヒザシを睨みつける。

「……………ヒザシ……………お前……………」

「私に行かせてください」

無表情で淡々と言葉を発すヒザシ。

「お……………お前にはネジだっている……………何故宗家の為に死を選ぶ……………」
「それは違います……………」

ヒザシは、ヒアシに背を向け、部屋を出て行く途中で立ち止まり、
呟く。

「私は宗家を恨んできました。正直今でも憎い。だからこそ……ア
ナタを宗家としてではなく、私の兄として守って死にたいのです。
そうすることが、分家の私にとって初めての選ぶことが出来る自由
なのです」

宗家に使われ続けてきた分家。だからこそ、一瞬でもいいから自由がほしい。選択としての自由。例え死ぬことになったとしても、最初で最後の反旗。

「ネジにはこう伝えてください……私は宗家を守るために殺されたのではなく、ネジや兄弟、家族、そして里を守るために自らの意思で死を選んだのだと……」

「……自ら死を選ぶことが自由だと言うのか……？」

「兄さん……私は一度でいい、日向の運命に逆らってみたかった……自分で運命を選んでみたくなった……ただ、それだけです」

そう言って、ヒザシは部屋を出て行った。もう二度と戻ることはないだろう部屋を。”

全ての話が終わり、ゆっくりとヒアシは瞳を開く。

暫くの間、水を打ったような静寂が二人を包み込んだ。

「これが真実だ……」

「くっ……！ そのような話を信じられるとでもっ！？ 宗家の作った都合のいい言いわけにしか聞こえない！」

「そう言われるとわかっていた……だから時を置き、今伝えた……」

「チッ……」

「私は……宗家としてではなく、弟が兄弟として救ってくれたよう

に、兄としてヒザシの最後の言葉を、ヒザシの息子に伝えておきたいのだ……」
「何を!？」

ヒアシは深く土下座をしていた。宗家としては出来ないが、兄として土下座を。

「信じてくれ……」

その、当主にあるまじきヒアシの姿を、ジッとネジは見降ろしていた。

そして、諦めたようにため息をついた。

「……頭を……上げてください」

それだけ紡ぎだし、ネジは黙りこんでしまった。ヒアシも言うことが無くなったのか、部屋を出て行った。もしかしたら、ネジが自分と顔を合わすのは嫌だろうと思ひ、気を使ったのかもしれない。

ヒアシが出て行ったあと、ネジは窓の外を見た。そこには、バツクに透き通るような空を彩った、花弁が舞い落ちる桜の木があった。それは美しく、ゆっくりと、ゆっくりと花弁を落としてゆく。

(父上……人の運命とは雲のように流れにのってうかんでいるしかないのか、それとも自ら選んだ流れに乗ることが出来るのか……それは未だによくわかりません。後者の生き方を選ぶとき……人は生きる目的に向かって頑張れる。そして、それを持つ者が本当に強いのだと、この戦いでやっとわかったような気がします。“運命程度に負けてる人間に負けるはずがない!” 確かに……ハナビ様が言った通り、あの時の私はただ復讐を願う逃亡者だったのかもしれない)

ん……)

フッと笑顔を浮かべ、窓の外を飛んでゆく鳥を見つめる。自分もあのように、自由に力強く、羽ばたいてみたいと。

(もっと強くなりたい。誰にも負けなくらい……今はそう思います。父上)

「父上……今日は鳥がよく飛んでいます。とても気持ちよさそうに……」

呟いた言葉と、流れる涙は、本人以外誰も知らない。

会場

「第二回戦。奈良シカマル対フウ。下へ！」

試験官が呼ぶと、フウがすぐさまその場に現れた。

「奈良シカマル下へ！」

「うおー！ マジ殺される！ よし、此処は棄権」

「行ってこーい！」
「わわ、待てい」

背中をいのに押され、シカマルは無様にドサリと音を立てて落下した。

「コラー！ さっさと試合しろー！」
「いつまで寝てんだ。立て小僧ー！」

観客席からヤジが飛ぶが、シカマルは頭をかきながらゆっくりと立ち上がる。

お前等オレの立場になってみるよ、と。

「それでは、第二開戦開始してください！」
「あー……めんどくせー……。でもやるからには男が女に負けるわけにやいかねーしなあ……。まあやるか！」

シカマルがやっと構えをとる。

「フウ……面倒だから速攻で終わらせろ」
「はーいー！」

フウはナルトの言葉に元気な返事を返し、ドンとクレーターを作った。チャクラを爆発させ、一気に飛翔したのだ。

フウは一瞬で意識を狩り取ろうとしているようだが、
だが、途中でピタリと動きが止まった。

「！？ あれ？ 身体が動かない？」
「影真似の術、成功！」

全く動けないフウをよそに、九陽達は呆れていた。

「兄様。フウちゃんつかまっちゃいましたね……」

「だなー。フウが他より弱いのもあってあの性格からなんだよ。素直すぎてフェイントもなんもないからな」

「……ただのバカ」

そう言いながらも、負けることはないだろうと全員が思っていた。

シカマルは腰からクナイを取り出す。フウも同じ動きをするが、フウはクナイなどもっていないのだ。

「女傷つけるのなんて出来ねーしなあ……棄権しないか？」

「うーん……それでもいいけど、おにーちゃんに勝ってって言われたからな。おにーちゃん！ 混化していい！？ 負けちゃう！」

フウは大声でナルトに叫んだ。

「おー、ただしゼロ尾まで。あと殺すな」

「わかったー！ じゃあ、行くよ？」

シカマルに嫌な汗が頬を伝い、『オレの予感当たるんだ』と、慌ててクナイを投げつける。

「なっ!?!」

だが、フウの身体の直前でキンッと何かに弾かれる。

そして、フウの瞳は真緑に染まっていた。

フウは手足を動かし、問題が無い事を確認し、口の端を吊りあげるように笑みを浮かべる。

「ッ!? なんだこのチャクラ……!? 影真似かけたほうが操られるなんてありかよ!」

フウはそのまま歩き出し、シカマルを殴ろうとする。ただ、シカマルも同じように腕を振り上げ……。

「いつッ!」

バキッ、と音がして、シカマルの筋肉の線維が切れ、同時に、殴った腕が折れる。

リーチが長い分シカマルの方が早い、フウの速度とチャクラの防御に身体が耐えきれなかったのだ。

そして、フウの拳がシカマルに届く。

ゴガンッ、と音を立て、100メートルは離れた背後の壁にぶつかる。同時に、影真似の術は切れる。

やがて、煙が晴れると、シカマルは右腕を押さえて壁に張り付いていた。

「あーくっそ。だからやりたくなかった……。あの身体であの腕力って反則だろ……?」

「シカマルー頑張れー!」

「頑張るっつったって……印組めないぞ」

右腕を潰され、既に印は組めない。

(物理攻撃は効かない……影真似は無理。そもそも印が組めない。主人公っぽく覚醒しない限り無理じゃないか……? 何手先を読んでも攻撃が効かないんじゃないかな……)

シカマルが考えていると、フウは地面に落ちている石を拾っていた。

「何するつもりだ……?」

そして、フウはその石を空中に浮かせる。

「行くよー!」

「って、マジかよっ!?!」

ドンドンドンとシカマルが先ほどまでいた壁が、大砲をくらったようにはじけ飛んだ。

「むー、避けないでよ?」

「アホかっ!?! あーもう! 九陽の里は皆化け物揃いかよ!?!」

あ……」

シカマルがそう言った瞬間、フウの雰囲気が変わった。

「あっ! 待て待て嘘だ! 普通だ普通!」

シカマルはナルトに、サクラが化け物と言った時のことを思い出していた。九陽への禁句は化け物だ。だが、本当に化け物のような威力で口が滑ってしまったのだ。

「化け物……フウは化け物じゃない。そんな酷いこと言う人間は……死んじゃえ」

フウの周りのチャクラが変形し、空中に大量の針が現れる。

「大スズメバチの毒はー強いよ？」

バシユバシユっとな音がして、針が次々と飛翔してゆく。
当たった部分は変色し、やがて溶けてゆく。

「おい！ その何処がスズメバチだよ！？」

「ちよつと強力な毒だよ」

「あぶなっ！ って！ まっ、てっ！」

シカマルが次々と避けて行くが、永遠と飛ばされる針にやがて疲れてくる。

「やばい…てか降参！ 降参します！」

「勝者フウ！」

だが、フウは全くやめない。

「めんどろうだからこれでー」

フウのチャクラが変質し、大量の大スズメバチになる。

「追いかけるー」

「って、もう終わってるって！」

ブーンと音を出して飛んでくるスズメバチから必死にシカマルは逃げ続ける。

会場は生温かい空気に包まれていた。妹と遊ぶ兄を見ているような。妹が残虐だが。

「とりあえずフウ戻ってこい」
「はい！」

フウが戻ってきて、ススメバチは消えたが、シカマルは刺されすぎて倒れ伏していた。

「あれくらいのもで倒れるか普通？ 君麻呂。解毒薬掛けといて」
「はい」

君麻呂に指示を出し、ナルトは大きいため息をついた。

「フウ……もつといいやり方なかったのか……？ てか出来たる？」
「近づいて殴ればよかったんだけど、あの人逃げ方が面白かったら楽しくって……えへへ」

フウが嬉しそうなのでナルトは良しとした。化け物って言われたのは忘れてるが、本人が楽しそうならいいかなと。

シカマル自信は、別に尾獣の事で化け物って言ったわけじゃないのだから、ナルト的にはどうでもよかった。ただ、フウはまだ頭が弱いので、過剰に反応してしまっただけだ。

「えーっと、次はヤヒメか……殺すなよ？」
「……うん。ちょっと遊んでくる」

中心に歩いていくヤヒメを、羨ましそうにナルトは見つめていた。

「どうしたんですか？ 兄様」
「いや。ヤヒメの相手のテマリってなんだがS心をくすぐるんだよな。泣かせてみたい」

「……」

ハナビは、そんなナルトを見ても変わらない気持ちに戸惑っていた。

「あれ我愛羅の姉だけどいいのか？ ヤヒメが相手じゃ死ぬかもよ？」

「……関係ない」

そうこうしていると、ズドンと、地面が揺れるとともに大きな音が聞こえてきた。

振り返ってみると、障害用の岩や木。試験官とテマリが地面に深く埋まっていた。

そして、歩いて帰ってくるヤヒメ。観客は茫然として声すら出ない。

「……ただいま」

「遊ぶんじゃなかったのか？」

「……気が変わった」

ヤヒメはナルトがS心がくすぐられると興味を示したので、速攻で潰したのだ。嫉妬深い少女だった。

「まあ、よくやった」

「……撫でて」

「ああ、よくやったなー」

「……うん」

軽く頬を染め、ヤヒメは嬉しそうに撫でられ続けた。

「でも試験官まで潰すとはえげつない程ピュアだなヤヒメ」

「……そんな褒めないで」

「兄様……九陽ってこんな感じなんでしょうか？」

ハナビは今更ながら色々後悔していた。

「試験官を交代し、次は我愛羅対多由也」

「んじゃ、カード配るから大貧民ね」

我愛羅と多由也が出て行ったあと、ナルトがトランプを配り始めた。

「兄様。見なくていいのですか？」

「あいつらの試合は長いんだよ。だから、一時間超えて勝負つかなかったら両方棄権させることになってる」

ハナビがステージを見ると、我愛羅の砂が多由也の笛で動きを止めていた。だが、我愛羅も砂に命令し、拮抗している。ものすごく地味な戦いである。

「賛成です兄様。大貧民しましょう」

「んじゃルールは革命在り、階段、縛りで。もちろん八切り在りで」

ナルトが順番にカードを配ってゆく。

参加人数は5人。

「んじゃハートの3もってる奴いる？」

「フウがもってる！」

「んじゃフウから右回りで」

そこで、何故かハナビがニヤニヤしていることに気付いた。

全員が革命　四枚同じ数字を持っているだろうと予想した。
だから全員が大きなカードを出してゆく。

「次ハナビだぞ？」

「フフフ……きました遂に。これなら確実に勝てる……」

ゴクリと唾を飲み込む。そして、ついにハナビが最高の一手を打ちだした

「ロイヤルストレートフラッシュです！」

全員が戦慄した。まさか大貧民でロイヤルストレートフラッシュを使う人間がいるのかと。

確かにポーカーなら最高の手だが、これは大貧民である。そもそも、その余った手札をどうするつもりなのだろう。

九陽は視線を交差させ、頷いた。

「あー、負けた。よし、配りなおすから次はポーカーやろう」

「そ、そうだね。フウもポーカー好き」

「……異議なし」

口々にポーカーに変えることを承諾する。ただ、一人を除いて。

「あ、わたしポーカー知らないです」

皆が口をポカンと開き、目を見開きながらハナビを見つめた。
さっきロイヤルストレートフラッシュを出したのはハナビだ。
確
実に知っている。

だが、此処でさっきのと教えれば、ハナビの心に傷が出来る。仕方ないので、

「ハナビは何かトランプで他の遊び知ってるか？」

「えーっと。ツーテンジャック、ナポレオン、ラミー、二・八、レツドイットラッグ、51、ゴニオン、コントラクトブリッジ、カリビアンスタッド、カナスタ、ウインクキラー、29、スカート、バイスクルくらいですね」

もう全員がおかしくなるほど目を見開いていた。

なぜそんなマイナーな物ばかり知っているのかと。10人居て知ってる人が一人いればいい方だろう。

「あ、あとカルタ」

もう誰も何も言えなかった。最後にいったのはトランプ違うし。結局、トランプ版カルタと言う意味のわからない遊びになった。ついでに、ハナビは慣れていたらしく大勝をおさめた。

「あ、次は花札やりましょう」

九陽は疲れていた。一時間程ハナビのよくわからない遊びに付き合わされて。

花札トランプ版なんて想像もできない。

ちょうどその時、我愛羅と多由也が返ってきた。ぼろぼろの服で。

「結局棄権か？」

二人は軽く頷く。

ナルトは荒れたステージを見てため息をついた。

019 ハナビのロイヤルストレートフラッシュ！(後書き)

何でトランプ知ってんだーって思うかもしれませんが、ご都合主義
バンザイ。

ついでに描写手抜きでごめんなさい。

会場

一方、火影サイドでも大変である。

なぜならサスケが来ないのだ。ほとんどの国の重鎮は、うちは一族の最後の生き残りであるサスケ目当てで来ているのだ。もし棄権なぞさせたら、暴動が起きる可能性だってある。

もちろん、九陽を目的にしているものもおおいが、同じくらいサスケも注目されているのだ。新参の里より、歴史を積み重ねた木の葉のエリートであるうちはが見たいとのこと。

「ところで……彼はもう此処に？」

風影のイライラとしたような問いに、火影が答えようとすると、火影の護衛が小声でみみずさんで来た。

（それが……サスケの消息がつかめません。大蛇丸のこともありませんので、皆が騒ぎ出す前に彼を失格に……）

火影も、最悪それしかないと考えていた。それ相応のいいわけも考えてある。

「…やむおえんか…：ルール通り、サスケは失格とする」
「火影殿…：うちはサスケの失格は少しお待ちいただきたい」
「？」

風影の宣言に、その場の木の葉の忍が驚いた。

他里の忍を擁護するなど、普通はない。しかも、風の国の忍はもう残っていないのだ。早く終わらせたいところだろう。

「お言葉ですが、忍において時を軽んじる者はどんなに優秀とて中忍の資格はない。ここに来られている忍頭や、大名たちが納得するような明解な理由でもなければ…：彼を待つ理由がありません」
「…なるほど。それなら十分な理由がありますよ…：」
「「！？」」

風影は火影を鋭く見つめ、続ける。

「私を含め此処にいるほとんどの忍頭や大名は…：うちはサスケを見たいがために此処に来たようなものだ」

「しかし…：」
「何せ彼はあの“うちは”の末裔…：」

その会話を聞き、仙狐はかったるそうに眉を寄せた。

「うちはだかうちわだから知らねーですけど、やるんなら早くやってくださいです。そもそも、“風影っばい”やつがうちはみてーだけでしょ？ さっきから大名や忍頭がうちの九陽の情報メモしてーですよ。そんなうちはサスケ以外屑みたいに言われるとしんげーです」

仙狐は、時間の無駄だと口を尖らした。残っているのが全て九陽

の忍なのだから当たり前だ。これでうちはサスケが現れないと、完全に九陽の忍以外居なくなる。そうすれば、仙狐的には試合を終わらせて終了したいところだ。別に中忍など自国であたえればいいのだから、時間の無駄にしかならない。

「次の試合はどうなってるー！」

「うちははまだかー！」

やはりというか、観客席からブーイングが流れてくる。

仙狐は視線を移動し、ある一点を見つめる。

風の流れが違う会場の一点を。

「来たみてーですよ」

「え？」

その時、ステージでブワッと木の葉が舞、その中からサスケとカシが現れた。

「ってわけで、早くやってほしーです。ねみーですので」

ステージでは、サスケの元にナルトが歩いて向かっていた。不満たらたらです。と表情だけでわかるような顔で。

「おせーな、全く」

「フ……お前に勝てると思ったら楽しみすぎて眠れなかったからな」

「よくこんな夕方まで寝れたな」

「……」

サスケがカツコよくきめたセリフは、ナルトによって崩れ去った。

「おい！ あれがうちの末裔か！？」
「うちの試合がはじまるぞー！」

観客の興奮が次第に高まってゆく。ステージに居てもそのざわめきが聞こえてくる程だ。

「サクラー！ アンタんこのチームってスゴいわねー！」
「何があ？」

「だって、ハナビなんてあの年で下忍最強って言われていたあの日向ネジを簡単にやつつけちゃったし。サスケくんだってうちのエリート。みんなサスケくんの試合観たくてウズウズしてる人達ばかりみたいだしねー！」
「う……うん」

サクラは、いのにまくしたられるようにそう言われたが、不安だった。

相手はナルトなのである。例えうちがエリートだろうと、そんな常識は通じないのだ。

「全く！ アンタが信じないでーすんのよ？ ホラ、応援！」
「そ、そうだね！ サスケくん！ 頑張ってー！」
「兄様がんばってー！」
「……」

ハナビが控室で、サクラの応援に對抗していた。

「ハナビって同じ班よね？」
「ハナビはナルトさん大好きだから……」

ハナビのことを知っているサクラは、苦笑した。

ハナビにとってサスケなどどうでもいいのだから当たり前だろう。

眼下では、ナルトがサスケと対峙し、身体を上から下に流し見ている。
いた。

もちろん、輪廻眼を使つて内部まで。

「サスケ。呪印は使っていないだろうか？」

「ああ」

その答えにナルトは安心した。もし、此処で呪印が残っていたら、サスケは大蛇丸が連れていくだろう。

だが、あれから一か月が立っている。それなら呪印はもう消えている。正確には、体内に残っているが、あと数日で消えるだろう。

サスケが呪印の力を強く望まない限り、それは出てくることはない。

「ナルト……あの封印はお前がしたのか？」

「そうだが、悪かったか？」

カカシは首を横に振り、ニカッと笑つて親指を立てた。

「パーフェクト。合格」

「……何が合格だったの。だが、安心するなよ？ 呪印は消えたが、体内に残滓が残ってる。あと数日使わなければ消えると思うが、今此処でサスケが力を望むと、出てくるからな？ 出てきたら俺は、サスケを殺すぞ」

ナルトの発言に、カカシはへらっとした表情から厳しい表情に戻り、控室に下がる。

実際は殺すつもりはない。此処で殺すと、ルール上ではOKだが、

木の葉の重役がうるさいだろう。なんたってうちはの末裔だ。理屈としてはOKでも、場合によっては戦争になりかねない。ナルトは別に殺しが好きなわけではない。殺すことを躊躇わないが、理由もなく殺す程バカではないのだ。面倒事が増えるだけだし、相手の立場に立って考えると殺しは推奨できないだろう。理由もなく殺されるなど、もし水の国の民が殺されたらと思うと、当然報復しようと思う。

「それでは、第五回戦。風巻ナルト対うちはサスケ。始めてください」

「……ナルト。オレはお前とやりたかった。お前を越えなければ強くなった気がしねえ」

「たった一か月で俺に勝てるだけでも？ 甘く見過ぎ」

（今はまだコイツは無理だ。強く反発するようにみじめに倒してやるか。成長に期待かな）

ナルトとサスケはお互いにニヤニヤと笑い、後ろに飛びずさった。

「だったら見せてやる！ この一カ月でどれだけオレが強くなったか！」

「見せてみるよ……うちはサスケ！」

《火遁・豪龍火の術》

サスケの口から大きな炎龍がナルトに飛翔する。それを見、観客が更に沸く。

だが、ナルトは眉を潜めていた。

「その程度で俺に勝てるだけでも？」

《風遁・大突破》

ナルトの口から出される暴風に、火の龍が拮抗もなく相殺される。大きな爆発が起こり、辺りを土煙が包み込む。

「龍の中に入ったか！ やるな！」

サスケは龍の中に入り、龍が吹き飛ばされると姿を現した。

ナルトはサスケの手にある電気の塊を見、自分も手に風を収束させる。

《千鳥！》

《風遁・螺旋丸！》

二つの大威力の術がぶつかり、辺りの地面や木を弾き飛ばし、先ほどよりも大きな風を起こす。

もっとも、ナルトは手加減をしているが。

そして、仕切り直すと二人は後方に飛びずさる。

どちらも傷はなく、相手を睨みつけているだけだ。

「さすがに、この程度じゃダメか」

「つたりめーだろ？ てか俺が見せた技じゃん。オリジナルを見せ
てみる」

「上等！」

ニヤニヤと笑う二人は、傍目には気持ち悪かった。

だが、周囲はそれどころじゃなかった。観客は、あまりの応酬に声を失っていた。

これが下忍同士なのか、と。

「螺旋丸……ミナトの術か。やはりナルトは使えるんじゃない……」
「何言つてーです。あんなの二歳で覚えてーです」
「なっ!? ナルトはそのような年から修行していたのか?」
「産まれた翌日には変化の術使つてたつすよー。だって、そうしな
いと生きていけねーですから」

火影は絶句していた。生きていけなかったということに対してだ。
やはり、ナルトを保護できなかったことは失敗だったと。

だが、生きていけないと言う理由が違った。ご飯が食べられない
から生きていけないのだ。決して命を狙われているからではない。
もちろん、今は狙われているのだが。

「気にしねーでいす。産まれたときからウチ等がせわしてーです
から」
「……」

見た目12歳の少女に言われても全く世話出来るようには思えな
かった。

眼下で対峙する二人。

まずはサスケが動いた。瞬身で一気にナルトの背後に移動する。
だが、完全に見切られている。それに気付いたサスケは、ワイヤー
を引っ掛けナルトを飛び越えた。

《火遁・龍火の術》

ワイヤーを伝って火が奔る。

それを見たナルトは、『バカか?』と呟き、呆れ果てていた。

「火は効かないって言っただろ？」

そのワイヤーの上を蒼炎がサスケに向かって走る。ぶつかった蒼炎は、赤い炎を一瞬で消し飛ばし、サスケに襲いかかる。

「うああああ！」

サスケの身体を蒼い炎が包み込む。

だが、それはボンと音を立てて木に変わる。身代わりだ。

《千鳥！》

ナルトの背後にいつの間にかサスケが居、不意を突かれたナルトの腹部に千鳥がめり込む。

そして、ナルトは壁まで吹っ飛び、轟音を立てて壁にめり込んだ。壁が壊れ、その中にナルトは埋もれてしまっている。

「サスケ。よくやったが……あれをそのまま当てるなっていうた
だろ？ 死んだぞ？」

「来るなっ！」

近づいて来ようとするカカシを、サスケは静止させる。

試合中にステージに入ったら失格だ。相手が死亡したか気絶している以外で。

そこで、サスケを見ていたカカシは、あることに気づく。

「サスケ……その腕どうした？」

サスケの右腕は、真っ黒に火傷をしていた。否、墨化と言えるだろう。

「千鳥を打ち付ける瞬間。千鳥ごと全て燃やされた。だが、印を組むのに問題はない」

カカシは目を見開いた。アレは完ぺきなタイミングだった。それでも無理だとすると、倒す手段はない。なぜなら、一か月の間、サスケは体術と千鳥しか覚えていないのだから。

千鳥は当たれば、確実に勝敗が決する威力を秘めている。だからこそ、カカシはそれを徹底的に教えていたのだ。

そして、反撃できたと言う事は

「おいしい。だが、甘い。威力と速さがない」

ジユウ、と周囲の壁であった石を溶かしながら、ナルトは無傷で現れた。

身体の周りには蒼い龍が撒きついている。

その圧倒的なチャクラに、火影はおろか、周りの人間全てが言葉を失う。

唯一平気なのは、九陽達だけ。ハナビは『さすが、兄様です』と、絶賛していた。

サスケは結果を分かっていたのか、ほくそ笑む。

「そーでなくっちゃな……」

「だろ？ お望み通り無傷って……な？」

「ッ！？」

サスケが瞬きした瞬間、ナルトは消えていた。それを見たサスケ

は、すぐにその場を飛びのこうとするが、背後から殴られ、上空へ飛ばされた。

《風遁・花散舞》

大きな桜の花びらが入った台風が現れ、サスケを更に上空に巻き上げる。

ちなみに、花弁はチャクラで出来ているものだ。

《影分身の術》

上空から声が聞こえ、サスケが10人程現れる。

「お前いつ覚えたよソレ!？」

「アンタのを見て覚えた」

「写輪眼卑怯すぎー!」

その10人全員が印を結ぶ。

そして、10の大きな龍が現れる。

それがナルトにぶつかる瞬間、ナルトは既に上空に移動していた。

サスケはニヤリと笑う。

「誰が火遁・豪龍火の術って言った？」

龍は方向を変えて、ナルトを追う。

「火龍炎弾覚えてたのかよ!」

その10匹の竜は、ナルトにぶつかる瞬間、大きな爆発を起こし

て消え去った。

方向転換が出来ない火遁・豪龍火の更に上の難易度、火龍炎弾。規模も大きくなり、操作が可能となる。上忍でも一握りの者しか使えないだろう術だ。

「ったく……人の話は聞け。俺に炎は聞かないんだっつの……」

「あの火力でも無理か……ッ！」

ナルトは両手に絡みつかせた蒼い炎の龍を、鞭のようにサスケに叩きつける。

サスケは避けたが、地面が陥没し、黒い焦げ跡を作っている。

蒼い炎の龍は更に振られ、何度も地面に叩きつけられる。サスケはそれを避けているが、打開策が無ければ、いずれ消炭なるだろう。

「ちなみに、残った影分身で攻撃しても無理だぞ？ 気配丸わかり」

ナルトは後ろを見ずに、炎で影分身を焼きつくす。

「ぶつちやけ遅いんだよ」

「なっ!？」

写輪眼を使っても見切れず、上突如として空に現れたナルトの、蒼い炎の龍で殴られる。

ナルトはほぼ燃烧能力を消しているので、サスケは無事だが、衝撃は半端ないだろう。もともとナルトは、サスケを殺そうとはおもっていない。するつもりなら、最初から会場ごと燃やせばいいだけなのだ。

出来るだけ、憎しみを抱いてほしいのだ。サスケのような人間は、憎しみが強ければそれだけ強くなれる。自分が圧倒的に劣っていると思わせれば、死ぬ気で努力するだろう。

「一か月程度の付け刃でどうにかなると？ 俺が12年間休みなく修行してきた成果を越せると？ んなわけないだろ？」

ドンツドンツ、と籠を叩きつけ続けるナルト。熱を取っており、ただの衝撃だが、地面が陥没するほどの衝撃である。

「そんな強くなりてーならもっと修行しろ。木の葉で赤子でも出来るような任務じゃなく、もっと死闘するような任務でも受けてな」

サスケがクレーターの中で倒れ伏しているの一瞥し、歎息した。もう勝負はついた、と。地上に降り、サスケに背を向ける。

「……さて」

「あ？」

背後から聞こえてきた弱々しい声に、ナルトは、まだやるの？ 時間の無駄だが？ と、視線を戻す。

「それでもオレは強くならねーといけねー」

サスケはボロボロの姿で、腕に千鳥を作り、立ち上がっていた。

「一言言おう。そもそも、千鳥の威力が全然足りない。さっき言っただよな？」

ナルトは両手に千鳥を作る。サスケの10倍ほどの千鳥を二つ。

「これが今のお前と俺の違いだ」

ナルトはその千鳥を地面に叩きつける。
ソコを起点に、波のように地面が波立つ。ステージ上全てが地割れを起こしていた。高いものは5メートル程まで、地面が立ちあがっている。

「今回は負けを認める……」

「……それでも、オレは誰にも負けることは許されない!!」

ブワッとサスケのチャクラ量が跳ねあがる。おぞましく、禍々しいチャクラが。

そして、黒い痣がサスケの身体を侵食してゆく。

「まずい!!」

カカシが走り出そうとするが、それをナルトが止める。

「アンタじゃ無理だ。俺が止める」

ナルトのチャクラが更に跳ねあがり、空気がピシピシと音を立て始める。地面の岩が浮き上がり、ピシリピシリと割れてゆく。

「強制的に気絶してもらうぞ、サスケ? 殺しはしないが……な」

「ケツ……負ける気がしねー!!」

フっ、と二人の姿がその場から消え去る。

誰にも見えないが、拳を撃ち合う音だけが辺りに響く。

「何アレ……どうなってるの?」

「わたしに聞いてもわかるわけないでしょバカサクラ!!」

「ボクにも全く見えません……」

「リーさん!?」

背後から現れたリーは悔しそうに拳を振るわせる。
現実離れたその戦いを。

「皆さんはアレ見えますか?」

「んー? 普通に見えるよー? おにーちゃん本気だしてないし?
というか歩いてる?」

「……白眼つかえばいい」

「使ってるんですが……うちはサスケはある程度見えるんですが、
兄様の動きが全く見えません」

「それは、ナルト君が気配も絶っているからね」

残念そうにしているハナビに、君麻呂がフォローする。

「と言うことは兄様が勝つってことですね。速度が兄様の方が早いですし」

「そうだね」

九陽達はその結末を見守ることにした。既に決まっているような結末を。

「サスケ。終わりだ」

「ハッ! どっちがだ!」

ナルトはサスケの背後に移動する。サスケが拳を振り抜きながらそちらを向いたところには、更に上空へ移動していた。

「お前がだ」

ズガンと、土流が20メートルは立ち上がる程の勢いで、サスケを殴りつけた。サスケの腕なら死にはしないだろうと思ひ。呪印も主を守るだろう。

サスケが地面に激突し、案の定会場全体の地面がひび割れた。そして、土煙が消えると、サスケは気絶していた。

だが、予想通り呪印が消えない。先ほど侵食した呪印はそのまま残ってしまった。

それを見たナルトは、忌々しさから舌打ちをする。

(だから、呪印絶対使うなって言ったのに……全く)

「力量の違いくらいわかれ。ダメだったら修行してもう一回当たればいいだろ？ そんなことしてたら死ぬだけだ」

「勝者！ ナルト！」

そこで、茫然としてた観客から今日一番の歓声と拍手が巻き起こった。

どうでもいいとばかりに、ナルトはゆっくりと控え席に移動する。

丁度その時、上空から白い羽が大量に舞い降りてきた。

「あれ？ 兄様、なんでしょうコレ？」

「ハナビ。幻術返しをしる」

「え？」

「いいから」

ハナビは言われたとおり印を組み、幻術返しをする。

同時に、会場ではバタバタと人が昏睡してゆく。

「これは……！？」

火影が席を立ち上がり、ゆつくりと元凶であろう風影へと視線を移すと、視線があった。

ニヤリと笑みを浮かべ、嘲笑うように火影を見つめていた。

「やるか……」

次の瞬間、風影の護衛が動き出した。

同時刻、木の葉の各地で大蛇が現れ、街を破壊し始める。

火影は風影にクナイを突き付けられ、連れられてゆく。

水影は寝ていた。

「兄様……どうするんですか？」

「んー、ハナビは助けたいんだろ？」

「一応今まで居た里ですから……」

「じゃあ、暗部の手伝いでしょとけ。九陽はハナビを守りながら行って来い。俺は 父さんへの最後の親孝行でもしてくる」

疑問を携えてハナビが首を傾げるが、いきなりフウに抱きつかれた。次の瞬間、全員が消え去る。

誰も居なくなつた控室で。ナルトはある一点を見上げる。火影が連れ去られた方向を。

「父さんは三代目火影に預けるつて言つたしな……此処で死なれたら困る。ついでにハナビの里抜けを認めてもらおう」

そう言うと、ナルトは消え去つた。

火影を連れた風影は、屋根の上に来ていた。すぐ後を追って、四人の人影が現れ、四角形を作るように配置する。

「やれ」
「はっ！」

《忍法・四紫炎陣！》

内部に火影と風影を閉じ込め、四人で作った強固な結界が張られる。

木の葉の暗部が入ろうとするが、壁にぶつかり、炎に包まれた。

「どうやら、触れると焼きつくす仕組みのようだ。」

「くっ！ 結界か……！」

暗部は結界の前で立ち往生することになってしまった。

中では未だに、火影が風影にクナイを突き付けられている。

視線の先 火影は木の葉の忍と戦っている忍に見覚えがあった。

（音忍と……砂忍！？）

「まさか……砂が木の葉を裏切るとはな……」

「条約なんてのは相手を油断させるためのカモフラージュに使ってくださいですよ。チンケな試合ごっこはここで終わりです。ここから歴史が動く……」

「戦争でもしようと言つのか!？」

「そうです」

慌てた火影に、さも当然とばかりに風影が言い切った。

「武力による解決は避け、話し合いで模索すべきだ……風影殿。今ならまだ間に合う」

「フフ……年をとると平和ボケするのかな……さるとび先生」

ブチブチと、風影が顔を引き剥がした。その下には、他の人間の顔があった。風影ではなく、音忍の長である大蛇丸。

「! お前……大蛇丸! 風影として、砂を操ったのはお前か……」

「クク……知る必要はありません……アナタはここで死ぬのだから……」

音の侵略がはじまる直前、門付近にて、イビキと一人の中忍は見張りをしていた。

「で……大蛇丸ってどんな野郎なんすか？」

「元々なあ、三代目の教え子だ……」

「それが何で抜け忍なんか……」

「昔な……時代的には四代目火影を決めるときだな。大蛇丸は自分こそその器だと主張したそうだ……受け入れてはもらえなかったが、それから少しして、奴は里を抜けた……。おそらくそのことから大蛇丸は三代目を恨んでる」

「復讐……!？」

「おそらく……」

二人は沈黙したが、すぐにその沈黙は破られた。慌てて奔り寄って来た第三者によって。

「報告！ 木の葉の東口付近に大蛇が多数出現。それに続き、砂の忍が約百名、里に侵入！」

「その付近の巡回中の忍は全て現場に急行させろ！ 東口の見張り小屋の指揮官と連絡を！」

それから数分後、結界の内部では激しい戦いが繰り広げられていた。

火影と大蛇丸の師弟対決が。

《手裏剣・影分身の術!》

火影の投げた手裏剣が数百個に増え、大蛇丸に向かう。上忍レベルでも、避けられないような速度で飛翔する。

《口寄せ・穢土転生!》

「一つ!」

大蛇丸の前に、死人の棺桶が現れる。

(口寄せを楯に使うとは……しかもこの死人は……)

「二つ!」

(三つ目はやらせん!)

「三つ!」

だが、三つ目は火影の手裏剣が、先に棺桶に突き刺さり、呼ぶことが出来なかった。

そして、ギィィと、棺桶が開き、中から二人の人間が現れた。

「久しぶりよのオ……サル」

「ほお……お前か。年をとったな猿飛……」

その二人が声を発する。

火影は、知り合いであるはずの二人を見て、寂しそうに顔を歪める。

「まさか……この様な形で貴方がたに再びお会いするとは残念です

……初代火影様、二代目様」

「穢土転生か……禁術でワシらを呼んだのはこの若造か。大した奴
よ」

「だとすると猿飛。ワシらは貴様と戦わねばならぬ……ということ
か」

どうせ戦うのならばと、火影はすぐに印を組み始める。
躊躇しては、確実に勝てない相手だ。

《火遁・火龍炎弾！》

火影は炎の龍を口から放出する。

サスケが使った術と同じだが、規模が違いすぎた。サスケの物よ
り、10倍近く大きいだろう。

《水遁・水陣壁》

だが、二代目により、周り一面に水が噴出し、火を消し止める。

（水のない場所でこのレベルの水遁を発動するなんてさすがじゃな
……）

《水遁・水龍弾!》

《土遁・土流壁》

二代目の放った津波の様な水を、火影は土の壁で防ぎきる。

《木遁秘術……樹海降誕!》

防いだのも束の間、屋根の上から木が生え、どんどん成長し、上空に飛んだ火影を捕まえられてしまう。さすがに初代と二代目の二人を相手にするなど、無理なのだ。

「ぐ…… □寄せ・猿猴王・猿魔」

□寄せで現れた猿魔が、身長程もある、太い金剛如意に変わった。それで周りの木を切り裂き、木の拘束から火影は脱出する。

「フフ……やるわね。だったら私も……」

「……草薙の剣か……」

大蛇丸の口から出た剣を見やり、火影が走りだす。

金剛如意を横に振り抜く。それを避けるためにしゃがんだ初代と二代目。その隙に、正面へと金剛如来を突き出す。初代と二代目の間を縫うように、如意が伸びる。

だが、それは直前で、初代と二代目に火影が蹴られることで止まってしまう。

「影分身も使わず突っ込んでくるなんてねエ……」

「くっ……ワシはもう影分身を使うチャクラなど残っておらぬ。年には勝てぬ……」

「……何故その弱点を私に」

「じゃから……」

《影分身の術！》

「フツ……やはり貴方は老いた。焦りで自らの寿命を縮めようとは」

三人に増えた火影は全く同じ印を組み始めた。

猿魔は火影が今からしようとしていることに気づき、静止の声を上げた。

「まさかつ！ やめる猿飛！ その印は魂を引き換えに」

「そうだぜ？ 火影のじーちゃん」

猿魔の叫びの途中、誰かが声を遮る。

全員がそちらを振り向く。止めたのは、ナルトであった。だが、まだ結界の外にいる。

「ナルト……」

「こんな雑魚共に屍鬼封尽を使うと？」

ナルトは結界に向かって歩き続ける。

「やめるナルト！ その結界は……ハッ？」

火影は途中で疑問に変わった。

なぜなら、ナルトが普通に結界を歩いて抜けたから。服すら燃えていない。

「人間程度が張った炎の結界が、炎の化身でもある俺に効くと？」

ナルトは火影の前に立ち、火影を蒼い炎で覆った。そして、結界の外に投げ捨てる。

火影は、そのまま何の抵抗もなく結界からはじき出され、暗部の人間に支えられた。

それを見届け、ナルトは大蛇丸に向き直る。

「雑蛇が吠えるなよ大蛇丸。初代？ 二代目？ その程度のチャクラじゃ、年老いた老人しか倒せねーだよ」

《水遁・水龍弾！》

二代目の放った水がナルトに迫るが、途中で蒸発して消え去る。

「で？」

「ナルトくん。私は火影に用があるの。退いてくれないかしら？ 貴方は水の国の者でしょう？ 意味はないはずだけど？」

「生憎、俺の父さんに火の国を頼まれててね」

大蛇丸は、ナルトの言葉に眉を寄せる。

「風波ミナトと言うんだけど知ってるか？」

『なっ！？』

その驚きは、結界の周りに居る忍からである。

「火影様！ 彼は四代目火影様の息子なのですか！？」

「う、うむ。そうじゃ」

絶句する。四代目火影に息子が居たことなど誰も知らなかったのだ。しかも、それが水の国にいるのだ。

「そう……あなたが。その力は九尾？」
「いや。空狐の力だ」

《木遁秘術・樹海降誕》

初代が術を使ったが、屋根から生える木は、全て燃え落ちて生えることすらかなわない。

「初代だかなんだか知らないが……あんたらはもう終わった人間なんだよ。俺の父さんのようにな。消えとけ」

蒼い炎で出来た龍が二人を飲み込み、一瞬にして消し去る。

どうせもう死んでいる人間なのだ、とナルトは割り切った。そもそも、ナルトは敵として向かってくるなら容赦はしない。敵の命など、味方一人の命に比べれば、全然どうってことないのだ。

「あとはアンタだけだが？ 大蛇丸……の前に結界壊すか。四点つてのは強固だが、一点を破壊されれば崩れるってのが問題だな」

ナルトは内部に展開された結界を突き破り、原作での多由也の変わりだろつ男を飲み込む。

それだけで、結界は崩れ去った。

「チツ！ 分が悪いわ！ 撤退するわよ！」

そして、残った三人＋大蛇丸は消え去った。

「逃げるのだけはスゲーなあいつ。俺でも見切れないって事は、移動じゃないってことだよな……」

「ナルト……」

ナルトはそこで、火影に視線を移す。
忍に支えられ、年相応に見える。

「無事かじーさん」

「お主のおかげでな……助かった」

『いいよ』と呟き、すぐにナルトは前方を見つめる。

「この数の大蛇。まずいんじゃないか？」

「うむ……最悪木の葉が終わってしまう……」

「……取引だ」

「出来うる限りのことには答えよう……」

火影もわかっているのだ。このままではダメだと。ならば、悩む時間すら惜しい。それだけ被害が増えるのだから。

「ハナビを抜け忍として追うな」

「じゃが……それだと他の者に示しが……」

「わかっている。ならば、お前の養子として取れ。それで、火と水の同盟の証として、ハナビをこちらに留学させる。まあ、木の葉に人を送ることはしないが、危ないときは助けてやろう」

「……それだけでいいのかわのう？ 木の葉の忍はこの事件で人が減っている。そちらが危なくなっても人を送れないのじゃが……？」

ナルトはフッと笑う。

「父さんの遺言だ。木の葉を頼むとな」

「ミナトの……よかろう！ その条件で木の葉は九陽の里に依頼を

渡す。大蛇を全て倒すのじゃ！」

「受理したーです」

「「「「「……」」」」」

「せーちゃん。お前いつの間にか起きたんだ？」

「さつきしかねーですよ。うるせーですから」

微妙な沈黙が続いた後、近くに居た一匹の蛇の上に巨大な蛙が墜ちてきた。

「ヒヨっ子ども！ ワシがきたからにはもー安心じゃー！」

白髪の変なじじいが、蛙の上で叫んでいた。

背中に背負った巻きも矢、長い髪、奇抜なファッション。バカとしか思えない。

「じーさん。何あの空気読まないバカ？」

「一応伝説の三忍の自来也なのじゃが……」

「聞こえてるぞ小僧！」

ナルトは頭を抱えた。確かに似ていると思ったが、あんなアホかと。

「おい、自来也。お前一人で里に広がった全ての大蛇を倒せるのか？ てか集まってきたけど大丈夫か？」

そこで、周りを見た自来也の額に玉の汗が流れる。

「ちーっと、多いかのう？」

そりゃそうだ。何十と言う蛇が居るわけだ。大きさ的には蛙と大

して変わらないが、数が多い。昔から戦争は質より数と言われているのだ。

「じーさん。今から怪獣大戦争になるが、説明頑張れよ？　せーちやん！」

「はい主殿！　水影から九陽全員に命令すーです。火影からの依頼任務。木の葉の大蛇の全討伐。出来るだけ迅速に、被害を最小限ですよーです。尾獣の解放を許可すーです！」

キーン、と耳鳴りがするような大音量が仙狐から放たれる。何処から声が出ているのだと言つような声だ。

《口寄せ・九尾の狐》

ナルトが地面に手を突き呟くと、地面に黒い模様が広がり、中からは圧倒的な存在感を持った九尾が現れた。そして、その頭にはナルトが乗っている。

『主よ。ワシは何をすればいい？』

「とりあえずあの蛙の周りの蛇全部消すぞ。他に被害出すなよ？」
『わかつておる』

九尾は大きく息を吸い込み、青い炎を盛大に吐き出した。それは、辺り一面を炎で包み込む。

蛇は瞬く間に炎に包まれ消えてゆく。だが、人間や建物に被害は全くと言っていいほど言ない。暴れた蛇による被害くらいだろう。

「お主……九尾。ミナトの息子か？」

「あ？　そうだが……それどころじゃないからオレは行くぞ。あんなの蛙は空を飛べるか？　被害無しで殲滅できるか？」

「……ムリじゃ」

「だったら火影のじーさんと一緒に休んでろ！」

そう言つて、九尾は空に飛びあがった。

上空から見ると、他の尾獣も同じように空から攻撃を加えている。

「きゅーちゃん！ あそこら一带の蛇消すぞ！」

『任せておけ！』

九尾はナルトを頭に乗せ、現場に移動する。

取り残された火影は茫然としていた。そこに、蛙から降りた自来也が降り立つ。

「ジジイ。あれがミナトの息子が」

「うむ……そうじゃ」

「やるのう。九尾を完全に従えておる」

「ナルトに言わせれば、大きい口寄せと変わらないそうじゃ。お主の蝦蟇と変わらないそうじゃが？」

「とてもじゃないが御しきれん。強大な力をもった口寄せ生物は、一度個人で勝たぬといけんからのう。つまり、人柱力でない状態で九尾に勝つてると言うことじゃ……」

自来也の教示に、重い沈黙がその場に流れた。一体水の国はどれほどの戦力を保持しているのかと。

五大国均衡しているからこそ成り立っていた平和が、此処で全て崩れ去った。つまり、水の国VS四国や、水火VS三国のような戦争が起こりえるのだ。

その間も、各地で大きな波や昆虫の大群、砂の嵐、怨霊などが現れ、蛇を駆逐してゆく。

「他の尾獣はなんじゃ？」

「水影殿の所の人柱力じゃ」

そう言つて、自来也は仙狐に視線を移した。

「あ、こんちゃーです。主殿 ナルトの口寄せ仙狐のせーちゃん
です。ついでにめんでーですけど水影やってッス」

「……なんともおかしな性格をした水影じゃのう」

「性格何てどうでもえーです。んじゃ、帰る」

そう言つと、仙狐は消え去つた。つまり、仙狐はずっと影分身だ
つたのだ。

「にしても……蛇が消えても騒ぎは収まらぬのう」

「そうじゃのう……つてワシは大丈夫じゃから早く他の忍に伝令を
回すのじゃ。あの尾獣は仲間じゃと！ もし攻撃でもしたら、簡単
に滅ぼされてしまう！」

火影の傍で、ポカーンとしていた忍達に、火影が命令を下す。

「し、しかし。我が国を襲つた九尾も……」

「今は味方である九尾に攻撃してみろ、報復する正統な理由が出来
てしまうじゃろ？ 助けたのに攻撃されたからやり返したと。早く
行くのじゃ。これは火影として命令じゃ！」

『ハッ』

そんな火影を見て、自来也は吹いた。

「なんとも頭デッカチじゃのう。木の葉の今の忍は。まあ、10年

前の事件があるのう……」

「それが、違うらしいのじゃ。ナルトから聞いた話じゃとな」

自来也は真面目な表情になり、火影を見つめた。

「その話。詳しく頼む。ワシもある組織の情報を掴んだのじゃ」

「それは……人柱力を集めてるところかのう」

「何故それを？」

「ナルトが言っておった。場所は知らぬようじゃが……」

「となると……ワシと同じ程度しか情報がないようじゃの」

「ナルトはそこから守るために、人柱力を守る国をつくったようじゃ。正確には嫌われている血継限界と人柱力を……じゃが」

「それでアレか」

自来也は既に全ての大蛇を倒し、こちらに向かっている尾獣達を見る。

その姿は、見る物を恐怖に陥れるだろう。圧倒的な大きさと、チヤクラ量を秘めているのだから。

「そうじゃ……五大国で拮抗し、バランスが取れていた力関係が一気に崩れ去ったのう」

「だが……確かにミナトの息子だのう。守るために自分から動くところなんてますます……」

「じゃのう。ちょっと色々擦り切れているがのう」

そう言つて、火影と自来也の二人は笑いあつた。

その場に到着した九陽＋ハナビは不気味な物を見るような視線で二人を見ていた。

020 侵略（後書き）

ツイッター始めました。

はつきり言って何に使うのかよくわかりませんが。気分で。

忙しいところちが見れないので、パツパとかけるツイッターに近況入れるかもです。

IDはnekogariです。

ID教えればいいだけなのは不明だけど。書かれたらフォローかえせばいいのかな？

021 家族として(前書き)

薄っぺらいよ？

021 家族として

火影執務室。

現在、ハナビとナルトは火影の執務室に来ていた。
約束通り、ハナビを里から抜く為の話をしにきたのだが……。

「火影のじーさん。まだアレから三日しか経ってないだろ？ 忙しいだろうから今度でいいぞ？」

「うむ。昨日亡くなったものの葬儀が行われたらもう。里に被害は甚大じゃが、ワシ自信は書類が終われば終わりじゃ」

そう言いながらも、火影は酷く憔悴している。書類仕事だけで死んでしまいそうだ。せつかく大蛇丸に殺されると言うフラグをぶち壊したのに、これで死んでは目も当てられない。

「にしても……何故お主たちは昨日来なかったのじゃ？ 一応村を救った英雄じゃぞ？」

ナルトはハナビは見つめ合い、お互いに苦笑する。

そんな事、わかりきったことだろう。英雄なら讃えられると思っ
ているのは、火影だけだ。木の葉の民は、そこまで出来た人間では
ない。異端には酷く冷たいのだ。

もちろん、それは他の里や人も同じだが。

「俺達が大蛇を撃退したって知ってる奴がどれくらいいる？ 逆に

化け物と言われるだけだ。だったら、里の忍が尾獣や大蛇を追い払ったって思わせとけばいい。そっちのほうが里にとっても俺たちにとっても都合がいい」

「……すまんのう」

火影は寂しそうな目でナルトとハナビを見つめた。だが、ナルトとハナビは笑っていた。

ハナビが抜けられるならどうでもいいと。

「気にするな。木の葉が同盟とするのは水の国であって、尾獣ではない。まあ、水影自体が“尾獣”だけだな。知ってる奴は九陽だけだが」

「ふむ……それでハナビのことじゃが」

「その前に！ そこに隠れてる奴出て来い。てかチャクラの質で誰かもわかるから。ハナビが心配なんだろう？」

「……」

なかなか出ないので、ナルトはその人間が居るだろう入口付近をずっとみつめていた。

やがて、その場にヒアシが現れる。

「父さ　ヒアシ様……」

ハナビはわざわざいい変えた。もう親ではないからと。

「別に心配なわけではない。ただ、一応妻が産んだ子供であるから、処分を聞きに来ただけだ」

(何このツンデレ？　コエー顔して可愛いこと考えてるな)

「ふむ。それなんじゃが……ナルトが出した提案。ワシの養子にすることにした。つまり、猿飛ハナビに……なんじゃその顔は」

ナルトとハナビが明らかに嫌そうな顔をしていた。

「……すごく嫌な名字です」

「同感だな。てか、名前が火影で名字が三代目だと思ってたわ俺」

「そんなわけあるかい！ 人の名字をバカにするでないわ！」

それでも二人は嫌そうだ。“猿”って言うのがもう嫌らしい。

「波風ハナビでよくな？ 俺が父さんに言われた名前が波風ナルトだったし」

「ってことは、兄様と……えへへ」

「じゃがそれは……四代目の名字だしのう」

「大丈夫です！」

「何がじゃ!？」

「風で海が波打ち、暗闇の上空では花火が上がる……キレイです」

「今は名字のよさとかどうでもいいのじゃ！ それほど猿飛が嫌なのか!？」

「嫌です!！」

さめざめと泣く火影を見て、ヒアシの唇がひくひくと動いているのを、ナルトだけは見逃さなかった。

なんとなく、言いたいことがありそうだ。

「兄様兄様！ 風巻ハナビでどうでしょう?」

「んー……無理じゃね？ 俺の歳で養子は取れない」

「いえ、そうではなくて。ホラ、アレです、アレ!」

「ああ」

「ソレです!」

「ハナビよく覚えておけ。養子と養女って意味は一緒だ」
「違います!」

ハナビは言えない歯がゆさに、その場でむせび泣いた。

「いや、なんとなくわかるが、結婚って言うんだろ? そもそも年齢がありえん。お前数えて8歳。オレ数えて13歳。ハナビなんて倍は生きないと結婚出来る年齢にもならない」

「何て理不尽な……」

さすがにナルトでも、ハナビから向けられている好意には気づく。むしろ、あれだけされて気付かないのは障害者だ。それが同性愛者。よく漫画で見る、異常な程鈍感な奴は全員同性愛者だと思っべきだろう。

「んで、ヒアシ。アンタ後継者はヒナタ? ネジ?」

「それならネジだろう。ヒナタは上忍まではなるつもりだが、その後医療忍者を目指すらしい」

「へー、あんたもそれを認めるなんていい親してるじゃん。やっぱりやる気がある奴後継者にした方があとあと楽だぞ? その点ネジならいいな。アンタが土下座して許してもらえたしな」

ハナビが目を見開いていた。あのヒアシが土下座するところなど想像出来なかったのだ。

それに対し、ヒアシはたじろいでいた。

「な、何故それを?」

「影分身がああ部屋に居たから」

「そんな気配なかったが……」

「旧家の当主程度に、つてか、火影だつて気付かないレベルで気配絶てるぞ？ やろうと思えば目の前に居ても気づかないくらいに」
「さすが兄様です！」

ハナビだけが何故か喜んでいた。

普通、生きているなら完全に気配を絶つなど不可能だ。

九陽達は、チャクラや生命の流れがおかしい。点穴や、流れが無い。存在そのものが人間とは違う。そして、チャクラを術に使う時、自然 風や水などに変えることが出来る。つまり、チャクラである九陽達は、そこに存在している空気とすることで、完全に気配を絶っている。

そこに居るのに、全く気付かない。体そのものを空気に変換しているのだ。

「で、名字どうする？ このままだと波風ハナビだけど？」

「ハナビの名字のことだが……このままだと白眼を封印せざるおえ

」

「そんな呪印を刻むようなことしたら、どうなるかわかってるだろうな」

ナルトはヒアシに殺気をぶつけ、低い声で言葉を紡ぐ。別に白眼が無くなるのはいいが、そうすると死亡率が上がるし、封印と言って眼球を抉るくらいはするだろう。それが、呪い。

「勘違いしているようだが……日向流を破門にただけであり、家から追い出したわけではない」

ナルト、ハナビ、火影はキョトンとする。

ヒアシの性格なら破門＝勘当だ。間違いない。何よりも日向を大

事になっている男だからだ。

「つまり、愛娘を手放したくないってことだな？」

「いや……そう言うわけでは」

「あー、ハナビ。やっぱりお前波風だ」

「……私の大切な娘なのだ」

とうとうヒアシは白状した。めずらしく頬がほんのうっすらとだがピンクになっている。

「まあ、わかってたけどな。お前がハナビ溺愛してたのなんて。あと日向流は俺が全て教えられるぞ？ ついでに亜流も」

「何故日向の体術を……？」

「九尾の千里眼で覗いて覚えた。あんたが12年間使ってない体術があるならそれはまだだが」

「……」

血での継承の技術が盗まれていたのだから、ヒアシが黙りこむのも至極当然。

「まあ、だから安心しろ。ハナビは更に強くなる。多分あと数年したらヒアシ超えるんじゃないか？ 九尾化すれば今現在でも超えるけど」

「なにはともあれ、ハナビを頼む。守ってやってくれ」

「ああ。精々Aランク任務程度までしか送りださないから」

さらっと言ったナルトの宣言に、火影とヒアシが青ざめた。

「水の国のAランクは……中忍の上位と上忍の依頼ではないのか……？」

「下忍だからどこまでとかない。うちの下忍とか中忍とか上忍ってのはあんま実力関係ないからな。免許みたいなものだ。誰と組んでもいいようにランダムでツーマンセル＋上忍一人って感じで付く。上忍ってのは教えるのが上手い忍者だ。下忍だろうとSランクやってるやつもいる。Dランクみたいになつまらない依頼は慈善ってことで、無料でアカデミー生徒がやるからな。忍術使いながらなら練習にはなるし。Cランクは下忍が単独で小遣い稼ぎにやる。実力だけなら九陽なんてとっくに上忍だが、全員下忍だし。ハナビは俺達の誰かがつけばA程度まで出来そうだから、実戦経験ってことでやらせる」

火影は絶句していた。自分たちの下忍が固定スリーマンセル＋上忍でやってる任務を遊びや小遣い稼ぎとされたのだ。しかも、下忍でも実力があれば時期を待たずにSまで出来る。

「そ、そういうえばじゃ。ナルト、ハナビ、フウ、ヤヒメが中忍試験合格してるんじゃないが」

「あれ？ 中止じゃなかったのかアレ？」

「うむ。じゃが、あの時点での審査結果で合格してたんじゃない。中忍としての実力があると認められればいい試験じゃったからな」

「フウとヤヒメが受かるなんて意外だ」

「確かに性格的にはアレじゃが、それを最低点にしても実力がそれをカバーしたんじゃないよ。他の二名は砂出して、笛吹いて睨みあつてるだけじゃったからナシじゃ」

確かにあの二人はダメだろう……。

「サスケは？」

「うむ……途中まではよかったんじゃないが、呪印を暴走させてしまったからのう。味方まで殺す可能性があつたのじゃ。信頼出来るって

言うのも大切なのじゃ」

「あー……確かに」

あれは危険だ。力を得る為なら悪魔にでも魂を売る性格をしている。もし、任務中に仲間を殺したり、里を売ったら大変だ。

「とりあえず、約束通りハナビは貰ってくぞ。まあ、ハナビが戻りたい時に戻るけど。んで、同盟の件だけど、火の国が危なくなったら助ける。まあ、死ぬような危険な任務の場合金もらうけど。九陽なら一瞬で来れるからタダでもいいが、他の人間は金払わないと無理。んで、こつちが危険な時は無視してくれていい。九陽が敵わないような相手が居たら誰もかなわないから無駄に人死に増やすだけだ。Sランク以上なら依頼回してくれもいい」

「ふむ。それだと木の葉に有利すぎないかのう？」

「だから言っただろ。これは父さんの遺言だつて。それに、里人に頼む場合金が必要だ。九陽は術の実験ついでに無料でやってやるっただけだ。修行にもなるし。ちなみに得意な依頼は討伐、殲滅。苦手つてか拒否するのは警護。討伐だけなら尾獣だろつと何だろつと喜んでやるつ」

「なんとも、性格が表れておるのう」

実際は捕獲すら拒否したいのだ。捕獲しようとして楽な方法は、フウとヤヒメの水晶で閉じ込めて運ぶだけ。他は皆討伐にしか向いていない。

そもそも、フウもヤヒメも捕獲などやったことがないので、十中八九殺してしまう。

「そうだなあ……とりあえず。問者とかだけは送るな。うちの里つて血継限界、いわば木の葉の旧家の様な人間しかいないってことになる。問者なんて送ったらすぐ殺される。木の葉の日向やうちはだ

ってあつちにとつては普通だ。もっとえげつない血継限界あるしな。無駄な事は考えるな」

「兄様。結局わたしの名字は？」

ナルトはその話は終わった物とばかり思っていたが、ハナビは理解していなかったらしい。

ハナビはずっとそれが気になっていたのだ。

「日向だろ？ 親バカがそう言ってたし。修行は俺がつけることになるが」

「えーっと、それだとわたしは兄様と同じ九陽になれないんでしょか？ せっかく兄様と同じ羽織と額当てもらったのに……」

ハナビは残念そうに着ている袂をふりふりと揺らす。

だが、ハナビは正確には九陽ではない。成長すれば、ナルトと同じ狐なので九陽になれるが、九陽とは力の象徴なのだ。ハナビが九陽となると、九陽の質が疑われてしまう。だからこそ、成長してか
らなのだ。

「忍の登録をあつちでやればいいんじゃないか？ 前代未聞だけど。ウチは抜け忍とかどうでもいいから問題ないはず」

つまり、木の葉では一般人。九陽の里で忍となるのだ。木の葉では忍の抜け忍は大罪だが、一般人が里を離れる分には問題がない。そして、水の国は基本自由だ。何の問題もない。

「うむ。では、ハナビを忍としての登録から抹消する。そして、水の国の下忍ハナビに、中忍試験合格の証明書を送っておく。これで、中忍じゃ。中忍最年少記録だったんじゃないかな……うちはイタチの8歳を超えての最短記録じゃった」

「へー、ハナビエリートじゃん！」
「えへへ、でも昔あったときの兄様より全然弱いですよ？ 兄様はもっと小さかったですし」

ハナビが抱きついてナルトを崇める。それに苦笑し、ナルトは頭を撫でてやる。

「そう言えばナルト。自来也がお主に術を教えると言っておるが…」

「教えるつつても…教わる術がないぞ？ せいぜい蝦蟇と契約するくらいだが…オレは妖狐と契約してるし…」

「ふむ。お主なら禁術書庫を覗いてもいいぞ？」

「いやー…忍術、仙術、妖術、神術なら全ての里の覚えてるからイラナイ。もちろん木の葉の初級から秘術まで。血継限界以外のだけだ」

ソレを聞いて、火影は驚愕に固まる。

「お、お主いつの間に見たのじゃ!？」

「いつって…三歳くらいには全部覚えたぞ？ うちのアカデミーで全里の忍術教えてるし。全里共通だが、警備がザルすぎる。全て写筆しても、見つからずに逃げられたぞ？ ついでに、日向に在った体術の巻物も写してある。まあ、使える人間がいないけど」

その言葉にヒアシと火影は眩暈を覚えた。あろうことか、火影しか見れない秘術や、当主しか閲覧できない巻物が気付かない間に写されていたのだ。もう秘術でも何でもない。

「さすが兄様です!」

「あ、ちなみにハナビが使ってる亜流も、ベースを日向にして他の

里の体術からいいとこどりして混合させた体術だ。と言っか、防御を全て捨てて攻撃に回したんだけどな」

「すごいですねー！」

ナルトとハナビだけが、その部屋で元気だった。

火影とヒアシは警備を厳重にしようと心に決めた。

「ってわけで自来也には断っておいて」

「う、うむ。何か困ったことがあったら遠慮せずに言ってくれ」

そんな火影の言葉にナルトは苦笑した。

「他里を助ける余裕があるなら復興頑張れ。大蛇や音、砂忍が暴れて町がボロボロだろ？」

「そうじゃった……」

「後、サスケは幽閉しろ。呪印を封印する名目で、サスケ自体を殺すか封印した方がいいからな」

それだけ教示し、ナルトはハナビを抱き上げ、背を向ける。

「じゃあなじーさん。ヒアシ」

返事を聞くこともなく、ナルトとハナビは消え去った。

水影執務室権昼寝部屋

その部屋で向かい合っているのは、ナルトと仙狐。
ナルトは一枚の依頼書を見て、驚愕に目を見開いていた。

「は!?!」

「いえ、ですからハナビちゃんは任務にいつてんです」

グデッている仙狐の言葉に、ナルトは眩暈がした。
別に任務に行ってるのは問題が無い。一般の忍だって任務くらいは行く。ただ、その任務の内容がダメなのだ。

「だからって何で単独任務なんだよ!? しかもA」

「ハナビちゃんが一人で行きたいって言うてーですよ? 足手まといになってるからとか」

「単体討伐でのAランクならいいけどな。これ、複数討伐だろうが!」

ナルトはバンツッと仙狐の前に依頼書を叩きつけた。

「でも、実力は下忍から中忍程度じゃねーですか?」

「ハナビは単体用の術しか持ってねーんだよ! 複数じゃ一般人の男にだって負けるかも知れない! ああ、もういいや。行ってくる! の前に、もしかして九陽の羽織着たままか?」

「確か気にいったから着てるーです」

「アホかつ！ 九陽は賞金めちゃうちゃかけられてる上に箔着くからって狙われるんだよ！」

ナルトはハナビを心配し、すぐに消え去った。

賊達の集落

そのころ、ハナビは涕泣していた。

初めは良かった。討伐依頼とのことで、着実に敵を屠っていった。実力は十分。ハナビの攻撃に、敵は成すすべもなく切り裂かれて行った。

だが、ハナビは経験が足りていなかった。木の葉の時はそれでもよかったかもしれないが、ハナビがやっているのはA級任務。組織を壊滅する程の依頼だ。木の葉なら、上忍と中忍でマンセルを組ん

で挑むだろう。だが、此処にはハナビしかない。

外の敵を叩きのめし、敵を屠りながら部屋を進んでゆくハナビ。そして、入った大部屋に、50人近い人数の人間が居たのだ。そして、背後からも同数の人間が現れた。

前方の敵を屠ると、背後から切り裂かれ、まず腕が切られた。

そこで、パニックを起こして我武者羅に暴れたが、数の暴力に押されて、一方的に切られてゆく。

切られては九尾によって修正されるからだ。『化け物』と言われ、切られる。

痛みで反撃が出来ず、ひたすら耐えていた。

身体中が切り裂かれる。好きだった髪は無残に切られてしまっている。戻れば治活再生で戻せるが、とてつもなく悲しかった。

九陽達なら、この状態でも達向かってゆくだろう。だが、ハナビは身体を切り裂かれる痛み慣れておらず、精神的に無理だった。九陽達は遊びですら身体を半分に切り裂かれたりするのだが、そんな修業まだやっていなかった。完全に尾獣と同化出来ないと始めることは出来ない。

「くそっ！　なんだこの化け物！　四肢以外硬くて切れねーじゃねーか！」

「だが、コイツを殺せば莫大な金と名誉が手に入るぞ！　なんとつてあの九陽だ！」

「ぐす……痛いよ……兄様……」

九尾はハナビを修復するのと、急所を守ることが忙しく、出てくることが出来ない。もし出てしまうと、ハナビは死んでしまう。完全に九尾と混化すれば刀程度はじけるが、そうするとハナビは内部から爆発するだろう。

「にしても、コイツは化け物つってもかなりの上玉じゃねーか？
弱いしよう」

「お前こんな子供に興奮すんのかよ！ どんだけご無沙汰だ」

「仕方ねーだろ！ こんな仕事してちゃな。攫った女も下っ端の俺
達じゃ回ってこねーし。もう何年やってねーかわからねーよ」

げひた笑みを浮かべる男たちを前に、ハナビは恐怖で震えていた。

「ごめんなさいごめんなさい……おうちに帰らせて……」

「おうちって可愛い嬢ちゃんだな。まあ、一人で乗り込んできたお
前が悪いんだ。遊び相手になったてくれたら、その後売ってやるよ」

「ギャハハハ！ それが俺たちなりの優しさってか！」

「チゲーねえ！ 殺されるよりマシだろ！」

ハナビの服に男の手が伸びる。ハナビは抵抗するが、混化もせず、
更には忍術も使えないハナビは年相応の筋力だ。大の男に勝てるは
ずもない。

そして、上着が破られる。残ったのは下着だけだ。

「いや……やだ……兄様以外には見られたくない……触らないで……」

「その兄様ってのは来てくれねーのか？ これから妹が犯されるっ
てのに。九陽ってのも呆気ねーな」

そして……ハナビの下着に男の手が迫る。

ハナビはギョっつと目を瞑って涙を流す。いつそ、死んだ方がマシ
とすら思った。

「に……いさ、ま……助けて……イヤ……」

「ぎゃああああああ！ あづい！！ たすけ……」

瞬間、男は蒼い炎に包まれ、消え去った。

「誰だ！？ ツ！」

声を発した瞬間、その男も青い炎に包まれて消え去った。同時に、ハナビの身体に白い羽織がかぶせられる。

「貴様ら……覚悟は出来ているだろうな……」

そこには、目を真っ赤にギラギラと光らせ、蒼炎に包まれたナルトが立っていた。髪は真っ白になり、狐をかたどった蒼い炎が出現している。完全な空狐化をしているナルトだった。

「兄様……」

「九陽が呆気ない？ ならば、体感しろ。九陽がどういふものか」

ナルトから放たれる威圧感に、賊たちはガクガクと震え、後ずさる。

「う、あ……うあああああ！」

拮抗が崩れたのは、一人が精神崩壊を起こし、ナルトに攻撃を仕掛けた時だ。一斉に皆が続く。

だが、それは途中で蒼い炎に包まれて消え去る。

「さあ……踊れ。炎の中で、踊り狂え！」

瞬間、建物全体が燃え盛る。

更に炎は燃え広がり、賊が固まって出来た集落、全てが燃え上が

る。

外にはナルトから出た妖狐達が暴れ、賊を噛みちぎり、燃やしつくし、抉り、引きずり出す。

まさに地獄絵図。

「転生させることも生ぬるい……魂まで消える」

輪廻眼・人間道。魂を物質化し、喰らう。

天に帰る魂を全て喰らい、永遠の地獄を相手に与える。さらに、相手の情報や能力をナルトが得る。

「兄様……ごめんなさい……」

蒼い炎の中で涙を流しながら謝るハナビの頭に、ナルトは手を置く。

「ハナビ。何故俺達九陽でもツーマンセルを組むか知ってるか？簡単に相手を殺す事が出来る俺達が」

ナルト達は今の現状のように、一人でも国くらいは落とせる力を持っている。それでも、一人で任務にあたったことはない。

「その方が……早く終わるから？」

「確かに。死ぬことのない俺達はその恐怖もなく、任務の速さだけを求めればいい。だが違う」

ハナビの前にしゃがみ、視線を合わせる。

「万が一がないようにだ。死ぬことがほとんど無くとも、万が一があった場合だ。俺達は誰か一人でもかけることは許さない。九陽だ

ろつと、里人だろつとだ。だから、広範囲忍術で一撃で仕留める。効率もあるだろつとが、手加減をして相手が生き残つて、こちらに万が一があつたらこまる。相手を殺すのは全てを想定したうえでも何があるかわからないからだ。ハナビが足手まといなんて誰が言つた？ 言つた奴が居たら俺が殺してやる。里人やハナビは俺の日常でもあるんだ。人間として、また戻つてこれるように。化け物にならないように……」

ナルトは治活再生術でハナビの髪を戻しながら、抱きしめる。

「よかつた……よかつたよハナビ。お前に何もなくて……ハナビに何かあつたら悔やみきれない……」
「にい……さま？」

ナルトは涙を流していた。ハナビを抱きしめながら涙を流していた。

久々に涙を流した。過去に一度、森に入った里人が死に、絶対に守ると覚悟を決めて以来初めて流した。それは10年ぶりの涙だった。

「にいさま……兄様……。う、ううあ……ああああ！ 兄様！ 兄様！ 怖かつた！ もう皆に会えないかと……汚れてしまうかと……怖かつた！ ずっと一緒にいたいですっ！ 皆と……イヤです！ 死ぬのは、イヤ！」

ハナビは大声をあげて涕泣した。ナルトの涙を感じ、ずっと叫びたかつた想いを叫んだ。不安で、怖くて、痛くて、押しつぶされそうだったハナビの想い。

「ずっと一緒だ。俺だけじゃなく、九陽が、妖狐が、里人が。全員

「がお前の家族だ」

「うあゝい。ずっといつじよです……強くなりませぬ。だれよりも！
いつしよにいただけるように！」

ナルトは、ハナビが泣きやむまで、ずっと抱きしめていた。
集落全てが燃え盛る中で、二人は泣き続けた。

「ハナビ……しばらくお前は国から出ることを禁ずる」

「え……？ やっぱり役にたたないから……」

「最後まで聞け。しばらく、九陽以上の密度で、修業をつける。起きてる間はもちろんのこと、寝ている間は影分身でだ。数年は、一日でも休むことは出来ないと思え」

ナルトとずっといれることに、ハナビは最初キョトンとしたが、すぐに満面の笑顔になった。

だが、ハナビはこれからするであろう修業の地獄を知らない。それを知ったハナビは、『愛が重い』と、違う意味で涙を流した。

「はい」

元氣よく返事をし、ハナビはナルトに飛び込んだ。もちろん唇を狙って。だが、ナルトはソレを避けて、ハナビの顔を肩に固定した。

「……………」

沈黙が墜りた。同時に周りの炎が、一気に消えた。

「帰るか」

「はい……………」

何とも言えない沈黙の中、二人は消え去った。
残ったのは集落がなど初めからなかったような一面の荒野。
そして、地面に染み込んだ涙の後だけだった。

021 家族として（後書き）

薄っぺらい！ ハナビの実力を合わせるって言うのと、ハナビの心境とかの布石とか現状とかそんなのでした。もっと長くすれば本格的にかけるかもですが、最低限伝えたいことだけで終わらせてしまつてすみません。

あと、ついったーで言いましたが、風邪ひいたみたい。またか、つて感じですけど。抵抗力が低すぎる。

まるで病原体を招き入れているように風邪をひきます。

022 ヤヒメと任務（更なる修正）（前書き）

修正しました（、・、）
心理描写追加。

022 ヤヒメと任務（更なる修正）

水影執務室

ナルトが13歳になったところ、突如、空狐が皆を集めた。仙狐と違って、空狐　しかも本体が九陽全員を集めることは滅多にないことだ。そもそも、本体が姿を現す事自体稀である。普段はナルトの中でのんびりしているそう。

「お主たちはもう歳をとれぬ」

いきなりの空狐の物言いに、全員がポカンと口を開けた。色々突っ込みたいところもあるが、とりあえずナルトが代表し、簡潔に問いかける。

「詳しく」

「うむ。皆体内に尾獣飼っているじゃろ？　尾獣を解放する条件を言ってみるのじゃ」

条件。強大な力を手にする代わりに、かなり多い条件が必要だ。一つでも出来ないと、身体を乗っ取られるか、解放が出来ない。

「……妖術で封印」

「対話もだいじだねー」

「尾獣から主と認められることも」

「契約だ……」

「精神力の強化」

「尾獣に耐えられる肉体改造」

「それじゃ」

ナルトの解答に、空狐がそれが答えだと言った。

「つまりじゃ、身体全体を器とする必要があるのじゃ。それに伴い、人間としての機能を捨て去ってきたのじゃ」

原理はわかるが、皆は納得できずに首を傾げる。

「人間として尾獣を身体に卸すなど、許容量が足りぬ。お主たちは人間を捨て去り、人間から尾獣になりかけておる。お主たち、尾獣からチャクラを借りぬとも膨大なチャクラを持っておるじゃろ？」

それは存在が変わってきた証拠じゃ。歳を重ねることにそれは増えてゆく。尾獣を使う限り止めることは出来ぬ。このままじゃと、後6年かけて3年ほど歳をとり、そこでとまるじゃろ。ハナビの場合は遅いから9年程かけて6歳くらい進むじゃろ。じゃが、結局はそれだとまる。もし、人間として死にたいなら、今から尾獣を抜くのじゃ。今すぐ抜けば寿命は倍くらいで済むじゃろ。一年後なら三倍くらいじゃな」

空狐は冗談を言う性格ではないと、全員が知っている。ならばこれが真実。全員が押し黙ってしまった。

「ちなみに不老じゃが、不死にはならぬぞ。尾獣と同じでな。1000年ほど生きればほぼ尾獣以外の手では死なぬような再生能力を得るが、それまでは簡単に死ぬ。尾獣の加護がなければ上忍2000人程度に来られたら死ぬじゃろ。強い忍なら一人にでも殺されるかも知れぬ」

皆が黙っていたが、珍しく一番最初に口を開いたのは、ハナビだった。

ハナビに迷いなどないのだ。ナルトと一緒になら、寿命程度どうでもいいのだろう。

「わたしは、兄様が一緒ならそれでいいです。人間捨てようが、何しようが心は変わりません」

「……わたしもいい。皆を守る」

「守り神ですねー。それはそれでいいです」

「この里は好きだ。オレ達が居なくなつた後に滅ばされるのはイヤだ……」

「そうですね。ボクもいいと思います」

「うーん。いいんだけどもう少し若い時にしてほしかった。私だけ20代だよ？」

「ウチはそれでいい。最悪死ねば終わるわけだし」

「ボクもいいですよ。命の恩人であるナルトさんの大切な里ですしね」

「オレもいいぜー！ 楽しいじゃねーか！」

全員が答え、最後にナルトに視線がいく。

「俺もいい。元々俺が作りたいたと言つた里だ。俺だけ抜けることなんてできない。まあ、どっちにしろ断るつもりなかつたけど」

全員が賛成の意を唱えたことに、空狐が軽く驚いた。不老ともなれば、必ず実験材料や暗殺が増えるだろう。水影や空狐も変わらず存在するわけだ。他里から怪しまれることは確実。

「ふむ。ちなみに、何度も言うが不老ではないぞ。ただ、長生きな

だけじゃ。主はわらわの器ならば、50万年程生きるじゃろう。もちろん、死ぬこともあるがのう。他は5万年程じゃ。もちろん、もつと生きるかも知れぬ。年老いる程力がつき、成長が遅くなってゆくからのう」

ナルトはソレを聞き、少し顔を暗くした。確かにまだまだ先のことだが、何れ一人になってしまふのだ。一人で45万を生きるなど、到底無理な話だ。

「心配するでない主。わらわはずっと主と一緒にじゃ。それに、皆の子供も一緒にいれるじゃろ？ 最悪尾獣化してしまえば、妖怪として生きれるし。う。なんだったら神にでもなればよからう？」

何万年も一緒にいたら、死んだ時どれ程悲しいか。ナルトはその時自分が耐えられるかわからない。だが、考えても仕方がないことならば、今は皆を守ることを考えようとおもった。さすがに、妖怪になれとは言えないだろう。

「大丈夫だよーちゃん。俺はそこまで弱くない」
「うむ。さて、早速だが任務を言い渡す。S任務じゃな。音の四忍衆、三人の殲滅じゃ。主が一人殺しておるので、残り三人じゃ。理由はこの里の血継限界を狙って幾度となく襲撃して来ておるのじゃ。今のところは大丈夫じゃが、怪我人が出ておるし、これ以上は攫われる人間もできてしまうからの。これは、気配を知っているナルトと……ヤヒメで頼むのじゃ。空気を操れるヤヒメが一番暗殺しやすじゃろ」

そう言って、空狐は三枚の顔写真付きビンゴブック（指名手配書）をナルトに渡した。

ハナビとフウは肩を落とし、ヤヒメはガッツポーズだ。

「他の者の修行はわらわが見ておこう」

『え』

「久々に元の姿に戻って鍛えるかのう」

皆が一斉に逃げ出したが、空狐は鋼糸をぐるぐる巻きにして連れて行った。

全員わかりやすい程、絶望に顔を彩らせていたのが印象的だ。ナルトとヤヒメもホッと胸をなでおろした。本来の姿の空狐と修業など、拷問以外の何物でもない。尾獣9匹を一瞬で屠る實力を持っているのだ。

「……にーと久々に一緒。うれしい」

「頑張ろうな、ヤヒメ」

「……うん」

最近、ナルトはハナビと白との任務が多かった。久々の一緒の任務で、ヤヒメは甘えられることが嬉しかった。

まだまだ子供で、ヤヒメやフウはナルトを兄のように好いている。ブラコンなのは確実だが。

それから、ナルトとヤヒメはすぐに出発した。

ついでこようとしたりしたフウとハナビとリトを追い返し、やっとの思いで音の里に着き、力を押さえて潜入。追い返したと言うが、実際は空狐に見つかり、気絶させられ、連れて行かれた。

ちなみに、服は二人とも和服である。それが一番気付かれないと思っただからだ。ちゃんと変化で姿も変えている。

「んー、にしても普通だな。大きくはないが、木の葉と大して変わらない。空気が淀んでる気がしないでもないが」

「……アレ」

ヤヒメが指さした場所には、ラーメン屋の屋台。

「食べたいのか？」

「……ん」

「まあ、期限も決まってるし行くか？」

「……うん」

ナルトは小さなヤヒメの手を引き、出来るだけ兄と思われるように屋台に向かう。もちろん、二人とも任務だと言う事を忘れた訳ではない。むしろ、任務だからこそ必要なのだ。のれんをくぐってから、一応確認する。

「おっちゃん。開店してるかい？」

「お、みねー顔だな？ うちの年中無休よー」

「ああ。最近こっちにきたばかりでな。今日は妹が里を見て歩き歩いて言うから連れて来たのさ」

「ほおーソイツはいい兄ちゃんやってんな。なら、チャーシュー一枚サービスしてやらあ。ちなみに、うちの人気はしょうゆラーメンよ！」

「サンキューおっちゃん！ じゃあ、俺はしょうゆで……ヤヒメは？」

「……同じ」

「しょうゆ二つ」

「ちょっと待ってなー、すぐ出来るからよ！」

そう言って、ラーメン屋のおじさんは奥に入って言った。屋台と言いながら、以外に大きな建物だろう。真昼間と言う時間が時間だけに、客はあまりいないみたいだ。

(ヤヒメ。気配はあるか?)

(……強いチャクラは数個あるけど……判別は無理。これ以上空気を操ると気付かれる)

(ならさりげなく聞きだすか……)

ヤヒメは空間を操れるので、暗殺などに便利な能力を持っている。だからこそ、空狐はヤヒメを付けた。

ナルトとヤヒメは一瞬視線を交差させ、戻って来たおっちゃんに視線を戻す。

「はいよ、しょうゆラーメン二つ」

「早いなー」

「そりゃそうよ！ 速さが命だからな」

「味にしてくれよおっちゃん……」

「ハハハ！ 味もおりがみ付きだ」

ナルトは辺りに人が居ないのを確認し、おっちゃんに視線を移す。食べながら自然に、だ。意外においしかったので、後でハナビやフウに教えてやろうと思っていた。もちろん、二度と来ることはないだろうから、土産話だけ。

ヤヒメはナルトの隣で、ふーふーと、ラーメンを冷ましている。

傍から見ると、微笑ましくなるような可愛らしさだ。

「そういえば、父上がこの里に来たのは、大蛇丸様と強い四忍が里を守ってくれるって言うからきたんだが、なんか知らないか？ 妹が四人衆に憧れててさ。そういう話し聞きたいんだとさ。あわよくばサインなんてほしいな」

「四忍つてのは、左近様と次郎坊様と鬼童丸様だなー。前は四人いたんだが、何でも卑怯な手で殺されたらしいな。あんないい人たち

殺す忍つてのもヒデーよな。たまにうちのまえを大蛇丸様と一緒に歩いてるから、サインがほしーならそんなときだな。まあ、もらえるかわはわからねーけどな」

(卑怯な手……ねえ。どっちが卑怯だか)

おっちゃんは本当に信用しているのか、笑顔で口を開いていた。ナルトも笑顔でそれを聞く。内心は宗教みたいだと思いつながら。

「ヤヒメ……無理だから今日は帰るか」

「……ヤダ。四人衆さまに会いたい……」

「我儘言うなって」

「……会いたい」

ヤヒメがぐずっている演技をする。もちろん、アドリブではあるが、ヤヒメがナルトの作戦を汲んだ結果だ。子供と言うのは、本当に便利な武器になる。相手の警戒を解かせるのが楽なのだ。

そんな様子を見て、おじさんは口を開く。

「そんなにあいてーんだったらアカデミーに入ってみたらどうだい？ 臨時教師として出てるらしい」

「アカデミーって誰でも入れるのか？」

「そうだなー、前に食べに来た生徒によると、アカデミー自体にはすぐ入れるっばいな。ただ、下忍になれるかどうかはわからねーらしいが」

「……そうか」

その後、ナルトとヤヒメはラーメンを食べ終え、席を後にする。情報収集の為だったが、此処に来たのは正解だったろう。生徒が

食べに来て情報も持ってそうだし、うまかった。ただ、これ以上聞くのはまずい。確かに情報を持っているかもだが、後でおっちゃんに、ナルト達が四人衆を探していた事を漏らされると、要らぬ誤解を生む。

誤解ではないが、面倒事は御免だ。一斉にかかって来ても殺せるが、万が一を考えると、一人ひとり暗殺するのが最適だろう。自信があるからと正面から突っ込むなど、愚の骨頂だ。そんな奴は忍ではなく、格闘家になった方がいい。

「おっちゃんあんがとよ、うまかった。これお代。おつりはもらっ
といてくれ。妹を失望させなくて済んだからな」

「おう！ これからいつでもきな！ 実は俺も四人衆様のファンで
よお。同じファンに会えるなんて嬉しくてな。次来たらおまけして
やんよ」

ナルトとヤヒメはお礼を言い、その場を後にした。

それから、ナルトとヤヒメは出来るだけ自然に、気のない方向
に向かう。そのまま、前を向いたまま会話をする。ヤヒメが風を操
り、声が拡散しないようにしながら。

「アカデミーに入るか。暗殺も楽そうだしな。実力は隠せよ？」
「……わかってる」

二人は更に物陰に行き、8歳程の姿に変わった。

そして、翌日二人はアカデミー生となった。忍者登録するだけな
ので、非常に楽であった。

この里では、住民登録がないから楽なのだ。と言っても、木の葉
も忍登録はあるが、一般市民の、ちゃんとした住民登録はない。つ
まり、水の国以外はないのだろう。

アカデミーに編入してから数日。ナルト達は馴染んだつもりになっていた。実際は、うわべだけの付き合い+情報収集だ。少しくらい仲良くなったとしても、邪魔になっただら簡単に殺せる程度の付き合い。

「はい。では、今日はクナイの練習です。最後に上手く出来たか見るから、それまでは自由に練習して」

『はい』

まだアカデミーに入って日が浅いが、既にナルトとヤヒメは、ゲンナリしていた。

音の里の忍のレベルが低いわけじゃないが、ナルト達の里が高すぎるのだ。

ナルトとヤヒメは目立ちたくないなので、一番端的に移動し、練習することにした。

水の国のアカデミーでやっている、簡単な遊びだ。

ナルトがクナイを投げ、それをヤヒメが弾く。弾かれたクナイにクナイをぶつけ、方向修正。更にヤヒメが軌道をずらし、それを戻すと言う遊び。実際これをやると、授業が終わるまで続いたりしているらしく、アカデミーではウォーミングアップ程度にしか使われない。一応ルールがあり、音が規則的になるようにする。ただ当てるだけでは、何の練習にもならないのだ。クナイの投擲の訓練と言うより、集中力の強化の為の訓練だ。クナイなど、あたって当然なのだから。

ちなみに、幻術をかけて他の忍にはちゃんとやっているように見せている。

「むずいな。目瞑ってても勝手に当たっちゃう」

「……屑忍者ばっか」

今度はナルトが上空にクナイを数本放り投げ、ヤヒメが全てのへと軌道をずらす。

タタタンと、的確に正鵠を貫くが、当然の事なのでつまらない。ヤヒメは本当に暇なのか、かたわらにおまんじゅうを置いている。お茶まで用意してあり、他のアカデミー生がみたらバカにしているようにしか見えないだろう。

もちろん、ヤヒメは空間が操れるので、見られる事はない。収納すら出来ると言う便利さだ。

「やっぱダメだ。いつたいつ来るんだ四人衆。一人でも見つければ、魂喰って情報引き出せるんだけどな……」

「……飽きた」

すぐに飽き、ナルトは幻術を解いた。刺激が足りなすぎるのだ。空狐の修業が恋しくなる。もちろん、実際空狐の修業を受けたら、五分で後悔するのだが。

「あーめんどいつつの！」

ヒュンヒュンと、ナルトはクナイを的に投げる。

それは、まったく同じ軌道で正鵠に突き刺さった。

「……」

同時に、ヤヒメが投げたクナイが、ナルトが投げた真ん中のクナイにあたり、的から弾き飛ばす。

時間差がなく、見た目的には最初から外れたように思えるだろう。ちよっとしたスリル感を味わいたくてやってみただ。

「おい！ おめーらいつも一緒にいるけどよー。デキてるんじゃないか？」

そんなうんざりしている二人に、一人の太った少年が声をかけてきた。少年の後ろには、ギャハツハと笑う子分が数人ついている。

クラスを仕切っている少年だ。

もうナルトとヤヒメはダルくて、それを完全に無視した。いちいち気にしていたらやっていけない。そもそも、二人にとって気にする価値があるとは思えない。

「……」

「何黙りこんでんだあ？ 俺様にびびったのかよお？」

「違うんですよヤオさん！ なんとってヤオさんはエリートっすからね」

更にそのやり取りを無視し、ナルトとヤヒメは欠伸をしていた。

少年はわかりやすい程額に青筋を浮かべ、怒声を上げる。

「おい！ なに無視してんだよ！」

ヤヒメは煩わしくて、鬱陶しそうに視線を向ける。

何でこんなデブがきつっているのかわからない。ついでに、いくら手を抜いている状態だとは言っても、力量差がわからない程相手は実力が無いのだ。

「……失礼。バツタと間違えました」

「デメエー！」

ヤヒメはみるみる顔が真っ赤になってゆくヤオを見、ああ、と訂正した。

フウが創り出すキチキチうるさいバツタではない、と。

「……勘違い。豚でした」

「殺すっ！」

ヤオが持っていたクナイを、ヤヒメに投擲したのを見、ナルトはそちらを見ずにクナイを投げる。

それは相手のクナイを弾き、ヤオの服を地面に縫い付けた。

ナルトはヤヒメの発言に歎息したが、ヤヒメだからなあと、よくわからない納得の仕方をしていた。ヤヒメは精神的には子供と変わらない。ヤヒメだけではなく、九陽達はほぼ子供と変わらないだろう。それは、他の忍の様に心理戦などなく、圧倒的力によって相手を叩き潰してしまうからだ。精神面で成長する機会などない。ナルト以外は指揮することすらできないだろう。

一人で軍隊の働きをしてしまうのだから、自分さえ御せればいいのか。一人軍隊とはよく言った物だ。

「全く力が入ってない。ついでに、里の仲間にクナイを投げるとは……人間として終わってるな」

「お前！ よくもヤオさんを！」

周りの人間が吠え、クナイを構えたのを見て、ナルトは眉をひそめた。完全に蔑んだ冷視を向けながら。

もし自分の里の忍ならどう指導するか……と思います。

「……お前ら忍者目指すのヤメロ。これは授業だ。これが任務だとしたら、仲間に武器を向けたお前らは任務違反で終わってる。嫌いな奴と任務することになったらどうすんだよ」

その言葉に堪忍袋の尾が切れたのか、全員がナルトにクナイを投

擲する。だが、それは誰かに止められた。少年達は止められた事に、キッと止めた相手を睨みつけるが、相手が誰か認識した瞬間、顔を青ざめさせた。

止めたのは、肌が浅黒く、腕が六本もある、怪物の様な男だった。

『ッ！』

「彼の言うとおりぜよ。皆大蛇丸様の下で働く忍じゃねーか。仲良くしとけ」

「き、鬼童丸様！」

一人の叫びに、場が騒然となる。四人衆は皆のあこがれなのだ。だが、ナルトとヤヒメは内心ほくそ笑む。

同時に、見た目キモチワル！ と言うのが、二人の見解だ。

鬼童丸と呼ばれた忍は、ナルトとヤヒメの方に視線向けた。

「それにしても、その歳でその実力はスゲーぜよ」

「き、鬼童丸様。いらっしやるならおっしゃって頂ければ……」

「気にするなつてのオ。たまに優秀な忍が居ないか見に来るだけぜよ。あの二人。前見に来た時居なかつたけど？」

「あ、あの二人はつい先日、他里を追われてきた両親の子供らしくて……」

「ふーん……」

鬼童丸はしげしげと二人を観察する。

変化かどうかみているのかもしれないが、ナルトとヤヒメは、チャクラの流れすらも子供となっている。チャクラ量も子供より少し多いくらいだろう。偽造は完ぺきだ。

ヤヒメはじつと見られ、怖気が奔る程気持悪がった。もし任務でなければ、殺していたかもしれない。ただ、此处で殺すと暗殺ではなく、里自体を落とす事になってしまうので、表には感情を出さな

い。
これがフウなら、すぐに表に感情を出してしまうだろう。表情を一切変えることのないヤヒメは、暗殺に向いている。

「お前ら二人。大蛇丸様のもとで強くならねーか？ 此処に居たら宝の持ち腐れぜよ」

その言葉に、場が騒然とした。鬼童丸からのスカウトは、有能な忍を見つけて、大蛇丸の配下にするものだ。呪印の実験台ともいえる。だが、それは子供達の目標。

ナルトは無邪気な笑みを浮かべ、嬉しそうに口を開く。

「大蛇丸様のもとで働けるのですかっ!？」

「……行きたい」

「おいおい、さつきと随分性格が違うぜよ？」

「そりゃそうですよ！ 鬼童丸様や大蛇丸様と、先ほどの忍の何たるかを分かっていない人間と一緒にするなど！」

「……同意」

「フハハツハ！ そりゃそうぜよ！ 気に入った！ オレが直々に鍛えてやるよ！」

機嫌のいい鬼童丸についてこいと言われ、二人は素直に付いて行った。

周りは驚いていたが、ナルトとヤヒメは完全無視である。どうせもう来る事もない学校だ。どうでもいいのだ。

ついでに、四人衆とは、なんとも未熟な忍だとも思っていた。絶対的な自信があるのかもしれないが、もう少し暗殺を危惧したほうがいいと。でないと、自分達のような存在が紛れ込んだ場合、内部から瓦解してしまう。

それからしばらく木の上を移動し、鬼童丸の後ろを二人は付いていく。鬼童丸は、まるで蜘蛛の様な奴だった。主に移動方法が蜘蛛のようで、ヤヒメは気持ち悪いと内心思っていた。

しかも、油断しているのか、簡単に背後から殺せそうだった。魂を喰う為、それをすぐに実行出来ないのがもどかしい。

殺しては意味が無い。間接的に触れ、輪廻眼で魂を喰らう。

ナルトはヤヒメに目で合図を送り、ヤヒメは一度頷く。

「……あの」

「何ぜよ？」

途中でヤヒメが口を開く。

「……ファンです。サインください」

真っ赤になったヤヒメに、鬼童丸は最初キョトンとしたが、すぐにハハハと笑い、了承する。

やはり、頼みごとをするのは幼い少女が一番だ。いい具合に警戒心が薄れる。

「その前に、きまりがあるからスマンぜよ」

「……」

ヤヒメから色紙を受け取り、鬼童丸は、口から蜘蛛の糸を飛ばした。

その糸の速さと硬度に、二人は抵抗も出来なく、背後の木に縫い付けられてしまった。術が使えぬよう、手も拘束される。

だが、この状態は二人にとって好都合。絶対的な自信がある術で拘束しているわけだから、相手は警戒がおのずと緩む。破られるなと思っても居ないだろう。

こんな細い糸の、一体何処に自信があるのか二人にとっては甚だ疑問だったが。

「それは象二頭で引つ張つてもちぎれない糸ぜよ。無防備になるよ
うなことをしちやいけないうって言われてっからな。終わつたら解放
するぜよ。印が組めないように両手も拘束させてもらったぜよ」

「さすが四人衆様。感服いたしました！」
「……素敵」

「ハハハ！ そんなに褒めるなぜよ！」

そして、サラサラと鬼童丸がサインを描きこんでゆく中、ナルト
とヤヒメは視線を交差させる。そして、今までと違う種類の笑みを
浮かべた。嘲笑すら含ませる笑みを。

もう遠慮はいらないとばかりに。

「!?!」

突然、鬼童丸は身体が動かなくなり、驚愕に声を上げようとした
が、鬼童丸は声すら出せなかった。

ヤヒメが鬼童丸の身体を空間に固定し、蜘蛛の糸対策で口も開け
ないようにしたのだ。

鬼童丸は二人に視線を移すが、二人は蜘蛛の糸に拘束されたまま
で動いていなかった。印も組めないだろう。ならば、と。周囲の気
配を探るが、誰も居ない。

「んごっ!?!」

「甘いよ鬼童丸。この程度の拘束。ヤヒメに比べればホントに蜘蛛
の糸レベルだ」

ボワツつと二人の身体が蒼い炎に包まれ、蜘蛛の糸が燃え尽きる。表情も口調も変わったナルトに、鬼童丸は目を見開く。

「冥土の土産に聞いておけ。印を組まなくても、忍術っぽいのを使える奴は人間以外なら珍しくない。人間以外なら、な」

「……屑のサインなんて誰も知らない」

トンと、ナルトが鬼童丸の額に指を置くと、口から魂が飛び出してきた。それを、ナルトは喰らう。バキバキと、まるで身体を喰っているような壮絶な音を立てながら、咀嚼する。この状況を第三者が見れば、怖気が走るような光景だろう。生憎、ヤヒメが空間に境界を張っているので、入って来れない上に、死人も出来ない。

ナルトは魂を喰いつくし、ぺつと唾を吐きだした。

「まずっ……。よし、住んでいる場所が分かった。アカデミーなんて糞な場所通ってたストレスを発散しにいくぞ」

「……行く」

魂が抜かれて死んだ鬼童丸を燃やし、ナルトとヤヒメは消え去った。

鬼童丸を殺した場から、十キロ程離れた森の中、結界を張って二人は居た。

夜になるまで、しばしの休憩だ。

「……何か、わかった？」

「居場所以外は大蛇丸の目的とかやってることくらいか。あと、敵の能力とか」

「……目的？」

「現在大蛇丸は二人いる。二人つてか、魂が二つに分かれてるんだけどな。片方の魂をうちはサスケに入れて、身体を乗っ取るうとしてるな。もう片方は既に乗っ取っている。暁のベインって奴をな。あと重大な事がわかった……」

「……重大」

「ああ……。大蛇丸は四人衆全員の後ろの穴を掘っていた……」

「……」

重い沈黙が押しかかる。ナルトはヤヒメに言ったことを後悔した。自分的には一番知りたく、知ったときの驚愕が大きかった情報なのだが、人に言うのはやめておいた方がよかったと。

「……にーも掘ってある？」

「いいか……ヤヒメ。後ろを掘られた男は男じゃなくなるんだ。それはホモって言う新しい性別 種族になる。そして、人柱力の一万倍くらい怖い存在なんだ」

「……ヤヒメも？」

「待て。お前誰かに襲われた？」

「……にー」

「虚言はダメだ。ハナビとフウに聞かれたらやっかいなことになる上に俺が最低な人間になる」

「……前、尾獣が暴走して殺されかけた。痛かった」

「襲われるってそつちか」

かなり昔だが、対話を成功させたと思った瞬間。ヤヒメは尾獣に騙されて、全ての封印を解いてしまった。その時、尾獣が暴走してナルトが無理やり押さえつけたのだ。

ヤヒメは眠そうな目でナルトに首を傾げているが、ナルト的には九陽にヤヒメがそんなことを言ったら、戦争が起きると冷や汗ものだった。

「だから、みだりに人前で裸になるなよ？ 女同士でも同じだからな。種族が変わるから。ヤヒメは風呂好きだから何処でも入っちゃいそうだが」

「……にー以外に見せたことない」

「それも問題っちゃ問題だが……」

ナルトは頭を抱えてしまう。最近はナルトが風呂に入っていると毎日乱入してくるのだ。それは、兄をハナビに取られないための対策だったり、ブラコン魂だったりするのだが。

「さて、標的の住処もわかったことだし、決行は深夜だ。それまで寝るか」

「……うん」

ヤヒメはナルトに抱きつき、目を閉じる。

小さいヤヒメを、ナルトは妹の様に思っている。孤児出身のヤヒメ、リト。赤子で連れてきたフウはナルトが育ててきたのだ。リトは7歳程で男故か『一緒に寝るの恥ずかしいぜ』と言って個室で寝てるが、ヤヒメとフウは未だに一緒に寝ている。リトが一緒に寝なくなつて、結構ナルトは寂しく思っていたりする。お風呂もリトだけは同年代の少女と入るのは恥ずかしいらしく、一緒に入らない。

現在の年齢は、ナルト13、ヤヒメ・リト12、フウ10だ。

ハナビだけは、ナルトと寝たり風呂に入ると貧血を起こすので、個室だ。最初一緒に風呂に入って鼻血を出した時など、本気でナルトは貞操の危機を感じた。入って来た瞬間に鼻血を出すなど、ギャグかと思っただくらいだ。

しばらくし、ナルトの胸の上のヤヒメから、すーすーと規則的な寝息が聞こえてきたところで、炎で出来た毛布をかけてあげた。

「おやすみ……ヤヒメ」

そう言い、ナルトも目を閉じる。

帰ったら久しぶりにリトでも風呂に入ろっかな、と思いながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9068j/>

輪廻の向こう側

2010年10月15日17時27分発行